

奇譚クラブ

古今珍談くらべ

現代好色化物ものがたり
南方いさごさ繪巻
お好みバラエティ



野球選手の告白
金儲押切帳

肉体悲歌
貧豪一代男

昭和二十五年十月五日
第三編郵便法認可

月刊奇譚クラブ

第四巻 第十一號
毎月一回 一日發行

古今

珍談くらべ 特集号

定價

七拾圓

第二十五集

企 畫 清川 輝輔
製 作 服部 静夫
監 脚 菅本 冬島 泰三
並木 禮三郎
お 光

長谷川 一夫
山根 壽子

今秋の期待される
大映巨弾の一篇

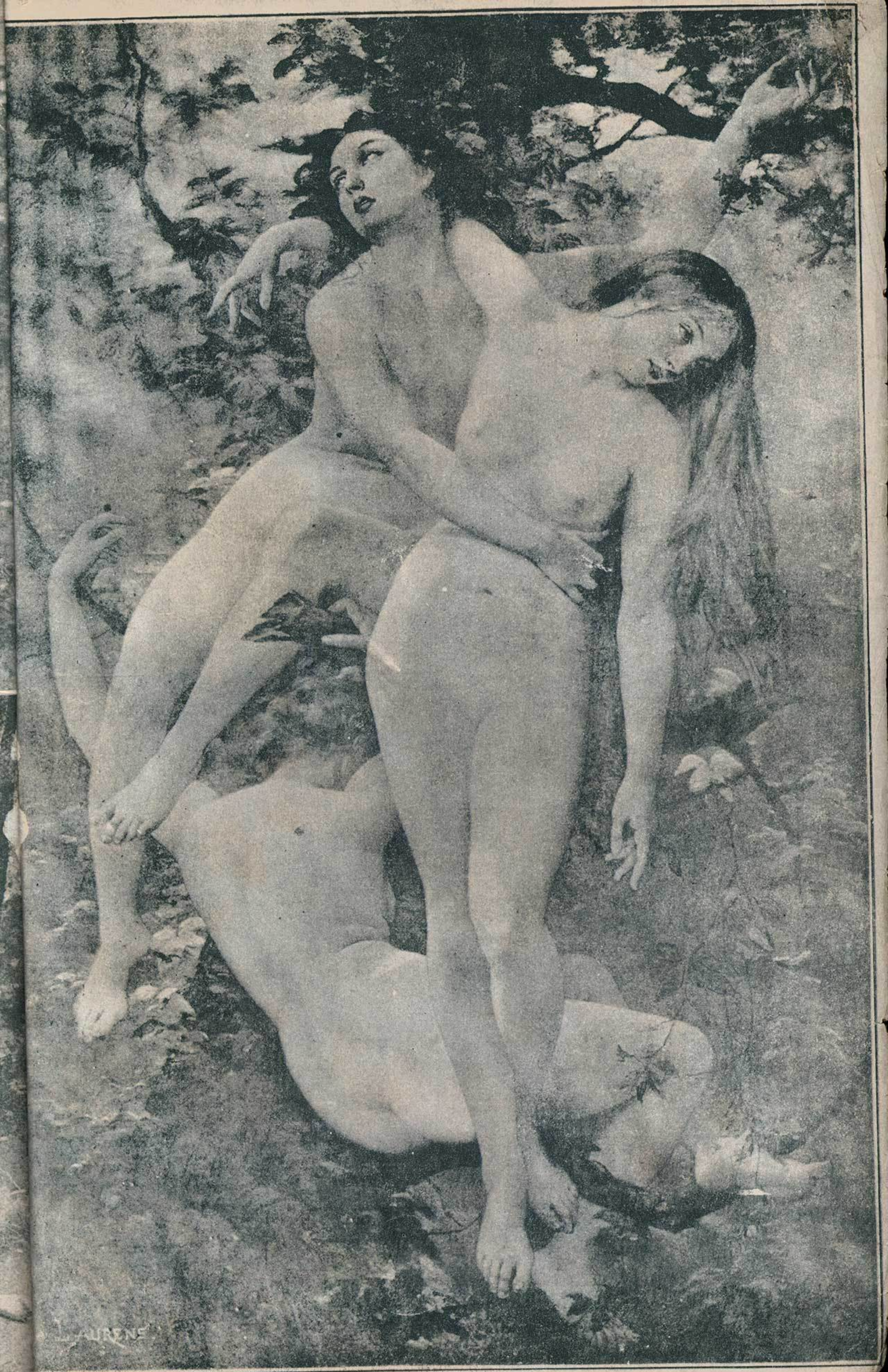
長谷川 一夫
山根 壽子

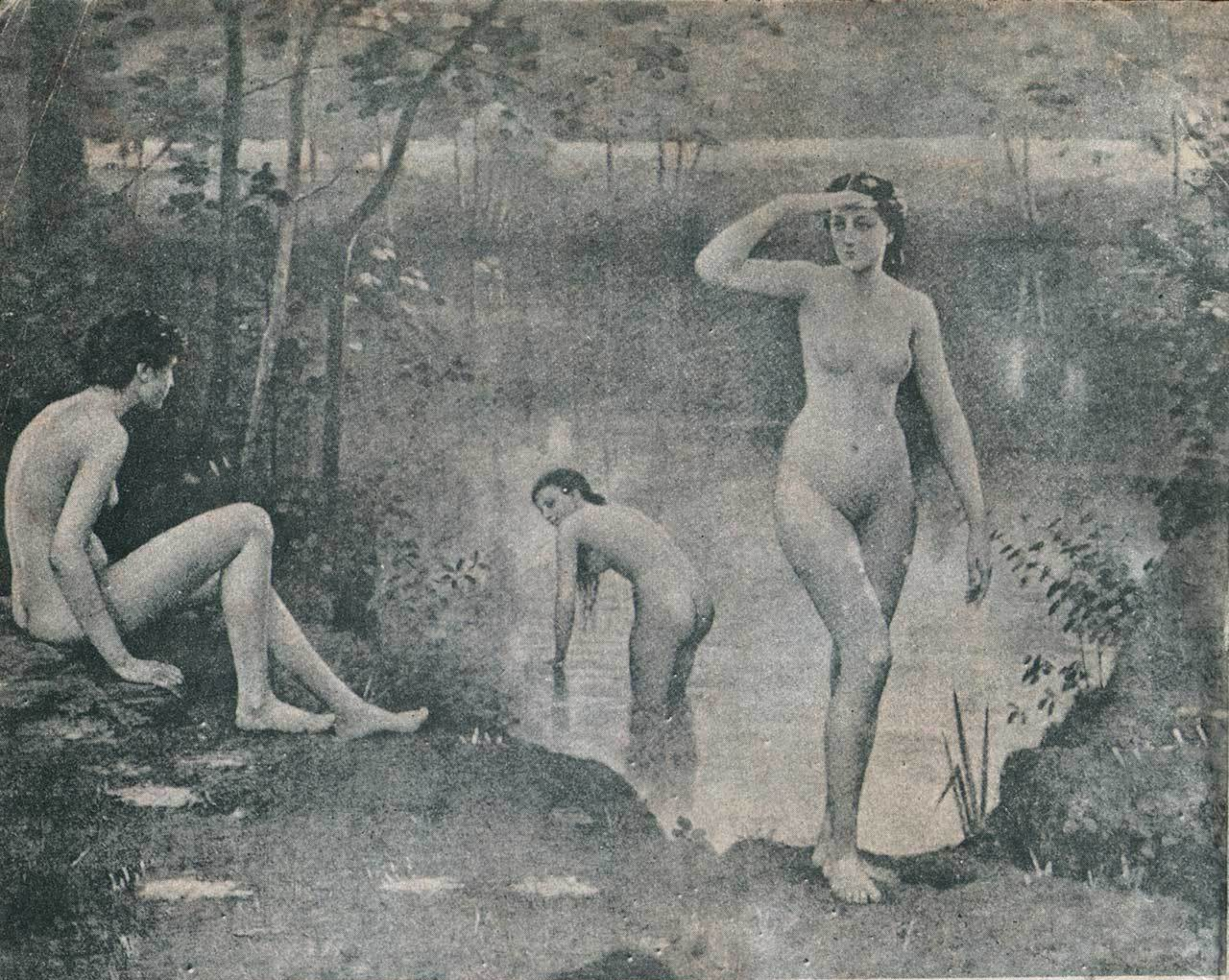
愚あばみ



★日本映畫界唯一と唱われる艶麗コムビ、
長谷川一夫・山根壽子が、久方振りに銀幕に
組んで、マア、シを愉快に去る哀戀時代劇。
★愛し合い、未來の輝かしい夢を描いて、共
に故郷を出發した若い純情の男女が、ふとし
た事から別れ／＼となつて、數年、偶然再びめ
ぐり逢つた時には、意外にも、男は役人に追
われるお尋ね者となつて居り、女もまた、夜
の巷に媚を賣る街の女になり果てゝいた。
この運命の激變、悲劇的なクライマックスを
中心に、長谷川・山根の美しい二人が、哀怨
限りない悲戀模様を繰り展げて行く艶麗時代
劇。







特集

突破中央戦術恋愛

奇譚クラブ

古今珍談くらべ

或るプロ野球選手の告白

愛慾小説 肉体悲歌

時代小説

愛怨比丘尼屋敷

桃色アパート 萬華鏡

夜草 京介……70

都會の溜息

奇譚百話 信士寒郎……66

古今珍談くらべ
色刷濃艶コント

小説の種になつた社長

山本 榮……16

お化け屋敷の睦言

兵庫 一平……18

愛欲の齒車

佐々木 直……20

お好みバラエティ

★一ツ笑亭主人
曾根三太郎(巴)

盛り場ブギウギ

「わてホンマによいわんわ」
門 好太郎……32

第一話 熊 の 掌……76

第二話 マダム・スカンク……83

蜘蛛男と章魚娘

須磨利之画

笠置 良夫……60

源吉金儲押切帳
貧豪一代男

辻村 隆……22
曾根三太郎画

現代好色化物ものがたり

姦夫は生きていた

南方いざこざ繪巻

第四話

乳房騒動★月屋靜史 明石三平(画) 104

奇譚クラブ夜話

人間の子を生んだ猿の話

夏原 常雄……74

泰西珍談

寝台の下から這い出した男……64

結婚奇譚奇習

花嫁の性的羞恥 嘉義 信哉……102

夜ひらく花競艶集……90

|| 初恋から女になるまで ||

貞操の代金 島田克郎

裸の踊り子談 月村俊二

北鮮シベリヤ俘虜放浪記

便所と露出症 穴吹 武……30

詩子 清山 杉
子玲 長 (絵)

若い燕戦術

僕は四人かけもちだ

寺本 明……40

オールド・ミス陥落す

女体開眼

有藻 亞郎……44

恋愛術指南

閨房遊戯の一挿話

花木 実……46

あばずれ女の戀愛戦術

映画館の女

富田 信二……48

純情戦法

ハンドバックの中には？

小島 伸一……50

有閑マダム攻略戦

私はこうして美しい

未亡人を獲得した

早乙女 晃……42

倦怠期突破打開秘法

効を奏した奇襲戦法

椿 昭彦……52

浮氣戦法

肉体の距離

直木龍之介……55

ラブ・ロマンス

初戀獲得法 平井京助……58

思春期の乙女

自殺殺人事件

全裸の黒魚死体



室樂娛談元

婦人雜誌

編集企画成功法

次の記事を毎月順に掲載するのです。

「理想の夫を選ぶには」

「妊娠の原理と受胎日」

「胸線美は如何にして得られるか」

「色覺の毒牙にかかった妾告白」

「夫を捨て、新しき幸福へ」

「かくして私は避妊に成功した」

「育児座談會」

「瘦せたい

お方の献立表

朝ぬき

晝ぬき

夜ぬき

正直なる日記

中學生、教師から日記に偽りを書いてはならぬと言われたので――

(月曜日) 朝、朝刊を読む

(火曜日) 雨、太陽見えず

(水曜日) 着物をぬぎて風呂へ入る。

(木曜日) 食後、茶をのむ

(金曜日) 正午、晝飯を喰う

(土曜日) 明日は日曜なり

と思ひて寝る。

(日曜日) 休日、明日は月曜なり

女を惚れさせす秘傳

色男の日記より

女とゆうものは、泣いても、ほつておくと駄目。

何を言つてゐるんだい、一年も十年も泣き通してゐる馬鹿があるかい。

草も木も鳥も花も星も月も川も海もみ

女の情とゆうものは、ク

リームが中から出て來た

とゆうクツシヨンみたい

なものだ。

甘くて、柔かくて、テ

ヘツ悪くはないね。

女は振られると、余計熱

烈になる。男は振られる

と、自棄酒を呑む。

俺なら振られたら女を

呪い殺す、又は自棄酒

をのんで余計熱愛する

面白問答

1、蓄音器のレコードの線は凡そ何本

ありますか？

2、What is What? を和訳せよ。

3、或る青年、モデルあがりの女給嬢

に、僅かに拾四のチップを置きました

どうしてでしょう？

4、マダムが近江百貨店にお正月のコ

ートを注文しましたら、店員めエヘ

ラエヘラと笑つたのです。どうしたわ

けでしょう？

5、最も安全に、虎穴に入つて虎兒を

得る方法も

6、最も安全な無銭飲食法

7、何升飲んでも二日酔いせぬ方法？

8、南洋植物二十を挙げよ。

9、鷲はナゼ片足で立つてゐるのでし

ょう？ (解答十頁)



☆笑止爆弾☆

未亡人の貞操とゆうものは、人知れぬ知きものである。雨に濡れるとタライもない。

雨になりたや、あの雨に。だが雨になる手を言わなくちやわからぬ。

元談案内廣告

萬年スロース

保健衛生のため、貞操擁護のため、國家的大奉仕の大發明品、絶対に洗滌無用、絶対に擦り切れぬことを二大特徴とす。

但し鉄製なり(幼年用百円、處女用二百円、人妻用三百円)

全國總代理店インチキ商會

接吻香水ランデブー

この香水を使用すると、相手は必ず接吻を欲求することは、證明書にある諸博士の證明によつて科學的生理學的に裏書きされてゐる。本品は鼠の小便を原料として研究の結果發明されたものである。各デパートにあり(小瓶五千円大瓶壹万円)

ランデブー本舗 東京堂商店

ハエー

丸ハゲ、中ハゲ、前ハゲ、後ハゲ、中ハゲ、横ハゲ、凡そハゲには何んでもよくきく。効果テキメン。この薬を使用して万パーに

も毛の生えたおすには金拾万円を呈す(五十円、百円二百円送料無料)毛生えぬ藥本舗禿頭合名會社





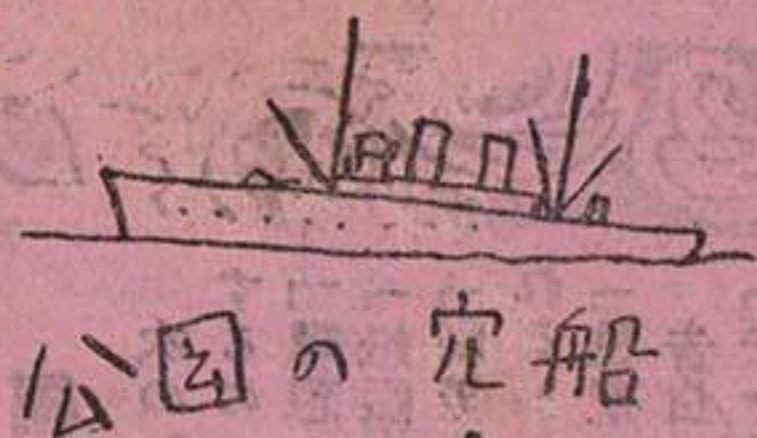
習性

「今度新しく入社した女秘書つて、變だね。ちつとも椅子にまともに腰掛けないね。」
 「うん、前の會社ぢや、膝の上ばかりに腰かけて居たんだね。」



大穴船

「温泉へ行かないかつて？今時、随分と費用がかかるのよ、あんたお金大丈夫なの？」
 「こつちは公園に勤めて居るんだ、早船に乗つて氣でついておいでよ。」



風流太郎



風流太郎

渡りに船

「あなたは、私と結婚しても、私が働くことを許して下さるでしょう？」
 「勿論ですとも！ そうなりや、僕は會社を止めます！」

現実主義

「君は俺の一人娘を狙つて居るようだが、一体君の欲しいのは娘かねそれとも俺の財産かね？」
 「はあ、どつちでも結構です。」



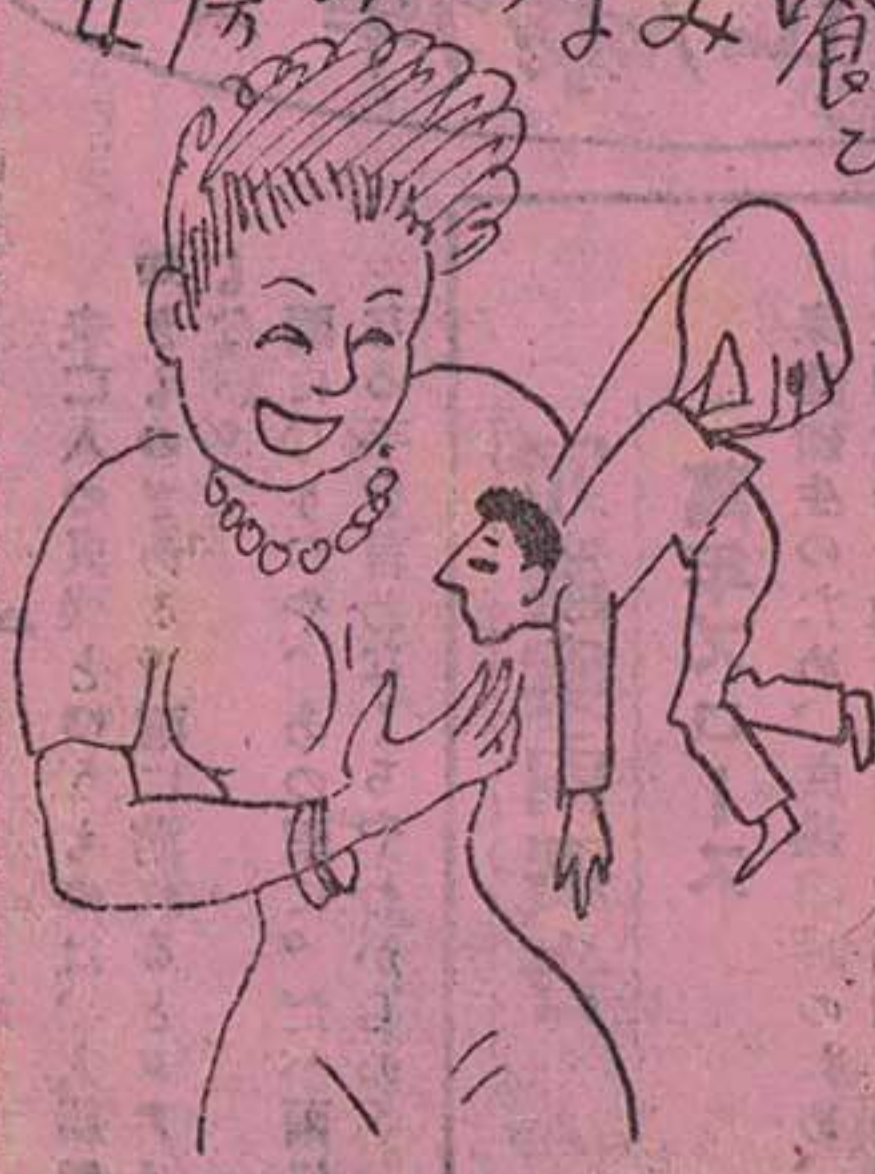
不感症

新聞記者A 「公園の經理に大分大きな穴があいてるようですが……」

總裁 「いや、女中のつまみ喰いだよ。」
 新聞記者B 「總裁の奥様と御出入りの家庭教師との醜聞が大分流布されて居るようですが……」
 總裁 「いや、家内のつまみ喰いだよ。」



女房のつまみ喰ひ





◆税金で裸に！

首に口をエデンの園にすると仰言つたようです
うん、着々と実行に移して居るさ、大蔵大臣が
ねー

アダムとイブ



◆強敵

僕と結婚して呉れませんか？
ええ、でも、あなたの財産は——？
澤山はありませんが、親父の遺産が五十万田ほど
……
あら！ あたし、お小遣のこときいたんぢやなく
つてよ

50万円=小遣



◆糖に釘

妻「ねえ、あたしの友達、御主人なんか、会社か
らは真つ直ぐにお歸りになるし、日曜日には必ず
お二人でお出掛けになるし、着物だつて流行に遅
れない様に買つて下さるし、……あなた、どう思
つて？」
夫「そいつは素晴らしい。その君の友達を是非、紹
介して呉れ給え」



◆名人藝

妻「お隣りの旦那様は、会社での出来事を残らず
奥様にお話しはなるのよ」
夫「そんなこと位なんでもないさ、僕なんか、あ
りもしない事まで、随分君に話して居る筈だ」

ウソ



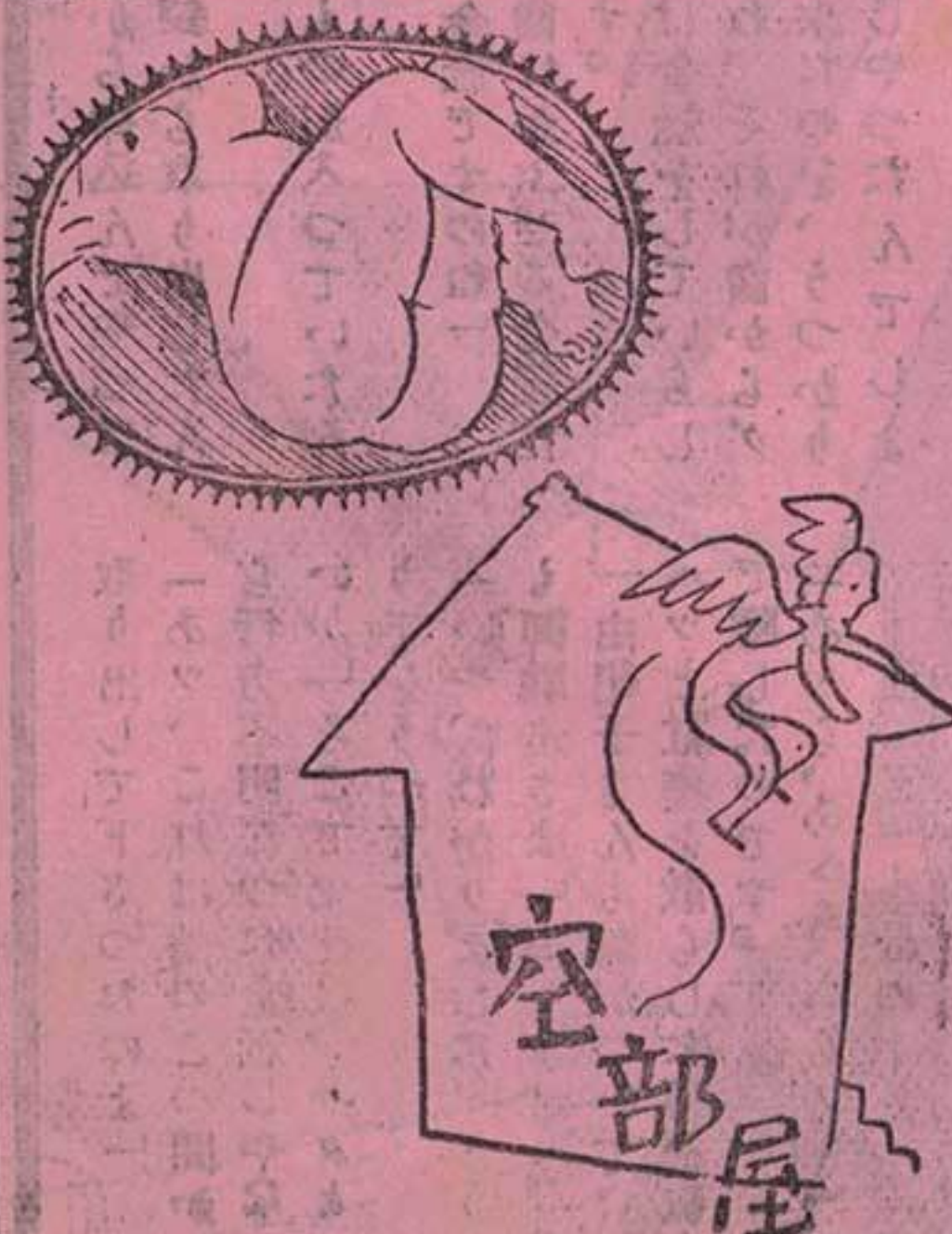
◆ノックアウト

「ねえ、僕のこの狂いそうな胸の中、今にも張り裂
けそうな胸の中、どうか察してください」
「あら！ 道理であなたのシャツの胸の釦がとれて
居るわ」



◆どうぞ御自由に！

「僕はもうとてもあなたなしでは生き
て居られません。若しあなたに拒絶
されたら屹度、死んで仕舞に違いあ
りません」
「ね、折角のお馴染みか
ら、あなたのお部屋、空いたら是非
私の友達に貸してあげて頂戴ね」



あら、アラ★かると



ざくろぐち けざれいし
柘榴口と毛切石

江戸時代の風呂屋の内部の構造は、今日と大分違つていて、第一に、湯槽の處の入口に、開け立てする戸がなく、人間がかがんで出入りするようになつており、これを柘榴口と呼んでいた。

柘榴は、昔から鏡を磨く材料なので、俗に「かがみみがける」のかけ言葉だと言われている。

「柳樽」の句に

柘榴口人を呑んだり戻したり
抱いた子を盡にして出る柘榴口

尙、その頃の浴場内には今日では絶對に見えることの出来ない怪物？があつた。それは毛切石でいつも流しの隅にころがつていた。

その用途は又實に素晴らしい

もので、男女共その局部の贅毛を擦り切り、又コツ／＼碎き切つたものである。

由にする
石で切るのをあぶながる女の氣
——「柳樽」——

超工口小說

等入選作品

色目助平

危ふく發禁ギリギリ
の線を突破した驚異
的エロ小説

金冠を呑み

取つた花嫁

由紀子さんは結婚して間もなかつたんです。頭髮にも襟脚にも新妻らしい匂いがブン／＼していったんです。内科の先生は、この健康らしい患者

は一体どこが悪いんだろうと
不思議に思つたんです。

婦人病？

そんな筈はない。そんな病
氣だつたら、こんなにもぎた
ての林檎のような艶々した頬
をしている道理がない。

「どこがお悪いんですか」

「あの胃袋に何かはいつて
いるらしいんですけど」

「へえッ」

何んだ、そんな事かと、先生は、二度びつくり、それでもとにかくレントゲンをかけて、胃袋を検査することになったんです。

「はいつています」

「何んでしよう」

「何んたか知らんか小さなものです」

小さなものだけではわかり
ません。が、こんなことは極
くたやすいことなので、先生
は長いピンセットのようなも

のを咽喉から挿込んでやつてそれを胃袋から取り出したんです。

「こんなものが入つていたんです」

「あら、金冠ですのね」

それは齒にかぶせる金冠だ
つたのです。

「あなたは金冠をしていらしたんですね、それが齒からグツついて來たのを、うつかり呑み込んでやつたんでしょ

「いえ、先生、あたしは、
虫歯が一本もございませんし
金冠などしたことがないん
です」

先生は、そこで、ハタと考
えに行き詰つたんです。實に
不思議な話だ。すると、そこ
へ、妻を先に医者へやつたが
心配なので、新郎がおつかけ
て来たんです。

「只今、先生が胃袋の中から

取り出して下さつたのよ」

「あッ、これは僕のこの圖から行方不明だつた金冠じや」

いか」そこで先生は、ハタと
り手をうつて」

「いや、わかりました。どうぞ
も御馳走さま」

由紀子さんも氣がついて、
パツと紅葉を散らした顔を秘
で隠したのです。

「あゝち、あゝち、あらく
—おわ—

面白問答解答

- 1、タツタ一本
- 2、ナニガナンデエー
- 3、ハダデー貫
- 4、來年のコートを言えば、
近江が笑うデス
- 5、親虎の留守に入るデス。
- 6、先づ自分で飲食店を開業
して飲食することデス。
- 7、水を飲むス。
- 8、椰子樹二十本
- 9、兩足を上げれば倒れるデ
ス。

蜘蛛男と章魚娘



だが、美しい女のいる水茶屋へばかり客をとられて、見世物とゆう見世物は、閑古鳥が鳴く仕末だが、文政二年の夏ばかりは例外であつた。回向院での嵯峨滑涼寺の釈迦如來の御開帳を目あてに廣小路へ出たごの見世物も、落ちこぼれなく繁昌したが、その中でも、人氣者の蜘蛛男は、連日の大入で、客止めをするような、すばらしい景氣であつた。

舞台では、その頃、江戸

一寸法師の蜘蛛男福助は、江戸兩國に小屋を張つて、いろ／＼な見世物を興行していた香具師の中でも、相当古顔の愛嬌者であつた。因果物の中でも、福助は、あの氣味の悪い鵝娘だの、緋縮緬の湯文字の間から見えかくれする白い股を命として、僅に好奇の客をよんでいる滑稽い足藝の手なし女等と違つて、いつも茜染の手拭をかぶつて、陽気な手踊りを見せたり、新作の瀬米節などを唄つて面白おかしく、朗らかにその日、その日を送つていた。



で新らしい流行であつた。叶福助の紛粧で、頭へ大きな髷をかぶり桃色の袴をつけた福助が、この盛況にすつかり満足しきつていた。

今仕込んでゐる、薬研堀の家を買つたのも、この年の御開帳で、自分の小屋が大当りに當つたからであつた。

その翌年の六月にも、同じ回向院に、信州善光寺の阿彌陀如來の御開帳があつた。



この時も、兩國は物凄く人出で、福助の小屋も去年程はなかつたが、とにかく毎日大入りを續けることが出来た。

この兩度の御開帳は、兩國の見世物を潤したばかりでなく今迄江戸の見世物といへば殆んど怪奇な因果物か、覗きからくりの類であつたものが、大仕掛の細工物の見世物がめつきり増えて來たことであつた。

先づ廣小路には針金細工といつて、花鳥人物、草木虫魚を巧みに、針金で作つたもので、回向院の境内には、丸竹細工、貝細工、瀬戸物細工、人形細工、ゼンマイ仕掛の造り物迄あつた。



文・恋々山々
絵・須磨じゆき

東阿國には、籠細工、ギヤマン細工と頗る新奇なものが、しきりに客の目を驚かした。

この傾向はひとり阿國ばかりではなく、浅草の奥山でも、客足のよいのは近頃流行の細工物の見世物であつた。因果物では、もう客は集らなかつた。

因果を賣り物にした蜘蛛男の福助は、めつさり寂れた自分の小屋のうす汚ない樂屋でしきりに愚痴をこぼしていた。

小屋の轆りに風が吹きすすんで、ハタ／＼と淋しいすゝり泣きする冬がやつて來た。

蜘蛛男の見世物は、日増しに、見物が減り、太鼓の音も細々と、福助の収入は際立つて減つて來た。

自分の醜い姿を十分自覺していた蜘蛛男の福助は、なにより金錢を必要とした



その頃の福助の周囲は、明けても暮れても女、女、女であつた。興行師は、その特別な地位を利用して、自分の手にある商品の中から、かなり変つた種類の女を彼にあてがつた。

それは福助が單調に倦まない爲でもあり、又、それ等の女達は、極めて僅かな報酬で彼に供紀することが出來たからであつた。福助が、あらゆる變つた女の肉体を漁りつくしたのはその頃の事であつた。

その中でもさすが蜘蛛男も怖れをなして、一べんで願ひ下げにしたのは、両腕と兩耳のない「徳利女」で、案外凄腕を持つていたのは小入島一行中の子供の如くに小さな年増女であつた。

が、なんと言つても、一番閉口したのは、身長六尺二寸、体重三十八貫目とゆう大女を力持の小屋から連れて來て、あてがわれた時であつた。

二度の御開帳で、

少なからぬ金を儲けたのは事実だつたがそれも、現在住んでいる家が

一軒残つたきりで、僅か半年と経たない中に奇麗に使い果してしまつてゐた。

僅か七ツハツの子供位の身長より持たなかつた一寸法師の福助は、酒も食欲もすべて普通人以下であつたが、その性慾だけは、すばらしく、激しかった。それで世間の女とゆう女が、どれ程金とゆう物に對して、強い愛著を持つてゐるか

とゆうことを、知り過ぎる程知つてゐた。

従つて彼が女に對して使う金は莫大なものであり、女に對しての支拂いならば決して延期したり滞納したりするようなことはなかつた。

彼にとつて、女は、享樂以上に最も必要な食料だつたのである。嘗て、蜘蛛男の人氣が広小路を圧してゐた頃、彼と出演を契約した興業師は、福助が他の興業師の手へ逃れるのを恐れて、あらゆる方法をもつて彼の歡心をつけた。福助が異常な性慾を持つてゐる事を知つた 敏感な興行師は、彼のために好餌を與える事を忘れなかつた。



一人前の太夫元となつて、金が自由になればなる程、放縱に慣らされた福助の生活は、益々淫蕩なものになつて行つた。

木戸番の甲州松とゆう男は、福助への忠義だては、いつも女をとり持つてゐた。その男は、自分と馴染の水茶屋の女と馴れ合つて彼から少なからぬ金を搾つた事もあつた。

然し、近頃のように、小屋が寂れてしまつては、松を通じて、いろん

な女と合うことも出來なかつた。

細工物の大流行によつて受けた大打撃を彼はどうに

らるゝ

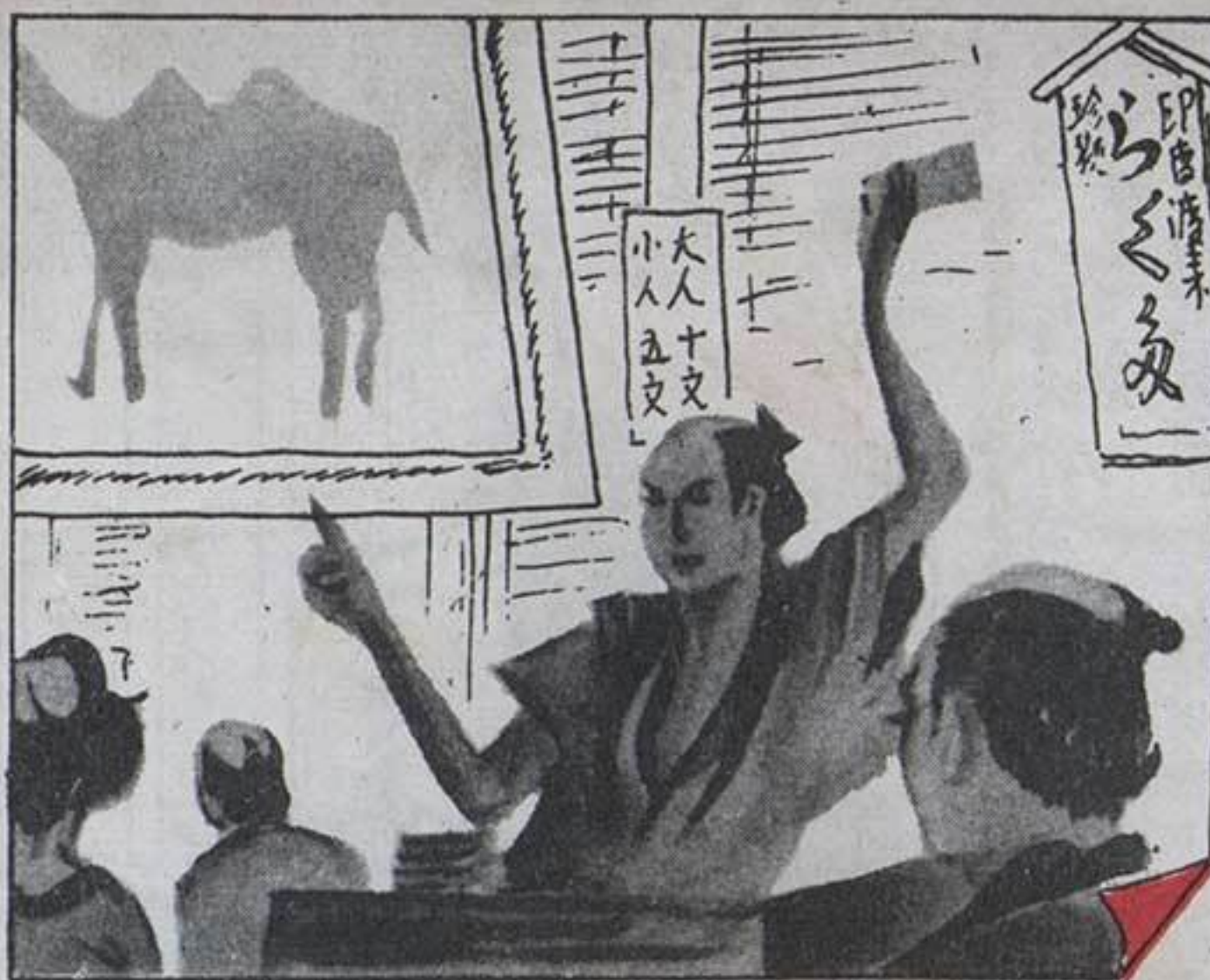
かして埋め合せようと焦っていた。

——そうだ、浅草だ、奥山へ何か一つ、目ぼしい物を掛けることにしよう。

と彼は思いついた。

当時の奥山は、勿論細工物の見世物が全盛を極めていた。

ゼンマイ細工、籠細工、人形細工、貝細工などはじめとして、大仕掛な麥藁細工の見世物があった。福助が真剣になつて考えた、思



いきつた奇抜な糸瓜細工とゆう物を案出して奥山の小屋をかりて興行することになった。

これは相当に好評であつたが、まだ福助が期待した程の利潤を挙げない中に、その小屋から出火してひとたまりもなく、焼け落ちてしまつた。

文政四年の六月になつて不遇にうなだれてゐる蜘蛛男に、すばらしい幸福が見舞つた。それはベルシヤ國から始めて長崎へ渡つて来た二頭の駱駝であつた。

この噂を聞き込んだ福助は早速長崎へ人をやつて、一番最初に江戸で見世物にする権利を得たのであつた。



八月の九日から、兩國広小路に現れた、怪奇な二頭の駱駝の姿は江戸八百八町の人々に、驚異の眼をみはらせた。

今迄の見世物の中では殆んど劃期的な評判で、見物は福助の小屋へ殺到して空前の大入りが続いた。

——さア、これが、このたび遙々ベルシヤ國から長崎へ渡つた駱駝とゆう珍らしい獣だ！

牡が八才牝が七才、仲のいい御夫婦だよ、背の高さは、いづれも九尺と三寸、背中が珍しいヨ背中二つの山があるんだ。

これを名づけて、男体山、女体山、さア代は見ての御辰り、ホラ、生きてるヨ——評判——、木戸番は声をからして客をよんでいた。

嘗て、御開帳で儲けた福助は、今度の駱駝で、大儲けに儲けた。しびれを切らしていた彼の好色癖は、急にまと



福助



まつた金の顔を見てすばらしい勢で盛り返してきた。駱駝に蹴られて、兩國でゴロ／＼していた仲間の香具師は、懐のよい蜘蛛男を目当に、いろ／＼の掛ものを持ち込んできた。その中に、身体の一部にとんでもない畸形な部分を持った章魚娘とゆう、まだ齡の若い顔の美しい女があつた。甲州松を連れて、熊蜂の吉五郎とゆう香具師の家へ、下見に行つた福助は、この女の持つ不思議を、好奇に満ちた目をしていつ迄も覗いていた。

「どうしますかね？親方」 いざなり松が言つた。

「ウウ——」 眼も離さず、福助はうつろな返事をした。

「ねえ、親方きめますかえ？」 再び、松はきいた。

「きめることにしよう、きめるよ、きめるとも——」

ようやく、女の身体から眼を離し福助は甲州松に言つた。

「じゃア、あッしが、ゆつくり掛け合ひましょう、だがね、親方アこれ程の器量の女で不具でなかつたら、こてえられねえね？」 さ／＼やくように松が言つた。

「フン、それじゃ見世物にならねえじやないか」と福助に言われて、「違えねえ、こいつは大縮尻だ！」甲州松は、月代へ掌をあて、失笑した。

であつた。めつたに外へも出さず愛撫していた。

新道の溝板に、師走の霜の厚い或る朝の事であつた。

福助の家を訪ねたのは、駱駝以來失業している甲州松と、「章魚娘」を彼に賣り込んだ、兩國の香具師熊ン蜂の吉五郎であつた。「御免よ——オイ福さんは家かね？」

つい、今しがた起きたばかりの福助は、その声の主が熊ン蜂である事を知つて、ちよつと眉をひそめたが子供の羽織程のごてらを引つけて玄關へ出た。

「ウム、吉さんかね、ばかに早いじやアねえか——」

「朝つばらから、邪魔をして済まねえが、こちらの家に御厄介になつているお千代のこ

とで、ちいつとききてえ事があるんで出掛けて来たんだ、オイ、松、手前もこつちへ入つてあとを締めてねえな」吉五郎は外に立つている甲州松を振りかへつた。

吉五郎は一寸法師の福助

その年の冬、西兩國の空小屋を借りて興行した、章魚娘は、



仕込みにたいして金のかゝらなかつた割になら当つた。本尊の「章魚娘」は、踊るでもなく、歌うでもなく、唯、はなやかな衣裳をついて、時々、身体の一部を見せるだけであつたが、それでも見物は、他愛もなく満足しているようであつた。

がそれも僅か二ヶ月の間で、いつの間に姿を消したかと思うと、樂研堀の新道で、四十二になる俄分限の福助に、困こわれていた。

女とゆう獲物の生血を吸いつくす蜘蛛男はそれからそれへと餌を漁つて、決して、一人の女を永く自分の傍へ置くような事をしなかつた。が、この「章魚娘」のお千代だけは、例外

に比らると、関取りの様に見える大きな身体をしてドツカリ胡座をかいた。その胸毛だけでも、福助を圧迫するに十分であつた。

「ねえ、福さん、手ツ取り早く言うがね、実は、お前さんの小屋の掛け物に世話をしたお千代とゆう女は、俺の小屋で使っている者の女房なんだ。

い、かね、俺はあの女の亭主から頼まれて見世物に出す世話はしたが、おめえの慰みものにされたんじやア、その男に對して、俺が顔むけが出来ねえんだ、間男は天下の御法度だつたね——オイ、福さん、この納りを、ど



うして、呉れるんでえ？」

熊ン蜂の言葉には、鋭い針を持つていた。「ま、まア、哥兄そんなに大きな声を出さなくても、話

はわかるじやアねえか、こゝの親方だつて、万更野暮なこたア、言うめえから——ねえ親方ア、そうでござんしょう？」とりなすように言つたのは、甲州松であつた。

人妻だ、間男だと言われた福助は、ひどくうろたえたが、一應女に訊きただすつもりで声をかけた。「あい、なんとよ、随分せわしいね」

しどけない寝巻姿で、お千代は美しい顔を現した。



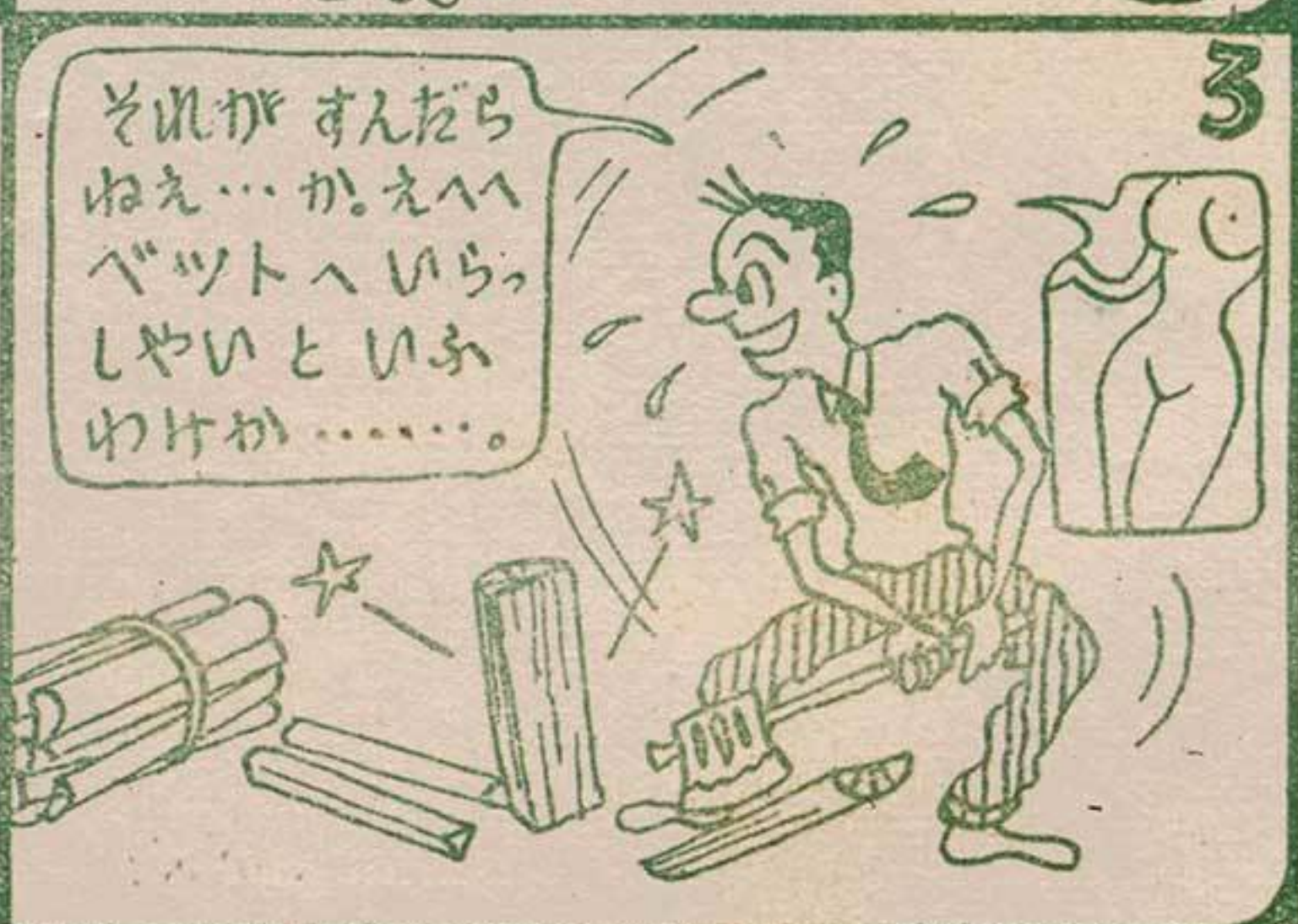
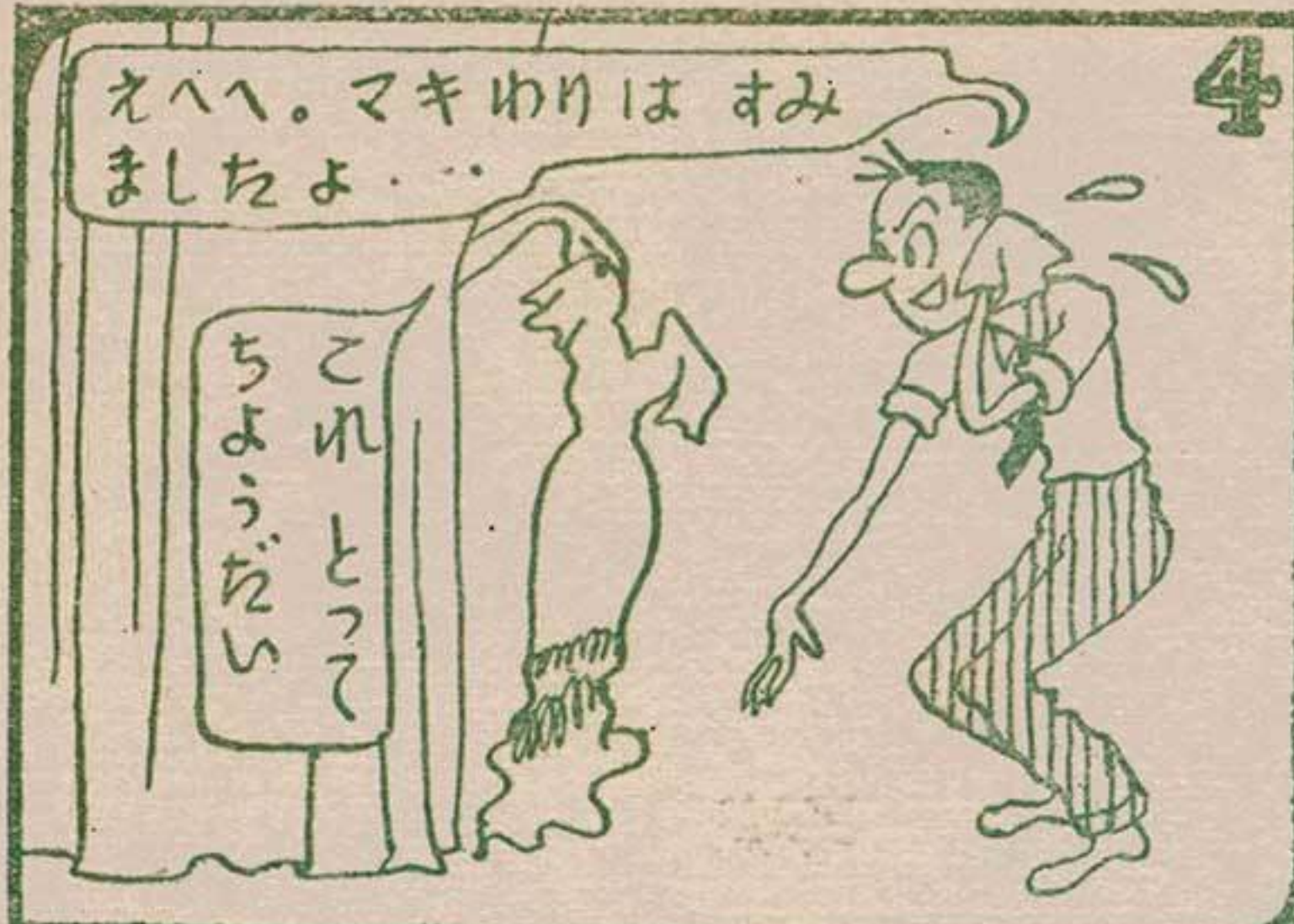
「さつきから、実は私も氣をもんでいなんだよ、ねえ、お前さん——もうこうなつたら、仕方がないじやアないか今更、別れるのなんのとゆう事も出来ないし——だから、出来るだけのものを都合して、吉親方にお渡しおしな、それより他に、形のつけようはないじやないか——ねえ、松さん……」落ちつき拂つて、女は、福助と松にむかつて言つた。

それで結局、福助は持つていただけのものを、残らず熊ン蜂と甲州松に提供して、ようやく帰つて貰つた。

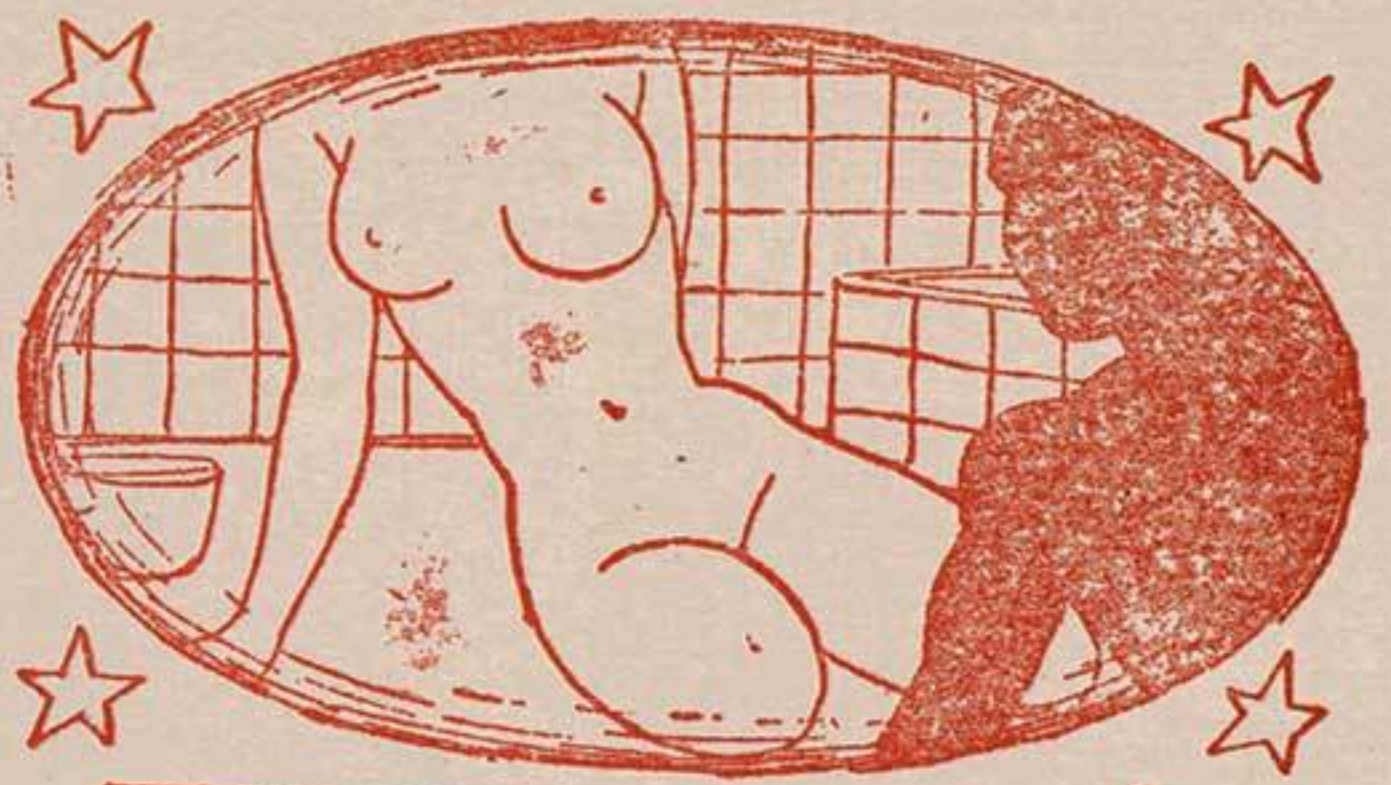
その翌朝、眼をさますと、傍に寝ている筈のお千代の姿が消えていた。御開帳と駱駝で儲けた蜘蛛男の福助は最後の章魚娘ですつかり無一文となつてしまつたのであつた。

終





誘惑の魔手から逃れたか。



山本 栄

小説の種になつた社長

日が暮れて家へ帰つてみると、今日は早く帰つてくつておらないので、どうしたんだらうと、ふと、机の上へ眼をやると置手紙らしい走り書きがおかれてあつた。

よほどあわてて書いたものと見えて、ひどく乱雑な筆跡である。

「同業者の総会にて、社長と同道、武田尾温泉へ七時の急行でゆきます。旅館は翠明ホテルです。今夜は帰れないかもしれません。御心配なさらないように、大丈夫です」

読みながら私は「馬鹿、馬鹿」と、どなりつづけた。

「何が心配なさらないように」だ。

「何が大丈夫」なのだ。ついに私が杞憂していたことが、いまわしい現実となつて現れたのだ。

私の勤めていた高島産業株式会社が経営不振でつぶれたのは三月前のことである。

整理でクビになつたのなら、まだしも退職手当でも貰えたらうに、会社自身が破産したのだから、全く無一文で失業してしまつたのである。

この節のことで、失業すれば、中々就職出来ず、たまに職があつても、私のような弱い身体の人には耐えられぬような重労働である。衣料、家財道具を賣つては、その日の生計にあてより仕方がなく、それとても限度のあることで、いつまでつづけられるやら。そんな状態に我慢出来なくなつたのであろう。サツキがある日、私に内緒で、新聞の求人案内欄を見て、求めて来た職が、現在勤めている不二建設会社の秘書であつた。その日、サツキは意気揚々と帰つて来て、誇らしげに告げるのであつた。

「あの会社はすいぶん景気がよさそうよ。一万圓くれるのよ」

「へえ」

私はおどろいた。私でさえ、手取り八千圓しかとつていなかったのに、珠算簿記が出来るとなし、タイプが打てるサツキではない。どうしてそんな高給を出すのか、不思議であつた。

「どんな仕事をやるんだね」

「社長の秘書よ、社長宛の手紙の整理や、面会人の応接など、やればよいのよ。楽な仕事よ」

「それで一万圓くれるのかね。結構な会社だね。その代り、待合出張も時には仰せつかるんだらう」

「マア、あなた。ケチをつけるの。それともひがんでいるの。男らしくない。あなたは当分、好きな三文小説でも書いていらつしやればいいの」

サツキの就職に私は不服であつた。第一にその一万圓という不当によい給料が曲物だつたし、建設会社といつても、その前身は××組といつた土建組であらう。ひいてはその社長たるも土方の親分の成上り者だらう。私はその社長という男が推測ではあるが、好色家のヒヒ親爺に思えて仕方がない。それにサツキは夫の私が自慢するものもおかしいが、一寸した美人であるので不安でたまらなかつた。が、今の経済的ピンチを切り抜けるためには、やつぱりサツキに働いて貰うより仕方なく不承々々サツキの勤めを承知した。

ところが、サツキが勤め出して、二月もすると、サツキの服装が、がらりと変つてしまつた。服は今流行のものだし、靴もどうやら舶來の品らしい。金の小さな時計、オパールの素晴らしい指輪。ひどくパリつとした。給料は全部生計費に当ててしまふのだから、そんな高價な品々が購えそうな筈がない。

「服に靴。時計に指輪。一体、どうしたんだ」

「これ？ 皆、社長が買つてくれたの」

「危険だと思わないのかね、そんな不当な物を貰つて」

「いえ、決して不当じゃないわ。社長は私をつれて、いろんな会に出席するでしよう。私がみすばらしい装をしていれば、社長の顔にかかわるんですもの。だから仕事の必要上買つてくれたんですわ」

私の想像どおり、社長は最後のものを手にいれる投資をし出したのである。

「それが社長の手なんだよ。後で後悔しても追つゝかんぞ。一応忠告しておくと」

「大丈夫よ。私だつて、娘じやないんだから、ちやんと心得てますわ」

私はサツキの置手紙をにぎりしめながら、あんなに忠告しておいたのに、私の忠告を容れなかつたサツキに腹が立つた。

夫のある職業婦人が如何にし

「同業者の総会」なんて、サツキを連れ出す日実に過ぎない。

サツキがどんな術で社長を御すかしらないが、究極は男と女だ。暴力をふるわれ、ば、それまでだ。

いよいよ今夜こそ、ヒヒの正体をあらわし、サツキにいどみかゝるのだ。珠玉のように磨いてきたサツキの肌を、ヒヒに汚されてたまるものか、私は大阪駅へ急行した。

武田尾驛へ来ると、翠明ホテルは一流の旅館なので、すぐ判つた。避暑の時期もすんだころとて、部屋は空いていた。

私は早速、サツキに私の来ていることを知らしてやろうと、あまり呑めないビールをのみながら女中をひき止めて、乏しい財布から、チツプをはりこみ、私の来ていることを、そつとサツキに傳えて貰つた。

十時、十一時、私は今にサツキが、悲鳴をあげて逃げこんでくるだろうと、待ち構えていた。が十二時近くなつても現れないので、少し心配になり、彼等の部屋へ押しかけてみようかと思つていたら、き、ノックの音がした。扉をあけてみると、ホテルのパジャマに着替えたサツキが、湯上りの化粧も

濃く、匂うばかりに奇麗になつてニヤ／＼笑いながら立つていた。

「あなた、ご心配かけてすみません」ひどく落着いて、いるので私はいささか見当がはずれ、ボカンとしていた。

「あなた、お風呂まだでしょ。一風呂浴びていらつしやい」

「社長は？」

「大丈夫よ。細工はりゆう／＼、安心なさい。温泉場へ来るなんて、新婚以來初めてネ、今夜はゆつくり温泉情緒にひたりましようよ」

私は全く狐につままれたやうで、訳が判らなかつたが、それ以上聞いてもサツキは笑うばかりで答えないので訳の判らないまま安心して風呂場へ下りて行つた。

「こうしてしていると、新婚旅行の時のことを思い出すわね、ウフフフ……」

流しのギターの音をききながら、私は甘い昔の思い出にふけつていた。私は膝をくずして座つてゐるサツキを改めて見た。

あの頃より脂肪がのり、ゴムマリのようにはすんでゐる双つのふくらみ、腹から腰へのなやましい曲線。

翌朝、朝食をとつてゐると、

「奥さん、お早よう」

どぎつい化粧をしたけばけしい女が入つて来た。サツキは女を見ると、

「昨夜は、ご苦勞さん、じゃこれ、約束の二千圓」
と、女に差出した。

とつてもひつこくつて、粘つこくて、私、疲れてしまつたわ」

女は金を受取りながら、ブツ／＼こぼした。

「じゃ、もう五百円増すわ」

「どうも、すみません」

女は金をハンドバッグに仕舞うと、

「奥さん、またどうぞ、バイバイ」

と、蓮ツ葉な言葉を残して、部屋を出て行つた。

「ありや、なんだい」

私がおどろいてゐると、

「パンパンよ。あたしの身代りよ」

「エエ？」

いざというときになつて、眞暗がりを利用して、サツキとパンパンが入れた替つたのだと説明されてさうだつたのかと、

私はよく

うやく

合点が

いつて

高笑し

た。

「あな

た。も

う社長

お目ざ

めの頃

ですか

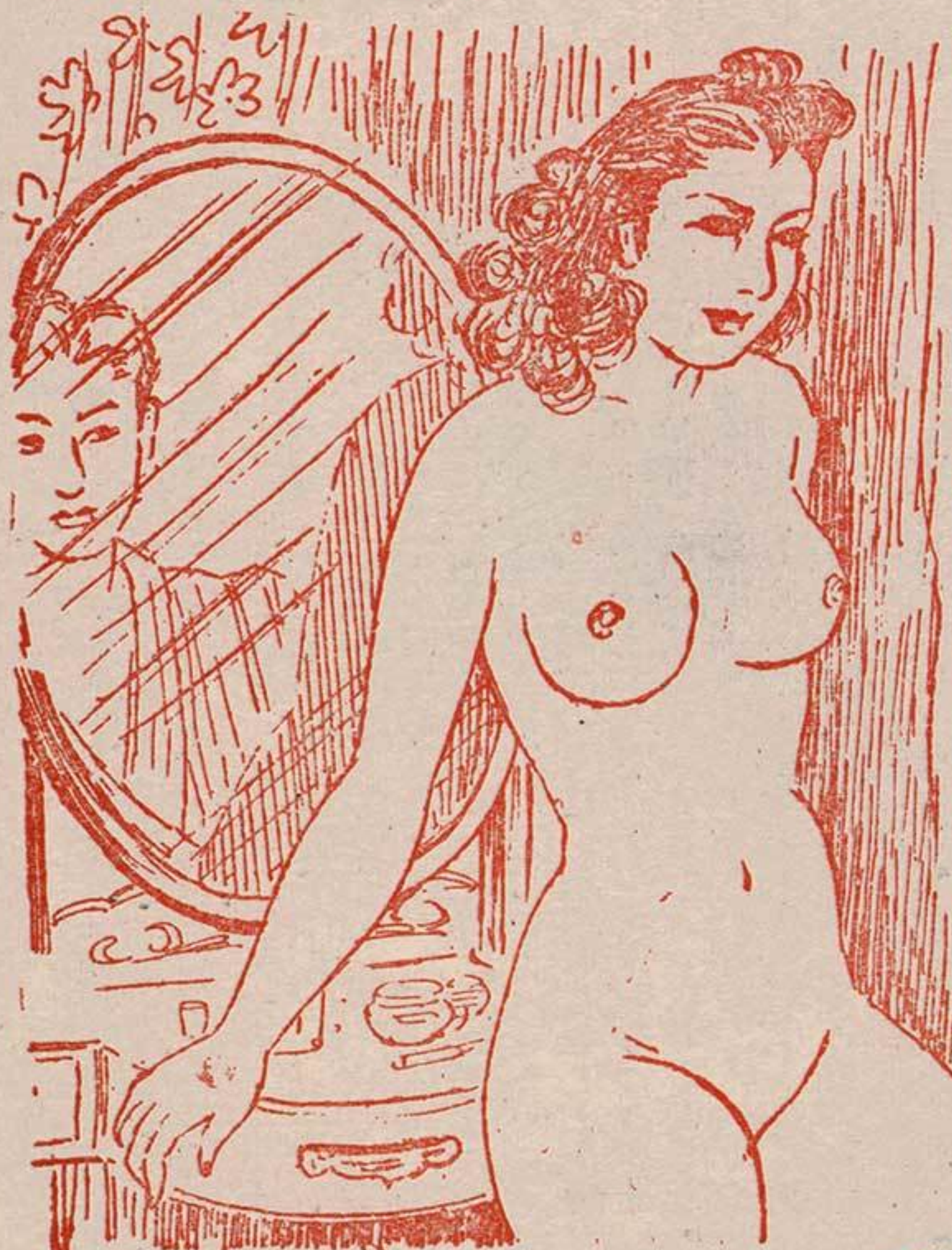
ら、一

寸、ご

機嫌お

伺いし

てくる



わ」

そういつてサツキは出て行つたが間もなく、クツクツ忍び笑ひして帰つて来た。

「あなた、社長とてもご満足の態で帰つていつたわ。これ、出張料の一萬圓よ」

「お前、なかなかすごいんだネ」

「これで二三日逗留しましょうよ」

「ウン、小説の種が出来たよ。早速仕事にかかろう」

「なんて題？」

「小説の種になつた社長」

「オホホホ……」

「アハハハ……」

静かな湯の町の朝だつた。

——オワリ——

新婚夫婦の寝物語から



「ねえ、あなたッ」
例によつて艶子が甘つたるい声を出す。
「うん……」
「もう、そろそろ、お炬燵がほしくなるわね」
「うん」
「あたし、足が冷たいわねえ、あなたッてば……」
「うん」
「あなたの足、いつでも暖かいわ、あなたは情熱家なのよ……」
「うん」
艶子は幸福そうに天井裏をちつと見つめながら、
「いゝ、お家がみつかつてよかつたわね」
「うん」
「まるで、このお家、あたしたちの結婚を待っていてくれたようなものね、ほんとにいゝお家だわ、一戸建て、大きな声をあ

お化け屋敷の睦言

兵庫一平

「でも、お隣へは聞えないし、いゝわね、あなた、そう思わない？」
「うん」
「結婚して、義兄さんたちの狭いお家へ同居するなんて、みじめだつたわ、ほんとによかつたわ、こないとお家がみつかつて……難を言えば、鐵道線路の近いだけが欠点、でも、これも、馴れればリズムのように思えるわ、あたしたちにこない、お家が与えられるなんて、奇蹟よ、うれしいわ、あなたうれしくない？」
「うん」
「これは、あなたが敏腕家だからよあたしどうして、こんな幸福をつかんだのでしょう……あたし、あなたを信頼してるのよ、寂しがらせず、悲しませず、あなたお願いするわ、」
「うん」
「頼りないのね、なにを言つても、うんうんて、どうなさつたの——」
艶子の饒舌はつゞく、
「艶子、そう僕の身を揺るなよ、僕は疲れてるんだ」
「あら、まあ、あなたは結婚前にどんなことをおつしやつたか覚えていらつしやる。会社で疲れて帰つても艶子さんの顔を見りや、疲れなんか一べんにけし飛んでしまつて……」



あれ、嘘だつたの……
「嘘ぢやないよ……」
「ぢやあ、元氣を出してちょうだいねえ、あなた、電燈が明るいでしょ、暗くしましょか」
「暗くするのは待つてくれ」
「変ね、どうかしていらつしやるわ……あたし一日中、一人でお留守にいて寂しいのよ、あなたのお帰りをどんなにお待ちしてるか、あなたにはお判りにならないのね」
「判つている……艶子、汽車が通つ

「あなた、それ、なにのこと……今晚のあなた変ね、すつかりおちつきがないわ、疲れたと言つていながら大きな眼を開けて、ときどきむつくり起上つたりして、ますます変だわ……夜は艶子の愛情に思いつきり、おぼれるんだとおつしやつていらしたのに……あたし失望するわ、なんかあるの……」
「そりや線路が近くだもの……」
「何時だろう？」
「十時でしょう」
「十時？、いよいよ、近づいてきたね……」
「あなた、それ、なにのこと……今晚のあなた変ね、すつかりおちつきがないわ、疲れたと言つていながら大きな眼を開けて、ときどきむつくり起上つたりして、ますます変だわ……夜は艶子の愛情に思いつきり、おぼれるんだとおつしやつていらしたのに……あたし失望するわ、なんかあるの……」

「なにもないんだ、もう何時だ……」
「また時間を気になさるのね……時間なんかどうだつてい、ぢやないの、早くやすまなけりや、明朝、眼があかないわ」

「うん」
「まるでお義理のようね、……あらッあなたどうしたの、また起きたりなんかして……」

艶子は不平そうに言いながら、ちつと夫の顔をみつめた。

「お驚きにならなくてもいいのよ、いまのは汽車の響きぢやないの、毎晩、きいていて、もう馴れつこになつていゝるはずよ、押入のふすまなんか睨んでいて、変だね、おかしいわ……、あゝそうだね、あなたツて方、あたし以外に關係のあつたひとがあつたのね、その幻影におびやかされ、良心のかしやくに苦しんでいらつしやるのね、見損つたわ、あたし実家へ帰るわ」

と、はや涙声になつて言つた。
「あゝ判つた、やれやれ、ようよう判つた」

ほつとしたように明るく言つた。
「あなた、それなに？」

夫の明るさに、艶子は涙の顔をあげた。

「艶子、この家は化物屋敷なんだよ、お化けが出るんだよ」

「あなた、それほんとう、こわいわ」
艶子ははつと夫にしがみついた。

「うん、今日ね床屋へ行つただろう、するとね、待合せていた人が、あすこの若夫婦も、いまに恐れをなして逃げるだろう、誰だつて化物屋敷なんて気

味が悪いからね、と話しているんだ僕は最初のうちはどこのことかと思つていたんだが、聞いていると僕たちのことを言っているんだ、いやだつたね」

「まあッ、あなた、なにが出るんでしよう、こわいわ、しつかり抱いてよ……なにが出るのでしよう……」

「夜中に押入のふすまが音もなくすうつと開くんだよ、それぢらん、あのふすま二寸ばかり開いているだろう、さいぜん、ふすまが開くの僕は見えていたんだ」

「あらッ、きつちり閉めたはずなのに開いているわ、あゝこわ、あなたもつとしつかり抱いてよ」

「そう、ふるえるなよ」

「そんなに、落着いてはいられないわ明日は早速引つ越しましょ、こわい、こわい、どうしようかしら、今日一夜が過せないわ」

「そうふるえるなよ、いまに化物の正体を僕が見せてやるよ」

艶子の饒舌はすつかり納つて、恐怖におのゝいてはるばかり。

「立つちやいや、あたしのそばを離れちやいや、というのに、あなたツ」

「やかましく言うなよ、ふすまを閉めなけりやお化けの正体が見られないんだよ」

艶子は夫の腕のなかで、恐怖に身を固くしてしまつた。

「ほれ、艶子、見てごしん、いまに開くよ、もうすぐ開くよ」

遠くから聞えてくる汽車の響が蒼白い化物の出る、前奏曲のような気がする。

「いま開くよ、見るんだよ、それ開いた、ほんとだろう」

「ほんとだわ、こわいわ、あなたどうしましょ」

「どうもしないよ、化物の正体は、説明をするよ、これは汽車の悪戯だよ、この辺は地盤の關係で、汽車が通る度に家が揺れるんだ、それなんだよ、そこへ押入の敷居が少し傾いてゐるんだね、汽車の震動で、ふすまがちよつとすべるんだ、たゞそれだけだよ幽霊の正体見たり枯尾花なんでもないことだ」

「それほんとう、なんだかまだ、こわいわ」

「納得がいかなぬのだつたら次の汽車が通るまで、待つてゐよう……」

「ぢやあ、ほんとうね……やつぱりあなたは頼母しいわ」

艶子は抱かれたまゝ、夫の懷へ手を入れて赤兒のように甘えた。

「あなたツ、でもまだとくしんのいかなぬことがあるの……」

「なんだい……」

「いじわる、知つてゐるくせに、ひどいわ、ひどいわ」

「あゝッそうか……」
息すまるような長いキツスが終つたとたん、艶子の手によつて、明々とした電燈が、ベットルーム、ランプにきりかえられた。

終



愛欲の歯車



佐々木 直

「マダム、電話ですよ。」

パーテンの松本が、針を含んだように声で硝子戸の外から呼ぶ。

「電話、あなた聞いたといてよ……」

マダム彌生は眉根をよせて、硝子戸越しに言った。

「それが、僕では用をなさないので。マダムでなくちやね。」

「そうッ、ちやあ、ちよつと待つてもらつていて、ちようだい」

パーテンの足音が遠ざかると、

「ふっうん」

と彌生は鼻をならして（パーテン風情で、わたしの行状を批判するなんて潜越至極だわ）と思ひながら、

食卓の向いがわに坐つてゐる玉置へ「しばらく待つて、ね、すぐ來ますから」

といつ、つゝ、酔つてとろりとすわつた眼に媚を現してみつめた。

すうつと立ちあがると、よろよろとよろける、硝子戸につかまつた彌生の着物の裾は乱れ煽情的な、色彩が、ぱつと、なまめかしい票胆氣を醸し出した。

「ねえ、待つて、ねえ……」

甘えるような声を残して、彌生は店へ出て行つた。

うすくらしいシャンデリヤの光の下には、客がたてこんでいて、女給の嬌笑が、みだらな爛れた、気配をおほり立っていた。酔つた躰をカウンターに凭せかけて、受話器をとると、どこからか

「マダム、マダム」

と呼ぶ、彌生は店内の客へ、まんべなく、媚笑をふりまいた。

「皆さん、いらつしやい……」

と言つてから受話器を耳へあてた。「どなた……あ……いつお歸りになつたの……電報？知らないわ……ちよつと待つてね」

妹に戀人

二人を奪われたマダムはどう生きた？

「松本さん、ちよつと……」

と呼んだ、

「ご用ですか、マダム……」

「昨日、電報が來たそうですね」

「來ましたよ、これですよ」

パーテンは電報の綴をのびしながら

カウンターの上にひろげた。

「どうして知らせて下さらなかつた」

「昨日、これをもつて、マダムのアパートの部屋まで行つたんですが、どうも、なかの気配がね、ひどくおもしろい

のようで、僕はノックする気がしなかつたのです、それに電報は今日間に合

えばいゝんだと言ふ気があつてね」

「ちやあ、何故、今日早く言つてくれなかつたの。」

「すみません、忘れていたのです」

「馬鹿にしているわ……」

と、つんとして電話口へ向つた。

「えゝ、電報、着いていましたわ、店の者がうけとつて忘れていたのです、すみません……あらッ、いまからこゝへ來るつて、困るわ、駄目々々、いま

とつてもお店が忙しいの……ちやね、ア

「有田さん、お歸りになつたんですね」

「僕、歸ります……」

「そんなこと気にしなくてもいいのよ、あなたは、いつものとこで待つて

ね、有田をはぐらかせて、わたし大急ぎで、あなたのそばへ駆けつけ

るから……」

彌生は黒の一重羽織を着ながら言

つた。

アパートの自室の前に立つて、彌生ははつとして立ちどまつた、話

が聞える、かき穴に耳をあてたが話の内容は不明だつたが、有田が女を

連れこんでいるらしい気配に、彌生は、自分の行状を反省する余裕を失

つてしまつて、嫉妬にかりたてられ

た。

ハンドルを廻したが内から鍵がかつていた。

「有田さん、あけてよ……」

室内の狼狽がありありと眼に見え

る、彌生はいらいらしながら、外で待つていた。

ドアが開くなり、騎虎の勢で飛びこんだ彌生の眼に、思い設けぬ妹の

と言いつつ、有田へ投げた明代の眼差は、たゞならぬ光がひそんでいた。

「有田さん、明代はわたしの妹なの……」

彌生はきめつけるように言つた。

「そうかい、君の妹か……なあんだ、姉妹總さめかいアハ……」

有田はこともなげに笑つた。

「それぢや、あなたは？」

「明代さんとはホールで知りあつて……」

言わぬが花かね……」

有田はにやにや笑いながら、舌を出して下唇をなめた、好色漢らしい

根顔を光らせている、

「明代、あんた、そんなことをして……」

いの、有田はわたしの夫なのよ、姉さんの厄介になんかならないと言

つて飛出しておきながら、なんて言

うことするの……」

「わたし、恋愛にまで、お姉さんに

干渉されたくないわ、自由よ……男

をつくるのは女の腕よ」

反抗にぎらぎら眼を光らせて、明

代はこう言いながら、有田の銀のケ

ースへ手をのばし外國煙草をつまみ

出して、傲然と煙を輪にふいた。

「まあ、あんたは……」

彌生はいきなり猛然と明代へいど

みかゝつたが、その手をするりとぬ

けて明代は部屋を飛び出してしまつ

た、

「明代ちゃん、明代ちゃん……」

有田までが、つゞいて飛び出して

しまつたあと、彌生は痴呆のように

ぢつと部屋に坐つたまゝ、暗い窓を

みつめていた、妹への敗北感がひ

しひしと胸をしめつける。

そんな彌生の心にふと明るい気

がきらめいた、それは玉置の存在

である。

「そうだわ、行こう、」

彌生はひとりごとを言いつつ、鏡台

の前に坐つて、化粧の崩れを直した。

三

勢いこんで、玉置のアパートへ來た

けれど、彌生はそこでも、敗北のみじ

めさを味わされてしまつた。

「玉置さん、いてる……」

と浮き浮きと明るい顔になつて、開

けたドアのうちらには、そこに、明代

と玉置のあられもない狂態が演じられ

ていた。

「あらッ、まあッ」

見てはいられなかつた、彌生はそん

な叫びを残して、ぱつと部屋をとび

出した、有田の前では一応は姉として

の威厳を保つことができたが、もうこ

ゝでは散々にうちのめされた敗北感に

胸をしめつけられただけで、なに一言

いう気力がなかつた。

玉置こそは心のなかの灯であつた、

女ざかりの欲情を満足させ、性の歓喜

を与えてくれる唯一の相手だと思つて

いたのに、それさえ、明代の若さにも

ぎとられてしまつた

彌生はなんとなく肉体の秋を感じつ

つ、悄然とアパートの玄関を出た、有

田に去られ、またまた玉置までに……

そうして、その敵手が、こともあろう

に血をわけた妹であつたとは……愛欲



の齒車の宿命的

なきしむ音に彌生は慄

然とした、女としてのまともな生活に

入りたい、そんな殊勝な氣になつた。

四

歸つてきたアパートは寒々としてい

て、満たされぬ思いに彌生は孤独の寂

莫をひしひしと味つた、この思いをい

たわつてくれる誰かゝほしい、そんな

ことを思つていたとき

「マダム……」

パーテンの松木が折靴をかゝえて入

つてきた。松木は今日の水あげを、彌

生の前にならべ、

「とつても忙しかつたですよ」

といつ、彌生の顔をみた。

「そうッ」

彌生は他人事のように言つて、ほつ

と吐息を洩した。

「マダム、どうしたんです、溜息をつ

くなんてマダムらしくもない」

「ねえ、わたし失恋しちやつたの」

「ほうッ」

「いゝさまだわ……」

それはそうと松木さ

ん、黒狸バアの収入だ

けで食つていける？」

「マダムの心がけ一つですよ」

「そうッ……暮していける自信があ

るのね……」

「そりや、ありますよ……今晚のマ

ダムは変だなあ……」

松木は、煙草をくわえて、パツと

ライターをすつた。

「わたし眞剣よ……」

彌生には異性の刺戟がなければ生

きいられない熾烈なものがあつた。

「マダム……」

「マダムなんて、いや……」

彌生はこんどこそ、一人の男の愛

情に眞面目に生きようと思つた、松

木の抱擁が、女の幸福をもたらせて

くれるように思えてならなかつた。

—終—

源吉金儲押切帳、内

貧乏一代男

辻村 隆雄
曾根三太郎

前篇



ヘラ／＼の榮養失調で、雜のう一つ肩にかけて大阪驛を出たが行く宛もない。長い間外地で苦勞したんやから、一寸は案配してくれるかと思つていたら、舞鶴で清算金千八百二十六圓貰うたさりで、さあ自由な体や、好きな様にしなはれと、ボーと放り出された。でもまあわいは、月給九十圓でのもあつたら一年位は遊んで暮らせるわと思つたのも束の間、駅弁で、何煮にかまぼこ三切、コロツケ一つに沢庵二切

のバラ／＼弁当で八十圓ふんだくられ、ラムネ吞んだら十円や云われて、わあ、こらいかん。一べん飯喰うたら一ヶ月がとこの給料飛んでしまうがなとベソをかいて、まるで世の中の物價も変つたもんや、四年の軍隊生活と三年半の抑留生活で、もうわいの生涯も無茶苦茶やと、源吉は今更の如くびつくりした。まあ負けたんやさかいこれも仕様ないわ。——せやけど、シベリヤでの赤い話とはまるきり違つて、大阪の梅田界限はどこで戦争あつたんやて云わん許り

のえらい景氣にだまされた見たいな氣がして、

——えい、こうなつたら景氣直しに一杯吞んだらと、駅前から梅田新道をトボ／＼歩き、焼酎一杯五十圓の屋台店が、高い／＼とおして入りかね、この調子やつたら何処迄いつても同じ事やと、思い切つてとび込んだ焼鳥屋で、

——おつさん、酒一杯吞ましてんかぐつと一息に吞み乾して、豚の臓物串にさした焼鳥五本食はり喰つて、

——何ばやねん

——へい、二百五十圓戴きまつさこらあかん、金をほる様なもんやと口惜しがつたが、今更吐き出す訳にもいかず、澁々腹に巻いた千人針の胸巻から、虎の子の百圓札を身の切られる思いで投げ出して、

——へい、大きに、又どうぞ——

阿呆くさい、何が又どうぞや、二度と、暮れなすむ空を見上げて溜息をついた。

短い脚に長いスカートはいて、口紅の濃い女が往來するのが妙に生々しく忘れていた異性への思慕が燃えてきて右を向いても左を見ても無精矢鱈に綺麗に見え、えい／＼こうなつたらやけくそや、今夜は一べん飛田で遊んでこましたれ。——強かつた一升酒を七年吞み忘れて、一升の酒にすつかりえい／＼こころもちになつて、ダラリと雜のうぶら下げた下駄靴で、ヨイ／＼フラリ／＼とちどり足。それをどう間違えたか、

——ネエ、一寸遊んで行きなはれ。え、娘世話しまつせえ——

五十がらみにベタ／＼と安白粉を匂わせて、エプロン婆がそつと近寄ると声をかけた。

ハハ、こいつが、噂に聞いたパン／＼のボン引とか云う奴やな。

——何ばやねん？……

——時間で五百圓、そらえ、娘だつせよつしや、ほんなら任しとくわで任した娘が現れたのはいゝが、すが眼の上に、眼と眼の間が間抜けて廣く、味噌ツ歯を齒じしまで見せて卑らしく笑うと、

——おゝきに、ほんならおばはんいつものとこで、後で呼びに来てな——

これがえい／＼娘か、まあ乗りかゝつた船や、しようないわと、手を引つ張られてゴミ／＼した露路を抜けて、トンカツ屋の横手、間口二尺の階段をドク／＼昇つた。

二階に三帖一間が五つ程あつて、その一つのたゞみだけは新らしい小部屋に、トランク一つボツンとおかれて佇しかつた。

惜しそうに出した五百圓無雜作に受取つて、女はブイ／＼ものも云わんと出て行くと、何処で脱いで来たのか、薄汚れのシュミーズ一枚で引きかえし、ぼんやり土間で立竦んでいる源吉に、——あんた、遊びはんねんやろ。何そこでぼんやり立つてなはんねん——あゝそうかと氣がついて、泥だらけの軍靴をギシ／＼脱いで、踵の見える大穴のあいたたつた一枚きりの、ブンとすえた臭いのする、軍足を氣にしい

／＼上ると、女が敷いた煎餅布團に黙つて横たわつた。

感情をおき忘れた平たい顔の女が、今ふりかけた許りの百圓香水のどぎつい匂いを迎りに撒き散してコロリと傍らに転がると、さあ好きな様にしなはれと云わん素振り――

おづ／＼手を出して、そうやこの女は金五百圓也で買うた身体、かめへん筈やと圖々しくなると、七年間忘れていたものが蘇つて来て、ダズ／＼鼻を吸つて人形の様に身動きもしない女をながめながら

わいはいえらい眼に逢つて来たんやで、ええ、あんたら知らんけど、わいは七年半と云うもの男ばかりの世界で辛抱して来たんやで――

愚痴ツぼくなる源吉に、女は急に思ひ出した見たいにフッフと笑つて、どこの誰様やら見たいに、

あーそう、あーそう……の一点張り。張り応えのうて、こんな女にわいの若衆はわからんのや。やつぱりパンパシするだけの女やとその氣になつたがいざとなると薩張り気分も出ず、泣き出した様な氣持で、

小夜ちゃん……お時間だつせえエプロン婆の聲に慌てゝ見たが追つかず、えゝいもうこうなつたら、やる処までやらんと氣がすまんと、有金残らずさらけ出した。

ほんならこゝへ泊りはりますか――あゝ、泊らいでか。わいも男や、今更おめ／＼帰れるかいな――そらそや、ほんならお泊りやで

下に聲かけて居直ると、女はむつくり起き上つて手を延して、これわかけのトランクの蓋を開けてアメリカ煙草をとり出した。

――まあ落付いて一本吸いなはれ――夜道に日は暮れんよつてになあ――

日の暮れん夜が明けて、呆けた顔でフラフラ露路を出て来た源吉に、トンカツ屋の二階から、女は手を振つていた。十一時前と云うのに静まり返つた露路に朝日がシラ／＼とさし込んで、十六圓残つたバラ錢をポケットでまさぐると、さあ阿呆な事してしまつた。これからどないしよう――

こんな時、わいに親か身寄りあつたら苦勞せえへんのにと虫のいゝ事考えて五圓のパン二つ買つと朝飯代りにほゝぱり乍ら、阪急の構内をぶら／＼してゐた。

あれも人の子モク拾い。――見れば一寸ぐらいから、手に火のつきそな短い奴まで、丹念に拾ひ歩いてる奴があちこちにうよ／＼してゐる。

――それ拾つてどないすんねん？……

――阿呆かいなオツサン、巻き直して賣るねんがな――わいも拾つてえ



三太郎

いち／＼断らんかて、勝手に天下の大道に落ちたるもんや、せいだ拾いと云われて、眼の覚めた氣持で慌てゝ拾ひ出した。

毎日々々拾う事にかゝりきつた。拾う事にかゝりきつて半月、どうやら細々命だけはつないだものゝ、仲間が多すぎてとんと近頃は拾いも少ない思いついたのが駅の構内で、電車待ちの線路に落ちた吸殻あつめ。生さんが爲の才覚で、竹竿の先に針をつけたのを隠し持つと、大枚五円はり込んで省線鶴橋の駅に出掛けた。駅員の眼を窺み乍ら人浪を縫うてホームの上から軌道に落ちた吸殻めがけて、プツリ／＼と針にさすのが一日中面白い程集つてそうやこれも構内清掃、公衆道徳を實踐してるんやと自ら言い聞かして、一杯になつた雑のう抱えて半月振りに駅前のカストリ星で焼酎をひつかけた。

——自分で闇煙草つくりなはれ。うちで買うたげまつさ——

——おやじ、ほんまか——

そんならそれで、わいは私設専賣局始めたろ。この儘賣つてると身入りも少ない。早速巻紙買うて、カストリ屋の親爺の言葉をあてになれん手つきで

ローソクともして、コソ／＼やり出した。大体わいはピースやなんてあちやち言葉が気に喰わん。日本の煙草やさかい日本語でえゝのや、わいは國粹主義で／＼平和と書いたるんやと、聞き

嚙りのローマ字でロ－マと丹念に一枚／＼黒鉛筆でかきこんで、二十本一束十五円なら阿呆らしい位賣れた。

國粹主義がローマ字で平和と書いて、英語めかした矛盾に氣もつかず、

源ちやんのモクは味がえゝで——

——そらそや、洋モクをようけ使いたあるさかいやと自慢にら／＼。

モクの取締りが大分きびしくなつたで。源ちやん、金貯めるんやつたら今のうちや。金さえあれば儲かる時代や

と仲間云われて、そやな、この商賣もぼつ／＼危いよつてそら／＼見限り

どきや。思いつくと氣が早い。その氣になるとその日から、爪に灯をとす

生活を始めた。好きな焼酎びたりと止めて、朝はコッペパン一個にきりつめ

晝は鶴橋のガード下ろつていて呑屋の裏口で喰べ残り拾つてすまし、夕方だ

けなとせめてカロリーつけんと、体も

たんとはり込んで、配給の余り魚の一番安いのを一切れ無理を云つてわけてもらい、塩焼にして喰う甲斐あつて、

どうやら仲間の新やんの二階の物置一

間、月百圓で貸れる身になつた。

もうこれで地下道や、中の島で寝る事もないと、秋風と共に急に人間らしい氣持になつて、新やん擱まえると、

——なあ新やん、何やつたらよう儲かるやろ？——

——阿呆云いな。たつた一千や三千の端金で何が出来るかいな。儂がきゝたい位や——

——神妙にうなづいて、

——それこそや、しかしこう取締りきつなると、わいの平和もさつぱりや。

あ、そや／＼新やんえゝ事あるわ、一寸耳かしな——

ええどや、傷痍軍人やつたらどうやろ。もとでいらすでよう儲かるで。フ

ン源やんも仲々隅におけんわ、ほんなら早速やろかと、忽ち俄傷病兵に早代

りして、新やんの都合して来た白衣を着込んで、ボロ切で脚首を巻くと蒼ざ

めて、一層傷病兵らしく、とても偽傷

痍軍人には見えなかつた。

——えらい新やん汚ない白衣やな——

——阿呆云え。汚ない程値打あるんや

それこそやとそその氣になつて、好きで覚えたハモニカ吹いて、新やんは

哀れな声をはり上げて、戦争の犠牲となつた我等傷病兵に、何卒厚き御同情

を……と板についてくると、心で一寸とがめたが、何、わいも戦争の犠牲者

や。云うに云えぬ心の傷手を蒙むつて

いるがなと心に言いさかすうち、はり

ぼての募金箱は莫迦／＼しい程ふくれ上つた。

えゝ氣になつてやつていゝうち、大阪の夕刊新聞が、偽傷病兵の記事をの

せてから、急に人々の眼がジロリ／＼と光る様で、こら傷痍軍人章もないわ

いらもいつ引つかゝるやわからん。そ

ろ／＼見きり時やとあつさりやめて、募金の金山分けし乍ら、

——新ちやん、今度は何やろ？……

——阿呆！自分で考えなあかんのや

それこそとやと馬鹿正直に頭をひねつた拳句、

——そうや新やん唄うたえるやろ。青空樂團編成したらどうや。この廣い大阪で、未だ二組か三組ぐらいのもんや

で——

——そらえゝ考えや。何でも儲けよ思

たら人のやらん間に早いとこ眞似せんとあかん。ほんならこの金出し合うて

ギターとアコーデオン買おか——

——新やんの妹で、布施のゴム工場の女工をしてる雪ちやんを呼び戻して、女

氣がないと淋しいからと俄歌手に仕立て、三人でうろ覚えの怪しげなレコー

ド仕込みの唄を歌いまくると、下手も愛嬌で客はガリ版の流行歌全集を十圓

で買つてくれた。根が器用なだけに、お玉杓子も読めぬ癖に、どうやらこ

うやら歌についてアコーデオンを弾くだけは弾けた。徹夜で覚えた新やんのギ

ターが情ない音色でボロン／＼とアコデオンの合間を縫うて、すつかり樂團

氣取りで

——わいの得意はかえり船や。かえり船だけわいに唄わしてやと云うだけあ

つて、源吉のかえり船はたしかに鐘二ツ半ぐらいの値打はある。

ペラ／＼の人絹アロハシャツも身について、リーゼントも人並みにくねら

して、女が欲しくなると、新やんに隠れてコッソリ雪ちやんを口説いて、ナ

イロンのハンドバックを押付けた晩、早いとこものにしてしまつた。

——雪ちやん、わいはもつと／＼儲けてみせるさかい。それ迄一緒になるの



三太郎画

を辛捧してや。な、この意味わかるやろ？

ウンと可哀想に首の附根まで眞根になつてうなづくと、あゝこの娘は純情なえ、娘や。すつかりわいに惚れてしもとる。ゴム工場の会計係に五百圓貰うて、十七で処女を失つたとは知らない源吉は悦に入つて、いつか折があるつたら、新やんに頼んで、正式にこの娘貰たる。わいも一人もんで淋しいし身寄りのない体や。女房貰わんことにや、二十八にもなつて恰好悪いがなと明け暮れ稼ぎと雪子との逢曳に忙がしかつた。

源やん、もうあかんで。敵はマイク持ち出しよつたがな

商賣仇がマイク附きの大々的放送に出て来たからには、向うを張つても始まらん。もうえゝ加減にやめとかなあかん、見限りのいゝ源吉はやけたたゝみにころこんで、雪子に買いにやらした夕刊の三面記事を一番に見ると、宇都宮のタヌキ御殿がパツと大きく眼に飛び込んだ。何？何？狸御殿は活動だけやと思つたら、本物もあるんかいな。えらいうまい事しよつたわ。

おーい、新やんタヌキ御殿や！

何寝呆けてねん——
寝ぼけてへん、もう眼を開けてこの新聞讀んでみ。紙や、紙で一儲けしよつたんや、でや、わいもやるか？
えゝ考えやけど、源やん心当り……

心当りはあるんや。わいに任しときとボンと胸を叩いてパツと飛び出すと樂園で馴染みになつてひいきしてくれ



た、六十面さげて流行歌が下手の横好き、困つたらおいでと云つた本屋寒天堂のおやじを勢よく訪ねた。

安う紙買えるところないかオッサン

どないすんねん？……
勿論賣るつもりやがなと聞くより、

そらあかん。やめとき——
この寒天堂がやつて、もうそろ

あかんのや。紙はどんく安うで

出廻つて、今更闇賣りでもないで。それより源さん、あんたそない云うのなら、こんな商賣どや？

えゝ商賣ときいて乗り出す源吉を抑えて、

まあ／＼そう慌てなはん。実は本を出すんや。今流行のカストリ雑誌

と云う奴や。エロ雑誌も上手に賣つたら儲かるで——

わいは教育ないけど、出来るやろか

何云うてんねん。出来いでか、えら出来や。まあわしに任しとき。小説

のネタはチャンと心配したる。発行編集人はあんたや。なあたいしたもんや

ろ。かりにも一冊の本の編集人になるんやで——

出来上るのを持ち兼ねて飛んで行き

わあ、えゝ表紙や、それにこの口

絵の裸美人が気に入つたわ。それにしてもオッサンあんたは見掛けによらん

えらい人や。ようこんな名高い作家集めたもんや、どやこの豪華メンバーは

吉河英二に小佛二郎、吉矢信子、飛田常男、多村大二郎、小島政太郎。フン噂にきく一流許りや。一寸字が可怪しいな？。なんや印刷の間違やろて？。そ

うやろ——。いや大したもんや。

一字二字の名前の変つたぐらい敢えて気にもせず、源吉は有頂天で喜んで

ふん、仲々よう書けたあるわ——

内容はどれも似たりよつたりのエロ小説許り。一枚五圓の稿料で速席に、

アルバイト学生に書かした大恋愛、時代、現代、探偵、記録ものの、銘打つて名作十六人集。風流滑稽談大特輯号

——。エロ物一掃の後、冒険覚悟の發行に、意外に當つてよく賣れ、寒天堂

は純益八萬圓を挙げてその半分をボツポに入れ、

なあ、源やん、こう見えても稿料

廣告代全部拂うて、三割の返本見起したら、純益は四萬圓足らずや半分づつ

で二萬圓やけどまあ儲からんよりましや。これとつといて——

調子にのつてエロが段々きつくなる

と、一回發行する毎に源吉の懷ろはグ

ン／＼膨れ、こんなえゝ商賣ないわ。

遊んで、毎月二三萬の金が入つてきよ

ると云うてるうち、お上から一寸おい

で——わては何んにも知りまへん——

馬鹿云つちや不可ん。本官を愚弄するか。今更あわてたけれど時既に遅く、散々お目玉を蒙つて、まだしも豚箱入らなんだがめつけものと蒼くなつて飛んで帰るなり、

——新やん、もうあかんわ。わいはえゝ面の皮や。今日から商賣變えや。何



——阿呆らしい。自分で考えんかいな
その新やんは近頃惚れた女を嫁に貰
ろて、すっかり眞面目で、本町の織物
問屋の通い番頭に納まつていた。

二級酒をラッパ呑みにゴクリ／＼や
つて、先刻怒られて来たエロ雑誌の内
容をぼんやり頭に浮べるうち、源吉は
ハタと思いついた。そや／＼クスリ賣
つてこまじたる。今の日本はこれ以上
産んだら喰て行かれへんと云うこつち
や。どだいあのゴムは感じが悪くてい
かん。避妊薬とはえゝ思いつきや。

——新やん、これならどうや——

——出来るんかいそんなもん？……

まあ見ていなとボンと例の如く胸を

叩く姿は、既製服乍ら三ツ揃の背廣も

いつしか身につけて、馬子にも衣裳の

チョイとしたスタイル。こんなすゝけ

た二階借りには勿体ない程のポケット

のニツケル鎖も万更見
捨てたものでもない。

俄か仕込みのサルチル酸と寒天で、
どこで頼んだのか石油罐に一杯どろり
とつくり上げ、いつの間につくつたの
か箱まで揃え、

——どや、えゝ名前やろサンガーゼリ
！。

齒磨屋の顔見知り、チューブ詰めし
てもろて、一個六十圓の小賣値は百圓
と、藥局を軒なみに廻ると、五十個、
百個と注文がとれた。

——そらあんたはん、効くか効かんか
どだいわてとここで実験すみでつかい
な——

お雪ちゃんに使つて見たとは流石に
言わなかつたが、当の雪子は浮かぬ顔
で——

——源さん、あれほんとうに効くの？

——そら当り前やかな——

——でもあたし、今月はとまつてしも

て、心配してるんやけど……

えゝ！ほんならやつぱり効かんのかと
些かげつそりしたが、顔には出さず。
——なあ雪ちゃん。もう今更夫婦見た
いなもんや。そろ／＼出来てもえゝ時
分や思うて、わいが一寸加減しただけ
や。心配しな。

と取りつくろつて、もう愈々雪子貰
わんと不可ん、早いとこ家探してこま
そか、西に東に飛び廻つて相変らずサ
ンガーゼリーの賣行きは順調だった。

天満に手頃の店を一軒買つと、雪子
を呼んで店番をさせた。新やんに内緒
の仲も、今では大ツび／＼に泊めて、兄
貴の黙認をえゝ事に、相好くづしてニ
ヤ／＼喜ぶと、当の雪子はすっかり女
房取りでいつしか源さんがあんなに

変り、やつと認可のおりたサンガーゼ
リーの外に避妊剤、器具から性病予防
薬、催淫劑のヨヒンビン系統のものま
で陳列に並べた店頭で、白い上つぱり
も甲斐々々しく、女医者気取りで若い
男を捌えて、なまめかしく喋る口上が

面白く、事性に関する品物なら天満の
セックスストアーに行けば何んでもあ
ると、赤あんどまがいの源吉の店は、
秘事を愉しむ輩で寧ろもない繁昌ぶり

陳列の中に麗々しく「完全なる結婚」
「性典」「性の科学」やら性のパン
フレット並べ立て、お雪の腹は其の
儘ふくれもせずチヤンと小さく納まつ

て、子を孕んだ女子はどこの誰かと許
り粧いをこらして、己れの墮胎などお
くびにも出さなかつた。

——当の源吉はこれで十何人目の孕み
女を連れて来て

——院長はん。面倒だつけど又一丁早

いとこやつとくはなれ——

何しろこんな時代や。産みたい時に
は産み、産みたくない時は産まぬと云
う自由な時代。これも人助けの善と、
性病科、産婦人科と書かれた看板をチ
ラリと見上げて、そら／＼お雪をこゝ

へ頼んだのが傳手の始め——この商賣
もよう儲かるやろ。妊娠一ヶ月千圓で
三ヶ月目なら三千圓。チョイト注射一
本と、そらはとか云うやつで掻き出せ
ば坊主丸儲けよりばろい儲け。

——一番こいつを始めてこまじたると思
うと気が早い。院長に頼んで医專出た
ての医師を一人廻して貰うと天満のセ
ックスストア、近頃は名を換えて、性
科学研究所の横にパンパンと三日でバ
ラツク建てさせて、性科学研究所附属

診療所と大層な名前もいかめしく、研
究所長兼診療所顧問と納まつて、バリ
／＼墮胎を始めた。

——やつぱり人間落がついてくると、女
の一人や二人圍つておかんと体裁が悪
いなあお雪。

——阿呆らしい。何が体裁だす。勝手
にしなはれ——

——そうか、ほんなら勝手にするわと、
雇つて来た看護婦二人を交る交る掴ま
えては、

——なあ、うちは避妊、産制が商賣や
研究がてらに一つべんどや

——千圓札一枚やんわり握らせると脆
いもので——
——あんた妙な事うちの看護婦に教え
なはんや——とお雪が涙をためると
——お前も昔、と云つてもつい二三年
前やけど、ゴム製品見せたら納得した

やないか。——しようむない事に口出しせん、と商賣に身入れと口争いの折柄——一べんどうぞ先生に座談会出て戴きとおまして。と夫婦雑誌が頼みにくれば、どうやわいも先生と言われる身や。お雪お前は幸せ者やでと記者に振向いて

何ぼくれんねん？……
お雪がハラ／＼するのを

やない。お前も研究所長の妻だがな。料理屋の二階に応揚に座ると、勝手な熱をあげて、近頃の性道徳はどうの産物がどうのと、今迄読み耽つて来たエロ雑誌のうんちく傾けてとう／＼と弁じ、医学博士も顔負けさして

あゝおもしろかつた。又頼んまつさ——でもまあ、わいと云う男も三年前のモク拾いの事較べたら一応偉ろなつたわい。なんと云つても雑誌や新聞に名前が出る身分になつたんや。こんどは何して儲けてこましたろ。

双眼鏡片手に競輪の女流選手の尻の振り工合許り追い乍ら、傍らの二十才にもならぬ女事務員の手をぐつと握りしめて源吉は、八百長競輪のボスを頭に描いていた。

今晚あの八番の本命の娘を引つ張つて、一丁握らしてやろうかい。

札幌の山を喰ひ浮べて源吉の手はいつしか女事務員の腰の辺りへと下つていつた。
(第一部了)

後篇

——さあこれからや。と源吉は大分肥つて来たビールの腹を撫で乍ら、はた

ちにも満ちた競輪娘おみつが凝つと堅くなつて、前に出されたお膳にも手をつけかねているのを楽しそうに横眼でにらんで、

——どない云うて口説いてこましたろ——なあ、あんた。お見掛け通りのこんなオジサンや。わいはあんたの大的ファンやさかい悪い様にはせえへんでせやけど、若いのに競輪選手やるようになったについて、色々深いわけもあるこつちやろ。一べんきかして！な。

きけば母親が癌で、たつた一人の兄貴が未だシベリヤ——。矢ッ張り金がほしさに女だてらの自轉車乗り。——そら仲々えらいわ。とりあえずいくらあつたらえゝねん？フーン五万圓

えらいいるなと思つたが顔には出さず、こんな不細工な小娘に五万圓やるんやない、これが商賣のもとでやと、眼をつむつて、半年前から始めた当座預金の小切手帳開いて、サラ／＼下手な字で書き込んで、ベタリと、ハツタリのかゝつた大判を押すと、

——さあ、五万圓……
貝殻の様に身を堅くした男を知らぬおみつ、の体を、性研究所長のメンツにかけてもと、じんわり口説き落して、やつぱりスポーツで鍛えてあるだけにえゝお尻や——。

源吉の頭は慾情とは別に、これで明日の勝負が楽しみやとろそぶいていた翌朝、

その足でハイヤーを飛ばして競輪場へかけつけると、予想はやつぱりお光——。どやおつさん、おみつの相手に

なる様な女子は誰やろ？——

——そらあんた、と予想表開いて、このシー坊ぐらいのもんだす。せやけど今日の穴はフミ子だつせ。相手も物知り顔に苗字を云わす名前で告げる奴にそやろ／＼、大きに——。

源吉は窓口でニタリと笑うと、こらいよいよおもしろいわ。シー坊の苗字探して、そいつを百枚買ひ込むとぐつと胸を張つて双眼鏡握りしめ、ゆんべあんなけ絞つといたんやさかい間違いない筈や。ベタル踏む足フラ／＼して、青息吐息に息切れするやろ、さあ負けてくれ——。

れて、案に相違のゲンと他を引き離してトツプを走る。わいはあの尻を撫でゝ見たんやでと叫びたい優越感をぐつと押えて、源吉の車券束持つ手はビリ／＼震えた。
愈々最後の追込み——。
突然五番を走つていたシー坊のベタルが俄かに勢いづく、四番、三番をさつと抜き、ダークホース二番のフミ子を悠々と追い越し、ゴール手前でおみつとスレ／＼、ワーツと云う歓声と共に同時に飛び込んだ。
ギョツとして、わいのゆんべの追込み足らなんだのかと氣になつて、こらえらい損したかも知れん。合せて六万



これ、十月かこの
値打認め
くれるや



圓がとこ——と思つたら、マイク
の声でシー坊のイチバン。

細いタイヤの輪の差だけとは随分危
なかつた。單で穴が一万八千圓。

しめて百八十万圓や。ワイイと踊り出
したいのをグツと押えて、いや／＼わ

いももう紳士や。そんなはしたない事
せんわいと、流石にブル／＼震える足

をふみしめた、その足で久し振りの音
の仲間、新やんを訪ねて、

——どうや新やん。何かえ、商賣ない
もんやろか。金は喰る程あるで……。

——そら自分で考えなあきまへんがな
いつか新やんの言葉づかいも変つて

いた。
——それもそや。わいはどうも人を当
にする癖がある。こないなことで出

世せんわ——
——手土産の駿河屋羊かんポイとおいて

立上ると、
——源さん。お雪だけは可愛がつたつ

とくなはれや——と新やんの声を尻に

きいて

——わいは何したらいい、
やろ——とタクシーの窓

から戸外を眺めた拍子に
どぎつい裸女のポスターが

眼をかすめて、あッそうや
近頃流行のスト……スト……

……ストリップ、シヨウと
かいうあいつや。あいつや

あれなら儲かること請合、
併し小屋でやつたらわいの

姑券にかゝる。こゝは一つ
秘密クラブ式にやつてこまそ

その夜何日振りかでお雪を抱
いた。

——なあ、お雪、裸踊りやつた
らどうやろ。よう儲かるで？

——そら儲かりまつしやろけど
あんた見たいな好きな人に一寸危なう

と皆まで云わせず、安心し、安心し
商賣は商賣や。

そらや、この間新聞に出ていた、エ
ロ落語で引つ掛つた桂風團治を訪ねて

こましたろ。第一わいが聞きたいがな
と、夜の明けるのを待ち兼ねて、肩書

沢山の名刺をふりかざして謹慎中の桂
風團治の宅へハイヤーを乗りつけた。

——そらそや、言論の自由の世の中で
それを束縛するなんてどだい間違うて

いる。やりなはれ／＼。わいが及ばず
乍ら応援しまさ、散々たきつけたあ

とエロシヨウの打合せすますと、早手
廻しに帰りがけ葉書大の案内状千枚半

日で刷つて貰つて、これはと思う知名
人に片ツ端から宛名を書いて発送した

「性の神秘探求会開催御案内

一、性の躍動性に就て

性研究所長 辻井源吉

一、性と夫婦生活

医学博士 色間龍三郎

一、世界性風俗珍談

医学博士 武山文章

余 興

一、落語いわしの頭 桂風團治師

一、映画或る夫婦の一日 性文化映画社

一、秘密シヨウ極楽への階段

L、Yシヨウ

ヒロセ春美、東カウ子、ルイ美山

追記、性具、秘具の特別

展示即賣会

探求会費、千圓（当日

限有効）

フーム、我々らよく出来

たわい。映画とシヨウの方

どや仲々え、事云うやると、自分勝手

にひとり寝るうち当日になつた。

流石に朝からソワ／＼して、

——なあお雪、あの案内状出した連中

皆来てくれるやろか？

——そら、その時になつて見んことに

は——わからんな、それもそやと、四

時頃になると早風呂に入つて髭そつた

テラ／＼顔に舶來のローションなすり

つけて、昨日慌てゝデパートで買い込

んで來た委託販賣のモーニング着込む

と、それでも馬子に衣裳、すつかり見

違える様になりはつたと、蝶ネクタイ



をしめてやり乍ら、お雪は惚々源吉を見なおした。

近畿ホテル四階の催場を二万圓で借り切つた会場に、それでも時刻になるとボツ／＼と面映ゆげに案内状を出した重役、課長連を始め名士、文士——噂を洩れきいた好事家達が乗り込んで灰暗いサロンのあちこちに澄して煙草をふかしていた。

千圓が千人で百万圓。会場費、余興代、講演代、食費に雑費差引いたら、こらトントンかも知れへんで、まあおもしろい眠るだけ得やわと、入口の所で一々丁寧に頭を下げ、秘書のよし子に受付さして、勘定間違わんとさやロハで入れたらあかんで。変な奴來たち定刻になつた。千人には足らなかつたがざつと八分通りの集りにまあ——と胸を撫で、

——え——、かくもお集り願つてと震える声に、こらいかと臆下丹田に力を籠めて、源吉は臍の緒切つて始めて八百人からの有名、知名人の前で司会旁々講演の眞似らしいものをした、ボロの出ないうち医学博士？二人の話も終り、エロ味たつぷりの落語にクス／＼忍び笑う気配感じて満足し、映画はサイレントの三巻で、最後の三十秒程の営みを見せる爲に長々と甘い新婚生活を下手に撮つたもので、さして興奮もせず、最後の秘密ショウだけが流石にグツと息をのむ凄さで、これで千圓がとこの値打認めてくれるやると漸く源吉は責任を果たした氣になつて、暗闇に夢中で秘書よし子の腰を抱きし

めた。

裸女乱舞、バタフライも脱つた正眞正銘のものを見せつけられ、最後に蛇まで参加の妖艶さに、よし子は顔を赧らめて震えていた。

さあ終いやでと立上ると、抜目なくセックスストア販賣の、秘具、珍具と稱する毛色の變つたものを賣りつけてあゝ、しんどかつた。余んまりぼろい儲けやないけどおもしろかつた。第一顔の賣れたのが何よりの取柄やと、悦に入り

——どや、お雪——もう一ぺんやろか——やめときなはれ。そのうち引つ掛つたら今度は元も子もおまへんで。えゝ加減に止めときなはれと云われ、おやお雪が珍らしく意見持ち出しよつたそれもそやなと溢々あきれた翌日の夕刊新聞片手に吸うていた、煙草の灰のボトリと落ちたそのところに、小さい五行廣告で、

「結婚と交際」

初再婚の方、又生活に悩む未亡人淑女の身の上相談、援助なさる紳士の御相談には誠心誠意お世話します。

阿倍野区阿倍野橋筋一丁目×番地

善導社

ハハーン。こらおもしろいわい。

——おい、お雪。一ぺん行つて見たらどうや

——阿呆な事云いなはん、何でわてがこんなところへ行かならしまへんねん？

偵察やが、商賣やがと、源吉は早速

その氣になつて、澁るお雪の尻つゝいて、己れもひとかどの紳士氣取り——

探しに探した露路裏の、名刺の裏に下手糞にペンで書いた善導社に、オッ／＼お雪が入つて三十分。わざと、キヨロ／＼して源吉はガタの破れ格子を押しかけて、

御免、今日は……。

——へい、おこしやすと五十がらみの

オッサンに、

——あのう、何も云い出さぬうち

——へへ、分つてまゝ。いゝ婦人を

世話しまつさ。丁度今御主人の亡くな

られたいゝ若い方がいてはりますと、

お雪を指して、——どないだす、この

方でしたら氣に入りましたやろ。どう

です貴女、この人は地位も財産もある

し、第一この御顔は女の人に親切の相

だつせ。と立て続けに喋つて、ほんな

ら貴方から千圓。こちらは御婦人で五

百圓にしときます。あゝ芽出度い／＼

まあ／＼仲よう早速お手でもつないで

歸りなはれ。何も恥かしがることおま

へんがな。と送り出され、

——あゝ阿呆らし、千五百圓まるいか

れやがと、表に出て二人は顔見合せて

大笑いし、あゝおもしろい茶番やつた。

それよりどや、精つげに柴藤の鰻でも

喰いに行こうやないかと、薄化粧のお

雪の手をとつて、

——ハハ、おつさん、こうせえいうた

でえ。眞晝間から恥かしげもなく手を

握り合はすハイヤヤを呼び止めた。

——わいは早速あの商賣始めた。濡

手で粟の掴みどりや。

二三日経つた新聞に、他の同業廣告

を圧倒した二段抜き麗々しさで、

「悩みすぐ解決す!!」

悩んでいる女性はずぐ御相談下

さい。結婚、援助の方多数。一

切責任確実。援助したき紳士多

数待つ。特に極秘に身上相談も

致します。

省線天六下車

天満セックスストア辻井雪子」

——うわーッ、わてほんまによう云わ

んわ。

——まあそう云いな。とお雪をなだめ

て手ぐすね引いた。まともな結婚相談

は少なく、世の中にはようこんな色

氣の多い男女もおつたもんやと、老い

らくの慾情に、二十才そこ／＼でにき

びの出来始めたの、貰い手のない不器

量娘に、三十後家の辛棒の出来ぬのが

色と慾とで次から次へと訪ねて来ては

お雪はひとかど勿体ぶつて世話をした

手数料は相手を見てふつか、歸り際

には、

——こんな時代ですさかい、おついで

に。と避妊薬をすゝめて悦に入り、

——仲々、面白おますわ。あんたはん

まにえゝとこに氣がつくわ。と褒めら

れた時分、源吉は既に訪ねて來た女の

うちから、よさそうなのを間引きして

四号辺りまで方々に囲つていた。

——わいは妾囲つても唯遊ばさんぞ。

と、

二号には梅田新道で結婚相談所支部

を始めさせ、三号に南の歌舞伎裏でス

ランドを経営し、四号には小金を渡

してアベノで金貸しをさせた。儲けの

半分を生活費にやつて、半分はとり上

げ、わいの妾圍いは金いらすや。反対に儲けてくれよと逢う人々に吹聴し、セックスストアと結婚媒介はすつかりお雪に任し放しで、己れは千日前歌舞伎裏の、若い三号の管むスタンドでチビリ／＼やつていた。

何でも目先の早いのが取得——河内の知人のラムネ工場を買収して忽ち社長に納まると、リーダースダイエスにのつていてる製造法をうのみの儘につくり上げさしたら、どうやらよろしいものが出来上つた。

し。一等百万圓の福引つきで宣傳し、各デパートでマネキンに派手に宣傳さしたら、全國からもう阿呆らしい程注文がきて、河内の工場で徹夜しても追いつかず、近くのサイダー工場買いつてようやく間に合して、ざつと見積りだけで二千万圓儲けて。

んらが憎うて／＼、妾殺しも執行猶予ぐらいですむさかい、いつそ青酸加里でもと思たけど、何しろ三人も四人もではそうもいかず……と泣き崩れるのを、フン／＼無理もないわと服を脱いでどてらに着換えると、

そら思て、わいは甲子園にお前の爲に別荘買つたや。こゝは又誰かに任しといて、新らしく五号になつたみゆきの顔をチラリと頭に浮べて、

暫らく呑気に暮らして見ようや。ほんまだつかと縫るお雪に何で嘘云わんならんねと源吉は久し振りに昔を偲んでお雪と音を立てて接吻した。

甲子園に八十万圓の別荘こうて移つた日、名士を招いての招待宴で、わざ／＼訪ねて来た昔なじみの新やんの影は薄く、お雪はいとしかつた。

廣い洋間からしよんぼり消えた新やんと入れ違いに、女中がバタ／＼と走つてきて、

何や、電話？誰からや……？何アベノのきぬ子さま。——シート大きな声で云うなすぐ行く。

フラ／＼え、気嫌で受話器をとると何やツ今頃ノフン——フンそうか明日兎も角行くわ。明日まで待つて貰うて——。

ガチャンと切つて、そや／＼、そう云えば近頃大分金詰りが深刻になつて来たわい。きぬ子の云つた大同機工とかの大口融資の口に乗乗して、一つ金貸本気で始めにろ。

思つたら気が早い。アベノの家を擴張して事務所になると、眼先のきく店員二三人おいて、融資、大口金融の看

何と云うんやよし子？
これが嘗ての源吉の秘書で、あのおとなしい、エロシヨウ見て慄えたよし子かと思われぬ位い、すつかりあかぬけして、水商賣のマグム振りも板についた二十二にも見えぬ色ツぼさで、
——あんた、これがコカコーラ言うてシールズ軍が来て以来一べんに名高くなつた進駐軍の飲物だすがな。
——ハーン、うまい粹な飲物や。皆なに飲ましてやつたら喜ぶやろ。よつしや氣にいつた。わいも一つこしらえた

何で名にしよう？
——そらあんた、あんたがつくつたんやさかい、自分で考えなはれ。
よし子にまで言われて、トホツ又わいの癖が出た。
コカコーラ。こいつはい、名やけど、登録違反でコラコラツと怒られるし……あツ……そう／＼、あ、コラコラつと。コラコーラ。こいつがいゝわと、早速新聞の一面一杯はりこんで、
清涼飲料 コラコーラ！宣傳大賣出

し。一等百万圓の福引つきで宣傳し、各デパートでマネキンに派手に宣傳さしたら、全國からもう阿呆らしい程注文がきて、河内の工場で徹夜しても追いつかず、近くのサイダー工場買いつてようやく間に合して、ざつと見積りだけで二千万圓儲けて。

んらが憎うて／＼、妾殺しも執行猶予ぐらいですむさかい、いつそ青酸加里でもと思たけど、何しろ三人も四人もではそうもいかず……と泣き崩れるのを、フン／＼無理もないわと服を脱いでどてらに着換えると、

そら思て、わいは甲子園にお前の爲に別荘買つたや。こゝは又誰かに任しといて、新らしく五号になつたみゆきの顔をチラリと頭に浮べて、

暫らく呑気に暮らして見ようや。ほんまだつかと縫るお雪に何で嘘云わんならんねと源吉は久し振りに昔を偲んでお雪と音を立てて接吻した。

甲子園に八十万圓の別荘こうて移つた日、名士を招いての招待宴で、わざ／＼訪ねて来た昔なじみの新やんの影は薄く、お雪はいとしかつた。

廣い洋間からしよんぼり消えた新やんと入れ違いに、女中がバタ／＼と走つてきて、

何や、電話？誰からや……？何アベノのきぬ子さま。——シート大きな声で云うなすぐ行く。

フラ／＼え、気嫌で受話器をとると何やツ今頃ノフン——フンそうか明日兎も角行くわ。明日まで待つて貰うて——。

ガチャンと切つて、そや／＼、そう云えば近頃大分金詰りが深刻になつて来たわい。きぬ子の云つた大同機工とかの大口融資の口に乗乗して、一つ金貸本気で始めにろ。

思つたら気が早い。アベノの家を擴張して事務所になると、眼先のきく店員二三人おいて、融資、大口金融の看

北鮮ンベリヤ俘虜放浪記

便所と露出症

榮養失調の骨だらけの尻から、ほとぼしり出る痔瘻の血を、目の前に睨みつゝ力んで居る男のすぐ横には「早く替つてくれよ。」と言つた顔で仲間がすりと立つて居る。此れがシベリア收容所の朝の風景である。

それは收容所の一隅にある板葺の粗末な小屋で、中には幅二十糎ばかりの板が三十糎少々の間隔を置いて十枚、十米ばかりの長さに渡してあるので、お互に顔と顔、尻と尻、顔と尻を突き合して用を足さなければならぬ。

穴 吹 武

中には僅の間隙をみつめて、「一寸御免」と薄汚い尻を鼻先に割り込ませ、異様な音を立て、今にもそのとぼつちりがかゝりそうで我慢も蕩もならない男もある。

私達は北鮮の咸興でソ連軍の手に捕われるや、點々とその近在を移り換つた。その俘虜生活が日を重ね、點々と移動するにつれ、人間性が次第と失なわれ野性になり、それにつれて厠も次第と原始時代へと退歩して行つた。

先づ最初の厠は、屋根こそないが、小学校の校庭の一隅を選んで一人づゝ三方

し。一等百万圓の福引つきで宣傳し、各デパートでマネキンに派手に宣傳さしたら、全國からもう阿呆らしい程注文がきて、河内の工場で徹夜しても追いつかず、近くのサイダー工場買いつてようやく間に合して、ざつと見積りだけで二千万圓儲けて。

んらが憎うて／＼、妾殺しも執行猶予ぐらいですむさかい、いつそ青酸加里でもと思たけど、何しろ三人も四人もではそうもいかず……と泣き崩れるのを、フン／＼無理もないわと服を脱いでどてらに着換えると、

で庭を圍い、一方には庭が、だらりと垂れた四面庭の周りで羞恥心の人並以上な私にも何のこたわることもないものだった。だが二番目の收容所では、前にたらしめた庭がなく、いつの間にか、顔を出すかわからぬ恐怖にさらされる様になった。三番目では中の一人づゝの庭の圍がなく、皆すらりと並び、たゞ外郭の庭園のみになつたが、四番目になると此れ以上に退歩した。たゞ穴を掘つて板を渡したのみで吾々を隠す一枚の庭さえない姿である。白晝他人の目の前で、ぼつと尻をめくる吾々には、羞恥心の片鱗さえも見つけない事が出来なかつた。野生の姿と言ふより露出症にかゝつた哀れな俘虜の姿だつた。

だが此の露出症は次第と高じ、最後のシベリア行の船待ちの興南の收容所では病状が最高の境に到してしまつた。興南の收容所は海に近く、校庭は砂濱の一部で、深い穴を掘る事が出来なかつた。その上氣候と食物、体力の悪化から下痢患者が殆んどだつたので一週間もすれば一杯になつて溢れる始末だつた。そこで高い足場を組み、下には土堤を築き物々しい厠を造つた。

そよ風に吹かれつゝ、彼方の海と山を眺め用をたす氣持は亦一興だつたが、とんでもない事が起つた。それは厠のすぐ下に道があつて朝々工場へ行く鮮人男女が珍らしそうに見上げて行くのである。男達はにや／＼笑いつゝ吾々の汚い尻を下から見上げて行くが、若い女達は顔負けして、うつむいて小走りにいつてしまふ。その姿を見ると吾々の露出症は更に高まつて、口笛を吹き、女でも見上げようものなら、どつと笑いつゝ、汚い代物をふりたてゝ喜ぶのであつた。男にも多分に露出症的傾向があるようである。

いよ／＼朝鮮にもおさらばをして、俘

虜の本舞台シベリアに入ると、厠は先に話した様な代物で、此れでもシベリアではなか／＼立派なものである。第一、地方人の家で厠を見つけない。彼等は男も女も見つける事は出来ない。彼等は男も女も木陰で用をすまふので、夜は軒先で失禮してしまふ、或將校のマダムは、食器をおまるのかわりに使つて居た。その上に彼等は紙を使わず、丁度犬か猫の様にとても早く用をすましてしまふ。パン食なので、下痢でもした時でなければ尻も汚れない様で、奇麗なマダムが木陰に行つて、さつ／＼としゃがんだと思ふともう立つて居る。だが最近になつてようやく五ヶ年計画によつて厠の建設が實現されて來た。しかし内便所は室内を暖房する爲に駄目で、五六軒に一つとか言つた共同便所だが、冬となると凍つてとても足の踏み場もない醜態で、結局木陰か、軒先になつてしまふ始末である。

白樺の木陰に尻をまくつてしゃがむとそよ／＼と涼風が心地よく、催促をする友が目の前には立つて居ない。實に自然の懷に抱かれた様な、ゆつたりした氣持になり、足が痺れてきてふと吾に歸る。もし自分の排出物が臭ければの／＼と風上の方へ這つて行けばいゝ。そして最後に白樺の若葉で尻を拭けば、白樺の匂いが移つて少しも不愉快な臭氣など残らない。

或日私はとんでもない恰好を見て幻滅の悲哀を感じた。私は例の如く木陰で用をすまし、立つた時、見ると村一番の美人の發電所技師のマダムがやつて來る。マダムは私の居るのも氣付かないか、丁度私の前の木陰で立ち止るや、スカートを一寸まくつて下の白い物をさげた次の瞬間、とんだ艶消になつてしまつた。彼女にはじや／＼と立小便をしたのである。友の話によれば、立小便する御婦人連中はシベリアに相當居るとの事だつた。

板を本式にかゝげて、源吉の肩書は又一つ殖えた。

こんな人かと思ふのが、頭を下げて頼みにくるのが嬉しくて、時には二重担保も承知、顔で貸したり、又貸しのマラソン金融も、いつしかボツ／＼焦げつきになつてゐるのを未だ氣がつかず、店員の浮貸しも巨額にのぼつてゐるのに、源吉は只管々營營に追われ

ていた。

どや雪、貸した金だけでも二千万八百万圓やで、利息が月一割の二百八十万圓として、何でこない儲かるんやろ、わいぐらいの若さで一十こんなに儲ける甲斐性もんも少ないで。さあ、今度は何してこましたらえや。さあ、眼をつむつた源吉の頭に、二日前頼みに來た社友党代議士の顔が浮び上つて、

——どうです。一つ政界に乗り出しては、貴方なら人望も財産もある。後は地位だけ。僕達こそつて応援します。当选疑いなしですよ。

フンおもしろい。吉田首相を彌次るのも又愉快なこつちや。思えば三十そこ／＼でわいもえろうなつたもんや。よし思い切つた——

急にの／＼お雪の横から這い出して、甲子園から大阪へ特急で電話かけると、夜中や云うのに、

——フン、わたしや。あの二日前あなた云うてた政治献金な。あれ出しますわ。何ぼでよろしおます。えー五十萬圓！そうか、かめへん。その代り今度の衆議院で一つ公認で頼みますつせえッ本氣かて。阿呆らしい。何ぼ夜中

や云うても寝ばけますかいな。わいの腹は今極まりましたがな。金か？、あゝいつでもえゝおいたはれ。今夜？、あゝ今夜は家内がな、ハハ——

喧ましくマイクが大阪市中を囀から隅まで走り出すと、辻井源吉——辻井候補の名が大分人々の脳裡にさざみこまれ、源吉は北浜の選挙事務所へ納まつて、はたでひや／＼する程無難作に危険を承知で金を貸していつた。

——七当五落と云うんや。わいは当选して見せる——

——一千万圓近い金がばらまかれて三位で当选すると、

——ほれみい当选したで、と流石に嬉しそりで、わいは代議士になつて何したらえゝのやろ。源吉は日焼けの顔に眼ばかりキョロ／＼させた。

——あんた、皆様に公約したのやろ。それ実行したげなはれ。

——それ無理やお雪、吉田はんが公約しても出来へんものわしが出来るかいな。公約はどこ迄も公約や。あれはわいを政治に結びつける膏藥やとろそぶいて、新らしく東京に六号と七号を囲うと、特急つばめで忙がしく往來したその無理で自然商賣の方は任しきりで放つたらかし。貸した大金がくつわを並べて焦げつきりとなり、しもたと焦り出した頃には破産、倒産がつゞいて相手は逃げたしまふ始末に、じだんだ踏んだが追つかず、東京の光クラブの学生社長が自殺した氣持が分つてくるとドキリとして、

——こらわいもうか／＼してられんわと、急に傳公やごろつき上りを集めてさびしく取立て始めた。

(次頁下段へ)

盛り場いんちきブギウギ 門 好太郎

第一話

すばらしい拾い物

秋の夜は長いが、飲んでいると時間

のたつのがわからな

い。

「あれ？、もう十一

時だぜ、阪急の終発

におくれたらたいへ

んだ、じゃ失敬！」

僕は悪友たちに挨

拶すると、カバンを

抱いて、あわてゝ酒

場を飛び出した。曾

根崎の裏町だから梅

田はすぐそこだ。さ

すがに十月といえは

しつとりと肌寒い。

いつものように地下

道の階段を下りて、

うすぐらいところを

すたすたといそいで

いると、ふいに後か

ら

「もしもし、ちよつ

と」

と声をかけられた

まわりに人影はない

し、僕のことにはが

いない。まさか追剥

じやなかるうし、僕は警戒しながら、
ふつと立ちどまつた。

「これは旦那の時計とちがいますか
？」

ハンカチにつゝんだ丸い平べつたい
物を手にのせて近ずいて来たのは、ル

ンペンみたいな、うす汚い男だつた。

僕も、亡くなつた親父の形見の懐中時
計をもつてゐる。そういわれて、反射

的に僕はチョコキのポケットを探つてみ

た。やれやれ一安心、僕の時計はコチ

コチとぶじに時を刻んでゐる。

「いや、ありがとう、僕のじやなかつ

た」

「そうですかい、ふうん、いゝ時計だ

な、こりや旦那、たしかに金側ですな

あ、誰が落したか知らんが、すばらし

い金目のものですぜ」

ルンペンが感心するのにつれて僕

ものぞきこんだ。うすぐらい地下道の
電燈の下だがチカリと純金らしく光つ

た。

「旦那、どうです、知つてゐるのはあ

たとわたしだけだ、こいつを賣つて、

二人で五千円ずつ山分けにしませんか

えへへ」

拾い物を猫ババするなんてのはおも

しろくない。しかし、酔つてゐた僕は

ふつと魔がさした。だまつてうなずく

と、

「じやあねえ、旦那、わしみたいたル

ンペンが賣りに行つちやきつと怪しま

れるから、御苦労だが、旦那ちよいと

地下道を上つたとこの時計屋までこ

つを賣りに行つて下さいよ、まだ起き

てゐるはずだし、旦那のような紳士なら

向うが安心してすぐ金にしてくれまさ

あんなはん、えゝ加減にしときな
はれや
お雪が見兼ねて云うと、
何云うてんねん。わいが貸した金
取立て、何処に文句あるかと、バリ

／＼因業にとり立てるとグツト世間の評
判が悪くなり、

あら天六の鬼やと、よると触ると

蔭口で、取立てた金も殆んど、えゝ工

合に傳公、やくざに捲き上げられて、

アベノの店員が浮貸ばくろして逃亡し

てからは、眼に見えて源吉は左前とな

つて行つた。

人身賣買やと云われて投書された天

六の結婚相談所がまず検査されると、

一瀉千里のガタ落ちで、コラコラの

模造品が市場に氾濫する一方、銀行の

信用落した資金難で、河内の工場は行

き詰り、

悪い時はなんでこゝろ悪なるのやろ

と溜息ついて、蒼い顔になつた時分

ブラツクリストに源吉の名がボスと大
きくクローズアップされて、借り手の
一人が取立きびしさの口惜しまぎれに
選挙で買収の一件を密告して源吉は、
大阪市警視廳に呼び出されて取調べを
受けた。

「社友党辻井代議士

選挙違反にてついに送廳」

三面記事を賑わして一しきり噂が高

くなる、セックス、ストアはびつた

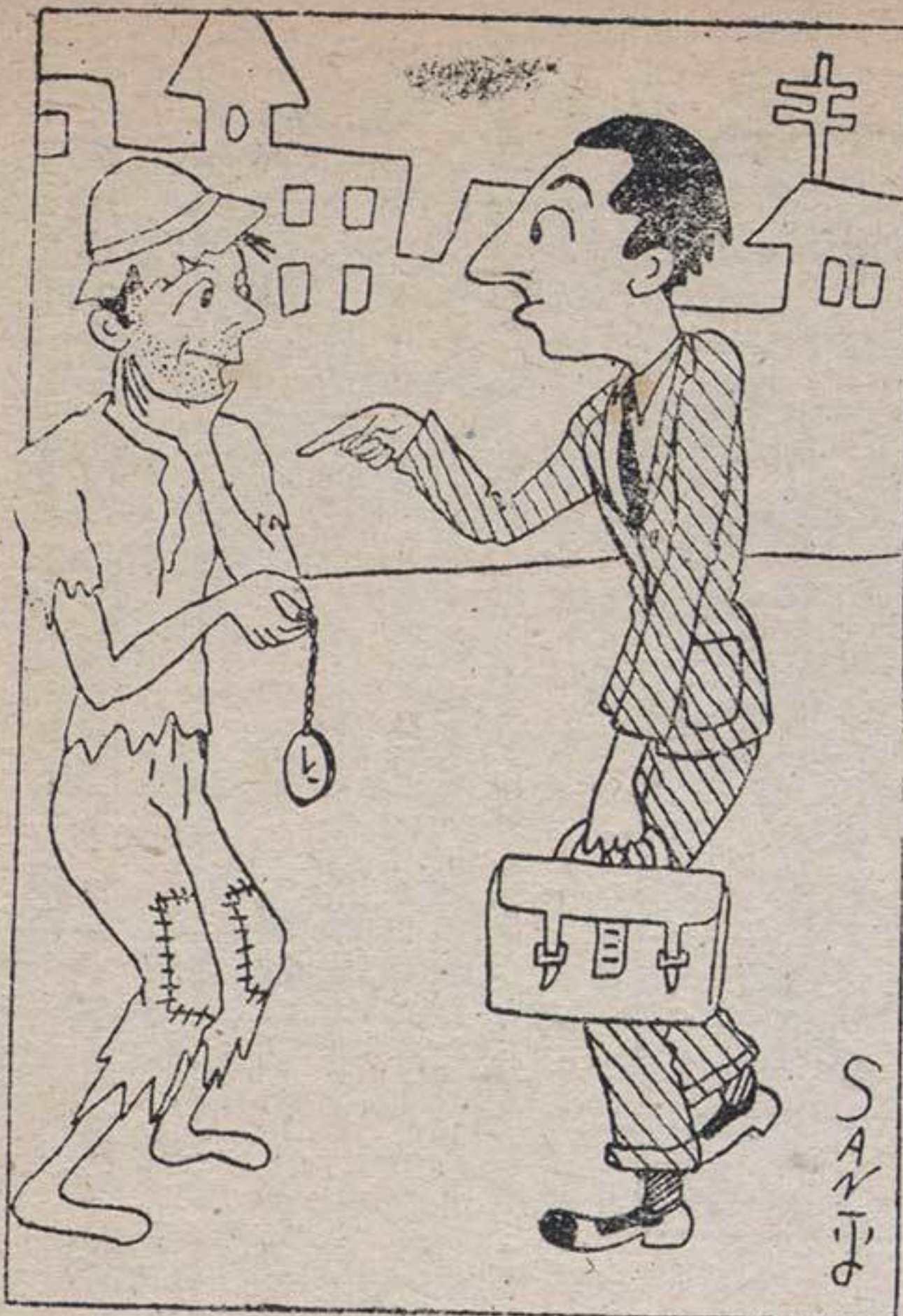
りと客足がとまり、五号はあつさり惚
れた向いの魚屋の後妻に納まつてしま
つた。
二号は梅田の結婚媒介所で、本人自
身玉のこしに乗つて再婚し、

「えへへ、だいぶん酔うてはりますな
冗談もえ、加減にしとくなはれや、お
もちやの時計だすがな、あんまりわる
い冗談はやめなはれ！」
叩きつけるように時計をつゝ返され
た僕はいつべんに酔がけし飛んだ。こ
んちくしやうめ、あのルンペンの野郎
よくも一杯食わせやがつたとかんかん
に腹を立てた僕が、ころがるように地
下道へ駆け戻ってきたとき、ルンペン
の影も形も消え失せていた。昨日貰つ
た月給の残り七千円を入れた買ったて
のカバンもろとも……。

第二話

八卦の大先生

「どうぢや、お立ちあい衆の中に、亥
の年生まれの方があるじやろう、よつ



SAYO

く聞いておきなされ、そもそもこの亥
の年といえは、名は体を現わす通り、
思い立つたが最後、たとえ火の中水の
中、矢が来ようが、鉄砲が来ようが、
こうと信じた方へがむしやに進む性
格をもつちよるもので、成功すれば必
らずや一國一城の主となるが、失敗す
ればわれとわが身を亡ぼす危険も大き
いものじや、この亥の年うまれが、源
の義経、西郷隆盛、近くは三菱の岩崎
彌太郎……」

うそか本当か知らないが、弁舌爽や
かな調子でまくし立てゝいたのは、お
定まりのヨウカン色の紋付羽織にハカ
マ、あごに山羊ひげをはやした易者。
場所は大坂北の繁華街天六商店街。か
らりと晴れた秋の日曜日の朝で、まだ
人通りはすくない。風が吹いたらたち
まち飛んでしまいそうなバラツクの易
断所の前の路上に、十二支を描いた新

紙大の紙
をひろげ、

「ほ、う、なか／＼よい筋じやな、知
能線が発達しとる上に、運命線も切れ
とらん、だが感情線が大分乱れちよ
る、は、あ、こりや女のこととて苦勞が
絶えんな、ふむ」
もつたいらしく小首を傾けた易者は
ふと僕の手を離すと

「さてお立ち会い衆、論より証據、当
易断所はよその無名の八卦見とちがつ
て、だまつて手を出せばびたりとあて
る、金は要らん、ほんの二三人じやが
無料で鑑定して進める、ふむ、あんに
はじめから熱心に聞いていなさるな
どれ手相を拜見！」

易者はい、鴨とばかり僕の手をつか
むと、天眼鏡でじろ／＼とのぞきこん
だ。

「どうじや、諸君もそれぞれ悩みを持
つとるじやろう、手相だけではなか
／＼くわしいことまではわからん、ち
ようど幸い、今日は東京の易断本部か
ら大先生が見えて居るから、希望者に
限つて、特に安く親切に詳細鑑定の特
仕をさせてもらおう、但し一時にたく
さんでは却つて大先生のめいわくにな
るから、まず五人だけに限る、さ、ま

四号の金貨宅は石を投げられ、小便
をひつかけられ、夜のうちに表戸に鬼
を書かれて、きぬ子はいたゝまらず、
店員の一人と駈落し、三号のよし子だ
けは流石に最後まで頑張つたものの、
噂がうるさくていづくともなく消え果
て、金網を通して面会に来たお雪を
見て、わけもなく源吉はボロ／＼と涙
をこぼした。

どうやらこうやら家を抵当にした金
で保釈になつたものの、既に甲子園の
別荘は二重抵当に入つて二進も三進も
行かず、

「わいは一体どうしたらえゝんやろ
自分で考えなはれとも云わす、お雪は
ひつそりとしただゝ廣い邸内で蒼樹め
て泣いていた。

「わいはもうあかん。お前にはえら
い苦勞かけた。せめて子供なかつたの
が幸いや。新やんとこへでも帰つてん
か……」

「何云うてなはんね。人間落ち目に
なつたさかい言うて今更見限る女房も
おまつかいな。妾はんと同じ様に思
くはんな。

そう云うてくれるのは、お前ばかり
やと男泣きに泣いて、明日は手離す別
荘で最後の晩餐をすまして、始めて解
放された様な氣持になつて、お雪のや
つれた寝顔をそつと窺うと、思い切つ
て布団の下からアドルム鏡をとり出し
て、枕元の水で三箱一ぺんに嚙下した
これで何もかもおしまいや。

お雪——さいなら……顔を寄せてじ
つとお雪の唇へホロリと涙こぼして源
吉は眼を閉じた——
(次頁下段へ)

「あんたから……」
ランプ机位の番号札を押しつけられた僕に……、前列の四人にすばやく札を渡すと、

「さあ、中へ入らつしやい！」

五人をつれこんだ。バラツクの中は板壁でまわり一面、人相やら手相やらの図をポスター代りにべた／＼貼りつけ、正面に机と椅子、机の上にはゼイ竹、算木、天眼鏡、それに虫の食つた分厚い易学書が積みあげてあり、どつ

すぐ外へ出て行つた。やがて、さつきの通り

「……さて、通行の方々」

と又くりかえしている声が聞こえてきた。

板壁の前の粗末な長椅子に目白押しに腰かけている五人へ大先生は、おぼんともつたいぶつた咳をすると、軽く僕を招いた。あとは例の通り、わかつたようなわからんような御托宣よろしく、十分も立つと、



SAN J.

「普通鑑定はこれまで、料金は五百円いたゞくどうじやな、御希望とあらば特別鑑定もいたさう、えゝと、料金は千円、二千円、五千円とあるが」

三十円は案内料、鑑定料は五百円、こんちくしようめ、まんとペテンにかけやがつた。

しりと椅子に陣どつている大先生というのが、つるつるのちやびん頭に長いあごひげを悠々としごいている。五人をつれこんだ男が

「ふむ、なにをもじ／＼なさつとるか、はゝあ、失礼じやが五百円のお持ち合せはないらしいのう、三百円、いや二百円に特別に勉強しときますぞ」

「では案内料としてお一人三十円ずつ」
ぬつと手をさし出した。いやおう言わさずメめて百五十円まさあげた男は大先生にうや／＼しくおじぎすると、

さすがは大先生、こつちのふところ具合もお見透しである。二百円を机の上においた僕は、もう秋というのに、腋の下にびつしより冷汗をかいて飛び

出した。しかし、どうもふしぎであるあの先生にはどこかで見たことがあるぞ……あつ、そうか。僕は、いちばんはじめ、易者の説明を一人で立つて聞いていて、見物がふえた時分にいつのまにか消え失せていたあのちやびん頭にあごひげのおやじこそ、いま二百円まさあげた大先生その人であることに気がついたのである！

第三話 艶画奇譚

戦災で丸焼けになつた昔なつかしい松島遊廓。それがいつの間にか、元の古巣から三丁あまり西、茨住吉神社北門前二丁目に、特殊喫茶街という名前前で復活していた。

だいたい焼ける前の松島というところは、築港へ寄港する船の船員とか、本津川、安治川を上下する船のオツサンの遊び場所だから、飛田や今里とちがつて、ちよつとガラがわるい。地まわりのデング公が多いし、ハツタリばかりに斬つた張つたの喧嘩も始終のことであつた。

それに例のY画、Y写真賣りの多いことも知る人ぞ知るで、僕みたいな温厚善良な？ 紳士は遊びに行くのをためらつたものであつたのである。

しかし、気分一轉、茨住吉の方へ移つたのだし、特殊喫茶と名も変つたのだから、前みたいにならぬことはあるまい、まあ一度見物に……にやにや笑いなさんな、ほんまに見物だけだすがな）出かけた。

市電は本田二丁目で降りる。北は華

あんた——あ……。しつかりしとくなはれ。

地底から呼ぶ様なきれ／＼の叫びにフト眼ざめると、白いベツトに蔽いかぶさる様に、新やんとお雪が懸命に覗き込んでいた。

「わいは、すると死ぬなかつたんやな。」

グツと熱いものが、こみ上げて、新やんがそばから、

「なあ、源やん。悪い夢や。長い／＼悪い夢を見て来たんや。凡人は凡人らしく、一生平凡に暮るのが一番しあわせやで。女房可愛がつて、子供の二三人にでもとりかこまれて平和は暮せたらそれが一番えゝんや。なあ、源やん、力合せてもう一ぺん出直さようわかつた——と手を振つて、

「今度こそ、あんな危ない橋渡らんと、まともに暮したら。金儲け許りが世渡りやない。人間の愛情が一番肝心じやつたんや……。」

あゝえらい腹が減つて。どこかでチヤルメラの笛がきこえてるわ。ウン中華そば喰いたいな……。もううか／＼死ねんわいと思ひ乍ら、

「お雪、たのむぞ——」

と手を握つて源吉は再び、今度は安らかな深い／＼眠りにと誘ひ込まれていつた——。



(了)

橋の商館の多い川口居留地だ。

この辺一帯も草ぼうぼうの焼野原だ。つたはすが、人間に色気と食気は外せないものと見えて、バラツクながら飲み屋、食い物屋それに問題の特殊喫茶店が押すな／＼と立ちならんで、昔の松島以上の繁昌ぶりなのにびつくりした。

もつとも接客婦諸嬢の勇猛果敢なお客争奪合戦は、さすがに昔鳴らした松島遊廓の傳統にそむかない。女子ラグビー団ができたなら、松島チームの優勝は疑いなし！

その猛烈な女群のタツクルをひらりひらりとかわしながら歩いて行く僕のうちろから、いつのまにか、一人の男がついて来ていた。

「大將、大將、えへへへ」

薄暗い横丁にさしがゝると、その男はぐるりとまわつて僕の前に立ちふさがった。

「ちよつとこつちへ寄つとくなはれ、警察に見つかるとさうさかいさかい」

男は一軒のタバコ屋の軒へ僕をひっぱつた。

「なんだい？、いゝタマを世話してくれるのかい」

「そらあ、大將がたのまはんのやつたら、なんぼでも世話しまつけどな、わてはボン引とちがいまつせ」

「ふうん、だつたら？」

「これだすがな、大將」

じろりとまわりを見渡して、人気がないかわかると、男は腕にかゝえていたカバンからすばやく五六枚の絵ハガキを出す、

「本物だす、ちよつと高うおまつせ」とパラパラとめくつてみせた。おぼろ気な灯影ではつきりとはわからないが、白い身体と身体、腕と腕、足と足がからみあつてゐるのがちらりと見える。

「どうだす、早うきめとくなはれ五枚で五百円、よう賣れまつせ、女の方はいま賣り出しの映画女優だつせ……」

「うんそうだなあ」

「ちよつと、こんな掘出物が気に入らへんか仕方がおまへんもう一枚とびきり上等の絵も添えまつさ、ほら……」

今度ちらりとのぞかせたのは半紙半分ぐらいの下の方に、あぐらをかいた白い足、それになやましく絡まる眞赤な布地。

「写真五枚と肉筆画一枚、これで五百円！、他におまへんで、大將！」

僕はだまつてドル入れから百円札を五枚引きくぬと男の手に押しつけた。

「へえ、大きに……」

男は僕の上着のポケットに写真と絵



を押してひとと、脱兎のように暗い闇の中に消え去つて行つた。
……で讀者諸君よ、もしぜひこの写真と絵を見たかつたら僕を訪ねていらつしやい。白晝堂々と、お日様のかんかん照つてゐる下で穴のあくほど見せてあげますよ。
なぜつてですか？。写真の方は、夏の太相撲の立合実況の絵ハガキですし

絵の方はですね、芝居の弁天小僧菊之助が浜松屋の店先でユスつてゐる絵ですからね。
全くこわい所ですよ、松島という所は昔から……。

× × ×

便所のらくがき

「らくがき」は一つの人生伴侶のものらしい。人間手に筆を持つ年頃、四ツ五ツになると鉛筆の芯をナメ／＼、紙に向つて、馬だの、ワンワンだのと言つて、ワケもわからないものを書きながら、

小学校の一年生にもなれば、凸坊同士の悪口を書き、そうして追々大人に至るまで、いろ／＼な形式でらくがきを續けてゆく。

どうして、人間が樂書をするか——という問題は——どうも人間感情の動物である以上、自分の氣持に何かしらわだかまりが存在している。それを晴らす、その吐露すべき処のない時、先人も言つたように、物言わねば腹ふくるゝわざ、げに、らくがきこそ心中の蟠りを簡単に放言出来るものであるからである。

従つてらくがきは、大して名文句もいらぬし、思考推敲の必要もない極めて瞬間な氣持で書けばよいのである。共同便所の壁に極めて拙劣な文句で書き散らされる卑猥極まる樂書には困つたものだ——あれも性の告白——と解釈するのも妙だが、一種の放言的な自慰行為と見るべきではなからうか。それが婦人便所に多いのも一つの理由と見られるからである。

あるコレクト、マニアが樂書を丹念に写しとつて歩いた報告によると、或る植物園の便所に「樂書は瞬間的の芸術なり」と記してあつたそう。

プロ野球の名投手と萬年娘の
映画スターとのスキャンダル

プロ野球選手の告白

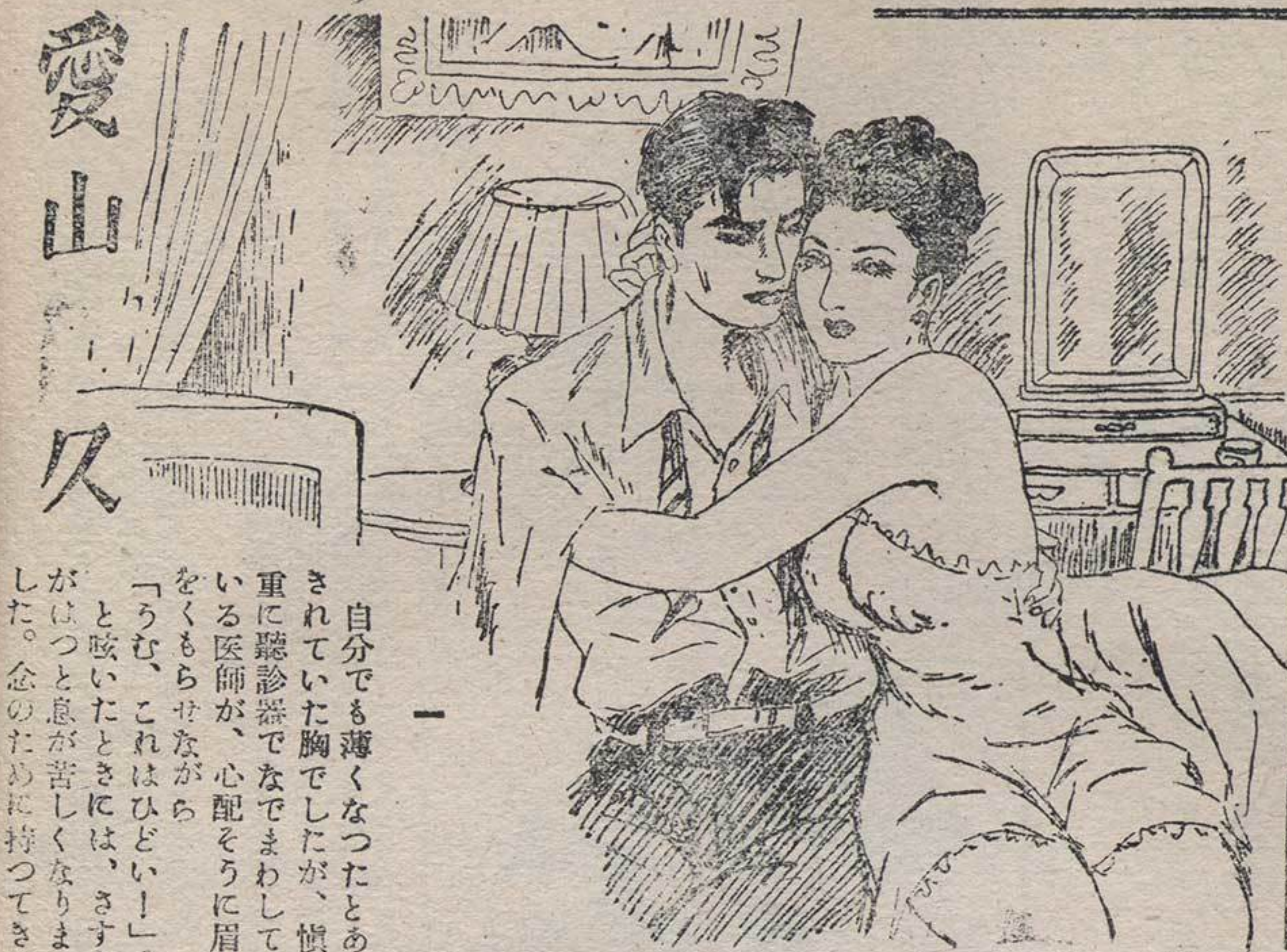
愛慾
小説

肉

体

悲

歌



自分でも薄くなつたとあ
されていた胸でしたが、憤
重に聴診器でなでまわして
いる医師が、心配そうに眉
をくもらせながら
「うむ、これはひどい！」
と呟いたときには、さす
がはつと息が苦しくなりま
した。念のために持つてき

絶対安静をい、渡されて、看護婦にき
びしく叱られながら、私はいまあおむ
いたまゝで、一冊のノートに鉛筆で、
この手記をつづつて居ります。書いた
あとはさきまつて、三十八度近い熱にう
かされることも身に沁みて経験しなが
ら、私は息を引きとるまでに、どうし
てもこれだけは書き残さなければ死に
されまい。

あとは言葉を濁しましたが、その一
言は私にとつて、死刑の宣告のように
鋭くひびきました。そうして、私がこ
の泉南郡の山奥にある国立療養所へ寝
台自動車で運びこまれてから、もう一
年過ぎました。私の極めて進行の早
い奔馬性結核という病気で、医師が五
年といったのはほんの気休めなのです
このごろでは、腸にも咽喉にも結核が
進んでいて、おそらく、私の生命は五
年どころか、あと半年、いや二ヶ月も
保ちますまい。

たレントゲンフィルムを明るく露光で
透かして、
「あす療養所へすぐ入りなさい、多分
ベットが空いているはずだから、でき
るだけ早い方がいい。」
それきりむつつりと黙りこんで、カ
ルテにむつかしい独逸文字の病名を書
きこむ医師に、私は怖る／＼聞きまし
た。
「相当長くかゝるでしようか？」
「そう、君の今の仕事はもうできな
いよ、まず五年はかゝるね、しかし、
もうこれだけ空洞が大きければ、気胸
をやつても」

それは、いまB映画の萬年処女女優
と謳われる清水早百合の仮面を引き剥
がし、稀代の妖婦である彼女の本態を
世間のファンに警告したいことゝ、も
う一つは、昨年の冬、芸術的な苦惱か
ら服毒自殺を遂げたといわれている女
流音楽家白木静枝夫人の死の真相を知
つていたゞきたいからなのです。
清水早百合の生息暴露や、白木夫人
の自殺の真相をあきらかにすることは
きつと俗悪なジャーナリストを喜ば
せ、その告白者である私の名も世間に
ばつと知れわたるでしよう。だが、私
はもうすぐに冷たい死体となる男で
す。ジャーナリストが、眼の色を変え
て、この療養所へ私を探訪してくると
きには、私は一つまみの白骨となつて
小さい骨箱に納まつて居るでしよう。
瀕死の病床に横たわる私は名も金も欲
しいのではありません。たゞ、あの憎
むべき妖婦女優への痛烈な復讐と、貞
淑な白木夫人に姦通の罪を犯させ、つ
いに気の毒な非業の最後を遂げさせた
私の心からのお詫びをしたいからなの
です。

こんなに青白く萎びて、ごほん／＼
と咳にむせながら国立療養所の施療病
棟の片隅に、紙屑のように見捨てられ
ている私が、以前は五尺六寸、十七貫
もある逞ましい肉体を持ち、しかも甲
子園球場数万のファンをどつと沸かせ
た名投手であつたといつてもおそらく
は本氣になさいますまい。けれども、
私のベットの枕元に吊つてある名札を

よく見て下さい。まぎれもなくかつての全中等学校選抜野球の優勝戦にたび／＼出場した九州のM中学チームの左投手、そして、卒業後はプロ野球アルプス球団のホープとして、西宮球場や後樂園球場で鳴らした男だと判つていたゞけるでしよう。いや、昔の自慢話を聞いていたゞきたいのでなく、それほど人気の的であつた私がなぜフアンに惜しまれながら、いつのまにかアルプス球団から謎のように影を消してしまつたかをお話したいのです。

野球選手が現代の英雄として、たくさん女性のファンにとりかこまれ、つい／＼色に溺れて身を誤る実例はよくお聞きになりましたが、私などはその大失敗のいちばんいゝ見本だともいます。

九州のM中学の先輩で関西に住む人はすいぶんたくさんありますが、芦屋に本邸のある有名な洋画家白木京介画伯もその一人で、私たちM中学野球部は毎夏甲子園へ出場するたびに、白木画伯の廣大な邸に宿泊りさせてもらつていました。先程私のいゝました白木静枝夫人はこの画伯の奥様だつたのです。まだ十七八才の無邪気な少年に過ぎない私たちにも、静枝夫人の淑やかで慎ましい美貌はよく判りました。画伯より十才以上も若い夫人はその時分二十四五だつたでしようが、独逸のアルト歌手マツキンゼー夫人の愛弟子であり、すでに関西樂壇では、有望なアルト歌手として鳴らして居られました。夫人がピクチャー専属の聲樂家として、歌劇ボツカチオをはじめいろ／＼

な歌を吹込んで居られたことは御存じでしよう。

御主人の白木画伯は至つて豪放快活な酒好きの藝術家肌で、夫人の方は同じ藝術家といつても静かなやさしいお方で、私たち野球部のやんちゃ坊主が廣い邸内をわが家のようにあばれまわるのを、黙つて微笑しながら姉のように見守つて居られました。私がM中学を卒業後、大阪のアルプス球団に入つてからも、試合の際によく白木邸を訪ねて行つたのは、白木画伯と愉快な酒合戦も一つですが、本当は心ひそかに静枝夫人に慕情を感じていたからでしよう。

画伯はときどき興を催すと、夫人を裸にしてモデル台に立たせていました。画家はアトリエに他人の入ることを極度に嫌がりますが、私の場合は特別だつたのです。

「どうだい、わしのマダムの肉体の線はすばらしいだろう、うん？」

夢中でカンバスを塗りながら画伯は一人言のうちに呟きました。野球一途に凝りかたまつて、美術や音楽には全く門外漢の私でも、一糸もまとわずモデル台で、画伯に命ぜられた通りのポーズを取る静枝夫人の全裸は、みだらな慾情を越えて、神々しいまで美しかつたとおもいます。

人妻といつてもまだ一度もお産をしない夫人の肉体は、ミロのヴィナス像そのまゝ、こんもり盛りあがつた二つの乳房、背からお尻へのみごとなカーブ、すつきりと伸びた両足、それが柔かなカーテン越しの日光に、薔薇色に

染まつて、深いみどり色のピロイドのクツシヨンになが／＼と横たわつている光景は、強く／＼私の胸に刻みこまれました。

モデル台から降りた夫人はすぐ隣りの部屋へ入つて、今度はきちんと和服を着た気品の高い若夫人として、アトリエへ洋酒の瓶やクラツカーやチーズをお盆に盛つて現われました。

「まあ、お酒つてそんなにいいいものでございますの、お二人ともいゝお顔色、おほ、」

シトロンを飲みながら、夫人はおかしくうに笑いました。

「うん、うまいぞ、お前も飲んで見たらどうだい」

画伯が夫人の肩を抱きすくめると、その美しい唇へむりやりにグラスを押しつけるのを、私はじり／＼するやうな嫉妬を感じながら、表面は笑つて眼をそらしました。美しい夫人の肉体を夫の画伯はいつでも好きなきに自由にできる：そう思うと、私の頬は美しさにかつと火のよりに燃えました。だが、私と静枝夫人の間は、まるで実の姉弟のよりに清らかで美しかつたのです。

こうして、私が白木夫妻とだけ交際して居たら、あるいはあとの痛ましい悲劇は起らなかつたでしようが、とんでもない悪魔がとつぜん私の前に現われたのです……

三

女は魔物といゝます。化粧一つでどうにでも若くなるからですが、その化粧も、映画女優となれば全くの玄人です。B映画の清水早百合は、たしか十八才で大正十三年にはじめてデビュウし、今年はまだ五十に近いあさんのはずです。だが、彼女の主演する映画には必らず清水早百合嬢と宣傳してありますし、役柄もいつもきまつて可憐で純情な娘役ばかりです。ある映画雑誌などは、

「彼女は果して処女であらうか？」と愚劣な座談会を催して、いかにも彼女がいまだに初々しい未婚の肉体を保つてゐるかのやうに宣傳しています。が笑わしてはいけません。

早百合が私へ猛烈なファンレターを寄越したとき、アルプス球団の友達は何つと喚声をあげました。

「おい、天下の名女優清水早百合からこんな熱烈なレターを貰うなんて、お前は幸福なやつぞ、可愛がつてもらえよ！」

私は野球選手が神聖なスポーツの旗手でなく、人気商賣で、昔の芝居役者のやうに、最良の女客に媚を賣らねばならないのかと淋しくなりました。私の胸にはヴィナスのやうに静枝夫人があります。その慕情の美しさを守りつゝけたかつたのですが、早百合からのレターはますます猛烈で濃厚になり、とう／＼一度だけでも逢わすに居られない始末になりました。

忘れもしません。十月のいゝ月夜でした。私は早百合から指定された通りとう／＼有馬温泉のある旅館へい／＼彼女を訪ねました。

「まあ！ 来て下さつたのね、とう／＼

「う」
旅館の奥まつた離れ座敷には、ちやんと酒や料理の準備が出来ていました。

「憎らしい人ね！ 待ちくたびれて、あたしもう！」

裾を乱して、よろよろと立ち上り、私の胸へ抱きついてきた早百合の口からは、むろつと酒の香がしました。これが初対面の男と女の礼儀でしようか。私は静かに、しかし力強く、早百合の重い身体を胸から押し、のけました。すると、彼女はかえつて「あら、あんた、じやけん人ねえ、うふふ」

と生あたま、かい両腕で私の首へしがみついてきて、いきなり私の唇へ火のような唇を押しつけてきました。

六甲山中の有馬の秋の夜です、もう肌寒いほどの青白い月光が座敷いつばいに漲りました。

それが私と早百合の肌をふれあつた最初の夜となりました。彼女があえぎあえぎ

「あたしは処女じやないのよ」

と熱くほくさくやくまでもなく、私はパンパンよりもえげつない手管で、早百合が今まで何十人という男の血を吸った妖婦であることを直感しました。弾力のない肌のくせに、男の生血の最後一滴まで吸いつくさすにおか

はないそんな女の技巧にかゝつては、男はなんという情ない動物でしょう。ぐつすり寝こんだ夜明け、ふと眼をさまして便所へ行こうとした私は、ふと隣りにねている女の素顔を見て、

ぞうつと背中に玉のような冷汗が浮かびました。

剥げ白粉や眉墨や

口紅の下から露出した清水早百合の素顔は、どんよ

りとす、暗い鉛色の皮膚、そして眼尻鼻のわき、口元、首筋には、一面にふとい皺や小皺が寄つて居り、すこしあけた口からは、老人臭い黄色い乱杭歯がのぞいていました。

これが万年娘役の名女優の正体なのか、幻滅の肉体の悲しみがじいんと私の胸に込み通りました。

早百合からはその後気が狂つたように、ひんびんと私へのラブレターが届きました。逢うのがいやさに逃げまわると、女はうるさく私につきまといました。大阪のアルプス球團の合宿所はもとより、私が東京の後樂園球場に出れば東京へ、四國へ行けば四國へ、九州へ行けば九州へ、まるで公然の恋人のように女は影のように現われ、私をつかまえるのでした。

喜んだのは新聞社や雑誌社の記者でした。プロ野球の人気投手と、映画女優の火のような恋。彼らにとつてこんな絶好のニュースが他にありませんようか。私と早百合のスキヤングルは尾鰭をつけてフアンの中に拡がって行きました。

だが、妖婦の捕虜になつた私は同時にプロ野球選手としてのたいせつな肉体を急速に蝕ばれて行きました。あつくことを知らぬ女との交渉で、私の衰弱は人眼にも衰れに見える位になりました。

した。

極度の貧血に

練習不足は、チームの生命である投手の

投球力を根こそぎ奪つて行きました。

「おい、どうしたんだ、直球もカーブも全然だめじやないか、一体君は遊び半分で投手の大役がつとまるとおもうのか！」

ハッピー球團のような弱打者ぞろいのチームにすら、私のボールはぽかん／＼とつづげざまに打たれ、無惨にも十六対ゼロという成績で敗北した夜、私は監督のS氏に烈火のように叱られました。

「よせつ！、君などに投手を任せられるか、明日からは外野にまわれ……」

「はい、すみません」

それが私の顛落のスタートでした。その外野でさえも、肉体の疲労しきつた私には勤まりませんでした。外野にまわされて数日後、セントポール球團との試合で、打ち上げられた外野より高いボールを受けとめるべく、必死に走つた私は、俄かにぐらぐらと激し

いめま

いを感じ、

どんと外野の

コンクリート塀に

頭をぶつつけるととも

に、泡を吹いて昏倒して

了つたのです。数万のファンの

渦が鉄傘下に総立ちになつて

わあつと人さなぎをしてる戸が氣絶

する前にぼんやりと聞こえました……

私が監督S氏の厚い情で、誰にも真

相の洩れないよう「病氣による退團」

という口実でアルプス球團から影を消

したのは、その翌日だったのです。

あゝ、だが清水早百合は私を不幸の

どん底に陥し入れ、球團を追放された



ました。そして、今度はアルプス球團の宿敵セントパールの美男投手Kに次の誘惑の手を伸ばしはじめたのです。彼女の欲しかつたのは、私の肉体よりも、「アルプスの人気投手」という肩書にすぎないのです。

四

自分の生命を賭したアルプス球團を追われた私は、疲労し衰弱し切った身体をとうとうあつかましく白木画伯の邸へ運びました。

「失敗は人生の良薬だよ
なかに、君は若いんだ、ものの一ヶ月もこゝで
ゆつく
り静

養すりや全快するさ、アルプスだけがプロチームじゃないよ、僕がいずれ世話してやるから又いゝチームで投手として復活しろよ」清水早百合とのスキヤンダルを一から十まで知りつくしながら、一言もそれにふれないで力強くなぐさめてくれる画伯の温情に私は男泣きに泣きました。

「はい……」

そうして私は画伯の邸の居候となりました。明るくて温かい絵ガラス張りのサンルーム、眼の下には絵のような大阪灣の風光がひらけ、うしろには、初冬らしい肌の六甲山脈が見晴らせました。この大きな邸には画伯夫妻と、若い女中が一人、その他には猟の好きな画伯の愛犬である純粋のセッター種の大が居るだけの静かな住居でした。

三度の食事は、夫

人が特別に心をこめて作ってくれました。それを女中さんが運んで来てくれるのです。

「ぼくはね、しばらく南紀の方へスケツチ旅行をしてくるからね、さあ、ひよつとすると一ヶ月ぐらいいは留守になるかも知れないが、留守番をたのむぜ酒の方は飲みたけりや、アトリエの書棚にお望み通りの瓶が並んでるから遠慮なくやりたまえ」

そう云つて画伯がぶらりと出発したあと、私はしんと静まった邸の内で、ときどき、夫人がピアノを弾奏しながら、美しいアルトでいゝの歌曲を練習しているのを聞きました。母の乳房のように、あまく、やさしく、神聖なその歌声は、妖婦清水早百合との動物のような爛れた愛慾に、どろ／＼に汚れた私の肉体も、傷ついた魂も、きれいにさき清められるようにおもいました。あゝ、だが私という男はなんと

いう浅ましい破廉恥な罪を犯したことでしよう。母のように、姉のように清らかに慕つていた静枝夫人の美しい肉体をある夜犯して了つたのでした。

それは、しんと静かに雪の降る夜のことでした。私は画伯に許されていたので、アトリエへ入り、書棚の上に並んだいりとりどりの洋酒瓶の中から、一本のアブサンを下しました。

た。夢のように軽い、しかもアルコール分の強いアブサンは画伯も私もいちばん好きな洋酒で

す。私は、クツション深々と腰を下すと、グラスに波々とアブサンをつぎました。そのとき、静かにドアがひらいて、

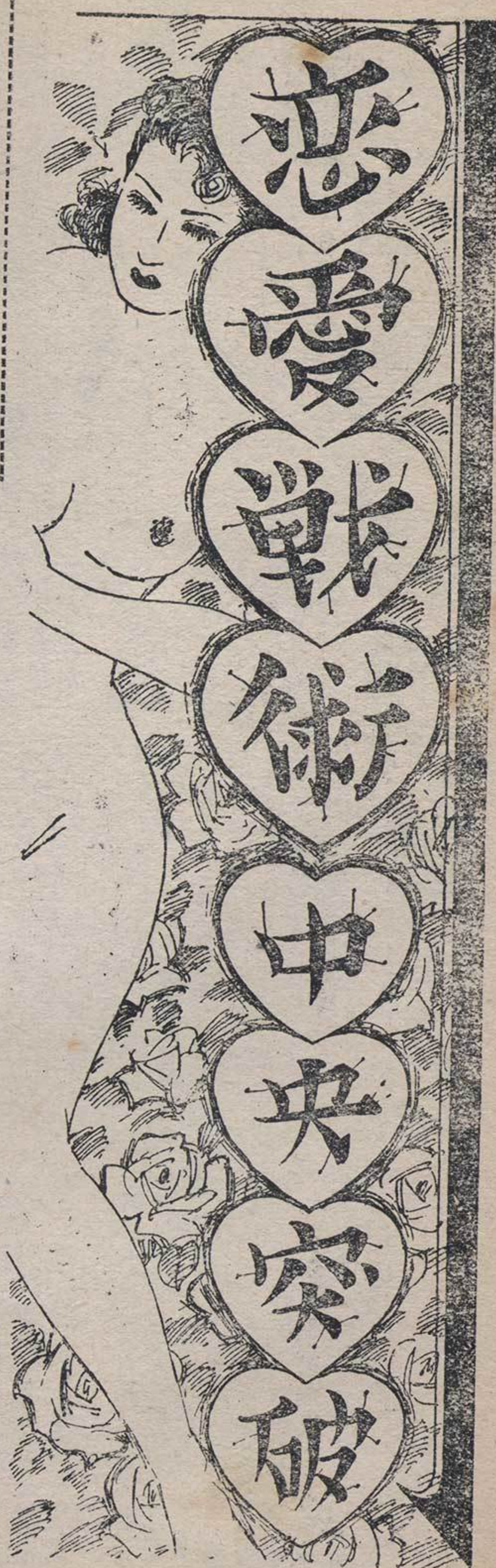
「おや、こゝにいらつしやいましたの居間へおいでなさいな、女中とラヂオを聞いてますのよ」

静枝夫人が入ってきました。そのすんなりとした和服の下に、いつかモデルとなつて、このクツションに横たわつていた夫人のみごとな肉体がかくされてある……私はアブサンをぐつとのみ干すと、まじまじと夫人の姿体を見つめました。

私はその夜明け前、誰にも知られずサンルームの窓から脱出しました。夫人を犯した私がどうして、のめめと画伯の邸に世話になつて居られましようか。生きるために、食べてゆくために、私は大阪の築港の日雇人夫の群に身を落したのです。そうでなくとも弱りきつていた身体で激しい重労働をしたことが、私に急性の肺結核を起こさせたのです。

静枝夫人の服毒自殺は、伝えられるように芸術的な悩みが原因ではなかつたことを、私は身に泌みてわかります。たゞくれぐれもどんなに憎んでも憎みきれないのはあの妖婦女優清水早百合です。私は彼女に精魂を吸いつくされて死んでゆく大馬鹿者の一人なのです。まるで女郎蜘蛛の巣にかゝつた哀れた蠅のように……

(完)



若い燕戦術

私は四人のかけもちだ

寺 本 明

一、素破らしい妙案

どこの会社も、整理々々と、えらいやかましいこつちやと思つていたら、こつちがクビになつてしまつた。退職金三万円、それでポイだ。元來、女郎買いの好きな私、といつても決して女に魂まで奪われるクチでなかつた。色眼をつかつて、ちいと甘みりや、慾ひとつ、こちらもそれを識つてゐるから終始打算的かつ鋭角的に振舞うのだつた。それは、キヤベレ、社交喫茶、ど

こへ行つても同じことだ。

さて、ここに、汗と脂で朝から晩まで働き続けたカスが三万円ある。それをモトデに、なんとかポロい儲けがしたいものだと、天井の節穴を数えながら、トツオイツ思案投首、やがて、眠くなつて、うとくしかけた時、素晴らしい妙案が電光の如く脳裡に閃いた。

善は急げだ、早速明日からその基礎工事にとりかかるう。

二、女將には亭主がない

私は、まだ二十五才を過ぎたばかりで、無論独身だ、男前もまんざらでない、色男といつたタイプでないが、上原謙というヤクシヤと比べたつて、そろヒケをとらない背丈をしている。自惚れではないが、遊びに行つても、金を拂うかぎりよくホテル方である。夕方、宮川町へ乗りこんで、妓を三人あげて、あまり飲めぬ酒を飲む振りでして、私は放蕩三昧に陶酔した。雨が降つてゐる。客はひとりもない、抱え妓も三人ぐらい、という家を選んでの、この振舞いだつた。

「帰つてよろしい、わしはこの妓と寝る」

一番まづい顔の妓を小脇にかかえ、そうつて千円札を一枚宛バラ撒いてやる。

トタンに妓の眼の色が変る。チャボヤして、まだ貰えるか知らんと、おみこしをあげ得ない。

酒に酔うてはいるものの、大きな計画を胸に秘めてゐる私は、細大もらさず、彼女等の心のウゴキを観察してゐるが、オクビにも顔色にも出さない。金持のドラ息子然としてゐる。

二時間ほど過ぎた。私は、もう帰るのでお愛想をいつた。

花代と酒五六本、附出し等でワスカ二千円足らず、その勘定を済ませて別に、千円一枚、皆にといつて出してしまつた。

大変である。彼女等特有のサービスの仕方まで、玄關まで食つゝいてきて、街角を曲るまで手を振つてい

る。残金二万五千円。

それから、三日おいて、また行つた。

私があるとき、この前買った妓が、飼犬みたいについてきた。あとの二人もやつてくる。雨が降っている。不景

気で客がない。そこがツケメだ。前に行つた時はあまり喋らなかつたが、今日は私独特の世間話を長講一席べら／＼とやつた。あることないこと

また千圓宛バラ撒く。今夜は、別の妓と寝る。あとの二人特に前の妓の技がヤキモチを焼いて手古すせめたがやさしく慰さめて一室にひさとする。

勘定は、千円と少し、めんどくさいので二千円やると、女將が出てきてベコ／＼おじぎする（これがツケ目だ）誰に聞いたのか、私の名前を二三度呼び続けながら、街角を曲るまで手を振つてい

る。私は、見返りもせずのんびり歩いた。

そのときの辛さ、経験者でないと分らない。

名だたる御大盡ならいざ知らず、年もゆかぬのに、僅かの遊びで千円札を惜しげもなく投げ出して、神よ、御照覽あれだ。

見送る妓達を振り向きもしないで帰つて了つた。何となしに心ひかれる頼母しい方、と思うが人情だ。素人女なら無論のこと、いくら男を喰いものにしている女郎でも、いささか考えさせられる。そして、職業意識を超越した

まかね種は生えぬ。こういう具合に金を遣いたいものだ。中には随分金を蕩盡して、結局何



の効果もなく、花柳病を頂戴しているバカもある。

その次ぎからの私の遊びは、三人の女を交替に呼んで、絶大な愛を寄せようにしむけた。かくすること数回今では、恰も、家族の一員か何んぞのようなもてなしぶり、アレは嫌いだ

が、キミ達が好きだという態度を持して、晝間も遊びにゆく。二時間で四時間分拂い、お菓子をおごつたり煙草をやつたり、こういう女は、素人娘より愛情に飢えてゐるからテもなく馴染んでくる。

噂に聞けば、この女將は、昨年主人を無くして、今ではしみじみ寂寥を感じてゐるらしい。（そこがツケメだ）

私は、この女將を考えると勇氣百倍する。

時折、私がやつてきて、妓達と、晝日中、喋々喃々たる場面をみせつけてやると、女將はあまり好い気持はして

いない。女將の心も、近頃私に傾いてきたことは確かだ。私の目的はここにあるのだ。

しかし大望の前だ。はやる心を抑えねばならん。

三、念入りな化粧

女將の私に対する信望は、いやましに募るばかりである。

フトコロは漸次淋しくなつたが、妓たちが魂を打ちこんでもてなしてくれ

残金五千円。

通い出してから一箇月、延回数十回そろ／＼何か沙汰があるかと待つてい

る。或る日、突然、女將から使いの者だというのがきて物を持つてきた。私は、立派な屋敷の二階住居をして

心。

包みを開いてみると、××様、つたと書いてある。女將の名である。

顔はみているが、何の関りもない者から、何故こんなものを貰うんだらうと、品物の如何に拘らず、私は早速返却に行つた。

「まあ、かまいませんわ」

そういつて女將は、帰ろうとする私を無理に止め、てんやわんやで酒肴の用意をさせた。

「さあどうぞ、おあがりなさいな、おひとりなんでしょう？ いいぢやございせんか、お自分の家だと思つて、こんなお婆さんの傍で嫌でしょうけど気軽に、ごゆつくりして下さいな」

眞向からこの挨拶である。

私も幾分顔負けをした。いわれるまにちよつと一杯ご馳走になつた。

こうなると、まんざら知らぬ仲でもない。話に漸次味が出てくる。五杯が十杯、十杯が二十杯となつて、いささか私もご機嫌になつた。

随分念入りに化粧したらしく、女將の顔も三十ぐらゐに若返えり、ボーツと赫らめた顔をすり寄せてきて、手を握りにくる。

そんなことはゼン／＼知らぬ体に、私は酔つぶれて、女將の膝を枕に寝込んでしまふ。一年の空闊が、たまらなく女將の情念を刺激するのか、大つびらに、私を愛撫する。

やがて立上つて、布團を敷いてくれた。

夜となつた。

私はまだ寝ていた。客が騒いでいるのが遠い物音のように聞えている。今夜は大繁昌らしく、妓も十人あまりさているらしい。

時は流れた。遊び客が帰つた後、嵐が過ぎたような静けさになつた。

その時まで、私は、女將の部屋に寝そべつていた。抱え妓も客を済ませて今夜は温順しく寝てしまふ。

火鉢の前で煙管の音がする。女將はまだ起きて一ふく吸つてゐるらしい。漸く眼を覺した私は、時間もかなり過ぎてゐるので、大慌てに帰ろうと寝

床から抜け出ると

「あなた、もう遅いから今夜は泊つてらしいやいな——」

女將は呼び止めて、また酒を進めた。根が厚かましく出かけている私のことだ。

「困つたなあ」それを連発し、顔を掻き、する／＼とその夜は女將に出来る限りのサービスを提供して朝まで、一睡もしなかつた。

アレから三日間、のら／＼と居続けをしてゐる。それでも純情さを失わないう態度を持してゐるので、すつかり信用してしまつた、女將は、もう公然と若い燕から、亭主に引き上げようと焦つてゐる。

—おわり—

有閑マダム攻略戦

私はこうして、美しい

未亡人を獲得した

早乙女 晃



良太は童貞ではなかつた。

彼が童貞を失つたのは、戦争中学徒動員で第一線に送られた時、作戦命令の出る一週間前の慰安所であつた。始め女を知つたときはひどく煽情的であつた。

良太はその夜の官能的な女のポーズが、今でも眼底の何処かに残つてゐる

のか、時々、郷愁のようにチラチラ想出すことがあつたが、五年の歳月を経つた今では、淡い記憶の一片でしかなかつた。

良太が今日書店に現れたのは、その記憶を裏付ける結婚の生盤が極めたかつたからだ。彼は其処で、印度の性典「カーマヌートラ」と、アメリカ青年男

女の性生活を蒐録した。「キンゼイ報告書」の二冊を買い、省線の乗場で三流新聞の夕刊も買った。

それには彼が水木京太のペンネームで投稿した「有閑マダム攻略戦」というお上品なエロチックなコント

が載つていた。テーマは、有閑未亡人の離れを貸つた用心棒を兼ねた青年が

ふとした智略で、遂にマダムの肉体を征服するという、ユーモアたつぷりの一篇なのである。

ところが、皮肉か偶然か、良太が書いたコントの下欄に、次のような貸間廣告が載つていた。

◎貸間いたします、住所××××。但し年令二十五歳より三十五歳迄の独身

の男子、柔道又は拳闘の心得ある方に限る。日当りよき、二階二室、無料提供、略歴持参、当方、母娘女中、小人数、家族的優遇、面談の事

良太はその廣告の中程から、ニヤリ／＼と北奥笑んで居た。丁度手頃な賃間を探していた矢先でもあつたが、何より條件が気に入つた。柔道初段は一寸心細いが、拳闘ならライト級で自信は大あり、ストリートパンチが得意なのだ。

翌日、良太はその夕刊を握りしめて一番電車で廣告の住所へ尋ねて行つた頃には、早くも十二三人の我こそは柔道×段、拳闘×級の猛者ばかりが列を作つて待つて居た。九時の面会時間迄には、凡そ二三十人の列になつた。何しろ住宅難の今日のこと、此の応募者の数には不思議はなかつた。こ



れ等の男達も良太と同じく、たゞ二階無料提供丈に魅力を感じているのではなないかもしれない。多分彼等も母娘に魅力を感じていることだろうと、良太は考えるのである。

貸間札、二階かします、おのぞみなれば、シタも貸します後家世帯……良太はふと、春の週末旅行の温泉宿で課長が唄つた都々逸を想い出して、俺は何といやらしやつちやろ、一人で赧くなつた。

良太がピースの七本目に火を点けた頃、ようやく門が開いて、順番に先の方から応接室へ案内されていつた。

彼は段々自信が無くなつて來たが、でもどんな間違いでお鉢が廻つて來ないとも限らない。良太は、貸して貰える二階の部屋を想像するより、その母娘？なるものに早く逢つて見たいと思つた。

聴て彼の番が迫つて來ると、時間の暇々に讀んでいた、例の性典と一冊の本を、急いで英字新聞で擬装した。応接室へ通された。

「どうぞ、お掛けになつて下さいな」やさしいチャアミングな、世なれた声と共に、良太の前に美しい四十歳前後の婦人が立つて居る。期待をそらさぬ美人だつた。

「ハア」向い合つて座つた。美しい夫人の後に、かくれるように十八歳ほどの令嬢が、ひっそりと寄添つて立つて居た。

「二十八歳でいらつしやいますの」「ハア」夫人は、良太の略歴書に眼を通して、やさしく訊いた。

「M大学ですのね、優秀ですワ、柔道は學校時代おやりになつたのね、御両親は御健在？ K・N会社にお勤めねほんとに結構ですこと」

夫人は、略歴書に一通り眼を通すと

良太の趣味を尋ねるのだつた。「至つて無趣味な方なんですが、コントは好きで書いています」

「ではS新聞の夕刊に出ていような？ ペンネームは何と仰言いますの？」

「水木京太です」まア！と驚いたような表情を見て、

良太は、まずい事を云つたな、と後悔した。夫人は、

側の令嬢と目を交して、お返事は本日中にお葉書で、と面接を打ち切つた。夫人の警えようもない素晴らしい魅力に圧倒された、良太は外へ出たもの、僅か三四分間逢つた丈で、おのぞみなれば……なんて失礼な都々逸を思い出したことが羞かしかつた。

「おヤ……失敗つた！」

良太はその時になつて、始めて応接室へ二冊の本を忘れたことに気が付いた。内容が内容丈に夫人や令嬢達が

発見したら、どんな顔をするだろう。下手すれば応募資格がフイになるのであるまいかと周章てたが、え、まゝよ。一体どんな結果になるか見てやれと、冀度胸を据えて歸つて來た。

ところが、それから二三日目の朝、水莖の跡も美しい一枚の葉書が、彼の下宿へ舞い込んだ良太は、会社の採用通知があつた時より嬉しかつた。こうして彼は幸運

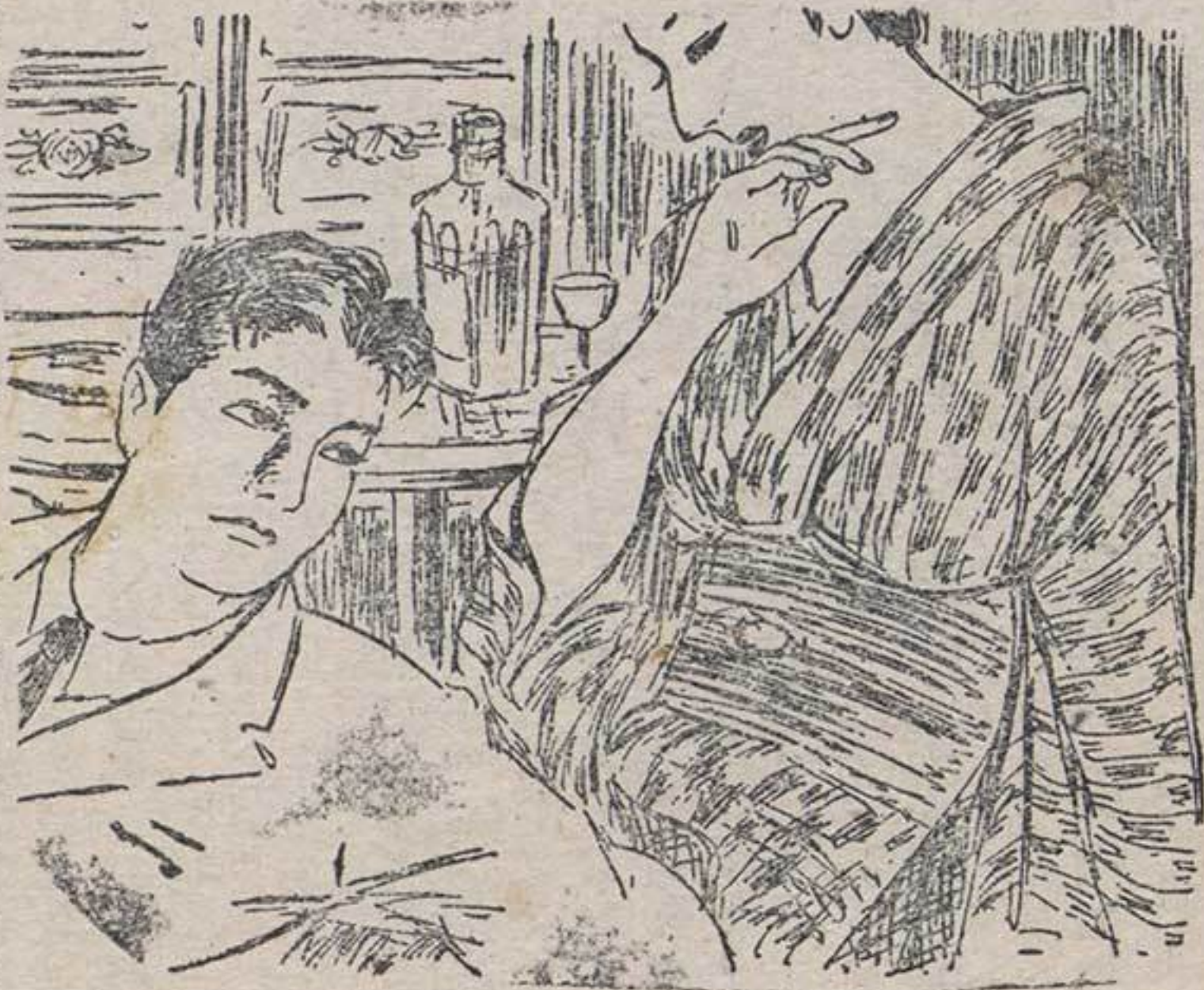
？にも、三十何名の中から選ばれて、

約束通り、和洋の美しい二室を無料で提供され、家族的優遇と、廣告にあつた通り、日曜日に、

は、十時と三時のお菓子迄配慮してくれる行届き方であつた。令嬢は、眞弓さんと呼んだ。良太は、それより女主人の素顔を女中に尋ねたい衝動にかられるが、失礼だと思つてやめた。だが翌る日曜の午後、三時のお茶を持つて來てくれた女中にこう尋ねた。

「どうしてあんなに沢山の中から、僕がお世話になることになつたのですしやう。あなた判りませんか」

と訊いてみたのである。女中は笑つ



て、良太が素晴らしい本を置いて帰つたこと、素晴らしいコントを書いて居たこと、が、とても奥様のお気に召したらしいと話した。彼女が素晴らしい意味を知る筈もなかつたが、それを知つて貸間を与えた夫人に、良太は、

「今になにか？ があると、無意識の裡に期待した。あるいは有閑マダム攻略戦のコントその儘の到来を夫人は密かに希つて居るのではあるまいかと思ひ、良太は翌日から古本屋を漁り、爲永春水の名作を、或は西鶴の好色一代男を自室の書棚に潜ませて、窃讀の形跡を検べる一方、愈々、能動的に暗躍した

或る日、良太が出勤した後、頼まれたシャツを洗濯して居た女中は、ボケツトの中から異様なものを発見して、夫人の許に差出した。田舎出の純心な処女は、それが何の目的のために使うものか判断がつかぬが、夫人は顔を赧らめるより、良太の青春に同情した。無理もないと思つた。と同時に、何故かその儘放つて置けない嫉妬と焦燥を身内に感じた。

良太はその夜、マダムに誘われて、今晩は飲み明かしませんか云つて、上等のウイスキーを出された。彼も飲めば、飲める口なので、マダムを相手に晩く迄飲んだ。酔いが廻るにしたがつて、今晩こそ？ と彼は不逞な肚を据えた。

「ねえ、ママさん」いつか呼名も奥さんからママさんと親しくなつていた。「なアに……」

「今夜は少し失礼を云つてもかまいませんか」「エーエ、いゝですとも、貴

男の失礼、訊いてみたいワ」

「ママさんは、御主人はほんとに無いの？」

「御存じの通りですワ、誰か主人らしい人此の家に居て？ 三毛まで、女よ」

「それは判つてますよ。でも、そんなに美しく若くて、絶対に一人つて法はないと思うア、御主人で悪かつたら、愛人は？ 怒る？ こんなこと云つたら」

「いゝえ、怒りません、でも何故そんなこと訊くの？」

「気になるんです、僕、ママさんが好きなんですもの」

「どんなに好き？」

「もう目茶苦茶に好きなんです」

「大分酔つたのね、もつと軀をチャンとなさい、インチキよそんなの」

「チョツトぐらいママさんに触らせて下さいよ」

良太は酔つた勢いを借りる訳ではなかつたが、どうしてもこんな鬱屈気にならざるを得ない夫人の魅力であつた。

オールド・ミスと呼ばれて、誰も相手にして呉れなかつた彼女ではあつたが、老巧な男の誘ひにかゝつては、他愛もなく腰を切つた。

彼女が或る會社の經理課に勤めて居る。

勤続十五年と言へば新陳代謝の激しいこの頃の會社では珍らしい存在である。經理課の仕事は、矢張り熱練と経験が物を言うのでその點、腰のすわつた彼女の勤務振りは、會社でもかなり高く評價されて、重役の御覺

えも目出たい方であるのだが、それだけに、同僚の若い社員の間では余り人氣がない。それは、三十と言ふ年齢のせいもある。

器量だつて、それ程、醜いと言ふ程ではないのだが、愛嬌のない、少し大まかな顔の造作の粗末さが、社交的でない陰氣な

た。

「今日は、何もかも聞きますよ。ようござんすか。おかくごは？」

「どうぞ、何でもお訊きなさい、ボイヤ」マダムも良太の態度がほぐれるにつれて、軽い調子になつて行つた。

「一体、全体ですね、凡そ世の中はですわね、とにかく、こんな世相がですわね、あゝ面倒だ、一体、ママさんの生活法の道は？……どう云うことに……失礼……だつた？」

「ばかね、そんなこと、あんたは心配しなくていいの、おませね、子供のクセに」

「子供？……子供と仰言いましたね、どうせ僕は子供です、でもね、ママさん、子供は……」

「バカね、何ママの前で昂奮してんの手を離しなさいな、駄目、駄目、バカよ」

「おとなです。僕はおとなですよ」男女の礼儀とは、紙一重である。

この場合までの夫人は、あの品のよい夫人であり、この場合までの良太は

立派なゼントルマンである。だが、今の夫人はこうであり、今の良太はこうである。紙一重の奥の人間の姿である。アルコールは、粹な月下氷人である。

「良ちゃん、あんた、うちの眞弓嫌い？」

「きらい？ あんない、お嬢さんを、嫌いな男があるでしようか」

「実はね、あの廣告はね」

「判つてますつたら、お嬢さんの、未

來の良人を選ぶための……でしよう」

「まア……判つていた？」

「いしましたとも、何も彼も……ママさん」

「で、眞弓をどう思う？ 貴男の方は引越して下さると同時に、失礼ですが身元を調べさせて頂いたし」

「ヤボなこと、云いつこなし、それより、ママ、僕、可愛がつてよ」

「ママの方がいいの？ 變つてんのね、今の青年つて」

「變りもしますよ、日本帝國が敗れてるのに、日本青年の氣質が變らなかつ

性格にも裏附けられて、冷ややかにそつて固つて、その上に結婚適齢期を過ぎた齡のひけ目、一層に彼女の日常の舉措を、乾からびたものにして居た

彼女の今日までの青春の経過の間に、一度や二度の縁話がないかつた譯でもない。目立たない日陰の陰花植物みたいな女では

あつたが、それでも娘盛りには時におせつかいやく人も居たり、手を握つたり、お尻を孤つたり、悪戯山戯に括つて小當りに責任のない誘惑を試みた男もないではなかつたが、濕つた薪みたいな彼女の肉体には遂に今日まで、火が點かず仕舞だつ

たら、どうかしてますよ。ママさんも
変りなさい、僕を可愛がりなさい。何
も？ 彼も？ 試験して娘のムコは選
ぶべし、おのぞみなればと、何やら世
帯、ママ、これさママ、つれなかるう
ぜ」

「仕様が無いのね。でも何んて、相当
なの、見なおすワ、でもね、一二年猫
かぶつて居れば、相当な財産と一緒に
美しい娘と結婚出来るのに、良ちゃん
の慾なし、ママのどこがいゝの？」

「一二年猫かぶつて、殺生な、一二年
どころか、今晚が持ちません。ママの
意地悪！ 何とかして……」

「ママも良ちゃん好きよ。とつても可
愛いワ、あのね？、小指出してごら
んなさいな、ぎりぎつちよんゼツタイ
にヒミツを守つてくれる？」

「ママの馬鹿、恋愛の自由判らないの
ボク肩を張つてママの愛人だといふ
らすよ。」「だめ、真弓が驚く、だ
からゼツタイにね」「ウルサイなア、
母上、なんでも約束するよ」

「待つて、それからね、待つてたら、
いやツ乱暴ね、待つてつたら、ボーヤ
駄目よ……駄々つ子ね……」

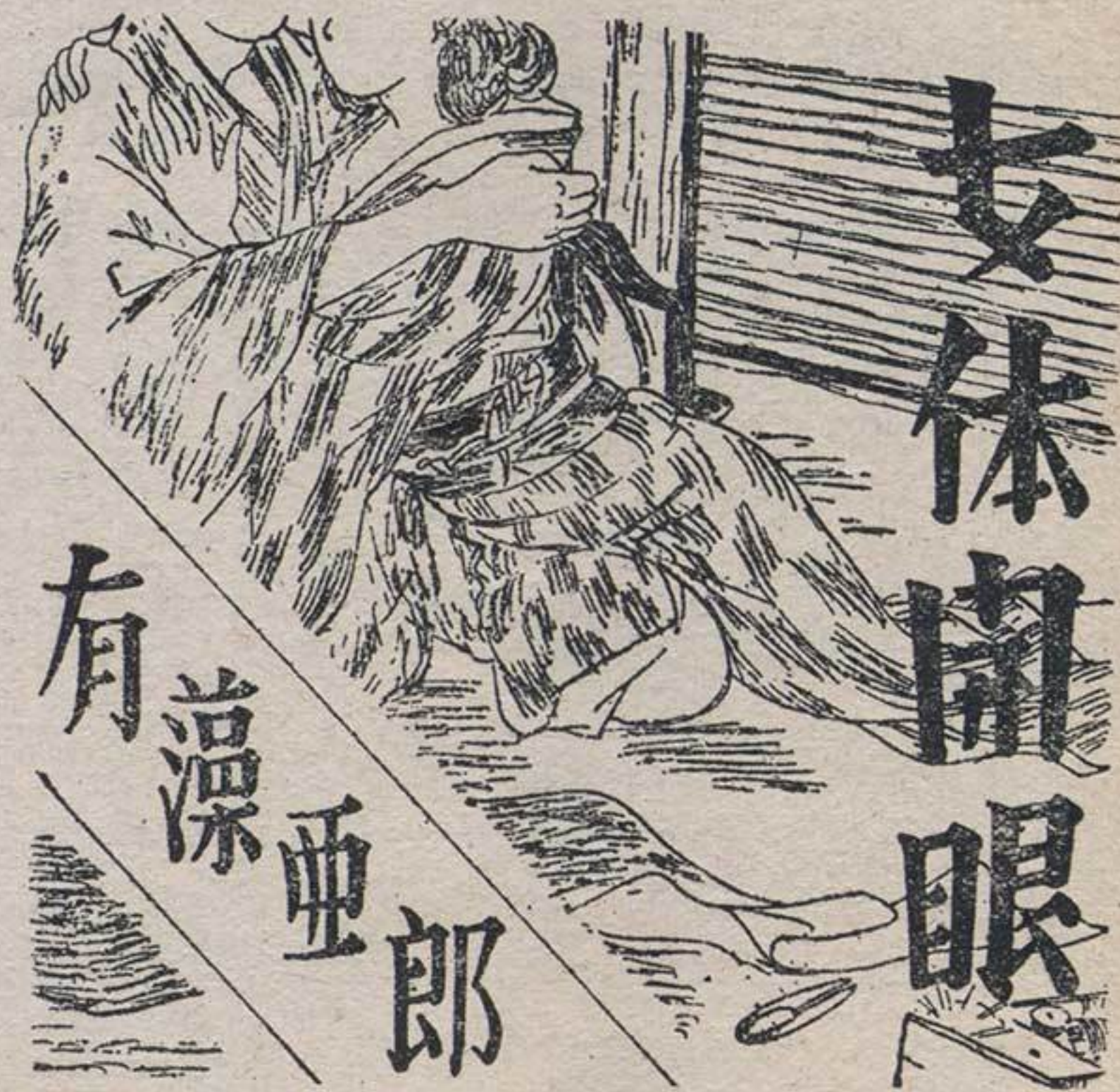
× × ×
よせばよいのにと、一二年待つてば
いゝのにと、ヤボは云わないで。

新聞廣告を見に瞬間から、良太の期
待はこの母娘？ にあつたのである。
娘が若過ぎ、母が美し過ぎた結果であ
る。良太の身辺から、好色的な書籍が
消え、服のポケットから避妊用ゴム製
品や薬品が見られなくなつたのは、そ
れから間もない頃であつた。――終――

たのだ。尤も数乏しい縁談や浮
氣男の小誘惑が、彼女の青春に
何の花も咲かせずに、あつてな
く通り過ぎて行つたのもあなが
ち彼女の器量や性格の爲ばかり
ではなく、彼女には扶養しなけ
ればならない小うるさい父親が
ついて居る養子娘であつたせい
でもあつた。

防空壕を掘つた街に平和が訪
づれると、開放された女の自由
が突拍子もないニールツクを
着込んで、剣き出しの動物的な
情欲が腕を組んで街に轟めさ
い初めた。若い娘達は、皆んな
羞恥と貞操を口金のゆるんだハ
ンドバックに詰め込んで、タキ
シードを着た街の狼と危険な四
舞曲を踊り狂つて居たが、彼女
は矢張りとり残されて、固い
冷たい椅子に、色褪せた青春を
縛りつけて居たが、其の表情の
乏しい顔からも、流石に吐け口
のない焦燥と遺瀾ない孤愁な覆
いかくすべくもなかつた。

×
私が、彼女に悪戯気なちよつ
かいを出したのも、あながち妻
を遊ばした中年男の淋しさから
来る浮氣心ばかりではなかつた
私は、若し、この乾からびた女
に、本當の女の喜びを知せてや
つたら、どんな玄妙不可思議な
情的變化が、彼女の人生の上に
現われるだろうか。それとも相
変らず、表情ない無感動な顔で
情欲と淫樂のクライマックスで
も天井の節穴を眺めて居るだろ
うか。



私は彼女の肉体の鑑賞探險を
思い立つと、矢も楯も堪らな
なつた。まるで、思春期の若者
のような興奮と熱情と好奇心で
私は發情期の牡犬のように尾を
振つて彼女の廻りを煽情的に廻
り歩いた。然も、濃厚な中年紳
士の親切と禮儀と謙讓を忘れず
に。

×
私の洗練された戀愛技術は、
この押花のような乾からびた處
女を誘惑するには何の造作もい
らなかつた。一度、二度と、初
めは虎の尾を踏むような不安な
想いで、私の家に遊びに来た彼
女も、私のおつとりと構えて、
出来得る限り彼女に急激な刺激
や不安を與えない様にする努力
に、漸く三度目の招待には大げ

物を体を伸して覗き込んで居た
が、その裡にいざり寄つて手に
とつて見初めた。
あッ！ 突然、恐怖とも驚愕
ともつかない異様な、まるで押
し潰した様な嘆息が彼女の口か
ら洩れた。パタリと反射的に閉
ぢられた書物の頁。だが、暫ら
くすると、彼女は、また、障子
の外の氣配をうかがう様にして
そつともう一度、閉ぢられた書
物の頁を開いて見た。その好奇
と困惑のいりまじつた燃える様
な眸の輝きは一体どうしたと言
うのだらう。彼女は息を詰めて
何物かを眺めて居る。乾からび
た押花のような薄い表情にも今
やほんのりと血の氣さえ登つて
ぐつと、精一杯の努力で押え附
けて居る興奮が、手の顫えるに
窺われるのだ。しつかり結んだ
右手、その右手には、まるで選
かれたように歡喜にあえぐ男女
の裸体の秘戯寫眞が破れん許り
に強く固く握り締められて居た
私は障子越しにこの氣配を感
じると、ニヤリと思わず北叟
笑んだ。大願成就も間近しと言
うやつである。

×
私は直ぐ様、しのび寄る様に
部屋にもどり彼女に近づくと矢
庭に抱き締めた。彼女の狼狽と
困惑も、堰を切つて流れ出した
熱れた女の感能のほどばしりに
は、今やもう僅かな羞恥心の抵
抗をかすかに私の兩腕に残すの
みにて、彼女は、三十の埋もれ
た女の歡喜を絶頂まで貪り盡し
てやまなかつた。

一、倦怠期

久美子は戸田譲の部屋の掃除を終え、雑巾をすすいだバケツの水を二階の窓から屋根へ流した。空になつたバケツを廊下へ置いて、戸田が大学へいつて留守の部屋へ入つた。机の前の戸田の座布團にちんまりお尻をおとし、机のへりに頬をあててみる、するとほのぼのと心が和むのである。

「不思議だ」と久美子は思う。戸田譲の男ぶりは良いほうであろうが、久美子が好きになるタイプの顔立ちとは違ふ。むつつりと読書ばかりしているような人、久美子はキライである。それなのにその人の机に寄ると、心のこの甘いうづきようは果たして何故であるうか。

「あれが原因だわ」久美子はすぐ思ひだしてゐた。一年ばかり前から久美子と夫の誠一とは、面白い夫婦生活をいたし、なんでもいふ。倦怠期にさしかかつていた久美子夫婦の夜のいとなみがしぜんおろそかになりだして、それが影響して二人の仲がうまくゆかすことごとくに言い争いをするような暗雲低迷した頃久美子が友人から聞いてきた「倦怠期突破戦法」であつた。

友人から「教授」を受けた日の夕暮れ、久美子は新婚時代にかえつた気持ちで、いねいに化粧して夫を待った。夫は相変らずつまらなそうな顔をして会社から帰つて來、いかにもめんどくさげに、久美子の唇に「ちゆつ」と自分の唇をあてるだけであつた。

「今日Aさんにお逢いして、いいことをきいてきましたの」
久美子は声をはすませた。
「ふん」
「私たちいつまでもこんな冷たい感情で暮らすなんてつまらないとお思ひになりませんか？」
誠一は妻が夫婦別れの話でも言いたすつもりかとちよつとドキリとした。あわてて、
「お互い嫌いあつてゐるわけではないし、無論前のように仲良しの二人にかへり度いと希望はしてゐるんだよ。夫婦の倦怠期は、どんな蜜のように甘い新婚夫婦もいづれ一度はかからねばならないハシカなのだから、どうしようもないのではないかね」
「そのどうしようもないことを私たちの力でどうしようもあるようにできますのよ」
「いつたい何のことだ。あまりむづかしいご注文は困るぜ久美子」
「ウフン、お代は見えてのおかえりというものよ。さあいらはいいらはい」
と久美子は見世物の呼こみを真似て笑つた。誠一はそう言う妻の動作の中に久しぶりに新鮮な色つぽさを感じた。女がからだの美しい匂いがこぼれる。

倦怠期突破戦術

閨房遊戯の二挿話

「たたごとでない」と心が早くききたがつてゐた。「お床を敷いて、休みしてからよ」

久美子は夫を焦らせ、食事の仕度くに台所へ飛んでいつた。二階に下宿してゐる大学生の戸田を呼んで三人の食事になつた。試験中の戸田は食事をさつさとすませるとすぐ自室へ戻り、誠一は食後ラデオを掛けたが電波がスピーカーに流れて來ないまゝにもうスイツチを消してゐた。あと仕末をして座敷へ入つてきた妻へ
「もう寝るぜ」「まあー、げんきい」久美子は軽く睨んだ。

二、テクニク

夫のあとからシミーズ一枚の久美子は床へ入つた。いつもならブロンディとダグウッドのように背を向けあつて眠つてしまふところだが、今夜夫は久美子のほうを向いて寝てゐた。
「不和の原因はね、あなたもあたしにも新鮮味がなくなつたことですつて。あなただつていつもおなじ女のおなじ肉体では鼻につくくるのはムリありませんわ。だからつて新しい餌を雞み



たいに突つきにゆかれたら私が困りますの。それで今夜から私があなたの新しい餌になるのですわ。お寝間のあいだだけ夫婦でお芝居をして気分をだすの。幸い二人とも想像力はまづしいほうではないのできつと又今迄とは違つたいい夢が見られるというものですわ。脚色演出、あなたよ。頑張つてね」
「と、いつても急に芝居も思ひつかないよ久美子」「ぢや脚色あたし、演出あなた」「それで」

花木実

恋愛指南

「私女学生の修学旅行に東京から日光へ行つた時だつたわ。別クラスの子で先生に犯された人がいたのよ。旅館ではなくて散歩にでた河原でだつたけれど。」「痛ア」と突然草のかけで声が出たので、おなじように散歩していた女の子は怖くなつて逃げかえつて來たらそれがそうだつたのですつて。あれ如何？」

「成程そんなことも世の中にはあるのかね。それ賛成するよ」

久美子は立ちあがつて電燈を消した。想像の世界をより豊富に明るくするためにだつた。久美子は清純な処女に化して男に甘え、男の心が獸性となつて伸びてきた時、人生の汚濁をみたように叫びひらりとにげた。

胸が波打ちはづんでいた。男は一気に慕いより空想の世界で甘美な夢を追つていた。

意外にもそのからだは初ぶ初ぶしい触感にみちみちて、征服の慾望を掻きたてたのであつた。強引に圧倒していく逞ましい男の生活力を自覚して、久方ぶりに誠一は満足した。

誠一と久美子の夫婦生活にそろして青春が戻つてきた。しかしいつまでも教師と女学生でもないと思ひ、電燈をつけてもできる種を考へ

た。その頃ちようど戸田は夏休になつて鳥取へ帰省していたのでそれから思いつき、夫が下宿人と妻との不倫な關係を疑つて妻を折檻することにした。いくら騒いでも聞かれる者のない氣樂さから

「戸田とどんなことをしたかそのからだにきいてやる」

とか

「戸田といいことをしたことが憎らしい」

などと戸田讓の名前が毎夜くりかえされた。何も知らない戸田こそ災難である。この遊戯の方法は盡きす一夏を久美子たちは充分堪能して過した。

そのためでもあろうか、久美子は近頃自分が本當に戸田讓が好きになつてゐるような錯覚におちいるのである。戸田の部屋にいて立去り難い原因もそれであつた。

三、誤解

足音がして現実に戸田が帰つてきていたのに久美子は気づかなかつた。

「なあんだ奥さんでしたか。誰かと思ひました。今日は朝の講義だけであとはズボラです」

戸田の声にはじめて掃除をやりかけでぼんやりしてゐた自分に気づき久美子は慌てるのであつた。

「あらあら私お掃除の途中で居眠りしてゐたわ。あなたのお部屋風がよくとおつて氣持いいのですから」

久美子が照れかくしを言ひながら立ちあがるその手を戸田は勢いよく掴んだ。

「奥さん事情は皆裏の山崎君からきています。僕が休暇で帰つていたあいだ、奥さんは御主人から、僕との仲に肉體關係があると疑われて責めさいなまれていたそうぢやありませんか。しかも奥さんはハツキリ僕のことを好きだと言明なさつていたそうで、戸田はどんなに感激したか。山崎と抱きあつて泣いた位です」

戸田がぎゆうぎゆう握つてくる手首が痛いので久美子はほろほろと涙を流した。

戸田はそれをも邪推して一そう感激するのである。夫婦のむづ言を隣家の息子が聞いていたのだ。遊戯のヤマを効果的にするために戸田が好きだなどと言つた記憶も久美子にあつた。これはたいへんな誤解を招いてしまつたと彼女は蒼褪めていた。

熱のため顔を眞赤にして、感動にぶるぶる慄えている戸田はどう考へても久美子が好きになれる青年ではなかつた。だが

「あれは倦怠期突破のための夫婦の遊戯なのよ」

とは辱づかしくて言えたものではない。久美子が迷つてゐると戸田は益々燃えあがつた。

「お苦しくても僕が学校を卒業するまで待つていてください。必ず奥さんを幸福にしますから」

と、まばらに髭の生えてゐる鼻下をむくむくと動かしたかとおもふと唇を尖がらせ接吻しようとした。



久美子は置いてあるバケツを取るふりをして腰をかがめ、辛うじて戸田の接吻を避けた。

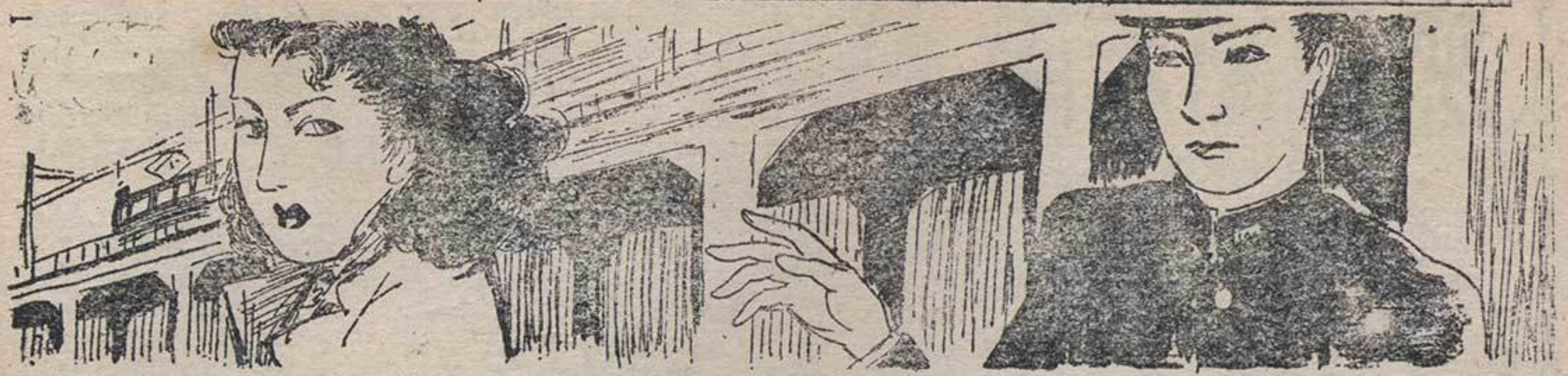
「よろしくお願いするわ」

と口の中で言つて階下へかけおりた。まだどきどきする乳房を抱いて鏡台の前に倒れ、肩で息をしてゐた。

戸田の熱病のような好意もいづれは醒めることだろう。今はそれをしぜん待つより他に仕方がなかつた。

しかしこのことを夫に語つた場合、本當に嫉妬した夫との夜のいとなみの激しさが久美子にはありありと感じられ、戸田よりそのほうに、此頃の彼女は少々疲労を覚えてゐるのであつた。

—おわり—



かすりこり戦法 富田 信二

あばずれ女の

戀愛戦術

映画館の女

夏休みには是非帰つて来いという親からの手紙をろく／＼読みもしなで、学資の外に五千円送つてほしいといつてやつたら、親というものは甘いもので、ツユ疑うこともせず、そんなに多く本を買うのはいいけれど、勉強し過ぎて病気になるなと、ボンといつただけの金を入れてよこした。

私は、ほくそ笑みながら市電に乗つて、先づ京極の映画館で時間をつぶしそれから、目的とする所へシケ込もうと思つて、三條河原町で降りた。

××座の特等席へ案内されたが、丁度映写中だったので、明るい外から入つてきた私は足元もはつきり見えなかつたから、案内女に手をひかれて、やつと席に就いた。

途中から何が何やらさつぱり分らぬ映画を観ている中に、ぱつと明るくなつた。今まで映画にひきつけられていた観客が俄に喋り出したので、ガヤ／＼わけの分らぬ雑音が鼓膜を刺戟し

たから、私は、今更のようにあたりを見廻した。そのとき、十八九の綺麗な娘が特等席へ入つてきたが、座席がないので、立つたまま割込めそうな所を探している様子だつた。

私は、自分の隣へ席をこしらえてやろうと思つて、いつも本を包んだ風呂敷包みを置いておくんだが、これ幸いとそれを取り上げ、チラツと女を眺めやつた。

相手があんまり美しい女だったので何んとなくきまりが悪いので、露骨に合圖らしい仕草はしなかつたが、女は、私の素振りを早やくもみてとり、つか／＼とこちらへやつてきた。

「ごめんください」

優しい声をかけながら、私の隣へかいた。ちようど、その時はベルが鳴つていて、女がかけた拍子に電燈が消えたので、女は面くらつて、何かにつまづいたのか、ふら／＼と倒れそうになつて、私の膝の上へ手を突いた。

「あら、ごめんなさい」

女は媚びるような眼つきを私の顔に投げた。映画の場面が現れたが、女が隣へ座つてからの私は、もうそれどこでなかつた。

ふうんと甘つたるい香水の匂いがす

るし、時々、扇子で、こちらへ風を送つてくれるし、膝の上へ手を突いた時の柔い感触が脳髓に沁みこんで離れないし、でも、角帽のたまえ、ムヤミに手を握りに行くわけにいけないので、溜息ばかりついていてた。すると、どうだろう、私の時に、女の肘がびつたりくつついてきたのだ。横眼でにらんでみると、わざわざ身を傾けて、私の方へ寄添つているのである。

私は、唯事でないと思つた。

みかけたところ、良家のお嬢さんみたいに上品だが——フン、アブいが一ルの生體はこんなものかもしれないよし、その気なら——。

私は、そう思うと、身内がぞく／＼するほど嬉しくなつて、自分からも、舐で女をぐツと押してみた。すると、女もまたそれに応えるのかぐツと押し返してきてた。

こうなると私も、それだけでは満足できなくなつて、何とかもつと具体的な意志表示がないかと、その方法を考へてみると、女の手が、自分の膝の方へきたような気がするの、その方へ手をやると、果して女の手があつた。むつちりした、温い手に触つてみた。

女の手はじつとしていた。

今度は、その手の上へ自分の手をのせてみたが、それでもじつとしていたので、思ひきつて、じんわり握つてやると、女もまた、ぎゅつと握りかえした。

私は、もう、たまらなくなつたので

握つたまゝ、女の手を引寄せようとした。

そのとき、パツと場内が明るくなつてニュースが終つた。

私は、仕方なしに手を離した。

離れたけれど、私は、女をもう他人と思われないような気がするので、どんな顔をしているかと振り向くと、きまり悪そうな顔をして俯向いているのが初々しくて、とてもたまらぬ程美しくみえた。

こんど暗くなつたら要領を得るだけのことをしておかねばならぬと、次の映写を待つていると、女が立上つて出て行つた。

便所へ行くのだろうと思い、後姿を見送つていると、便所の方へ行かずに出口の方へ行くので、こりやじつとしていられないと、大慌てに立上つて、出口の方へ行くと、女は、もう外へ出かゝつていゐる。

階段を二階づつ飛び降りて大急ぎで表へ飛び出したが、人混の中だから女の姿がもうみえない。

こいつは困つたと思つて、人を押し分け、ムキになつて探し廻り、花遊小路の角まできたら、四條通りへ抜けて行く後姿がチラツと眼に入つた。

しめたと思つて、駆足で追いつき、声をかけようとしたが、人通りが多い所では女が迷惑するだろうと、わざと接近しないで、一定の距離を保つて歩いた。

それでも、見失つては大変だと思つて、少しでも距離が遠くなると、人中を駆出した。そしていた。

女は、澄したもので、後も振り向かずに、四條大橋を渡り、京阪電車の停留場へ入つて切符を買つていゐる。何処まで買つか聞き落しては大変と、傍へ飛んでゆくと、女が振り向いた。ぱつたり眼が合つた。

きつと笑顔を見せるであらうと改つていたのに、私の姿をみた女はサツと顔の色を変えると、くるりと背をみせて、改札口へ向つて歩いてゆく。

少し当がはずれた気がしないではなかつたが、処女としては恥しくて、そろした素振をみせるのだろうと思つて大して気にもとめなかつた。

とにかく、丹波橋まで切符を買つて改札を出ると、やがて電車がきた。

満員で掛けるところがないので、女と少し離れた所で吊り皮にぶらさがり様子を窺つてみたが、女は私に背中を向けて、いつころ振り向こうともしない。

夕日の落ちた加茂川面から涼しい風が吹きこんできて、女のほつれ毛をなぶつていた。

私は、その後姿を、うつとり眺めていろ／＼な空想を描いていた。

これから、どこかで降りたら、すぐ声をかけようか、それとも、どこへ行くか、ゆく所まで黙つてついて行つてみようか、そして、声をかけたら、どんな返事をするかしら、返事の模様によつては、話がどう発展するかも知れない。そんなことを、それからそれへと繰返えしている中に、丹波橋へ着いた。乗り越してもいいや、と思つていた

ら、案の定、女が降りた。改札を出ると、もう薄暗かつたが、人通りが少なかつたから、見失う様なことはないと思ひ、少し離れて女の後をつけてゆくと、急に、薄暗い路地へ折れ曲つた。

片側は板塀、声をかけるなら今だと思つて、女の傍へ寄ると、気配でそれと知つた女は、こちらを振り向いた。

その顔つきが、いかにも氣重いのので口まで出かけた声が内訌して、私は唾を飲んだ。まごついていゐるうちに、女はどん／＼向うへ歩いて行く。これではならぬと、女の後をまたつけて行く

と、女は、足を速め、私が時々駆出さねばついて行かれないほど速く歩いてゆく。しかし、ここまでついてきて、このまま別れてしまふのは、何といつても甲斐性のないことだから、せめて住所だけなりと知つておきたいと思つて、接近した時には声をかけようとするのであつたが、映画館でみたときとは、まるで別人の様な、険のある眼つきで睨まれるので、いおうと思つていたこともいい出せなかつた。

女は、私にひとことも、ものをいわせないようにして、行き過ぎようとするのだが、もう、こうなれば、私も意地みたいになつてどこまでも追つかけてゆくと、人家の切れた田圃道へ出た。

ここまでくれば、全く人通りがないし、歩いていゐるのは、女と私の二人きり、日はとっぷり暮れて、どんなことをいつたつて安心だ。そう思うと勇氣百倍して女の近くへ寄り添い

「もし／＼」

と大胆に呼び止めた。

ところが、聞こえないのか、女は知らん振りして行き過ぎようとするから私は駆出して行つて、躰すれ／＼にまで寄り添い

「ちよつと待つて下さい」

今度は、大きな声で叫んだ。

こうなると、女も黙つて行く訳にも行かぬとみえて、そこへ立止ると、私の方へ向き直つたが、矢張り険しい眼つきをしていゐる。

「あなたに少し話したいことがある」
凄くような眼でみつめられるのが、何となく氣味が悪かつたけれど、今となつて尻ごみすることもできぬから、思つていゐることをいおうとした時、「執念深い人だね、話したいことがあ



る？ 分つてゐるわよ」
私は面喰つた。予期しないあはれ、すれだつたからだ。
「こんな所までつけて来て、どうしよつてんだい、さあ、それだけ惜しけりや返えしたげるわよ、とつと、お帰りこのしみつた奴ツ」

こういつて、女は、私の鼻先へ財布を突きつけた。私は、ハツと思つて懷中を探つてみると財布がない。
「金はまだ手をつけてないから、安心してもつてお帰り」
私は、恐る／＼受けとつた。女は、ボンヤリしている私を尻目に闇の中へ

消えて行つた。
私はがっかりして、財布をポケットに押し込み、もと来た道をトボ／＼と引返した。
しかし、まあ、金だけとられずによかつたと思つて、停留場までやつてきて、さて切符を買おうと思つて財布を

開けてみて驚いた。紙きれが押し込んであるだけでビタ一文入つていなかつたのだ。
こんなヒドイ目に会つたのは後にも先にもない。持つていた本を賣つて切符を買い、這々の体で下宿へ歸つた。

終

純情戦法

ハンドバックのなかには？

小島 伸一



薄給のサラリーマンがこうして戀を掴まえることが出来た――。

「三賀さんの悪意地、ね、返してよ、ほんとに返してよ」
いつにない眞剣な由紀子の声が、他をはぐかつて、低く重く三賀の耳へつきさる、午后のがらんとした事務所のなかではあつたが由紀子は大きな声は出さなかつた。
「返しますよ、だが、それには条件があるんですよ」
と言いつつ、三賀はなめらかな手ざわりのする、ナイロンのハンドバックの口金をあけようとした。
「開けちや駄目よ、あけちやいや……」
奪い返そうとする由紀子の手を、三賀はそつとはねのけた、低く忍びやかな争いはいつまでもつゞく……
このハンドバックのなかに、処女の香りと、秘密がひそんでいる、そう思うとなんとなくのぞいてみたい好奇心がわきあがつてきた、まして、由紀子が入社して自分と机をならべて以來、ほのかな愛情をさへ感じているこのひと、三賀はハンドバックの返上の条件をあれこれと考へた。
「あけませんよ、だから、僕の希望をきいて下さいよ」
いやがらせではない、三賀の思慕の念が燃えさかつてきたのだ
「条件つて……希望つてなに？」
由紀子は低く言つた。
「お茶をつきあつて下さい……」
「お茶ね……」
由紀子は不快そうに眉根をよせて、明らかに拒否の色を現した。
「駄目？」
「え、今日は三時の大社行で週末旅行に出るのよ、お茶なんかつきあつてゐる時間がないの……」
なんと豪華な話であろう、週末旅行など夢に見る以外には味えぬ三賀にとつては、この言葉は羨望と嫉妬をもたせざるだけ……こんな境遇におかれてゐる由紀子には、お茶を飲むなど、佳肴の前の鱈の煮干程度の魅力もなからう……それにしても、由紀子の境遇であのサラリーで、週末旅行に出るなど三賀の思考の範囲内では、答案のですね不可解なものである。
けれど、いつも濡れたような媚めかしい、ひとみ、純白のブラウスの下で脈うつてゐる匂うような肉体、そんな武器？をもつてゐる由紀子にしてみれば、三賀などの想像も及ばない、幸運をつかんでゐるのかもしれない。

机をならべて仕事をしている関係上三賀は由紀子の一番身近な存在は自分だと自惚れ、自分こそ彼女のアミーであるとする。自己満足にひたつていた。こんなブラットニツク・ラブに胸を焦しつゝ、お茶を誘おうか、映画を誘おうかと、何度も思つたが、その都度、由紀子の美？に圧迫されて言い出せなかつた。

だが今日の三賀は勇敢であつた、由紀子には不相応な豪華なハンドバックを見て、猜疑の嫉妬が、奔流のように体内をのたうちまわつた、お茶に誘つたのはとつさの思ひつきだつたが、平常から胸に抱きしめている、由紀子思慕の念が、はつきり頭をもたげたのだつた。

「御旅行……美しいですね」

自分ながら、唇がゆがんだように思つた。

「えゝ、誘われたの……断れないの……」

……女つて駄目ね」

由紀子はさしうつむいて、つぶやくように言つた。

「お連れがあるのですね」

「えゝ……」

（その同伴者は誰？）と口まで出かゝつたのを三賀はぐつと抑えつけた……週末旅行に出る女性の相手……如何な鈍感の三賀にも、漠然と想像できた、こんなことを思うとハンドバックにさ

え、三賀は憎悪を感じた。

「お返えしますよ」

怒つたように、机の上へ投げ出した

「……」

「ありがとう」

由紀子はハンドバックの方をちらりと見て、ほつと吐息を洩した。そんな態度から、今日の旅行を由紀子を歡ばせていないことだけはわかつた。

電話のベルが鳴つて、由紀子が受話器をとりあげた。

「あらつ、二時に変更……困るわ、わたし……だつて……」

そんな電話の声を背に、三賀はみじめにうちのめされた心を、洗面所へ捨てにきた、その窓から見える空には白い浮雲がゆるやかに動いていた、三賀はそれをぢつとみつめながら、失戀の苦汁を如実に味つた。

故意に手間どつて事務所へ歸つてくると。市内出張から歸つてきた同僚ががやがやと声高に話しながら事務をとつていた。

そんな活気から取残された敗残者のような氣になつて自席へ戻つたとき、はつとして机の上へ視線を釘づけにした、そこには由紀子と争つたハンドバックが靜かに待つていた。

あたりに視線を走らせながら椅子にこしかけるなり、つと手をのばして、急いで膝の上へ隠した、激しい動悸が胸を高鳴らせた。中味を、見ようか、それとも……しばらくためらつていたが、三賀は思ひきつて、膝の上で、ハンドバックの口金をはすした。

ふうんと匂つてくるむせるような脂粉の香りが鼻をついた、指に触れるもの一つ一つが異常な興味と情感をあらはらたてる……ルージュ、香水、コンパクト、旅行用の櫛、小型の手帳、……次の品を手にとつたとき、思わず

三賀ははつとした、ゼリー避妊薬、そろてまだまだ、驚愕させたものは、ゴム製の衛生具の箱……

三賀はくらくらとめまいがするよう

に思つた、汚れたもの、怖いもので

も見たよう、急いで口金を閉ぢ、びし

やつと音を立て、いきなり、ハンド

バックを机の上へたゞきつけた。

「三賀君、なにをしてるんだい」

その音に、同僚が悠然と煙草をふか

せながら近よつてきた。

「なんでもないよ」

「それでも、いやに眞剣な顔をしてい

るぢやないか……」

机にこしかけながら、同僚はハンド

バックを無難作にとりあげた。

「ほゝう、豪華品だね、誰のだい？」



口金を開けようとする、同僚の手を

おさえ

「僕のだよ、アミーにプレゼントする

んだ」

「中味が入つてゐるね、拜見するか……」

「駄目だよ、見ちゃいけないよ」

三賀は矢庭に同僚の手からハンドバ

ックを奪いとつた、由紀子への戀情の

残滓が、彼女をかばう氣になつたの

だ。

「ひどく眞剣だね、まあいゝよ……」

ハンドバックを諦めた同僚は長崎の

鐘の口笛を吹きながら、ドアの向うへ

姿を消した。

三賀は席を立つて会計の吉川洋子の

方へ歩いて行つた。

阪神電車線の見おろされるアパート

の窓にこしかけて、三賀は今日の出来

事を苦い思いをしながら頭のなかでく

り返した、由紀子……ふみにじられた純

「ハンドバックありがとう、吉川さんからいただいたわ……中味、ごらんになつて？」

「拜見いたしました……」

「悪るびすれずに言つた。」
「わたし、大変な女でしょう……でもあなたの好意で、わたし眼が覚めまして、あのハンドバック、そつくり中味のはいつたまゝ返してきたの……」

「今日の週末旅行に是非必要だからと言つて、あれは全部、もらつた品だつたの、わたしすんでのことに邪道へ足を踏み入れてしまつたのだつたの、あなたに、なかつたら……」
「由紀子さん、それ、ほんとうですか……」
「ほんとうよ……」
「ありがとう、僕、あなたが好きだつた」

三賀はいきなり手をのばして、由紀子の肩を抱きよせた。
「そんなことしちや、いやよいや……いやあん」
言葉だけは大袈裟だつたが、由紀子は抱かれたまゝちつとしていた。
「電燈が明るいわねえ……」
「消しますよ……」
と言つて立つたとき、三賀を襲つたものは、由紀子が安々と男性の腕へ身を投げかけることであつた、けれど、そんな疑惑も腹の底からつきあげてくる、情慾の火が、理性の芽を焼きつくしてしまつた。

三賀は抱きよせた由紀子の口へ唇を重ねた。
「僕たちにはゼリーなんて、不必要だ一人だけ愛の結晶がほしい」
三賀は喘ぐように言つた。
……終……

効を奏した

虚々實々奇襲戦法

椿 昭彦

倦怠期クククなんて厭な言葉である。

出来得ればこうした夫婦の暗礁から免がれたい一心の、今日この頃の葉子だつた。

結婚生活三年目を迎えて、良人の態度が急に冷酷になつたように思われるのは、強がちその先入観ばかりからではない。現に昨夜、良人の俊二は、理由もないのに三時間も遅れて帰宅した形ばかりの接吻を交わすと、ブーンと酒の匂いがした。

「若しやククク？」
葉子は小さな胸を痛めながら、先日同窓会の席上で聞いた、男の行動を調

査してくれる、秘密探偵社の話を思い出し、不安のあまり、翌日早速くだんの探偵社を訪れて、良人の素行の調査方を依頼した。
「承知しました。調査報告書は一週間したら、お宅へお届けいたします」
係員の懇切な言葉にホツとして社を出るか、黒と出るか。若し万々クククふと最悪の場合を想像すると、悲しさに眼の前が眞ツに暗なり、
俊二と結婚する前、たつた一度だけ唇を許した、初恋のKの面影をいいて、儚ない過去の感傷に耽けるのだつた。

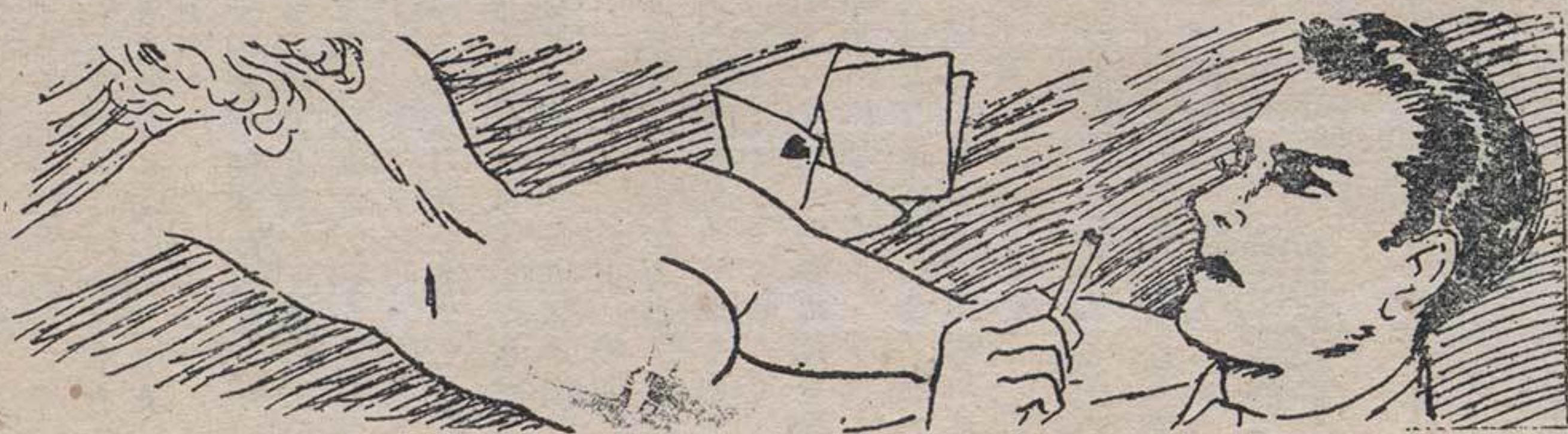
「お、姉さんぢやあない？」
突然、行手に立塞がれて、葉子はやつと我れにかえつた。弟の幹夫が降つて湧いたように舗道の眞中に立つて居る。
「まア幹夫さん」
暫らく見なかつた弟の快活な姿を懐しそりに眺めやり、近くの茶房にお茶を誘つた。

「お元氣だつたのね、阿紀子さんとは圓満？」
姉より一年先に結婚した弟は、コツクリと素直に頷いて見せた。葉子は深い溜息が出た。
「姉さん、どうしたの？ いやにふさぎこんでるぢやないの」
「倦怠期かもしれないワ、何も彼も面白くないのククク」



法訣秘打開突破怠倦

掘め手戦術



「へエー？面白くないというのは、結局お互いに刺戟が無くなつたんですよ。いゝ事を教えてあげましょうか、姉さん？」

「いゝ事つてククク？」

「フ、フ、つまりね。ククク」

「テエブル越しに弟の軀が乗り出して来て、姉の耳許に口を寄せた。」

「どうです？姉さん」

「やつてみませんかという風な顔付。まア！」

と呆れた姉の瞳。だが、葉子の表情の中には、小さな希望を擲んだ冒險の色が閃いていた。

妻が倦怠期に就々として、日夜身も

瘦せるほど杞憂の眉を擧めて居る時、

一方、良人の俊二は至極呑気そうに、

会社の晝のひとときを同僚と雑談を交

わして居る。

「君も結婚三週年の記念日が来たね。

もうぼつ／＼倦怠期の渦中にあるンぢやあいか」

「大丈夫だよ。僕には難關を突破する

だけの信念があるんだ」

「信念か？大きく出たな。まアそれ

ほど自信がありや結構だ。僕ア倦怠期

の時は随分ひどい目に遭つたよ、何し

る女房が秘密探偵社に頼みやがつたン

で、すつかり尻ツぽを掴まれちやつた

んだよ」

「オイ君、そんな術があつたのかい？

そりや今が聞き始めだ」

愕いて誤返して居る

ところへ、同じく同僚

の一人が来て、何事か

俊二にぼそ／＼と囁い

た。

「何？僕のことをククク？」

「そうなんだよ」

見知らぬ男が俊二の素行に就いて、

それとなく聞き合せて来て居るとい

ふのだ。然も、話の要点が女關係にある

と訊いてピンときた。

「よしッ、僕が直接会つてやろう」

何を思つたのか、彼は狼狽も見せず

に、悠々とビルの屋上から降りて行つ

た。

一週間経つた。

良人を送り出して間もなく、葉子は

待ちに待つた、秘密探偵社からの調査

報告を受つた。封を切るのももどか

しげに、タイプ印書の頁を開くと、彼

女はサツと顔色を変えた。

一、葉畑俊二ハ、最近会社内ニ於テモ

風評悪ク、特ニ女性トノ交渉ガ頻々

トシテ噂ニノボリ、既ニタイピスト

津川絹子（二一歳）トハ肉體關係ニ

迄陥ツテオリ妊娠ニケ月。二人ガト

イレツトデ接吻ヲシテイルトコロヲ

発見サレ、問題ヲ起シタコトガア

ル。

一、葉畑俊二ハ、難波附近ノカフェー

界ニ足繁ク出入シ酒場「クララ」ノ

女給小百合コト井上廣子（二十三

歳）ト深く馴染ミ、指輪、ドレス、

靴等カナリノ金品ヲ與エテ再三ホテ

ル旅館ニ誘イ、妊娠四ケ月ニナツタ

爲、女ハ掻爬ヲ理由ニ墮胎手術費ト

シテ四千円ヲ請求シテイル。

一、葉畑俊二ハ、神戸市山手通ノ秘密

クラブ臨時会員トシテ週期的ニ密カ

ニ集イ、有閑マダム、未亡人ト桃色

を遊戯ニ耽リ、中デモ帝國産業株式會

社社長、谷口欣也氏夫人多美子（三

十一歳）ヨリ格別溺愛サレ、一男二

女ノ母ノ身デアルニモ拘ラズ、俊二

ト結婚ヲ誓イ、性格ノ相違ヲ理由トシテ、家庭裁判所ニ雙方共正式離婚ノ手續ヲ提出シテイル模様。多美子ハ密通ノ果、目下妊娠ノ徵候アルモノノ胤ハ俊二ノモノトシ俊二モソレヲ認メテ居ル。

葉子はこれ以上讀む氣力が喪くなつ

た。クラ／＼と眩暈がしそつた。

それでいて良人が憎めないのが不思議

だつた。裏切られた口惜しさ腹立し

さをドツと良人にぶちまけてやる立場

にありながら、憎悪しないのは、因果

に愛して居るせいであろう。

ところがその日の夕方、俊二は珍ら

しく早く会社から歸つて来たが、何氣

なく机の上を見ると、葉子が隠くすの

を忘れていたらしい、男の差出人から

の妻宛てた一通の手紙を発見した。

「オヤ？ククク」

見馴れない男の筆跡を辿つて行く中

みる／＼俊二の心臓は早鐘を打ち始め

た。綿々として書綴られた男の恋情。

その一言一句が女の心を掻き乱すばか

り、求愛の文章に埋められて居るの

だ。

然も、最後のところには、今宵、是

非ともお待ちしています。と、逢曳の

時間と場所まで記してある。

俊二が愕然となつたのも無理はな

い。

自分のものになりきつて居る筈の妻

が、いつの間にか他の男に傾きつゝあ

る。それも慈文のやり取りをして、仲にまで進んでいるとすれば、眼の届かないところでは、どんな事が起きていたかもしれない。妻の貞操さえ疑がわしくなってきた。と同時に、あの真ッ白い柔肌が、自分以外の男の手に触れられるのかと思うと、たまらない惜しさと、素晴らしい妻の魅力さえ感じるのだった。

俊二はその夜、何食わぬ素振り、ジツと葉子の動靜を窺い、用事にかこつけて出て行く後から、窃かに尾行していた。

秋の澄みきつた月光を浴びて、浮々として逢瀬に聲をはずませる、不貞の妻の後姿にムラ／＼と嫉妬と憤りに揺ぶられた。すると、約束の場所に來た時、葉子はクルリと振り返つて、バタ／＼と良人の胸許に走り寄つて來た。「あなた！……」小さく呼んで、いきなり物狂わしく俊二の軀に顔を埋めた。彼は解釈に困つた。

「矢ッ張り來て下さつたのね。嬉しいワ。あの手紙もいふやうな嘘よ、出鱈目よ。幹夫に書いて貰つたんですの……許してね」

「何！ 幹夫君に……？」

その一言で、彼の疑惑はサラツと晴れた。訳を訊ねる必要もなかつた。愛するがために必死となつた、倦怠期打開のいぢらしい心根に、思わず妻をいだき締めた。

「すまなかつた、すつかり誤解して、……そう云えば僕だつて秘密探偵社の調査員を買収していたんだ。君を刺戟したための皆んな作り話の報告

世相諷刺

近頃の娘は

老人がお好き

土岐次郎

「ア、お母さん」
「まア、びっくりした。何よ」
「この新聞御覽なさい。また親子心中があつたのよ」
「いやね」
「やつぱり、今度のも生活難からだつて」
「みんな生活難ですよ。だから貧乏は大嫌ひ」
「お金持でなくつちや、でしよう」
「だから結婚する時には、財産家を選ばなければなりません」
「それは毎度お母さんから聞かされて、よく知つてゐるわ。さつきね、お母さん、あたしちよつと、お父さんに呼ばれたの」
「あ、そうそう、禿山さんの縁談じ

書さ。いや、そればかりぢやあない、最近夜遅く歸つて來たのも、お酒に酔つて歸つたのも、計画的な苦肉の策さ」

「まア……」

二人とも、黙つてしまつた。

二人とも、胸が熱くなつた。

良人も妻も、もう一度新婚当時の活々とした、愛情の鼓動を見たかつたのだ。

「あら、綺麗なお月さまよ。ホラ……」
「そう云つて二三歩早く歩きながら、月を眺める振りをして、葉子はそつと涙を拭いた。」
「葉子！」



彼は妻の涙を知ると、家まで我慢出來なかつた。物蔭に呼んで犇と乳房を両腕を圍んだ。長い接吻が薄闇の中に

息を止めて交わされた。それは新婚以來はじめて見る。新らたな愛情の表現であつた。

「やない？」
「で、お父さん」
「禿山さんがあたしと結婚したいんですつて」
「それはお母さんも聞いていますつて、禿山さん、随分御熱心なんですつて、フフ」
「あれ、悦んでるわ、この子」
「だつて、オホオホ」
「それで、お父さんは？」
「禿山さんは大変な財産家だつておつしやるの」
「そりや大変な財産家だわ」
「だから、お父さんは、あたしに結婚したらどうかつて」
「駄目です」
「あ、どうして？」
「いけません」
「お母さんは、いつもそうおつしやるじやございませんの、お金持でなくちや駄目だつて」
「お父さんは、あんなたをお嫁にやつて、禿山さんからお金を借りようとなさるんです」
「あ、政略結婚ね、だけど、お父さんの事業のためになるなら、結構じやありませんの？」
「それに、あんなお年寄り」
「あら、禿山さん、あんな、びつくりする程のお爺なの？」
「六十二ですよ」
「お父さんよりもお年寄りなのね」
「よ、よ、よ、お爺さんじやありませんか」
「のんかしら」
「に、どう御返事したの。勿論お断りしたんでしやう？」
「是非ともつて……」
「あれ、まア、呆れちやうじやありませんか」
「どうして？」
「結婚する気なの」
「そ、う、財産が山程あつて、六十のよ、お爺さんの、その上、あの方、心臓がとても、お若いんです」



肉體

浮気戦術

直木竜之介



秋田冷光(絵)



距離

「いやはあ、あかん、あかん……」

秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。

秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。

秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。

秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。

秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。秋子は醜い程に顔をしかめて耳に掌を当てて、聴えることに恐怖を持つた。

知れぬ情火の焰が燃え擴がり、四晩離れた良人の温みを求めて、細い血管の中をのたうち廻るのだつた。それは現実と幻想との無惨な争斗であり、満たされぬ女体の苦悶の図でもあつた。

二

晩婚であるだけに秋子は自分としては、沈着確実に熟慮の末最良の良人を選んだ心算である。町の染工場に勤め、今時には珍らしく夜間部に通つて経済を専攻中の達夫は、三十二才なのに額の禿上つた感じの弱々しい小さな眼と薄い唇を持つた男だつた。何時も何かを、それも近くを凝視するのではなく、遠い彼方をまさぐるような眼付きで、やゝ女性的な形の唇を一層細めて考え込む癖があつた。それが友人間に煙たがられたが、秋子には尠く共理智性に映いた。内気な良人をリードし乍ら、ふと、その考え込む横顔に薄情で残酷な油断のならぬ翳いが、その辺りに醸され漂うのを秋子は感じ始めた。

毎日の明け暮れの中に、或る渴きが次第に二人の間に索寞とした零囲氣を作り、漸く秋子は結婚生活に対する慚愧と猜疑を持つた。何時となく二人は單に寢食を共するだけに過ぎぬ、他人同志の下宿人に近い状態に迫りこまれていつた。

「お前の眼の冷ささ、言葉の刺々しさ、俺は会社で居る方がどれだけ愉しいか知れいよ。一体こりや何んてことだろう……」

「なあ……それはお前の邪推やでえ。何で俺がそんな阿呆なことを——」
これで三度目の繰返した。間延びて抑えのないだれ声である。姉の冬乃が身をよじつたらしい音がして、
「聞かへん、誰が聞くかいなあ」
突き放した言葉の中に色気が含まれてる。
「強情な女やなあ、お前の留守の間は俺が会社で泊る云うのが信用出来んか——」
絡んだ義兄の声に應えず、急に姉が投げた口調で太い溜息を吐いて、
「あんたの親父も氣の利かん。何もこんなやゝこしい時に病気で寝んでもえゝもんを……」
「そ、そら無茶や、誰が好きで畑の中へ倒れたりするかいな。まさか中風にはならんやろが……まあ何にしてもお前にはご苦労やな」
「フ、あんたには好都合なこつちやて……」
「又そんなこと云う。ほんまに阿呆やなあお前……五年も連れ添うて未だ俺

「その氣持の怖いこと知ればこそやわ」
「へへ……、こんな草臥れた男に誰が……ア、あいた痛いかな秋子に聞えるでえ、こいつ、やつたな……」
「痛い云うのに……」
聞えるもないものだ。秋子は小一時間も前から続いている姉夫婦の嫉話喧嘩を、嫌だなしに耳へ注ぎ込まれていく。うそ寒い夜の明け方に、激しく互を叩いて通り過ぎた驟雨の音で目覺めてから、すつと眠むれすにうとうとし



われる。

よ。俺達は考えよ

ろ。

——妾はもう充分考えて居りますわ。貴方位、いえ、男位

勝手なものつてないわ……

秋子はそこ迄云つて声を呑む。
(夜のいとなみに愉しみと悦びを与えて呉れない貴方——男女の喜悅は同権の筈です)

白々しい
付き
話し振り、何
が不足と仰有るの
二人は大声で罵りあう
ことはなかつた。

お前は何時迄経つても女に
ならないんだなあ。甘さも和やかさ
も、そして……

達夫はちよつと哀しげな暗い眼の色
を秋子に向け、ゆるい溜息を長く吐き
出す。

え、妾にはとてもお気に召す
ような器用な真似は出来まるん。ご不
満なら遊びにいらしたらどうですの
……

達夫はぐつと唇を噛む。薄い唇がそ
の爲に見えなくなる。余りにも冷淡な
妻の言葉に云いようのない悲しさに打
負け、激怒を超越した悲愴な絶望に襲

二年間の夫婦生活の歴史を秘めた夜具
が、むうつと籠つた濕氣と共に展べら
れる。だが、秋子は無表情だ。

——男が何を求めているか？、それ
がお前に理解出来ないことは悲しいこ
とだ……

(そうよ、その儘の台詞を妾も云える
わ)

秋子は寝返りして眼をむく。その眼
を脊中へ移した心算で男の態度を監視
している。肉体的な妥協は眞つ平だと
思う。シヤワアで済ませる良人と、薬
湯で温くもりにい自分との相違を考え
る。脊中に、シヤワアお断りの札を貼
付けた氣で緊張し、男の手が肩に触れ
るのを、その癖、躰一杯で期待してい
るのだ。

眼がすつかり牙を渡り、夜更の静け
さが一層秋子の心を騒がせる。何物も
動く氣配はなく時が過ぎてゆく。秋子
は焦悴の裡に不安に馳られ、頭を上げ
て良人の寢息を窺う。狸寝入りだと嵩
をくつていた独り相撲が莫迦らし
い。すでに良人は完全な睡りにおち、
小高く伸びた鼻筋から規則的な寢息が
洩れる。心持ち眉をしかめた儘の寢貌
に、秋子は不意に嗚咽のこみ上げるの
を感じて狼狽する。独り取残された俊
寛の叫び声を、心の奥底の方で聴いて
いる。秋の夜長の寂しさ哀しさが身を
さいなむ。

——今日は遅くなる……かも知れん
黙々と朝食を終り、朝刊から眼を上
げて達夫は短かく云う。家庭の良人の
顔ではなく、会社の会計課員の面構え

と秋子には見える。

——どうぞ——妾も一週間程母の処
へ歸ります。そして、ゆつくり考えま
すわ。

歸らせて下さい、とは云わない。帰
る権利を持つてゐる口吻で、昨夜遂
に眠れなかつた眼を血走らせてそう云
つて了う。平然とした態度で良人を見
詰める。だが疊についた小膝が細かく
慄えて仕方がない。相手の出様を待ち
ながら唾をのみこむ。よし、と良人が
云えば大變である。夜もすがら考え抜
いた筈の、自分の行く末、身の振方の
結末は、今憶い返すと子供のように、
良人と云う柱の周りをくるくると回り
舞つていただけだと氣付く。母の処へ
とは出任せの思い付きだつた。

達夫は恰で予期してゐたかのように
そうかい……と無表情で応えて立上つ
て了う。

勿論郷里の母の元へは帰れず、何喰
わぬ顔で姉の家泊り込んだ。良人が
一週間東京へ出張したと誇らかな嘘を
並べて、独りでは物騒だからと云訳を
添える

溫和で愛想のいゝ義兄は秋子を歓迎
して呉れた。しかし姉の冬乃は明らか
に迷惑面を秋子に示し、義兄と秋子だ
けの時間を作らないように、並々なら
ぬ警戒振りを見せた。秋子は、何だ彼
だと自分に氣を使つて呉れる義兄の態
度と、焦々しながら妹を看視する姉の
眼の色に、滑稽な茶番の舞台へ登場し
た自分の立場を氣付いた。だがそれ以
上に秋子の心は、達夫から離別した日
から漠然とした不安と、忘れ物でもし

てきたような、取止めのない脱落感が大きく支配していた。

昨夜のことだ。夕食が終り秋子は頭痛を感じた。風呂へ行こうと誘った姉の声に黙つて首を振つた。姉は急に眼を輝やかせて、本当かな？と云う風に秋子を見た。生理の爲と解して呉れたらしい。うん……姉の素振りに秋子はうなずいて見せた。実は予定日まで一週間もある。だが秋子は姉の眼に反撥をふと感じた。危険なひとときを義兄と持つことに、スリルめいた期待が燃えてきた。

姉が割切れぬ顔で下駄を鳴らして出て行き、五分も経たぬうちに、義兄は秋子の前へにやにや笑い乍ら近付いてきた。良人とは反対に物柔らかで、慣れなれしい態度から、何んとか淫らかなものが発散している。秋子は瞬間、羞恥よりも戦慄を覚えた。舐めるような低い、その癖女心をぐいと捉える撫ぜ声で、子供を生まないと女は何時迄も若くてスバスベした肌を……突然手を掴まれ、ハツとする間に引寄せられ腰を抱かれた。他愛もなく義兄の膝の上に崩れ、劇しい力で抱きすくめられていた。抵抗しようとする意識が頭に走るよりも早く、すでに義兄の唇がぐいと迫つた。何と云う素早さだろうかと、混乱した狼狽の中で秋子は驚嘆した。良人の場合の尺度では測り知れない美事な早業である。

ぬるりと触感を唇に感じた時、頭髮がふうつと逆立つた気がした。人妻だと云う虞れが峻烈な罪悪感を自覚させ愕然とした衝動に秋子は、墜ち込んだ

男の胸と腕の谷間から跳ね起きた。右腕でぐしぐし唇をこすり、ベツと疊の上に唾を吐き散らした。荒い呼吸が秋子の言葉を遮り、逆上した頭脳が燃え上つて何の思考力すらなかつた。只よるめき眼が眩み、重大な過失を犯した迂闊な、そして怠惰な自分の女の奥に住む、女の煩悩の醜さ卑しさに惧れを抱いた。義兄を憎むよりも秋子は、自らスリルを求めんとした、女の意欲を恥じた。渴いた女の心が、今何を要求し何を吸込もうとしているかを知つた。

義兄は照れた顔で首を唾え、秋子は表の間で床を展べ、その上に呆んやり坐つた時、姉がせかせかと溝板を踏んで戻つてきた。

三

「秋子はん、あいつの云うたことに氣にしないはんや。へへ、けつたいな女やで……」

下関行の列車の窓から、すざまじい嫉妬の色を漲らせて、えへか、女は身持ちが大事やよつて……そう繰り返した姉の云外な響が、耳に傷をつけていた。秋晴れの午後の梅田近辺は、若いアベツクが澄渡つた粧いを誇らしげに振り撒いていた。義兄の訛りの多い言葉が姉の声とだぶついて秋子を郷愁に誘う。他人の眸まじさを見て郷愁を想う女の悲しさ、女の、妾の迎らうとする途は何処にあるのか……家庭を捨てる良人を棄て去つた妻の望郷が目指すものは……妾はエトランゼだ。

相乗りの輪タクに揺られ、それを知

りつゝも秋子には義兄と行動を共にしているやうな実感が無い。脳裡の片隅で、賣られた女が固い無表情な姿勢で車窓にもたれてゐる一齣の、古い臙ろげな映画のワンカットが浮んだ。

家に這入ると義兄は俄かに活氣すいて、こまめに立廻り酒の支度をする。時折り台所から首を延して座敷の眞ん中へ、崩れた人形のように坐つてゐる秋子へ笑いかけることを忘れない。その眼に秋子は良人に見ない男の情慾の炎の色を知る。何も彼も秋子には不思議だ。水のような良人と風の中の炎のやうな義兄の對象が、秋子を好奇の世界へいざなうのだつた。カーテンに遮断された陽が、午後の室に夜の幻影と零團氣を作り、口あたりの甘い酒が咽喉を流れ落ちると、知性の池は次第に熱を帯び、眼元に駭蕩たる情緒が湧き上つてくる。

頭が急に重くなつた——或いは押倒されたのだろうか。妾の心を誰かがいぢつてゐる。遠い感覚なのだ。いけないわ……防ぐ手が途中で止められ、誰かの指先が妾の心を尙更ら巧妙に酔わせてゆく。

喩よう

もない慚愧が秋子の身を締めつける。麻痺せんとする知性が、ハツと覚醒した。

美粧院を出ると街は夜の氣配だつた良人の求めてゐるものを與えずして自分だけが与えられようとする図太さが恥かしい。うんと甘えてやろう……そして要求しよう。

秋子は次第に小走りになる。家との距離が近づくことは、自分と良人との距離のそれである。肉体の距離……零なつてこそ夫婦のいとなみは確立されるのだ。

もう小半丁、秋子は遂に走り出した(了)



思春期の乙女

平井京助

一、ラブ・シーン

それは、もうとつとくに都会の封切館でみた映画なので、わたしは、退屈まぎれに、ときどき良子の横顔を盗視していた。

おさげに結つた髪を胸に垂らしているの、頬の半分は隠れてみえないが不健康に蒼白い顔は、珍らしく、ぽつと汗ばんで光つていて、それに、スクリーンの反射が、ちらちら映つていた。

換気設備のない閉めきつた小屋の中は、暑苦しくて堪らないのに、彼女はまるでお客にいつた時のように、膝も崩さずに、きちんと座つていた。たぶん、わたしに遠慮しているのだろう。

その窮屈そうに張りきつた浴衣の膝をみていると、わたしは、ふと、先日のことを思い出した。

それは、つい数日前のことだが、わたしは、いつものように絵具箱をもつて、終日野原へ写生に出かけていて、夕方、家へ帰つてくると、ちょうど、良子が、蹴足になつて、裾を高くからげ、甲斐がいしく植込に水を撒いていた。

わたしは、彼女の家の二階に起居しているの、彼女の、こんな姿は始終見なれていた。それに、寝相の悪い彼女は、よく大つびらに、白い四肢を布団からはみ出させて、晝寝をしていた十六にしては完全すぎるほど立派なおんなになりきつていたが、なんといつても、まだ無邪気なものだと、彼女の母親と一緒に凝視めながら微笑んでみていたし、凝視められていたことを知つても、彼女は平気であつた。

それなのに、洗足で水を撒いていた彼女が、わたしの姿に気がつくのと、どうしたのか急に、あつと叫んで、慌てて裾を押し下げようとあせりながら、両手で脛を掩い隠した。

そして、今にも泣き出しそうな、真根な顔をして、後しざりに台所へ逃げこんだのである。

それが、あんまり出しぬけだつたので、かえつて、わたしの方が面喰つたみてはいけないうものを、みたような恥かしさを感じた。

その時らしい、わたしは、良子の白い脛の記憶に、夜毎、悩まされるようになってしまった。映画は、馬鹿げたほど甘つたらい、

初戀獲得法



他愛のない洋画だつたが、しかし、どの場合も、どの場合も、実にロマンチックで美しかった。

良子は、熱心にみつめていた。まるで、映画の中に、身も心も曳入れられてしまつていようだつた。わたしは、そんな映画より、彼女の白い、汗ばんだ顔に、ちらちら動いている、色んな光線の変化の方が、はるかに美しく、楽しく感じられた。スクリーンは、相愛の男女が、始終現れ、しつこく、幾度となく接吻を交した。大膽な愛撫の場面がしきりに出てきた。

ふと、わたしは、近くで大きな溜息を聞いてびつくりした。

溜息の主は彼子であつた。それは、接吻のシーンに向つて発せられるのだとゆうことが分つた。わたしは、興味を唆られて、彼女をつくづ

く観察した。

彼女は、映画と現実を混同させてしまつて、自分が主演者になつてでもいるかのように、唇をわなわなと顫わせ、うれしいとも、苦しいともつかない、もの凄いいほどの緊張を顔に漲らせて、眼をつぶつてしまふのであつた。

圧潰されたような溜息は、恥かしくて聞いていられないくらい、大げさで忘我的なものであつた。

その夜映画館を出てからも、彼女はまるで酔拂つた人のように、ふらふらしていた。

二、くちづけ

その翌晩、わたしは妙な光景を発見した。二階で、勉強をしていたのだが階下から赤坊の、火のつくような泣声が聞こえてきたのである。

それは、良子の母親が、ひきとつて養育している、親戚の不幸な女の、私生児で、とても可愛い、赤坊であつた。

ちようど、みんな留守で、良子だけがいて、守りをしてる筈なので、どうしたのだらうかと思つて、階下に降りてみた。

階下は、がらんとして眞暗であつた。

赤坊の泣声は、良子の部屋から聞えていた。

「どうしたの？」

返事がないので、障子を開けてみた眞暗な部屋の中に、赤坊だけが寝かされてるのだらうと思つたのであつた。

ところが、月明りにすかしてみると、いいなと思つた良子が、赤坊を抱いて柱に凭れてるのを見て、わたしの入つてきたのには気がつかないらしく、映画でみた接吻の場面を、しきりに試演してゐるのだつた。

赤坊は、息が苦しいのだらう、激しくもがいて泣き叫んでゐるのに、彼女、そんなことなんかお構ひなしに、夢中になつてゐる。まるで、氣狂ひのようであつた。

わたしは、みているのがなんだか恐しくなつて、慌て、障子を閉めた。が、その音に、彼女は気がついてやめたのか、赤坊の泣声は、それつきり止んでしまつた。

その夜、わたしは、奇妙な夢をみた。なんだか、赤坊や、映画や、色んなもの、交錯した夢であつたが、どうし

たことか、わたしは、身もたえして逃がれようとしてゐる良子を、無理矢理に抱きすくめ、彼女の唇を、夢中になつて吸つていた。

彼女は、ひどく怒つて、泣き出し、髪をふり乱し、扱帯でいきなりわたしの喉を締めつけた。わたしは、その苦しさに堪えかねて、うんうん呻いてゐるときに目が覺めた。

三、夢と現実

翌朝、わたしはその夢のことなんか口外するつもりはなかつたのに、どうしたはずみか、食事を報せにきた良子に、つい、うっかりと喋つてしまつたのだ。

彼女は、黙つて聞いていた。が、それつきり、おそろしく怒つたような顔をしてくだ、考えこんでしまふ、食事のときにも俯向きがちに黙りこんだまゝ、碌々飯も食べなかつた。

そして、その日に限つて、赤坊の守りをするとどこか、近寄ろうともしなかつた。

わたしは、しまつたことをしたと後悔した。が、いまさらどうにもならなかつた。

その日は、いちに



ち外出せず、二階に閉ぢこもつていた。あんな夢の話をしたばかりに、彼女の機嫌をすっかり損ねてしまつたのだ良子にはもちろん、母親にも、なんといつてお詫びをしたものだらうかと。そればかり考へて苦しんだ。

夏休みは、まだ半分残つていたが、思ひきつて東京へ帰ろうかとも思つた。

しかし、このまゝ帰つてしまつたらこれからさき、どんな永い間悲しまなければならぬことだらう、こんなことになつてしまつた以上、そう簡単に良子が忘られるものではない、しかし相手はまだ十六の少女ではないか。

そんなことを考へながら、寢台に寝そべつていたが、そのまゝ、いつの間にか眠つたらしく、ふと、なにかの物音で目を覺ました。

誰かが電音を忍ばせて、二階へあがつてきたらしい氣配を感じたのだ。

「だれ？」

返事がないかつたが背後に人のゐるのを感じて振り向いた。

良子が立つていた。彼女は、さつきから、わたしの寢台の縁に腰をかけて、わたしの寢顔をじつとみつめていたらしい。

「どうしたの？」

「なぜ、晝寢の邪魔をしにきたの？」

「なにか用？——朝の話でまだ怒つてゐるの？——ゆるしてくれね」

「なぜ、あんなひどいこというの？」

「え？——」

「あたしが、首を締めたなんていつたでしょう」

「あれは夢の話だから——」

「あたしも夢をみたわ——」

「どういふて、良子は、眞赤な顔をして唇を噛みしめた。涙をこらえてゐるようなのだ。」

「どんな夢みたの？——」

「わたしが訊くと——」

「しらないッ」

「どういふて良子は、シーツを乱暴に掴みあげたかと思つて、それで、すつぱり顔を掩うて俯向いてしまつた。」

「わたしは、胸がドキドキしてきた。」

「良子さんッ」

「呼んでも、顔を出そうとしない。傍へいざり寄り、ヴェールを引き剥がそうとした。しかし彼女は、しつかり掴んでいて、どんなに引張つても放そうとしなかつた。」

「良子さん」

「わたしは、無性に可愛くなつて、いきなり良子を抱き寄せた。」

「ヴェールが、はらりと落ちた。良子は、陶然として眼を閉ぢ、半開きの唇が、あえいでいた。」

——完——

情痴に狂う中年女

一、疑 惑

他人の噂はあてにならぬと思いかえしてみたら、一度、確かめてみたい——いや、どうしても確かめなければと、田村信二は、会社の晝休みに家へ帰つてきた。

忘れ物をしたといえはいい。道々思つていたことを、もう一度くりかえし、思いきつて表戸に手をかけた。

内から錠がかかつている。ためしにもう一度押したが、ピクともしない。声をかければ裏から逃がすだろう。

擦硝子のはまつた格子戸は一分の隙もない。板塀をぐるりと廻り、裏戸に手をかけると、のれんを押すように、軽く、開く。

半分畑になつてゐる庭先を、爪先だつて進み、戸に手をかけてみると、そこは開かない。

引きかえそうか？——。

しかし、好奇心と憎悪のかたまりみたいになつた信二は、じつと耳を澄まして内部を窺つた。

義理の母でも母だ、その秘密を盗いて何になろう——いや、何もしらすにいまごろ、大学で、めつきり白髪のふえた頭をふつて講義をしているだろう父の、やさしい眼、——柔和な微笑——

——そのためなのだ。信二は、障子の隙間に耳をあて、呼吸をひそめた。

と、気のせいではない、息使いが——する。爛熟した四十女の、激しい慾性の息吹だ——。

信二は、始めて、恋人光子の肌を知つた夜の公園を思い出した。

大樹の暗い葉蔭、ほのかな月明りで味つた、処女の、白く、匂やかな肢体——。

光子と、早やく結婚したい、そのためもある。己れの快樂のために、子に夫に逆く淫婦奴ツくそツ！

すると、動く気配と、母の、含み笑いが、微かにした。男の、太い声が、何かいつて笑つた。絹づれの音もする。

今だツ。思わず信二は戸を叩いた、「お母さん——」

呼ばうとしたが声がかすれて——返事もない。中で、驚いて、慌てて、男と何か早口にいつてゐる——と、足音が表へ駈けた。

しまつた。と思つたが、二度目の戸を叩いていた。

「誰ツ？、どなた？」

慌てた返事だ。部屋を二三回往復している義母の姿が見えるようだ

がおおツ、表戸が、開いて、閉つた。

小走りに去る行く男の姿が見える。



「お母さん」

まるで、悪いことをしたような、駈け出したような、胸が波立つて、信二は

「ぼ、ぼくです」

慌てて、たたきを歩く下駄の音がして

「信二かえ？——いまあけるから——頭が痛くつて、ちよつと——」

錠を外す音がして

「変な押売りでもくるといけないから——と思つて——」

がラ——と障子が開き、義母、満枝

の、大きな眼が、キツと信二をみつめ

「どうしたんだえ？——いまごろ」

母の眼をさけて、低く、

「ぼく、忘れものを——したんです」

「なにを？」

「書、書類です——」

義母は返事をしない、じろ——とみ

ている。

信二は、さけるようにして義母の傍を通るとき、いまの痴態を連想させるむうつとした女の体臭を生温く感じて逃げるように奥へ——。

二階へ上つて、本箱の傍に、しばらく立ちつくして、動悸を鎮めようと、あせりながら、書類を探しているらしく装い、ひきだしを開け閉めしてからやがて、階下へ——度胸をすえて、しづかに、降りた。

たしかに、髪が乱れて、頸筋が汗ばんでいた——。

義母は、片膝を立てて、長火鉢に肘をつき、掌に額をのせていたが、降りてきた信二をチラツとみたり、何もいわない。

少し剥げた、薄桃色の長襦袢の裾が乱れ、白い脚のぞいて——信二は、いつもなら、そんなことはないのだが今日は、それが、なまめかしく感じ、ぐつたりしている母の姿に、

は夫と女生きて

笠置良夫

沖研之画

この、狸婆奴ツ！
ほんとの親なら、たとえ、こうでも
いやらしい悪感を覚えないが——そこ
が継母だ。

信二は、部屋の中程まできて立止り
思いきつて

「お母さん、誰か、いましたね？」
ぎよつと振りむいた義母の顔、裏戸
を開けたときと同じ大きな眼で

「え？」
濡れた、黒い瞳の奥に、狼狽の色を
漂わせ

「変なこというもんじやない」
「いいえ、誰か、いました。表戸が、
開いた音も、家から出た男の姿も見え
ました——」

すうつと度胸が据つてきた。つか
くと義母の前へにじり寄り、信二は
鋭く

「母さんッ」

予期していたものの義母は、瞳も、
頬も、恐怖にひきつらせ、額に、あて
ていた手で、火箸を握つたが、少し震
えている。

「僕、変な噂を聞いたんですが——ほ
んとですか？——お父さんの留守中
に、いいのですか？——」

「どうしたんだえ、おまえ、たとえ、
いま、誰かきていたとしても——。あ

たしも、こんな年で、なにも、お父さ
んの名誉にかかわるような、変な真似
ができるものかね、お母さんわね、は

やく、おまえが身を固めてくれるよう
にと、そればつかし思つて——そりや

世間ぢや、義理の母だとか、なんだと
か、嫌な噂をたててくれるけれど、いいたい

人はいわしてお
くがいい、いち
いち構つていち
や、躰がいくつ
あつても足りや
しない、ね、ど
んなことを聞い
てきたか知らな
いけど——」

「僕も、噂を、
真に受けてるわ
けぢやないです
——しかし、火
のない所に煙は

「それが立つも
のだよ、お母さ
んは、いままで
おまえに、継母
みたい、ひどい
仕打ちをしたか
え？」

「それや——しかし——」
「したのかえ？——はつきりいつてご
らん、あたしは——あたしは——」

袖口で、眼を拭き、鼻をすすつて、
涙声で

「いちどだつて、おまえを、継子と思
つたことがあります、それに、世間
は、ふたことめに信二さんが可愛相だ
くと、それでも、あたしは、じつと

我慢してるんですよ」
「分つています、お母さんのお恩は、
忘れませんが——」

信二が七つするとき、大きな、呉服屋
の娘だつた、その頃の義母は、蔭で、



いま義母に、ご恩は忘れませんといつ
た、その言葉自体も、実母に対するも
のではないと、信二は悲しく、白々し
い気持ちになるのであつた。

二、父と子

「ね、信二さん、あたしは、どれだけ
あなたのことを——」
さつき、でるとき、いつた義母の言
葉に

「ふん、さんつけに、あなた呼ばわり
それが気に入らん——」
信二は、家を出てから、考えこみな
がら、いつの間にか、真つ直ぐに父の
いつている大学に向つて歩いていろの
に気がつき

「会社は休んでやれ、父に会つて、話
してやろう」
ポケットに入れていた手を出して、
顔を上げ、足をはやめて、アスファル
トの並木道を急いで歩いた。

煉瓦造りの、古風な、堂々とした建
物の、勝手知つた職員室へ這ると、顔
みしりの教授が、愛想よく笑顔をむけ
てくれ、机に、どつしりとかけて、莖
をくゆらしながら、傍の若い教授達と
雑談を交している父の所へすぐ告げて
くれた。

「ちよつと、話が——」
声をひそめた、信二の態度に、なに
か、普通でないものを感じて、父は、
応接間へ、信二を連れてきた。

「どうしたんだ。会社は——」

もたえる女体

「いいんです、仕事のこと、近くまで来たもんですから——お父さん、白髪が増えましたね」

母のために苦しんでいるんでしょう？　といたいい心で、信二は綺麗に分けた、つい二年前まで、黒々していた父の、髪を眺めていつた。

「はッはッ、齢だよ——で、なんだ、話つていうのは——」

「はあ——じつはお母さんのことです、ちよつと——」

「変な噂を聞いたというのか？　知つとる知つとる。おまえは、そんなことを考えずに、仕事に精を出して、いい嫁を探しておればいいんだ。どうだ、いい相手がみつかったか？　遠慮はいらんぞ」

強いて快活を装っている——。

信二は、義母が急に、憎らしく、いやらしく、こんな父の、どことが気に入らないんだと思ひ

「お父さん、ほんとに、ご存知なんですか？——」

「ひつこいぞ、信二、若いものは、ひとの噂など気にせずと、もつと朗らかに、歌でも唄つてりやいいんだ、そして、締るときは締る、くよくよするのは女と年寄だけでたくさんだ、いいか」

「でも、今日、家へ帰つたら、表も、裏も、晝日中だというのに——」

「それが、どうしたんだ」

柔和な眼尻が、一瞬、緊張して、父は、ちよつと、躰をのり出したが、すぐ思い止まり

「変なことをするもんぢやない」

「いえ、ちよつと、忘れ物をしたもんですから」

「で、お母さんは、どうしていた」

「頭が痛いって、寝ていたらいいんですが、それが——」

「言うな」

鋭い言葉ではないが、信二は、ピツタリと口を抑えられたようなショックを受け、俯向いて、じつと、握りしめた父の、血管の浮いた手をみつめ、ホロリとした。

やがて、父が

「信二、俺は、三月程前から知つとるしかし、どうにもならんのだ、俺は、毎日、夜遅くまで本ばかり讀んどう、それに、済まんとは思ふが——それに俺は、あれを満足させる力もない、親父の代から躰より頭を使う方で、最初から、あれも、不満に思つたらしい俺も人間だ、ひとなみに憎むことは知つとる。しかし、どうすればいいんだ。俺も、職務上、変な噂でもたてられれば——いや、一部の者は知つとるらしいが、黙つてくれとるだ。それなのに、わざと、こちらから知らせるようなことはしたくない——な、信二、お父さんを思つてくれる気持はよく分る、が、お母さんの身にもなつてやれ——これは、自分にもいい聞かしていいことなのだ——辛いぞ、もういつてくれるな」

逆光線の加減もあろうか、くぼんだ頬の皺が、にぶく光つた眼が、またたいて、父は、じつと俯向いている信二をみたり骨張つた自分の手をみつめたりした。

三、血の垂れた剃刀



「お母さんッ！　お父さんの留守中になにごとですッ」

信二の、神経質な顔は、怒りに蒼白く冴え、こめかみに、血管を浮かせ、キチンと座つた膝を、こぶしで叩き

「あなたは、どなたです、留守中いつも来る様ですが何の用事があるんですこの夜更けに——」

八時であつた。

「信二ッ、言葉を慎しみなさい、なんですッ、お母さんだけにならまだしも他所のお方に対して、どんなことを思つてるか知れないけれど、人を疑うもんぢやありません、おまえの、縁談のために、きてもらつたんだよ、大倉さんつて、御懇意にしていただいてるお魚屋さんの御主人だよ、わざと、おまえのために、こんな遅くまで、お話し願つてゐるのに、何事ですッ、赦りなさいッ」

今夜、父は、送別会、信二は宿直、しかし、仕事があつて遅くなるからと替つてくれたので帰つてみると、表戸は開いたが、四十がらみの小柄の、がつちりした男が、長火鉢のいつも父が座る位置に、でん、と主人面して構えていたのだ。

信二は、自制心を失つた。父のために、自分のために、と押しつけがましい母の言葉と、そちらが赦るべきを、なんということだ——と、いきりたち

「お母さんは黙つてなさいッ、大倉さんとおつしやるんですね、折角ですが僕は、既に、いい交した女性がありますから、どうか、縁談の話はやめにし、いや、くるのも、やめて、晝日中だけだと思つたら、夜中まで、母には父がありますッ」

「へッ、黙つて聞いてりやなんだ、貴様、青二才のくせにつべこべと、俺がいつたにどうしたんだ、奥さんは、大事なお得意だから、貴様のような、やろと、なあと、奥さんから頼まれて、御相談に上つたんだ」

筋肉質の締つた躰、浅黒いキリツとした顔、唇、その唇を食いしぱり、強く、握りしめた鉄瓶を、投げつけそうな勢いで

「この大馬鹿野郎奴ッ」

「なにッ、」

母も蒼白になり、血の気のひいた唇をふるわせ

「これッ、信二ッ、信二ッたら」

片膝をたて、それに腕を突つぱり、勢い立上ろうとする信二の、その腕に両手でしがみつぎ、裾を、髪を乱し「いけませんッ、お座りなさいッ」「嫌ですッ、こ、この泥棒猫奴ッ」「なんでえ、生白い面しやがつて、パシ助でもひつかけてやがるだらう、貴様のようになまくら野郎に、頼まれたつて、もう俺の娘はやれねえッ」



男は、歯切れのよい啖呵に、自分ながら、惚れくんと、にやりとして

「そろ／＼おみこしを上げようか」

「大倉さん、それでは、あんまりー」
舐の緊張を少し柔らげた信二に、気を許し、手を離して、その手を伸ばし引き止めながら、
「まゝお掛け下さいませ、これッ、信二ッあやまりなさいッ」

「嫌ですッ」

「いいですよ、奥さん、わつしや、気狂いの相手は眞つ平ですからな、ぢやご免下さい」

どうだ、こういう啖呵は、ちよつと切れめえといったげに、大倉は顔をほころばせ、垂れた両手を握りながら、

膝を屈めて、ひよい／＼と信二のうしろを廻り、舌打ちして、行きかけると痛筋を、ピクシと震わせ、齒を喰いしぱり、つか／＼と長火鉢へ寄つた信二荒々しく、ひきだしを抜き、何か掴んだ。と

「待てッ」

「おや？」と腰を屈めて信二をみていた大倉の胸元へ、檻を破つた豹のようにな、さつと飛びこんだ。高く上げだ右手が、大きく半円を描いて大倉の腹の辺りへ流星のようにチカツとひらめいた。

「うーわあーッ」
獣のような鋭い叫びが起つて、屈んでいた大倉の舐が、大きくのけぞり、それに、信二が、しがみついたのしかかり、ドサツと大きな音をたて、折重つて倒れた。

「ひえーッ」ともなるともつかぬ叫びをあげる母が、大倉の上にのしかかつた信二の舐に飛びつき

「信二いッ」

と信二の右手にしがみついて、裾をはだけ、足を突つ張り必死の力で、ひつ張つた余力で後へ、どさツと引つくりかえつた。その上へ、信二が、仰向けに、血の垂れた剃刀を高く上げ、握りしめた、手も、鼠色の服の肘まで、べつとり血を浴びて――。
大倉は、けもののように吠えて、腹を抑え、着物も、疊も、血に染めながらのたちち廻つた。

「ひ、ひとごろしいッ――」

でん、とのつかつた信二を、必死に拂いのけて、母は、死にももの狂いの大倉に、しがみつ

き

「大倉さんあんッ」

かばつと跳ね起きた信二は、ダダダッ――と、夢中で、表へ飛び出した。

四、血ッ血だあ！

信二の心は動揺していたけれど、湊町の、四つ角のポストの傍にある魚屋と、光子がいつた言葉を覚えていたらしく、いつの間にか、街燈のボツリ／＼としかない暗い、ひつそりした四つ角にきていた。

ポストがある。ここだ。と傍の家を仰ぐと、大きな看板に、魚傳、と書いてあるのが、ぼんやり見える。

締めきつた入口の柱に、へばりついて表札を覗くと

ああ、大倉傳三と書いてあるのだ。「しまつたッ大倉？ 大倉といつぞああッ」

殺した時も、逃げたときも、無我夢中だつたが、いま、始めて、天地がぐる／＼と廻轉したような、大きな衝撃を感じた。

おおッ！ こともあろうに、あの可愛い、光子の親父を殺すとは――。

ど、ど、どうすれば、いいんだッ――どうすれば――。

刑事、手錠、薄暗い牢舎、よれ／＼の赤い着物、編傘、刑場――。

おおッ、死、死刑だッ！ た、助けてくれッ――。

咽喉をかきむしり、髪を引きちぎらんばかりに掴み、恐怖に思いきり、口を開けて身震いしたかと思ふと、へな／＼と冷めた大地にしやがみこみ、

うおう、うおうと吠えるように、声を殺して、泣いた。

なんだらう？――。



かしたツ、お、お父さん
をツ——」
ピッタリと、素早やく戸
を締め、門をかけて、光

遅くなつたら締めておいてくれと、子が

夕方、急いで出ていつたまま、十一時「えッ？」

になるのに、まだ歸つてこない父を、振り向いて、信二の、ガタ／＼震え

なぜか、不安な氣持で待つていた光子、ている、血だらけの手を、眼を、蒼白

は、表の方に、寢音がして、家の前でな顔を、みると

止つた氣配を感じ、まだ寢ないで讀ん「きやッ——」

でいた雑誌を投げ出し、表戸の傍まで眼を剥き、わな／＼と、震えて、手

そつと忍び寄つて、聞き耳をたてた。を、握り締め

人の泣いてゐるらしい声が、表戸一枚「ど、どうしたのよッ——」

隔てて、あり／＼と、激しい呼吸の音「い、いま、君のお父さんを、こ、殺

と共に聞こえてきたので、ぎよツとしして、きたんだッ!!」

て立竦んでゐると、肩で、大きく呼吸を吐き、血だらけ

「光子ッ、光子さんッ、ゆ、ゆるしての手で顔を掩つて

くれッ——」「ゆ、許してくれッ——光子さんッ!!」

自分の名を呼んでゐるらしい。誰だ信二は、また、吠えるように泣きな

かう? いま頃、泣きながら——。がら、地面へ崩折れてしまつた。

る嫌な予感が、さつと、光子の胸を戦光子は、一瞬、びたりと心臓が止ま

かせた。り、全身が、激しく、痙攣した。かと思ふと、すうつと眼光が眞暗になつて

「どなた?——」深い／＼谷底へ墜ちてゆくように感じ何も分らなくなつてしまつた。

と、泣声がびたりと止んだ。

「どなた?——」

「あッ! 光、光子さんッ—— ぼ、ぼく

「す、信二、信二ですッ」

であらッ、信二さんッ」

「慌てて門を外し、ガラリと開けて

「信二さんッ」

す光子さんッ」

すつと立上つた信二に

「どうしたのよ? 信二さん、お這入り

なさい」

信二は、飛び込むなり

「光子さんッ、た、大変なことをしで

泰西珍談

寢台の下から這い出した男

氣の荒い、怒りつぽい亭主を持つ女があつた。

亭主が留守の或る日、間夫と一緒に

に居ると、急に亭主が旅から歸つて

來たが、あわて、男を寢台の下へ隠

すだけのひまはあつた。

どうしたら家の外へ出せるか、ま

るで見当もつかないし、その隙もな

かつたので、隠れ場所をそのまゝに

して置いた。

不安で心配でたまらなくなつて、

女は一寸向いの家へ行つて、そのこ

お内儀さんに事情を打ち明けた。

するとお内儀さんの言うのには、

「安心して家へお歸りなさい。万事

あたしがうまくやつて、いゝ人は必

ず救い出してあげますよ。心配なん

ぞ、およしなさい」

暫くすると、お内儀さんは、一寸

訪ねて來たような振りをして、女の

家にやつて來た。

丁度晩飯の用意が出来ていたから

お一つ如何と招待した。女の亭主の

前に坐り、お内儀さんは寢台と向い

合わせになつた。食べながらお内儀

さんが話を始めて、女の計略をいく

つもしやべつたが、寢台の下の男に

も、一々よく聞えに。

そのうちに、こんな例を話した。

「或る女に、大変仲のいゝ人があり

ました。幸い、訪ねて來てゐる丁度最中、だし

ぬけに亭主が歸つて來ました。うま

い隠れ場所はないかと見廻すと、寢

台の下より外にはありません。そこ

で女は暫く辛抱して下さいと言つて

其処へ隠して、御亭主が部屋へ入る

と、びつたり横に坐つて、おいしい

物を食べさせたり、自分が踊つて見

せたりしました。色々ふざけて、面

白いことをして見せるうち、ちよい

と布を取つて、御亭主の眼かくしを

して、いゝ人の方へは、さあ逃げる

と合図しましたが、うまく逃げおお

せたとゆうお話」

これを聞いて夫婦も笑つた。女は

非常に面白がつて、布で亭主に眼か

くしをして、さて言うのには

「こつち計略で、今のお話のいゝ

人は、御亭主の眼をのがれたのね」

寢台の下は男は、このひまにと思つ

て、這い出して、女たちが声を合せ

て、面白そうな高笑いをする間に、

うまく部屋から出て行つた。計略に

乗せられた亭主は、何にも氣が付か

ないで、一緒になつて、人が好きそ

うに笑つた。

よろ／＼と、表戸によりかかり、じつと、光子の血の気の退いた、石像のような顔をみつめてみると、やがて、熱い涙が、ボロボロと頬を傳つて、流れ落ちた。

それは、甘い、想い出の涙であつた。

始めて、光子に、恋を打ち開けたときの、始めて、接吻したときの、涙に似ていた。

輪廓のはつきりした、白い歯をチラツと覗かせた小さな唇、豊かな頬、美しい眉の下に眠っている眼、――。

信二は、そつと、頬すりしてみた。白粉と、髪油と、女の匂いが、甘つたる／＼、胸をうづかせる。

「光子ツ――おおツ！、いとし／＼光子ツ！ 死んだつて、離すものか、死んだつて――」

信二は、光子の、柔い胴を、力一杯抱き締め、唇を、頬を、頬を、気狂いのように吸つた。

「おや？ 変な匂いがする？ 生臭い、舌で、唇を舐め、光子から顔を離し、みると

血ツ、血だツ！

眞つ白な、光子の、頬に、額に、血が、血がついている。

自分の掌をみた。

「うわあッ！」

血だらけだツ！ 掌も、袖口も、肢まで、赤黒く、こつてりした液体が、べつとりと半乾きに、こびりついているのだ。

「逃げろツ！」
どこでもいい、みつかつたら最後

だ。

光子を背負つて、逃げるのだ。

信二は、やつと、餅細工のように、ぐ／＼の光子を背にする／＼、戸を開けて、表へ出た。幸い、人影もない、薄暗い夜道だ。

どこへゆこう――山でも、川でも、線路でもいい、静かに、死ねるところだつたなら――。

五、朝風の唄

信二は、がむしや／＼な力で、背負つてきた光子を降ろすと

「光、光子さんツ！」
肩を揺つて絶叫した。

さら／＼光つている田圃に、蛙が鳴いて、湖の晶は、静かな明るい月夜であつた。

「あッ！ 信二さんツ」

光子は、ハツと正氣づいて、大きな眼を開いた。キョロ／＼として、激しく泣き出し、かばツと、信二にしがみついていた。

信二は、氣狂いのように、光子をかき抱いた。

そして、二人は、おい／＼と、いつまでも泣き続けた。

「もう――と／＼かえしがつかない――」

信二は、この、光子の肉体も、可愛いい眼元も、唇も、永遠に、かうしてしつかりと手に触れることもできなくなるのかと思うと、急に、死が、怖しくなつた。

ああッ！ 嫌だツ！、死にたくない

死にたくない。
「光子さんツ！ 僕は、僕は、どうした

らしいんだツ！」

信二は、熱い涙を流して叫んだ。

光子は、しいんと瞳を据えた。そして突然、激しい口調でいつた。

「馬鹿ッ！ 信二さんの馬鹿ッ！――あなたのお父さんは、あなたのことも、すつかり知つて――あたしが話したのお父さんは、いいひと、とつてもいいひとよ、怒つたりなんかしないで、惚れ合つたふたりなら、こんな結構な話はないと、いづれ、あなたのお母さんに、話にゆくつていつたのよ、それなのに――それなのに、あなたは――あッ――」

光子は、氣がふれたように、肩を震わせて泣いた。

信二は、愕然とした。

血の氣が、さつと退いて、全身が寒気がち／＼と、止めどなく震えた。

「あ、ああ――そ、そうだったのか！ 頭を抱え、からだを揺り、もたえ泣いた。

薄墨色の連山は、こういう二人の悲しみなんか知らぬげに、かすかに、かすかに、明るく、夜明けの、清涼な、大氣の中に、生々／＼と姿を躍／＼かし始めた。

柔い微風が、湖面に、叢に、そよ／＼と、夜の歌をかなでた。

「あらッ、誰か、誰かくるわッ、警察の人ぢやないかしら？――あ、走つて、走つてくるわ」

信二は、ドキリとして顔をもたげた。

「おおいッ――信二ッ――」



◆二人妻

「先生、すみません、うちのが産気づきましたんで、至急お越し願いたいんですが……」
「ええ？ 奥様は先月御出産なさつたばかりじゃございませんか？」
「それがその、実は別の方の……」

◆誰か夢なき

妻「あなたつたら、昨夜夜半に、おいッ、こらッ！ なんて大きな声で寝言を仰言つたわね」
夫「ねえ、せめて夢の中で位、俺の自由と権利を認めて呉れよ」

◆赤と黒

「君の個展、仲々素晴らしい景氣じゃないか。全部賣約済の赤札だぜ。待望の黒字時代が来たわけだね」
「それがね、さつき税務署が来て、差し押えて行つたんだよ」

◆暗夜行路

「僕は昨夜、二度も彼女を怒らして仕舞つて弱つたよ」

奇譚百話



「ああッーお父さんだ、お父さんあんッー」
信二は、十年ぶりで始めて会ったかのように、懐しさと、嬉しさに、震え戦きながら、乳を求める幼児のように両手を高くあげて、一散に駆け出した。涙が、朝露のように頬を傳つて飛び散のた。
光子も、さつと、立上り、信二の後を追つかけた。
二人の、姿が、衣服が、朝風になびいて、ひら／＼と、ひらめいた。
「おッー 信二ッー 信二ッー い生きていたかッー」
父は、白髪まじりの髪を、乱し、呼吸を乱し、とぎれ／＼に、嬉しそうに叫んで近付いてきた。
「お、お父さんッー」
信二は、子供ののように、胸元へ、しがみついて、おい／＼と顔をあげて泣いた。
「心配したぞッ、おまえは、人殺しをし

したと思つて、きつと、自殺すると思ひ、大急ぎで駆けてきたんだ」
父は、息子の、いたづら盛りの頃を思い出して、優しく、みつめ、そういつて、微笑した。喉が真つ赤であつた光子は、肩であえぎ、大きな瞳を、はつちり開けて、信二の、父の、上品な老顔を、じつとみつめ、泣きながら立ちつくしていた。
「ああ——よかつた、じつはな、信二おまえが殺したと思つた男は、近所のならず者でひどい奴だつたんぢや光子さんの、お父さんの名前をかたつて、満枝を——満枝も、危く、間違ひを起すところだつたといつとつたが——もういいよ、俺は許そう、俺にも責任があるんだ——それに、満枝も、後悔しとるらしいから——」
「ぢや、お父さん、あの男は死んだんぢやないんですか？」
「あんな男、殺しても死ぬような奴か前科何犯というお尋ね者なんだ、今頃

当置場で喰つとるだろう」
光子が、おづ／＼と、でも、嬉しうに、
「あの——あたしの、お父さんは——」
「あ、大倉さんのお嬢さんでしょう、お父さんは、よく、基会所で会いますよ、昨夜も途中で会いました、今夜は面白い相手で、夜通しになるかも知れんと、如何にも、うれしそうに行きましたよ。今頃は何も知らずに、パチ／＼やつてらつしやるでしようよ。」
「まあ——困つたものね、お父さんに、それに、お父さんが、殺されたと聞いて、私も転倒して、信二につれられて、こんな処へ、」
「いや承知して、いますよ、信二との約束事も、もう心配せんでもよろしい私の方から御願ひしますよハハハ」
光子は顔、赫らめて、信二を見る。
光子は、晴れやかに笑つた。三人の笑声は、朝風を縫つて、湖面に響き渡つた。
——終——

六十話 チャアタレー夫

人の戀人以上

或る會社員の話

「なーんだ。大したことはないぢやないの。」
僕がやつと手に入れた「チャアタレー夫人の戀人」を
「面白いから読んで見給え——」
と彼女に貸した結果どんな顔するかと思つたらこうなんだ。

「どうしてだい？」
「うん、電燈が消えた際に彼女の唇を盗んだんでね」
「それから？」
「二度目の停電の時、キッスをしなかつたんだ」

幸福の限界

「君、そんなに急いで家に歸つたつて仕様がなないぢやないか。奥様が留守だつて言うのに？」
「うん、一家の主人であると言う氣持を思ふ存分味わうことは、また格別なものだからね！」

戯れに戀はすまじ

「明日、彼氏が郊外ヘドライブに連れて行つて呉れるのよ」
「あんだ、用心しなきや駄目よ」
「大丈夫よ、あの人まだ新米で、片手で運轉が出来ないんですもの！」

「それじゃこれどうだい。將來絶對役に立つよ。」
と、些か僕は撫然としてヴァンデ、ベルデの「完全なる結婚」を読む事を奨めた。
「当り前の事書いてあるだけだわ。婦人雜誌とちつとも変りないぢやないの——」
と物足らげに彼女は呟いた。フォーム御名答——。正に当り前の事には違いないが、その当り前の事を、男——慨

して戦前派の男共は、眼の色變えて心をズキ／＼として讀むんだから、近頃の若い娘にかゝつちや、いやもう大の男型なしさ。

「ねーえ、もつと面白いのなの？」
えーい、もうこうなつたら仕方がない。僕は秘藏中の秘藏たる、例の和綴のすゝばけた本一冊持参に及んで「これならどうだい。絵入りで且面白いこと絶對請合——」

僕は新聞紙で表綴をカバーして恐る／＼差し出した。結果、彼女は三日目に本を僕にさつと突き出すと、顔色も變えず

「ウフン、ちよいと面白かつたわ。あのう……もうないの？」

ギョツ。恐れ入りました。此れだから近頃の娘はこわいと言ふんだ。

六十一話 わてほんまに

よういわんわ

或るタイピストの話

あの人がらい浮気な人もありやしな。なら、別れたらどうて？ 阿呆らしい。別れる位ならこうして苦勞しないわ。

此の間だつてそうよ。あの人の仲間が大腸カタル……え、あの人はそう云うんだけれど、外科、性病科の病院に大腸カタルも一寸怪しいわね、兎も角入院したの、見舞いだと云つて毎日日

参——。それはいゝけど、私も一度位顔出ししなくては悪いと思つて一緒に出かけたら、見舞うどころか、さつさとそのお部屋を歩き過ぎてしまふじやないの。

「まあ何しに病院へ行らしたの。お見舞いやなくて？」そう訊ねると、「阿呆らしい僕は看護婦の顔を見に」ほんまにわてよういわんわ。腹が立つて、一週間もの云わなんだら、昨夜酒々をやつてくるなり

「おい映画行かんか。三人の妾への手紙とか云うやつ。自分と同じ様に思つて、三人の妾ですつて……」

「あんた、看護婦さんへ行つたらいいやないの——。ブンとむくれるといや参つたよ、その時になつてとんでもねえ。一度検尿したその上でのたまわつたよ。バレちまあな、ガツカリしたよ。」

「まあ見るつといゝ氣持、癪だけどいつ迄怒つていても仕方ないし、え、一緒に見に入つたわ。さあ今夜こそうんといじめてやろう思つてたら——僕どうしても今夜十時に帰らねばならん。と云つて御堂筋で別れのキツスしたわ。あつさり貴女らしくもないつて？……いゝえね、別れたのは夜中の一時……あら、恥かゝさないでよう。」

六十二話 ジェーン 颯風

或る青年は語る

女なんて結婚した当時だけだね、いゝのは——
我つく／＼あやまてりさ
僕の女房、ホレ君も知つ

もつと面白いのなの？



……あいつだ。そりや通い

中だつた。とてめ陥落した時は俺も夢

「ジェーンのヒステリーには閉口するよ。この間だつてそうだ。心斎橋歩いて見たいと誘うから、溢々ついていったんだが、フト前を木匠久美子そつくりの性的魅力の横溢した娘が歩いて行く。その又スタイルのピツチリ身についた事。女房が——まあ、綺麗ですわねえ。つて云うもんだから、僕ついうつかりと

「ウン、本当に綺麗だねえ。たまらないねあの腰のしまり工合なんか。とつい見惚れて賛成した。——途端ッ。——

「帰りましたようッ。ブン／＼。もう機嫌が悪い。帰るなり——
「そうでしょう、どうせ私なんか駄目でしょう。口惜しいツと手がつけ

S
られない。

「わあ／＼と泣き喚く。ヒステリックにひゆう／＼唸る。パシヤンと藥罐をぶつけて廻り一面水だらけにする。ドクバタガシヤンと家鳴り震動させて片ツ端から物をぶちこわす。

俺は布團をかぶつて避難し乍らつく／＼思つたよ、なるほど世界中女はどこでも同じらしいわい。だから颯風に女名前がつくわけだとね。

六十三話 横になつた

彼女

或るスポーツマンは語る

川路龍子の何とか云う映画で、女柔道家になる映画を見てから、彼女はすつかり柔道なんか凝り出してね、そつと僕を掴まえると声を秘めて

「そりや教えてもいゝさ、だけど又どうして……」
「だつて物騒ですもの、若し暴漢に襲われたら、その時……」
「フン、投げつけるつてわけかい。」
「よせばいゝのにボク、面白半分から毎日会社が退けるとアパーでドタバタやり出した。」

「階下のオバサンが驚いて、——まあ／＼何です、赤ん坊が起きるからチョツト静かにして下さいよ。バアツと覗き込んだ折も折、ボクは彼女を押え込んで締め上げていたところだからビツクリ——」

「まあ何と云う人達だらう、宵の口か

男女の睦言が聞える

「今日の若人にはあきれかえるねー」と云う始末。

ぐつと襟首をもつて引つ張ると、「チョイト、余り引つ張らないで、オッパイ飛び出しちまうじやないのー」だの。

柔道
です



内股かけて、曳いて投げ様とすれば「いやッ、そこは標つたいから——」とか、仲々註文が多い。

一ヶ月目……。

ダブルベツトの上で彼女は必々と云つたよ。

「貴方、柔道つて案外役に立つものなのね。」つて。

そう云えば、彼女特に寝技が得意なんだ。

六十三話 彼女は松茸が

お好き

或るサラリーマンの告白

秋の行樂には何処が一番よからう？

そりや君、松茸狩に限るよと誰か云い出して、その結果、秋の日曜日の一日、僕等はいそ／＼とN電鉄沿線のT山の麓に出掛けたと思ひ給え。

松茸山と云つたつて、素人の我々にそう／＼松茸が見つかるもんじやないありや君、山の番人が程々にアチョコチに埋め込んでおくんだよ。その証據に引張るとスツポリ抜ける筈だ。勿論タイピストの彼女も一緒だつた。キツスはしたけれど、それ以上進むチャンスもなく、今日こそ絶好のチャンスと、「どうです、少しは獲れましたか？」と、僕はおもむろに彼女に声を掛け

た。

「それが駄目なの。ちつとも……」

「じゃ僕も一緒に探したげよ」

つてわけで彼女の手を引つ張るとド

ン／＼奥深く這入りこんで連中から姿

をくらました。こゝぞと思ふ赤土の松

の根元をあらちこち——あつた、

未だ傘の開ききらない若いのが、ニョ

ツキリ落葉を冠つて頭を出している。

「見つかつた／＼。まあ、うれしい」

彼女は大喜びで、しなやかな指でグ

イとひつばる。ヒョイとつまみあげて

しげ／＼その形を眺めている。

「君、松茸好き？」

「えゝとつても……」

と云つてから、何を思つたのか急に

ボツと頬を染めた。フフン、万更知ら

んこともないな。ここで僕は念を押し

た。

「本当に松茸好きかい——」

もじ／＼して彼女き／＼とれぬ程の声

で、

「えゝ……好き……。だつて私の亡く

なつたあの人もそう云つて訊ねたんで

すもの。」

「えゝッ！それじや旦那さんあつたの

？」

「でも去年死んじやつた——」

成程赤くなる筈だ。ホレ川柳にもあ

るだろう。

「亡くなつた夫を想う初茸——」

六十四話 きけわがつま

の声

或る嫉妬家の話

彼の新妻は、とはうもない美貌だと

云うので有名だつた。彼はこの上もな

く妻を愛し、新妻はこよなく彼を愛し

ていた。彼は幸福そのものであつたが

妻が余りにも持てはやされる美貌の持

主である爲、フト妙な疑いを抱いた。

「僕の妻は果してボクだけに貞節な

んだらうか、と疑わしそりに訊ねるも

んだから

「チエツ、この懷疑派奴と思ひ乍ら

僕はヒソ／＼と耳打して、一つの秘策

を授けてやつた。

「うん、早速今夜そいつを実行して見

よう。」

彼は其の夜更一杯のビールを引つ掛

けて元氣づけ、途々ハンカチでマスク

し、帽子を眼深に蔽つて、僕の貸して

やつたレインコートと襟を立て、拔

き足、さし足勝手知つたる我が家の裏

口からメイツと忍び込んだ。

そいつと茶の間を覗くと、待ち草臥

れたか夕飼の御膳も其の儘に、長火鉢

に凭れてうた／＼寝をしてゐる愛妻の姿

が眼に映る。太い作り声で、

「おいッ」といきなり抱きついた。

「キヤッ」と妻は振り離すのに追いか

けて、胴に手を延す。妻の拒む手、忽

ち一大修羅場と化して、日頃の弱々し

い妻の、どこにこんな力が潜んでゐるのかと思はれる程、投げやるわ／＼。手当り次第。それを遂に押えつけて縛り上げると、

「どうだ俺のゆう事さくか」

と彼は今が一番大切な時と震え声で

とく／＼と大を相心ふ

初きのこと



叫んだ。

「近づいて御覽、舌を噛みきりますよ

出、出て行つて頂戴——」

蒼靄めても、尙且勇敢に抵抗の氣配

。

彼は靜かに台所から出て行つた。ホ

ツとした様な愛妻の顔を後にして——

半時間後、服装を整えて表をトン／＼

やつと縄を解いたらしい、この小さ

な胸を痛めた、可愛らしい小鳩は、彼

に飛びつくなり、欲びに打震えて、先

程の出来事をそつくりその儘彼に報告



した。なんと素直な妻なんだろう。と彼が一番よく知っているだけに彼の婦りをどんなに待ち兼ねたかを必々思いやつた。易々諸々彼のなすが儘になる妻を抱きしめて、彼は自らを恥じると共に、二度と疑う気になれなかつた。翌日、投げられたコーヒ茶碗、ラジオ、目覚時計をいそ／＼買いに出掛け、彼の姿は、世にも幸福そのものだった。

「さかしてやりたかつたね。妻のあの時の声を……」
と彼は何かあると口癖の様に僕に云う。彼の愛妻が知つたらどう思うだろう僕は一生彼の爲に沈黙を守つてやらねばならない。

六十五話 若きウエテル

の悩み

戦後成金の息子は語る

今迄鼻もひつかけなかつたオカッパ女学生が卒業して一二年経つと、今度は向うで相手にしてくれない。なんと二十才娘の相手の標準が平均年齢三十九才だぜ。我々二十才代の青年はまるで青二才扱いだからいやになつちまう

ホールに行つたところで俄然老いらく組がよく持てる。会社のタイピストは課長の尻許りついて廻っているボクも早く齡をとりたくなつたよ。いや

愚痴も出るよ。まあ聞いて呉れ給え。ホラ君も知つてゐる例の須美子ね。あれ程わいわい云つてキツス迄許しとき乍ら、あつさりボクから離れて行つてしまつたんだ。戀去りぬさ。そりや何しろ親父が新興成金だからボクも最初は金廻りがよかつた。それも金の切れ目が縁の切れ目、親父がチツトモ金を呉れぬ様になつたら、途端に手の平を返した様に水臭くなつて、しかも当てつけの様にあつさり結婚してしまひやがる。誰とて？ ささ、それが……それが実は当年とつて六十才のボクの親父と。二十七才の僕の養母が二十一才の彼女とは——ウー／＼あゝまゝならぬ。ボクはアドルフ自殺でもしたくなつちやつた。

暫く辛抱して待てと？……そのうちお鉢が廻つてくるつて？……仲々それどころじゃない。親父は毎日ヨヒンビン注射で益々張切り出したよ。

六十六話 ストリツ

ブガールの嘆きをよく見とき
なさいヨ エヘ……



え、近頃はもう大分馴れたわ、初めは随分恥しくて、樂屋へ飛び込んでくると、体中ボーツとはてる始末。その樂屋の方が面白いと、わざ／＼高いお金を出して舞台から見ずに、樂屋のわきから覗きにくる人。でもこれから辛いのは私達のショーバイは。だつて追々寒くなるでしょ。目も当てられぬ日もあるのよ。その上私達のショウもそろ／＼行き詰つてきたし、何か新規な目先の變つたことをしなくちゃ、裸にコーフンしなくなつたお客さんを集めることも出来やしない。そう、この間の裸女の空中綱渡りなんか、一寸スリルもあつて評判よかつたわ。小さい時分曲芸團に使われていたのが役に立つて、私流石にその時は優越感を感じた。下を見ると、ポカンと大きな口を開いたおじいちゃん連が、いゝ年をして一生懸命ヒョツとして——と見上げてゐる。勿論こんな小さいもんだけど、下にはちやんとピツタリ身についた薄いものを履いてゐる。結婚つてあんなもの

こないんだけど——。

六十七話 性教育はむづかしい

かしこい

ひらけた親爺は語る

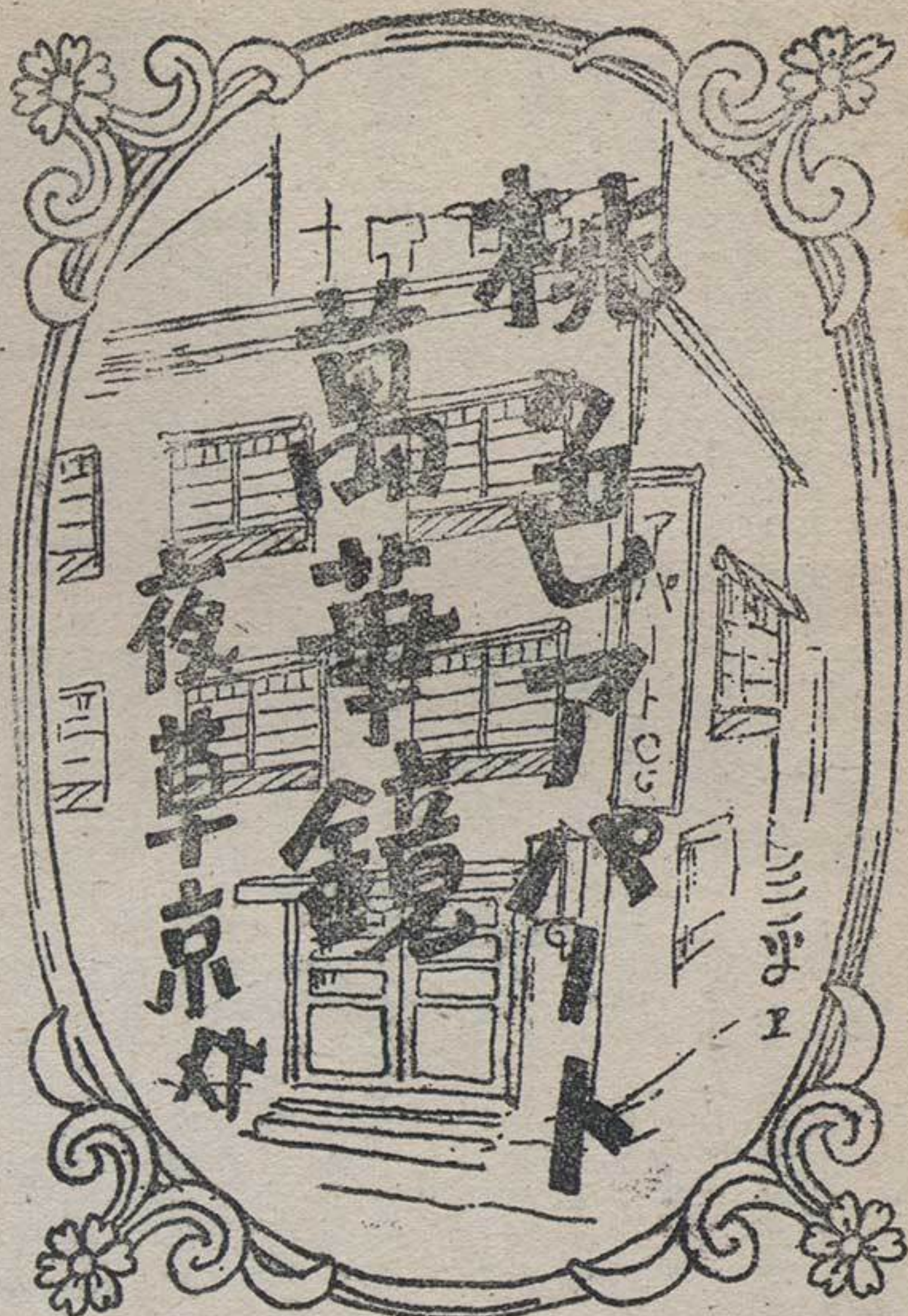
わしがこれ程開けておるのに、娘は又何と云う世間知らずなんじや。二十三にもなりおつて、しかもこんな時代じやちうのに、結婚のそも／＼何たるかを知らぬ愚か者じや。わしがやつと骨折つて嫁がせたにも拘わらず、翌朝ボンヤリ戻つてきよる。

いや全く笑い話にもならぬあきれ果てたね、以後のみせしめにと、わしは知人の経営しとる旅館に娘を連れていつてやつた。幸い新婚旅行の泊り客も一組ある由、わしはソツと足音を忍ばせて件の部屋の前迄くると、案にたがわす甚い囁きが部屋の外まで洩れる。ふすまのすき間から、娘は云われる通り暫く覗いとつた。一向に顔面に変化も来さんし恥かしがりません。フン可怪しいわい。こいつ不感症かな？と思ふ内、娘はフト振返つて「お父さん、結婚つてあんなもの？」

エーッ！いやに落付いてるわい。これでも分らんとは益々厄介な娘じや。わしはひよいと覗いて見て、こらどうじや。

なんと若い新婚夫婦が二人して一生懸命ボストンバックに土産物をつめる最中——。

あゝ、愈々厄介な娘じやて——。
(おわり)



第一話 慾を言えば

ハンドバツクで

此のアパートの居住者の中で、若し金満家として番付を作れば、先ずその筆頭に、吉野さん親娘を挙げるのに誰しも躊躇はしないであらう。

戦災で綺麗に家を焼かれ、奥さんを喪い、ホンの臨時のアパートに住いとは云え、元は島之内に、御殿のような邸宅を構えて、心齋橋筋の本店まで、超流線型のキヤデラツクに乗つて、朝夕通勤されていたと云う、関西屈指の貴金屬商なのである。従つて、親娘二人の他住居乍

ら、其の生活様式たるや、向う三軒両隣の庶民階級氏とはいささかケタが違ふのである。万事が派手で豪華を極め、其の職業愉らに、燦然たる光彩を放つた観があつた。

況してや、眼の中に入れても痛くない、一粒種の令嬢眞知子さんの日常生活と来たら、推して知るべしである。芳紀正に十九才、これぞ正札付のヴァージンであらう事は疑ふ余地もないのであるが、人は裕福になると美望のあまり、色々とあらぬ悪態をつくもので、口さがない放送局連中の間では、誰云うとはなく、聖処女眞知子さんを捉え

した。小野小町とは謂うまでもなく、女体の象徴が無い事で、女にとつて、これほど屈辱の烙印はないのだけれど、いくら親娘の間柄であるとはいえ、まさか、ソコまで詮索する訳にもゆかない。

「それは眞知子、お前に教養もあり、美しいと云うので、皆さんが褒めてゐるのだらう」と、流石に娘の手前、苦しく誤魔化して通じたものの、矢張り氣に掛る噂であつた。

無理もない、たつた一人の親娘の情愛として、嫁入前の娘の体には、万一造物の神様が一番肝心なモノをお忘れになつていた

とすれば？……。

とところがである。その吉野さんの杞憂を吹き飛ばすに充分なる実に意外な泥棒事件に遭つたのである。泥棒は既にアパートの内情に精通してゐる者らしく、貴金屬を狙つて、深夜窓から忍び込んで来たのである。

鑢て目的の金庫を開き、今正に数個の寶石類を籠括みにしようとした時、ハツと眼を覚ますや否や、吉野さんは豪氣にも組付いていつた。

「眞知子ッ。早く、早く今の中に寶石を……」

必死となつて叫ぶ父と怪漢の格闘を目前にし乍ら、適当な匿し場所と云つて、眞知子さんは咄嗟には機敏な智慧も出てこない。

と、次の瞬間、

「あッ、そうだッ」

ボンと脳裡に閃いた矢庭の智略！流石は賢明な眞知子さんである。ダイをルビーを、サファイヤを、ものゝ見事な手付で以て、遂に……が、いかにせん。初夜まで開かぬ秘密のトビラは、時價數十万円の首飾まで、カクノウし得ないのが当然である。

怪漢は首飾を奪つて逃走した「眞知子。せめて斯んな時にで



ぶっそりな話

五篇

殺人器、空氣

空氣が存在することによつて人畜は生きてゐる。その空氣を利用して殺人に用ゐられるのだから、少々理窟に合わないが、本当だから仕方がない。

先づ頸靜脈でも、上膊靜脈でもよい、それに注射器によつて、空氣をドシ／＼注入するのである。

どれだけ空氣を注入したら死ぬかは人間で實驗した人がないからわからない。家畜で實驗したものは、馬は一五〇〇、〇〇〇以上、牛は三〇〇〇、〇〇〇以上、兎は三〇〇、〇〇〇以上、兎は二〇〇、〇〇〇以上を注入しなければ死なないようである。

空氣注入による死因は、空氣が血管を栓塞して、肺、腦などの機能妨げる爲とされてゐる。

肛門から出る針

十八才の女工員があ



第二話 それでも奥

様はご存知ない

吉野眞知子嬢が、才色兼備の淑女であるのに反し、其のお隣りに住む、運輸省建設技師の肩書を持つ、堀井さんの令室賢子さんは、皮肉にも、凡の名とは縁遠い、一寸頭腦の構造がお粗末に出来ているので有名である。それかあらぬか、勘定高い毒舌夫人達の言を借りると、酒屋の小僧さんのカストリの詰め方が一寸足らぬと、途端に、「あら、チヨイト。これ堀井さんの奥さんだわよ」なあんて、怪しからぬ符牒で底翻する。堪らないのは旦那様の堀井さんである。

も、お母さんが居てくれたらなア」吉野さんは残念そうに、涙々として呟いた。宜なる哉。処女の娘があれ丈の成果を揚げたのである。子供を生んだお母さんであれば、正にハンドバック的な役割を果たしたであろう。「まあ、お父さまつたらニヤニヤ笑つて、厭ッ、しらないー」眞知子さんはボツと頬を染めて勘ねて了う。吉野さんはヤツと慈眉をひらいた笑顔であつたが、それよりもつと愉快なことは、小野小町の冠稱を呈したあの五月蠅い放送局連中が、愈々彼女がお嫁入をする日、驕然と顔を見合せて見送つていた光景である。

通の祝電が届けられて来た。「イワウトンネルゴカイツウ」何と云う穿つた電文であろう。新夫の堀井さんは、頬を火照らせて苦笑したものである。ところが、新妻の賢子さんは聊かの動搖の色もなく、「貴男。トンネルつて随分とお憎いものですつてね？」と、眉も動かさずに、シヤアとして仰言つたものである。かくて、和製オフエリヤは、文豪シェーラスピアにおもねる事なく、三百六十五日をいとも御気嫌麗しく、目下、二世を懷妊遊ばされ、近き将来に於いては、アパート随一の良妻？賢母？ぶりを發揮されるであろうと、大なる期待が寄せられているのである。

第三話 いゝえたど

讀んだだけですの

世に女性多しといえども、扱愈々美人となると、仲々そうザラにあるものではない。それが何うした奇蹟か偶然か此のアパートの中に、水準を超えた秀逸がある。詳しく身許を洗えば、元子爵綾小路ルリ子夫人が噂の女性なのだ。明眸コウシ、容姿タンレイ、ありとあらゆる麗人形容詞を以つてして、尙、其の上に朱の二

重マルでも付けねばならぬのが彼女を讃える最も適切な表現方法なのである。然も、学習院女学部から女子大英文科へと高度な素養を身に着けた彼女は、其の比いなき美貌と相俟つて、先年夫君を喪つたと云う環境は、いやが上にもアパートの異性達の関心を惹かないではない。



貞淑にして節操堅きルリ子夫人は、日常の起居容儀は元より特に、就寝時に至つては、独身の危険をヨウ護するために、貞操帯を穿いていと云う噂。ところが此処に、彼女にとつては名譽毀損も甚だしい、一大不詳事がボツ発して了つた。そも、事件の発端と云うのは、彼女の室の眞上に當る、ア

舌を噛み切る。舌を噛んでウーンとそのまゝ死んでしまふというのは芝居や昔の小説によく出て来るが果して舌を噛み切つた位でそう簡単に死ねるものだろうか。事実、舌を噛み切つた位では中々死ねないようである。キツス強盗の例でも方々で舌を噛み切られた実例があつたが、それが原因で死亡したという事は聞かない。馬を取扱う際に、よく舌を握つて口外へ出した馬が嫌つて後しざりし

パートきつての守銭奴織田さんが、虎の子の千円札五枚を縫い込んだ猿又を、窓の物干から彼女に落した事に始まる。驚愕したのは織田さんで、「失敗つた！これは一大事」とばかり、其の夜勇を鼓舞して忍び込んだことは謂うまでもない。が、深慮決行を怠つた彼は不幸にしてルリ子夫人に声を立てられ、しかも、余りの狼狽のため肝心の猿又を置忘れて了つた。



いをかけられようとした。急報に依つて馳付けて来た、警察官の現場検証が始つた。織田さんも事此処に至つては、最早詭弁を弄するより他逃げ道がなかつた。

「どうですか？奥さん。男は斯様に言つていますが、貴女は以前から親密にしておられたのですか？」

「いゝえ、それは皆んな嘘です。今はこんなに零落れていても、妾はレツキとした元子爵綾小路家の妻でございます、佛門に帰依して亡夫の霊を慰める以外、およそ異性に関する事などは、見ただけでも、聞いただけでも身顚いがするくらい厭でござい

ますわ。それなのに、そんな、そんないかがわしい事を、妾が……」

そう訴えるとルリ子夫人は泪の顔を両手で蔽つた。警察官はもつともだと云う風に頷ぎいたをして、

「それでしよう。私は貴女の言葉を信じた」

と、同情の眼をしばたき乍ら、不図、その枕許にある、ハトロン紙で擬装された一冊の本を取上げた。

途端に警察官は眼をパチクリとさせた。あゝ、なんと、それはワイセツ文書の廉を以

つて発賣禁止になつた「チャタレー夫人の恋人」なのであつた。

第四話 眼尻りにつ

ける眼薬

文盲と一概に云つても、十号室の細川さんのような、その都度々に多大の收穫を揚げる毛色の変つた文盲もある。

何日か此のアパートに這入る前、とある貸屋札を見付けた時細川さんは誰れも知らない貸屋札の謎を解いたことがある。

貸屋札と云う奴は、皆、申合せたように斜めに貼つてあるが、細川さんは斜めに貼つてある疑問は元より、先ずその紙に書かれてある「かしや」なる字が讀めないのである。

「はてな、この字は？」

腕こまぬいて首をかしげた時丁度貸屋札の斜めの角度と一緒になつた。

「あゝ、そうか」と、これで貸屋札の斜めの原理を掴んだといふ。洵に物理学ノーベル賞の値は充分にある発見である。細川さんは元は天満の魚屋さんで、一時は数人の使用人も雇い仲々繁盛した商人だつた。

今の奥さんも実はその全盛期に困つていた、堀江の名妓千代香さんなのである。綾小路ルリ子夫人が優雅な美

貌であれば、細川千代子さんは所謂、小股のきれあがつた粹な美人である。櫻色に火照つた肌をグツと襟元をすかして、ぬか袋でも啜えた湯上りの風情は、流石に花街の色香が偲べて、往年の艶姿を想い起させる、実に惚々とするいゝ女であつた。そこへもつてきて彼女は花柳氣質

とでも云うのか、それとも傳統の習慣からか、金輪際ズロースを穿かないという噂で、愈々、好色連の情慾を煽ることおびたゞしい。あばよくば文盲先生の眼をかすめて、白い手をたゞの一回でも握ろうと、あの手この手の秘策を練る。つまり、目差す相手の旦那が文盲だと云うので、それにつけ込んだ、むずかしい漢字の並べた恋文を送る。

一方、千代子さんは最愛の夫以外に心を許すようなことは絶対にない、花街出身に似合ぬ貞操堅き奥さんなのである。心配なのは細川さんで毎日のように怪しい手紙は這入つて来るが、悲しい哉意味がさつぱり解らない。業を煮やした細川さんは、或る日管理人の久津山さんの所へ行つて細かく事情を打明けたのである。

「ウーム、そりや大変だよ細川さん。皆んながキツト奥さんに懸想しているに違いない」「え？然し家内はいつも一人で化粧を」

あるが、馬は決して死なない。

卵巣から針が出る

豚の毛を食われると、その毛が胃腸壁を穿通して全身に迷入して時には皮膚に出てくるといふ事である。

嘘か本当か知らないが中國の或る地方ではこの豚の毛を殺人に利用しているという話である。

或る針医者がある場所妙齡の婦人の或る場所に打ち、それがどうしたとか尖端が折れて腹の中に入つてしまつたのである。

針医者はそのまゝ知らぬ顔をして帰つてしまつたが、その後、この婦人の卵巣に腫物が生じた。

それで腫物を摘出すべく腹を割いてみると銀針の先が卵巣の中から出て来たのである。

首を切る話

首を切ると言へば、現在では免職とかお拂い箱という意味に使われているが、昔の様に実際に人間の首を斬る

「いやお化粧ぢやあない。つまり奥さんに惚れているんだよ」「え、ッそ、それぢやあの手紙は、つけ文だつたんですかい」「先ずそう云うところだね。しつかり見張つていないと飛んだことになるよ、細川さん」その忠告以来細川さんは夜もロク／＼寝もしないで、妻の監視を続けたのである。

その結果可愛い千代子さんには指一本も触らせずに済んだが、お蔭でひどい疲れ眼になつた。周章に細川さんは早速薬屋で眼薬を買ひ、使用法を読んで見ると「めじりにつけ」と書いてあるが、どうしても一番上のめ字だけが読めないのどうしてつてよいか見当がつかない、するとその帰り途中で、

ボンと手を打つて合点するが早いか、部屋に帰るなり大声で「千代子。尻を出せ、尻を」「え？あたしのお尻をどうなさるんです」「いゝから早く尻を出すんだそうしないと俺の眼病は治らんだ」「まあ？……」

半ば呆れ返つたものの、愛する旦那様の眼が治るまじないならと、仕方なく羞かしさを堪えて、白いむつちりとしたお尻をそつとまくつて四ツん這いになつた。細川さんはその窪みの中へ匙で一杯、粉末の眼薬を盛り上げた。と其の途端に、百年の恋も醒めるかと思われ、いとも潑刺たる音楽が、ブーツとも論紛の眼薬は其の勢いのよい噴射作用に依つてアツと云う間に眼中に入つた。

「貴男ごめんなさ

い」千代子さんは消入るように云つたが細川さんは眼をパチクリとして「なる程斯うしてつけ

るのか」



フト鏡湯の暖簾を見る
と、女湯と書か
れた草書体の文字
と、今の文字と同じ
である。
「あゝそうか、女の尻につけると、眼薬の効果があらわれるんだな」

第五話 W・Cなら

向うです

鼻さん。……と云えば六号室を思い浮べ、六号室と云えばすぐに、あの巨大な鼻を連想する。実に和倉君の鼻たるや、神話の天孫降臨ならぬ、二十世紀の驚異の奇形物であつた。兎角、中学時代から伸び始めた鼻は、年に数耗すつの進度を以つて、大学の學業半ば頃には遂に十五纏程にも達しはなはだ醜惡な面相に變つて了つたのである。

尤も其の一面に於いては、天稟の利器？のため、破天荒なる恩恵に浴する場合がないではな

それなのに何うした理由からか、最近彼が原因不明？の極度の神経衰弱に罹つていると云う一寸領けぬ話であるが、実はその隣室に、つい先程引越して來た、新婚ホヤ／＼の若夫婦が居ると種を明かせば、ハ、ア、と誰しも納得する。

無理はない、朝から晩まで甘美なスキートホームの連続放送なのである。「ねえ、あなた。厭ン……バ

カ」訊くまいとして訊かすにはいられない、隣室の新妻の鼻声である。

オヤ／＼和倉君は我れを忘れて聞耳をたてた。と、同時に今日こそはと、予て密かに開けて置いた壁の穴から覗き込んだ。一寸痛いの我慢して無理矢理に巨大な鼻を突つ込むと、眼の方

もどうか、妖しい花園の一部が窺える。

あゝ神よ！ 思わず和倉君が眼を閉じた時、何うしたのか肝心の鼻が伸々ぬけない。痛さは痛し鼻水が出る。その時である突然隣室から頓狂な声が響いて來た。

「あらーお隣りの方、こゝは廁じやありませんよッ」おわり



大町新聞 クラマ夜話

○皆さんが面白い話をしろしつて仰言いますが、野暮な私にはとんと皆さんに面白がつて頂くような話は持合せておりません。しかししたつた一つ、それももうずつと先の話で、皆さんのお氣に召すかどうかしりませんが、又こんな話を皆さんが本當になさるかどうかも私は存じませんが、とにかくお慰みまでに喋らして頂きましょう

(1)

十年は一昔と申しますが、私が二十八の時のことです。それからもうかれこれ三十年近くなりす。その頃元氣だった私は、百姓の傍ら鐵砲をかついでよく山をかけまわつたもので、そして鳴やつぐみ、さては兎、狸などを追つて随分面白い日を送つていました。

所がある日、仲のよい鐵砲仲間二三人がやつてきて一つ黒熊山へ行かないかというのです。黒熊山とはその名のように熊はいませんけれど猪がよく出るので、勿論猪をとりにゆく相談に來たのです。血氣盛りの私が早速賛成したのは無論のことです。

黒熊山は皆さん御存じのようにこゝから十三里も北にある山です。汽車もなかつた時分でしたから私

たちは充分身擦えをして草鞋脚絆のいでたちで鐵砲片手に颯爽と出掛けて行つたのです。

さて目的地へつきまじりましたが時期外れのためか一向猪らしいものに出喰しません。私たちはがっかりしましたが、手ぶらで歸るのは如何にも癪だと尙も山奥へどんく入つて行きました。

さて森のはづれについて私たちは一先づ休憩することにして見晴らしのいい場所に腰を下しました。咽喉が乾いたので水が欲しくなりましたが結果一番年若な私が水をくみに行くことになりました。この邊はさすがに人も余り來ないと見えて雜草がのび放題です。その上、夜來の雨で道さえわからないうのです。私はかすかなせゝらぎをたよりに草の根などにつかまりながら一歩一歩谷間の方へおりて行きました。

(2)

やがて眼下に飛沫を上げて流れる清冽な谷川がみえました。やれ嬉しやと私は道を急ぎました。處が道は必要以上に曲りくねつていて、いつまで行つても谷川のはとりに辿りつけないのです。五十尺ほど下に水をみていながら私はじれつたくなりました。そしてとう

／＼切立つたような崖を一直線に下りることを考えました。

今でいえば随分無茶な話ですが若い私は葛の根などにつかまつてじり／＼と下りて行つたのです。所が十間ばかり降りた時でしようか、確かに大丈夫だと思つて足をかけた岩角がもろくもガクリと崩れたのです。アツと思つた時はもうおそい。足場を失つた私の体はもんどりうつて石ころと一緒に谷底へ鞠のように轉絡して行きました。

それつきり私は意識を失つてしまつたのです。それからどれ位の時間が立つたかしれませんが私はふと眼をさました。汚い家の中らしいのです。しかも私は藩圖にねかされてゐるのです。私はあわてゝ起上ろうとしましたが忽ち悲鳴を上げて倒れました。足腰が針をさしたように痛むのです。すると私の聲をきいたらしく土間にいた一人の男が上つてきました。「やあ、氣がついたか。よかつたよかつた。」

そういつて男は大きな口を開けて笑いました。男の話によると男が山からの歸り道、谷川のそばで倒れてゐる私を発見して助けて我家までつれて來たんだそうです。男は獵を専門としてつたものを麓の村へ賣つてその日を送つているとのことでした。私が黒熊山へ獵に來たことをきくと男は別段驚きませんでした。がまあ癒るまで休んで行きなさいとその顔に似ず優しく言つてくれました。私はすぐ出立するつもりで

したが体が言うことをきかず、身体が元氣になる迄この男の世話になることにしました。

男の住むこの家は極めて簡単な堀立小屋で四面を山にかこまれた窪地にありました。その上男は一匹の大きな牝猿を買つていました。小さい時に生捕つたものだそうですがよくなれて放ち飼ひにしてゐるのに逃げもせず小屋の附近をいつも歩きまわつておりました。當座は變な顔をしていましたがすぐに私とも仲よくなつてしまひました。

やがて私の体もすつかり元通りになつたので私はいよいよ男とも別れることにしました。こゝで世話になつてからもう十日目です。

所がいよいよこの家を出ることになつて男と別れの挨拶やらお禮を言つてゐると、突然妙なうなり聲を上げてあの牝猿が私のまわりをうろつき始めました。

この牝猿は一寸大げさのようですが十才位の小供程あるのです。それがこうして變なうなり聲を立て目をひからせてゐるのですからさすがの私も余りいゝ氣持ではありません。

私は氣になつて仕方がないのでこの妙な素振りの牝猿のことをたずねました。すると男はいうのは、いわゆる交尾期に入つたらしいのです。私も成程と思ひ、間もなく山を下りることになりました。けれど四五日もねていたせいか足



がふらついて仕方がないので、私は草臥れてとある辻堂に腰を下して休んでしまいました。

(3)

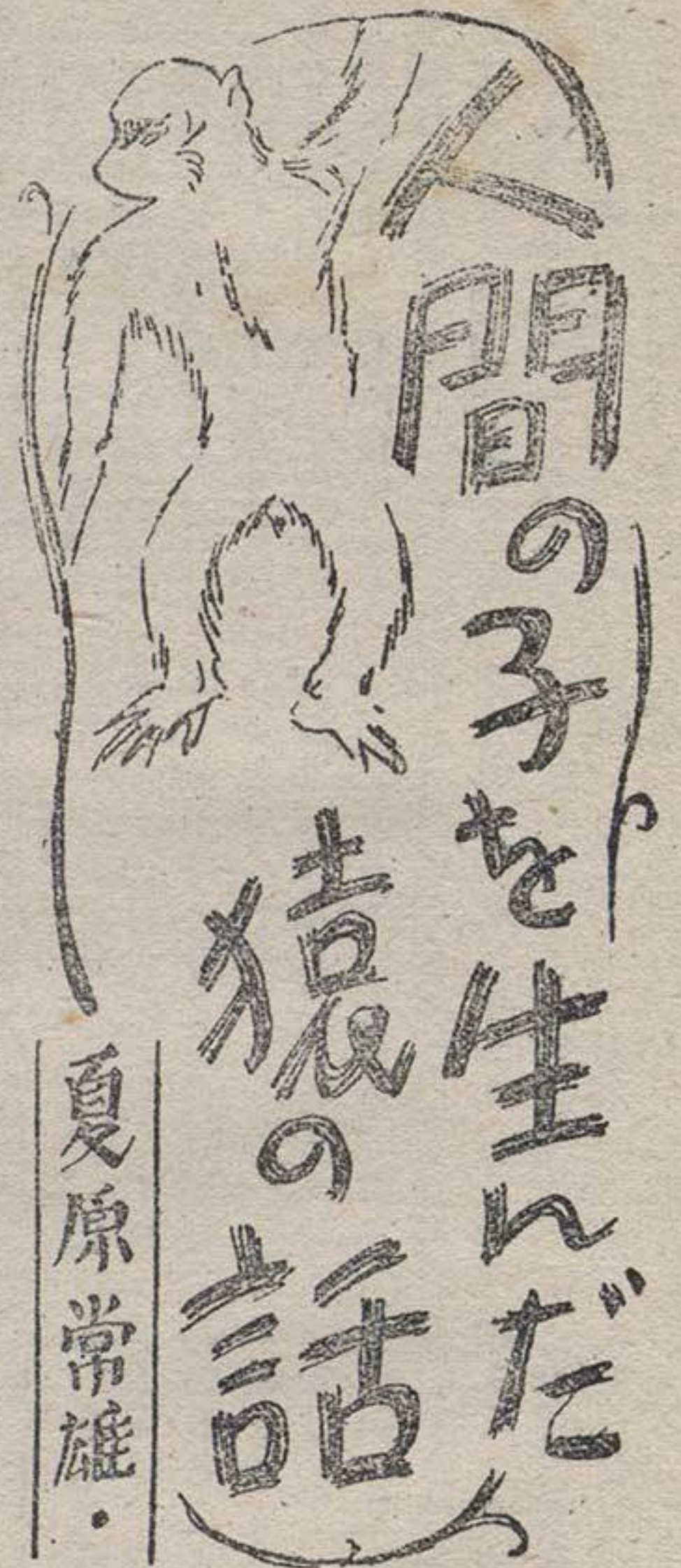
するとその時です。突然眼の前の草むらさがガサ／＼と動いたと思ふとマツと顔を出したのには紛れもないあの牝猿でした。私はその時には全く膽を冷しました。しかし牝猿はさもなくばかし氣に、じつと私の顔を見つめていたのです。元より危害を加えるような氣色もありません。私は始めて安心しておいで／＼をしました。牝猿はうれしそうに近づいて来ました。そしてしきりにその毛深い体を私の体にすりつけて、どうしていいのかわらないといった風でした。私もしきりにこの牝猿が可愛くなつて歸ることも忘れていつまでもその頭をなでていました。

と突然、私の頭には一閃ある妙な考えが浮び上りました。そしてその次の瞬間、私は鳥肌を立て、これを打消すことに努力しました。だがそれは空しいことでした。私の頬は紅潮しました。これでいて額には冷い汗がたら／＼とつたいました。

それは全く私自身も想像せぬ事でした。

身体がふる／＼ふるえ、手足ががた／＼鳴りました。その事を再び考えるまいとあせればあせる程私はその妄想の恐ろしさに襲われました。

そうしてたつたさつきあの男が



言つた言葉を思い出していたので、辻堂の中のある優しい顔をしていた地蔵様の姿さえその時ばかりはまともに見ることが出来ませんでした。

(4)

それから二ヶ月たちました。すっかり元通りになつた私は、相變らず鐵砲をかついで野山をかけまわつていました。そして或日かの男にばつたり出會いました。私その時の禮をいうのを聞流した彼は、牝猿が其後身重になつたことをきかしてくれました。

私は一瞬再びあの恐怖の淵にたゞきこまれてしまいました。だがそれと同時にあの牝猿の姿が大きいくうかんで私はじつとしていられない氣持でした。あの牝猿の胎に私の子供がいる／＼それは何という恐ろしいことでしょう。今にも足元の草むらさがガサ／＼と動いて、大きな腹をか／＼えた牝猿がぬつと出

てきそうな氣がして仕方ありませんでした。

私はとう／＼いたたまらなくなつて、果氣にとられている男をそこに殘して一目散に我が家へかけ戻つて、蒲團を頭からすつぱりかむつてガタ／＼ふるえていました。そしてその晩から烈しい熱を出して三日二晩うなされつづけました。それから一年たちました頃、私は又同じ仲間黒熊山行をさそわれしました。私は全く行く氣がしませんでした。が、余り皆がすすめるのでとう／＼出かけることになりました。

途中あの山の男の小屋を訪ねましたが、それは後形もなく壊され男はどこへ引越したかわかりませんでした。私はもしやあの牝猿に出逢わたいかと、内心ビク／＼ものでした。幸いそんなことで、大いに安心しそれから尙も奥へ奥へと急ぎました。

(5)

と、ある尾根を曲つた時、突然

一人が足をとめました。そして叫ぶのです。『おい、皆の衆獲物だぞ。』

『何？どこだ？』

『そこだ。』

『そこらあの樹の洞にさ。猿がいるだろう。』

『うん。いる／＼親子だぞ。』

皆な口々にわめきました。見ると成程、一丁余も距つた高い樫の木洞に親子づれの猿が腰かけているのです。しかし私は一瞬ギクリとしました。それは紛れもないあの牝猿なのです。そして仔細はよくみるとそれは猿の子とは思えないような妙なものでした。むしろ人間の嬰兒そつくりなのです。私はそこですべてを了解しました。

そしてふとみると、仲間の者たちはもう鉄砲を構えているのです。かの猿はねらわれていたとしても、ぼんやりと日向ぼつこをしてゐる風でした。私はあわて／＼皆にいいました。

『皆の衆、頼むからあの猿は俺にうたせてくれ。』

『ほほう。それは又どうしてだ？』

『何うでもいい。とにかく俺にやらせてくれ。』

皆がいいとも悪いともいわないうちに、私は急いで肩から鉄砲を下すやいななりドーンと一發ぶつ放しました。

ねらい違わず子猿はぐる／＼と廻つて樹の下へ轉落しました。せめてもの獸とはいへ、私が兒(?)を他人の手で殺す氣はなれなかつたのです。銃聲に驚いた親猿がギヤ／＼と鋭い聲を上げて、らんらんたる眼でこちらをにらんだ時、私は思わす目をつむりました。然しその次の瞬間、他の銃聲はものゝ見事にこの牝猿の心臓を貫きました。

私はすぐ飛出して、可愛い子猿を上衣にくるむと、そのまゝ皆の處とは反対の方角へどん／＼走りまわりました。皆がワイ／＼騒ぐ聲を背にき／＼乍ら、そしてあの男の小屋跡の土をほりかえして子猿の死骸をそつと埋めて、急いで土をかぶせました。何故か私の頬には涙が溢れて止まりませんでした。

私が一人とぼ／＼と村へ歸つたのは翌朝でした。

いろ／＼訊ねる人たちに答えようせとはす私はその日限り、獵具一切を他人に譲つてしまいました。そして今日までこうして百姓ばかりやつて参りました。

私は女房を賣う事もせず、事實上の禁慾生活を送つています。そして時折はこつそりと黒熊山のあの小屋跡へ行つてみるのですが誰一人知る筈もないこの墓へいつの間にか眞新しい無記名の墓標を發見した時、私は愕然として色を失つてしまいました。が、三十年後のその墓標も全く腐つてしまつた今日まで、それを誰が立てたのかを不思議な謎として考へつづけてゐる次第です。(おわり)

第1話



熊の掌

ヒサ子夫人は、田舎のチャチながらも、旧制の女学校をどうにか出て、現在の小学校の教官信夫氏に嫁いだのだが、永年の夫婦生活に倦怠期が到来したのか、近頃夫の態度がどことなく水臭い。

彼女としては最愛の夫であり、子供の無い気楽さから、夫の氣に入るように、万全のサービスをくりかえすのであるが、之に對する夫の応酬がほんのお義理的で、精力絶倫の彼女には大不満であつた。肥満した女は子を生まないのか——五尺一寸、十四貫三百のヒサ子夫人の肉體は、ハチ切れんばかりの健康に輝いていた。この超肉體を、毎晩まともに受けておつては、どんな豪傑と云え、凹垂れてしまふ。

彼女は近傍の親しい農家の主婦に、忍山の天神さんへ、三七、二十一日の夜詣りをすれば、効果があると云う事をきゝ込んできた。

「ねえ、あなた。実行してゐ、何でもないんだもの」
「そりやア、頂上迄行くんぢやなし、お社は中腹あたりなんだから、行つて行けない事はないだろうが。お前、いまだに、そんなカンタンな事が

一方、ヒサ子夫人は、夫の冷淡なのは、子の無い爲だと断じていた。

「信じられるのかね？」
信夫氏の口元に薄笑いが浮かんでゐる。ヒサ子夫人はムツとした顔付きになつて、
「あたしの事は、あたしに任しておいてちょうだいよ」

の若い衆が娘を連れ込んだり、氣味の悪い放浪者が寝ころんでいたりするのだ。そんな馬鹿な地点へ、近頃けうとく扱つてゐるとは云え、そう、この女房をウカ／＼出發させたのを、信夫氏は悔いたのである。

いつたいに此の山村はおツそろしく風儀の悪い所で、私通、姦通などは、まるで、饅頭や煎餅を買つて喰うに等しく、若者達の話は、性と女の話で持ち切り、どこそこのお神さんの尻ツぶりがいゝので、ゆうべ這い込んだ所、亭主と鉢合わせして、俺ら禪を忘れて飛んで逃げただの、峠の娘の腹はどいつの種だろう。喜作の奴が一番しつこいけん、



一 笑亭主人
(丑) 曾根三太郎

軟らかくて面白い。お好みパレイティ

あいつに脊負わせてやろうぢやないか、とか、仕事の合間や、寄り合いには、さまつて猥談がはすむ。

村人の觀念が、私通姦通を娛樂視し、日常茶事化し、つまんでも、つまゝれても、当人は勿論、周囲の者も意に介しないと言う、驚歎すべき状態に固定化しておつた。

生徒数五百人足らずの校の、数少い教官の一人として、もはや校長になる年配の、危ぶく穢迷れの策として入り込んだ信夫氏は、汚れたき兒童達に對して、あまりに還境の不潔性を多きを憂慮していた。

三

こゝの村人達は他人の家を覗き込んだり、隙見したりするのは、常習である。三十才とは言え、年増盛りのヒサ子夫人の仇姿が、淫獸達の好餌であるは言う迄もない。誰一人居ない忍山の天神で、万が一、彼等の手にかゝれば、妻は好餌となつてしまふだらう。

もう秋で、四辺の空は冷や／＼するのだ

が、信夫氏は額に汗をかいた腕捲り、裾はしよつて、馴れぬ山道をいそいだ。土質が赤泥岩で構成されていて、大小の岩が所々凸出していて、信夫氏はそいつによく蹴ツつまづいた。

『こりやア不味かつた。下駄なんかちや、無理だ。』

空は晴れて、無数の星だ。その星明りで、どうやらこうやら道も迎れる。

四十段程の石段をあがり切ると、鳥居がある。本殿の前は黒い影がしがんでる。妻だ。

『ヒサ子。』……俺もきたぞと言いかけて、そいつは呑み込んだ。

『まア！ あなた……』

彼女は白い顔を見せて近寄つてきた。

『あなたも、いついにお詣りして下さる氣になつた？』

……

バカア俺はそんなぢやない。只、お前の身が氣掛かりで……と言うのが、本心だつたが、

『いや。山道は危険だからな。お前。足をどうもしなかつたか？』

『二度も三度もこけちやつたわ。親指どうかなつてるか？』

ヒサ子は、石段に腰をおろす

すと、星明りの方へ、足を持上げてみせた。

『どれ、もつとよくお見せよ。』

信夫氏も蹣んで、自分の膝の上へ、彼女のボテ／＼したふくら脛を乗せた。彼女は全てを夫に任せていた。

『血が出てゐる。お前ハンケチ何か……』

ハンケチを引裂いて、信夫氏は手当をし終つた。ふと見ると、妻の裾前が、膝頭から内股の奥の方迄、乱れを見せ、夜目にも白いその豊満性が、非常な蠢惑で持つて、信夫氏へ迫つてきた。妻は両手を後ろへついて、星空を仰いでいる。妻なりにロマンチックな事を空想してゐるのだから。信夫氏は妻の内股を二三度ピチャ／＼叩いて、彼女を引き起こした。

ヒサ子は足を負傷してゐるので、おくれ勝だつた。信夫氏は腕を貸さねばならなかつた。

星の见えない、暗い樹の間道に差しかゝると、信夫氏は幾分口籠もつて言つた。

『お前。どうして丸すツボなんだ？ いかんぢやないか！』

『でも、下のお安ツさんが、丸すツボでなくちや、利き目が無いんですツて……』

『バカな！ ぜつたいにいけな

ない！ そんなフシグラを好くのは助平神様なんだ！』

信夫氏は先刻からメラ／＼とした青い炎が、頭の尖きから、足の踵まで、走り上り走り下りして、何とも言えん焦燥感に襲われていた。彼は、女房のこの腕を、必要以上に強く掴みしめて、容赦なくグイ／＼引つぱつた。脇の下のハツロがピリリツと裂ける。ヒサ子は夫の爲すが儘となつていた。

四

ヒサ子は、昨夜の夫の猛獸性を想起して、ニンマリ鏡の中へ笑つてみせた。ドガの描いたマヤ夫人のような、大きくて美しい乳房が鏡へ映つてゐる。そこへ、上の熊爺さんが、案内もなく這入つてきた。

彼女は丁度、髪をつかねようとしていた矢先なので、その儘だつた。爺さんは、早掘り芋のはいつた籠をブラサゲながら、不遠慮に彼女の乳房を凝視した。なめるような目付だつた。彼女は赧くなりながら、手早く髪をつかねると、そ／＼に肌を入れた。

『奥さん。子供を生まんと、肌はきれいなもんぢやのウ……』

熊爺は、涎を手の甲でふいた。

『奥さん。子生れ祈願に、天神さんへお詣りしてゐるぢやうでねえか。下のお安が言つたつたで。きけやア、ゆうべは旦那も御座らしたちゆうこつちやが、旦つくがついていつちやア効顯は無えだ。一人で行きなせえ。二人で行くなんて、今迄にそんな例は無え。今夜から一人でおいでなせえよ。』

爺はそんな事を一人で口走りながら、目は相不変すなめるような視線で、ヒサ子の全身を撫で廻すのだつた。ヒサ子は何故か汗ばむ思ひだつた。

この爺さんは、ヒサ子家の上手の芋畑のあつち側に、細い山道がある。その傍の農家の隠居であつたが、戦時中出征した孫の女房に手を出したり、麦畑の中で後家さんを抑え込んだりした経歴の有る其の道の強者だつた。

腰は少し曲つてゐるが、皺だらけながら、腕と言ひ、脛と言ひ、頑丈で骨太だつた。殊にその掌の大きな事は、ヒサ子に、都会の動物園で見たことのある熊の掌を思わせるのである。だから熊爺さんと言ふのは、本名が熊吉として、も、実にピツタリあてはまる村人中の獸人として、此の七十才の老爺が、相当な地位を

確保しておる事は、村民等が
狒々熊。狒々熊と、蔭で呼び
棄てにしているのでも、わか
る。

『おッ！ 奥様が、あまりに
奇麗だで、忘れていた。こ
の芋ア少し早えで、うまく無
えかも知れねえが、まア食う
が好えだよ。』

熊爺は、再び芋をブラサダ
ると、裏へ廻つた。

『小父さん。毎度すまないの
ね。そこへあけておいて頂戴
ほんとに有難う……』

ヒサ子にしてみれば、熊爺
は有難かつた。一坪の野菜畑
も持たない夫婦は、附近の百
姓達より日々の副食物を求め
ねばならなかつた。下のお安
さん方にも相当世話になつた
が、此の熊爺ぐらい、何から
何迄気のつく世話をしてくれ
る人間はなかつた。米麦など
でも、自家のを盗んできてで
も、こちらの不自由を補つて
くれているようだった。夫の
信夫氏は一切そんな事は知ら
ず、何となく変な爺さんだ
アぐらいしか思つてない。

人間が好色無類である事は
ヒサ子も知つていた。或る夏
の夕暮、ヒサ子が裏庭で行水
しておると、熊爺がヒョック
リ這入つてきた。ヒサ子とて
娘ぢやあるまいし、三十六に
もなつた小母さんが、慌て、

飛び出る事もあるまいと、悠
然とタライの中に納まつてい
ると、何の躊躇もなく、ヅカ
／＼とヒサ子の傍へ近寄つた
熊爺は、

『流しやしよう……』

と、彼女が股間を掩つてい
たタオルを、素早く取りあげ
て、熊の掌で彼女の厚い
左肩をガシとつかんだ。彼の
流しは必要以上の時間をつぶ
して、時折、腰のあたりをそ
つと撫でたり、まちがつたよ
うな素振りをして、乳房の方
へ掌を廻したりした。しかし
流石それ以上の事はしなかつ
た。

ヒサ子は、之でスツカリこ
りてしまつて、夫が帰宅して
からでない、絶対に行水し
ない事にきめた。

五

信夫が元気な顔をみせて帰
つた。

『あなた。おサツが蒸してあ
るのよ。』

『もう！ 芋が喰えるのかい？
そいつアステキだ。どれかし
な。』

『なか／＼やわくてあまいが
お安ッさんでも、呉れたのか
い？』

『いゝえ。熊さんなの。』
『何だ。熊さんか……。変な
爺さんだなア。あれで、なか
／＼色気があるツて評判だか

ら、こいつアお前、用心せな
けアいけないよ。』
『ホッホッ。あんな事言つて
まさか……。』

『いや、そのまさかが危いん
だ。どうもあの爺さんは虫が
好かないね。』

『でもいつもよくして呉れる
んですもの。どれだけ助かつ
ているか知れやしないわ。』

『まア出来るだけ世話になら
んように注意するさ。その内
下の街道筋へ出るようにする
よ。こんな山裾の生活は氣に
食わない。』

『早くお願いするわ。あたし
だつて飽きあきしちやつた』
『おい。早く飯を済ませて、
お詣りしようぢやないか。今
夜もいゝ星空だろう。』

『えゝ。でも、先刻熊さんが
夫婦でお詣りしちや効果が無
いと言つていたのよ。そう言
えばお安ッさんも、天神さん

は男の神様だから、旦那様と
御いっしょぢや、神様がキ
モチして子種を授けて呉れな
いんですツて。』

『何言つてゐるのさ。俺は謹衛
について行くだけぢやアない
か。お前を一人でやらして、
飛んだ生神様の子種を頂戴す
るのは御免だよ。』

『まアあなた。相手は神様ぢ
やないの？』
『ふゝ、女学校をとにかく出

たお前が、いまだにそんな頭
か？ これだから日本は戦争
に負けるんだ。ともかく俺は
いつしよに行くよ。』

『片意地な人！ 利き目が無
ければお詣りは無意味ぢやな
いの？』

『昨夜は無意味だつたかい？
あれこそお詣りの効果なんだ
ぜ……。』

信夫氏は、少しはいたなく
思つたが思い切つて言つた。

ヒサ子夫人は、流石、まア
……と言つて緘く差しうつむ
いたが、直ぐ立つて仕度する
のだつた。

『おい。ぢやア俺が行つても
いゝんだな。』

『えゝ。』
ヒサ子夫人の声は、低かつ
た。

六

満願の二十一日目が来た。

その晝、ヒサ子は所用があつ
て、下のお安ッさん宅へ行つ
た。お安ッさんは、ヒサ子が

夫婦で祈願に詣つてゐるのを
知つていて、せめて満願の今
夜だけでもお一人でおいでな
さい、折角の祈願が今日も旦那
様とぢやア、天神様の御気嫌

を損じて御利益がありません
よと、眞顔で云つた。

此の夜、どうしたのか、信
夫氏の帰宅が遅かつた。ヒサ
子は先に食事をして、夫を心

待ちしていたが、なか／＼帰
つてこない。こんな事も二三
度あつたが、ヒサ子は一人で
行くのを堅く禁じられていた
ので、素直にいつ迄も待つて
いたものだが、今夜の夫の帰
りは馬鹿に遅く、晝間、お安
ッさんに云われた言葉が、頭
ん中にひろがつて来て、あた
し一人で行くのかしら……
とうつかり立ち上つた。黙
つて行つてもわるいと思つた
ので、ピンセンを一枚ちぎつ
て鉛筆を走らせた。

すい分お待ちしておりま
したのにお歸りが無いの
で、あたし一人でお待ち
してきます。今夜は満願
の日ですし、お安ッさん
も必ず一人でおいでなさ
いと云つてますし、馴れ
た道です故大丈夫です。
心配しないで下さい。早
く歸つてきます。水屋の
中にあなたのお好きな物
が入れてあります。あた
しも一つだけ頂きました
のよ。

旦那様

ヒサ子

垣根を出ると、すんぐりと
した人が立つていた。ヒサ子
はビツクリしたが、先方は氣
サクにペコリと腰をまげて、
『お晩です。』

と挨拶した。あれ以来ちつとも姿を見せない熊爺さんだつた。ヒサ子も反射的に

「お晩です。」と低い声で云つて彼の方を見ないように、足早やに歩いた。

今夜は、とつてもなく暗い晩で、朝からの曇天で、何となく蒸暑さをおぼえた。雨なのかしら……

こんな晩は、夫がしつかもあたしの腕を抱えてくれた。おかげで山道も大変ラクだつた。馴れた道とは云え、こう暗くちや、全く困つちまうわ引續して、夫といつしよに出直そうかしら……。いや、折角こゝ迄きちやつたのに、もう駄目だわ。

彼女は、とある岩角で腰をおろして、胸を大きく掻きひろげたが、風は無かつた。十月も半だと云うのに、この蒸し暑さはどうだろう。きつと又地震かも知れない。……彼女が、ふと、近くでゴツと云う、岩石を踏み込ますような音をきいた。彼女はハツとして、その下手の闇をすかすように見たが、それからは何の反響もなかつた。彼女は思い直して、胸を入れ、立ち上ると、早くお詣りを決行してしまおうと、馬力をかけた。

もう直ぐ石段に辿りつこう

と思われる時分、再び後方でザリ／＼と云う人の足音らしいのを耳にした。彼女は恐怖でいつぱいとなつた。誰だるう？ 今時分山へ登つてくるのは。……ヒサ子は立どまつて、後方を睨みつけていると、ザリ／＼と云う音も消えた。ヒサ子は、ひよつと、夫の信夫でないかと思つて、

「あなたと違ふのオ？……」

と呼びかけてみたが、ウンともスンとも返事がない。ヒサ子が歩き出すと、後ろの足音もザリ／＼と進んでくる。次第にその足音は早くなつてきて、今はヒサ子の身近くできけた。強い男の足音だ。彼女は、後を振り返るのが怖ろしくて、一時も早くお社へ入ろうと思つた。此の場合、無形の天神さんを心の頼りとせねばならぬ程、彼女の気持はセツパつまつていた。一人でこなければよかつた！ 夫を待てばよかつた、と云う悔いが、短剣のように彼女の良心を刺した。

ヒサ子は、石段を馳けのぼろうとして、一段踏み違えて思わすのめつて、途中で膝を突いてしまつた。ザリ／＼と後ろから急に馳け寄る足音がして、一つの黒い影が

彼女を抱え起こした。

「奥さん。けがしねえだか？」

熊爺だつた。彼はヒサ子の上半身をしつかと抱きしめながら、片手で、挫傷したと思れる彼女の膝頭を撫でる。芋虫のような手触り……。ヒサ子は、その手を拂いけると、立ちあがろうとした。

「奥様。無理だよ。俺が連れて行つてやるべえ。」

熊爺はヒサ子をラク／＼と抱えあげると、ぶらさげるようにして、石段を昇り切つた。『奥様。もう昇つただよ。さ



三太郎

「お社へ行くべえ。」

ヒサ子は、小さな声で有難う……。と云うはか、なす術とてなかつた。膝頭はズキン／＼と痛んで、ころんだ拍子に強く打つたのが、今だにこたえる。

「奥様。膝が痛むべえか？」

お社で、俺が撫でてやるべえ。」

熊爺の強い右腕は、ヒサ子の脇の下へ廻されて、左手が彼女の胸を持ち、全く抱えらるるようにして、社殿に着いた。

熊爺は草履をぬいで、はだしとなると、ヒサ子の草履と足袋をもぬがし、再び彼女を抱えるようにして、社殿の内部へ入る爲に、観音開きとなつてゐる格子戸を、トンと足で蹴つた。

反動で扉がギイツ……と開く。爺がヒサ子の中へ抱え入れると、後ろで自然と扉のしまるボタンツと云う音がした。

ヒサ子はその音で、初めて

「いけません！ 小父さん！
駄目よ」



三太郎

「奥様、今日は満願の日だてねえか。
子種は天神様の御許して俺がのを進
ぜるだて静かにしへえ。」

夢から醒めたような気持ちに帰つた。自身の肉体が、熊爺の厚い胸へ抱かれていたのだと知ると、飛びのこうとしたが動けなかつた。いつのまにか脇の下に廻されていた爺の、例の「熊の掌」が衣物の八ツ口から入り込んで、彼女の、マヤ夫人の乳房をギツチリつかんでいる。

「いけません！ 小父さん！
目よ！」

ヒサ子は必死に争つた。

「奥様。今日は満願の日だてねえか。子種は天神様の御許して、俺がのを進ぜるだて、静かにしへえ。」

彼女が足をバタ／＼して、奥のように悲鳴をあげた。途端に、その悲鳴を待ち兼ねていたのでもあるかのように、横音開きがサアツと開かれると、懐中電燈を持った一人の男が飛び込んで来た。

その大型灯の光の輪を受けて、熊爺は果然とした。瞬間ヒサ子は跳ね起きた。夫だつた。信夫氏だつた。

「出て行け！ けもの！」

信夫は爺へ吐き出すように去った。

「なに？ けもの？」

熊爺は、信夫の方へ凄んでみせたが、暗くてわからないので、懐中電燈の薄明い光線の中の、ヒサ子の露き出しにされた二の腕や乳房を、みれんたらしくデロ／＼眺めていた。

「出ていかんのか？ おとなしく出て行けば、駐在へ届けのだけは、ガマンしてやる。」

「へえんだ。俺がけものなら旦那もけものだべ。」

爺は憎しげに棄せりふを残すと、強く扉を蹴つて出て行つた。

爺が去ると、ヒサ子は乱れた姿の儘、信夫氏に喰らいついた。

「あなた！ すみません！ 悪かつたわーあたし……」

彼女はこのまゝ夫に抱きついて泣きじやくりたかつた。

ほんとにあたしが悪いんだわ。いゝ年をして、恥づかし……

「ヒサ子。ちよつとお放し。まだ奴さん、ろろ／＼しとるらしいから……」

信夫は彼女の手を引いて、内殿を出ると、彼の照らし出す懐中電燈の光茫の中に、バタ／＼と石段を駆け下りて行

く老爺の醜い姿が映つた。

七

「呆れた奴だ。俺は街道筋の住居を早急に取極める爲、源太郎さんの家で、少し手間をとつたのだ。夕飯を出されてムゲに斷り憎く、御馳走になつたりしたものだから、余計に遅くなつたのだよ。待つておると信じたお前がいよいよ置手紙も大げさだが、ともかくあれを見ると、懐中電燈一本を持つて飛んできたんだ。ヒサ子。子授け神様の正体がわかつたろう。」

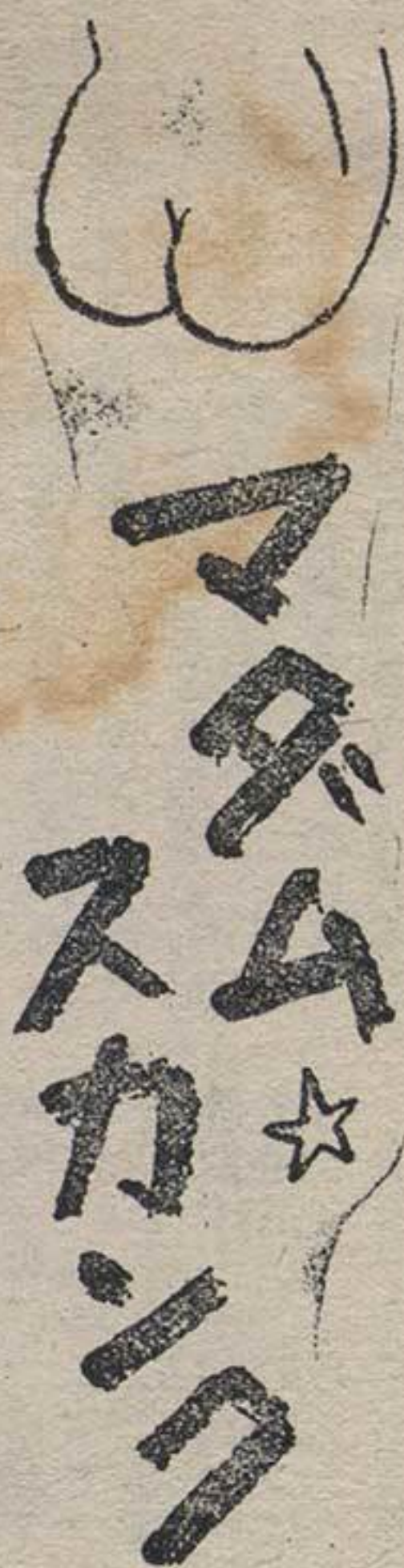
ヒサ子は一言も無かつた。只、夫の長身の跡に凭れるようにしていた。

「とんだ岩見重太郎の狒々退治さ。昭和の御時世にも、こんなお茶番があるんだからなア……世の中ア面白いよ。」

信夫氏は、カラ／＼と笑つてみせた。ヒサ子は今夜ほど夫をたのしく力強く思つた事は、かつて無かつた。彼女は秘そかに、信夫氏の腕に、自分の腕をやわらかくからませていつた。

終

第2話



私は、その二階の開放された窓へ性來の大音を投げつけた。

「おい、ハマノノ、在るか」

直ぐニヤけたリーゼントヘヤのノツベリとした顔が覗くと、それがハマノノだった。「よッ！ガンテツのオツサンか。あがれよ。」

「いやだ！この暑いのに、家の中にすッ込んだる法があるか！」

私は叱るように怒鳴りあげた。途端に、下の格子戸がガラリと開いて、此の家のマダムの鹿、バケツをさげて現われた。とつさの事で私は少しドギマギして会釈した。

マダムはニコ／＼しながら私の方を見て、直ぐ傍の共同水道の前に隔んだ。二十七八にはなるか、顔のまるまるこゝろと色白の肌で、太い眉がやゝ鋭になるが、目大きく鼻筋通

り、口元尋常、肥り肉の方で隔んだ、裾前から、荒巻の鮭の身のような健康な内股を見せている。

彼女はバケツの中の茶碗や小皿を丹念に洗つてゐるのだ。時折、私の方をチラツと見上げる目付が、馬鹿に色ツばい。私はマダムの内股から廣い腰へ目をそらした。「相不変ずガンテツ主義だな。外を歩けやア尙暑いんだよ。」

ハマノノが派出な色のアロハを引かけて出て来た。彼はマダムの方を見向きもせず、私と並んで歩き出した。私は少し悪いと思つたので、マダムの方へ振り返ると彼女の方からベコリと頭をさげた。

私達は扇町公園へ出た。此の附近唯一の樹林地帯で浮浪者やパンパンの休息所でもあるのだ。晝間の暑熱を避けるには、こうした樹林地帯の芝生の上に寝ころんで、渡つてくる天然の風に吹かれる事が

一番涼しいのである。

「時に、ガンテツ。用は何だ？」

「いや、何、大した用ぢやないんだが……三木は仕事だろ？」

「うむ。」

「実は先達で、チヲと拜見した三木の妹だな。あの人を、こちらから云うのもおこがましいが、自分の弟の嫁に欲しいのだが。もはや國へ帰つたのだらうね。」

「いや、まだ居る。おそろく國へ帰らないかも知れん。婆も喰つついて残つておるし、大変だよ。」

「そりや好都合だ。」

「君にや好都合か知らんが、僕は堪まつたもんぢやない。何せ、六帖と四帖半のふたまだ。三木は三木で勝手な事にや、妹を自分の間において、婆を僕の部屋へ寄越しやがるんだ。尤も奴の部屋ア商賣がら、道具で一杯なんで、実質上は、四帖半でも僕の部屋の方が廣いという、変則的な事

になつてゐるのだからしかたがない。僕は毎晩婆の齒齋臭い寢息を嗅がされて往生してゐるんだ。それなのに、下のお鹿さんが嫉いぢやつて、三木の妹とどうかしてるとでも思ふのか、下へ来て寝ろつてゆうんだが。いつそ、社長の家の玄關番にでもお願いしようかと、考へてゐるんだ。」

「あの、マダムの亭主は失礼だが、あの、下の六帖に、臥込んだ切りの御主人はどうしたい？居ないのかね？」

「岡山の兄貴が連れて帰つたよ。兄貴はお鹿さんを好かないんだ。お鹿さんも兄貴一家を好かないんで、死んでも岡山へは行かないと断言してゐる。お鹿（こ）からハマノノはマダムを呼葉てにする」の亭主は、腹膜炎でもう到底駄目なんだ。彼が死ねば先代からの預かり物の遺産を当然お鹿へ渡さなければならぬ、長男がまだ七才だからね。それが厭さに亭主の兄貴は、その七才の長男共々連れて行つちまつたんだ。勿論、籍も抜くだらう。お鹿にしてみりや厄介拂いしたようにセイ／＼した顔をしているが、なるほど、女ツて、魔物ツて感じがするね。五ツになる女の子は、お鹿の姉の嫁ぎ先が淀川にあるので、そこへ養女に貰われて

いつた。末の男の子はまだ乳がいたので、家におる。考へてみりや、お鹿一家の生活費は、僕一人が出してゐるようなものだ。三木の奴は、あんな奴だから、月末に、家賃三百圓。当節は人数が増えたから五百圓出してゐるがね。ともかく、そいつをばいと手渡したら、それだけでいゝんだからね。僕とさたら、下宿代四千圓の他に、洗濯その他の雑用費として千五百圓提供してゐる。まだ、時折、何のものと立替金があるのだ。それらが積もり積もると、どうみても、僕の手から月々八千円前後の金が、お鹿の手へ渡つてゐる事になるんだ。これちやア僕は、サラリ全部投げ出してやり切れぬ。幸いテヨ／＼と競輪で儲かるものだから、どうにかそれで埋め合はせをつける始末なんだ。全く、お鹿にも三木にも弱つたよ。……」

ハマノノは向い手のキャンデー屋のそれを二本買つて来て一本を私に手渡した。樹の間を渡る眞夏の太陽は、斜／＼輝やいて、公園の道はゆる道は、白く乾きあがつてゐる。

ハマノノは私の郷里の者で、私には再従兄弟みたいな關係にある。彼はこの界隈の大親

分、釘本組にうまく入社して月給泥棒を稼いでいる。釘本組とゆうのは、マトケツトを二つ、映画劇場を二つ経営し他に政治新聞、競輪新報、競輪雑誌などもやつている。

ハマノは映画館用心棒のよな事をやつたり、競輪の開催時は、新聞雑誌の応援記者をやつたり、特別に決まつた仕事が無い。彼が下宿先で食事は釘本組で喰べるので、お鹿さんにすれば丸儲けみたいなもんだ。

いつたいに、二階の六畳には最初ハマノが居つたのだ。映画館の仕事で親しくなつた三木が、ハマノの好意に甘えて、次の間の四畳半へ遷つてきたのが、看板絵師、図案家などの仕事をしている三木には、相当仕事道具が多く、且階段の上り鼻の部屋で、前に直ぐ物干台などあつたりするもんだから、マダムや、小供達が上り下りして、家で仕上げるの仕事などの場合、非常に三木が困惑しているのを見兼ねて、ハマノらしい其の場切りの任侠心で、部屋を取替えたのだつた。何アに、己公は寝るだけなんだから……といつた軽い気持だつた。それが今、沢庵くさい婆と並んで寝させられておる。そいつがハマ

ノはシヤクでならんのだ。「それで、今夜、三木に会うかい？ 晩には戻るだろう」「ともかく会つて見るか。娘さんも、お母さんも居る事だし……」

「ちよいと待てよ。それにしても時間があるから、映画を見せてやろう。それからやつてこい。」ハマノは腕時計をチラと見て、腰をあげた。

二

「実あ、こんな事、何から話して……んだか、わかんないのですが、要するに貴方の妹さんを、他に適当な婚約者が無いのであるならば、不肖、私の……」

「三木さん。実ア、このオツサンが弟の嫁に峰子さんを欲しいと云つてゐるんだ。弟と云うのは復員軍人で、今、高松の刑務所の看守をしておる。このオツサンも元看守だが、首になつてカツギ屋をやつてゐるんだ。」

私は最後のハマノの言葉に眉根をしかめた。

三木は色の黒い四角い顔を俯向きかげんにあぐらを組んでいたが、何とも返事しなかつた。

「こんな事は早い方がいい。幸い、お母さんも、本人も居らざる事だから、よく相談し

て、色よい返事を戴けないかね？」

このオツサンはカツギ屋をしておつても案ずる人物ぢやない。弟の看守にしても、誰彼なれる仕事ぢやないんだから……」

私は、ハマノが何事もズバリと片づけてくれる手腕に、ボカンとしておつた。

三木の妹の峰子と云うのは十八だと云うのであるが、甘の成熟を持つていた。三木と同じく色は黒いが、どこか高峰秀子に似た容顔で、三木の四角い顔に比べて、之が妹かと怪しまれた。母親の常子は娘似で、小柄なキチンとした礼儀正しい女だつた。

ともかく、一度皆でよく相談する。と云う三木の言葉を



土産として、私は天六前から築港行に乗つた。

闇夜に、輝くばかりに浮かんだ船体。赤い煙突。今夜は速力のあるスマ丸だ。まだ出航に四十分あまりあるので、待合所前の飲食店へ入つて、鮓を注文した。

魚肉のそぎ身の、赤白いなまぐしを見るに、私の脳の裡に、ふと、マダムお鹿さんの内股の水々しさが、甦つてきて、暫らく鮓を食うのを忘れた。

三

私は次の夜の、スマ丸の引返しで上阪して来た。朝で、荷をハマノの部屋へ放り上げると、直ぐ彼を尋ねた。

「おい。この五升は三木さんへの土産なんだ。又こいつは下へ差しあげて呉れ。」

「ガンテツのオツサン。駄目だよ。あれから三木の奴等、一言も相談してないらしい。もつとも、こりやア下のマダムの証言なんだが……。今日は娘も婆さんもルスだし、ゆ

つくり晝寝ができると思つて
おつたが、ガントツ氏の來訪
でオヂヤンだ。」
「皮肉云うなよ。ともかく、
之を三木。之を下へ……」
「よしなツて事よ！ 總ては
無駄だ。笑い話……」
「笑い話だつて？……」
「オツサン！ あの娘、三木の
妹と見えるかい？」
「だつて……」
「大した妹だ。どこの世界に
兄貴の種を姪む妹があるん
だ。いけしやアしやアと娘面
していたが、奴ア、五ヶ月な
んだ。こうなつたら、何もか
も白狀するが、実ア昨日、三
木やおツ母アの留守に、奴に
ちよいと手を出したんだよ。
奴ア泣き喚くし、そこへおツ
母アと、一足遅れてお鹿とが
戻つてきたもんだから、大騒
ぎさ。晩になつて三木が帰る
と、騒ぎは一層テンヤワンヤ
だ。九州人の一徹で、三木は
口やかましく俺を非難しやが
る。だが、元々、妹でもねえ
者を、妹だなんて隠しておつ
たお前が悪いんだ。お前の罪
だよ。と、云つてやると、三
木アしよげちまつた。」

のムカツ腹があつたもんだか
ら、思ふ存分云つてやつたん
だ。お鹿も上つてきて加勢す
る。いや賑やかだつたぜ。
三木の奴ア、守口の知己と
かへ行くと云つて、女房と
婆さんを連れていつたが、
それぎりなんだ。
あの、三木の野郎が出て行
く時の、泣きべそかいたタ
カモリヅラは、思ひ出して
も可笑しかつたヨ……」
ハマノは近眼鏡を光らし
てふふふと、笑つた。私
には全てがあまりにもあ然
とした事であつた。

四



と左に別れた。
ガラリと格子を開けて入ると
お鹿さんが台所の叩きの上に
洗面器を置いて髪を洗つてい
た。白い豊満な上半身で、脇
の下に丸つこと大きな乳房が
くつついてゐる。私は、それ
を横目でチラリと見て階段を
あがる。

私はハマノの部屋で、
旅の疲れからグツスリ寝
込んでしまつた。マダム
がお茶を持つてきてくれ
てあつたのも、知らなかつ
た。
下へ下りて行つて詫び
を云い、顔を洗つてやつ
と人心地ついた所で、失
礼しようと思つてゐると
マダムが、
「何も御座いませんけど
お夕飯たべて頂けません
？」
首を傾しげて、媚びるよう
な目付をしたので、私はマダ
ムの向い膳に、へ

たへたと腰を落着けてしまつ
た。
菜は、揚豆腐の刻み入のき
ゆうり揉と、鯛の塩焼。マダ
ムは、ピーナツの小皿に入れ
たのを、私の方へ押しやると
コップへごぼりとシヨウチ
ユウをついだ。
「いや。之はやれません。私
はごく弱いんでして……」
「でも、あまくすればお飲め
しますわ。」
彼女は袋から砂糖を幾匙か
コップの中へ入れ、よく掻き
廻した。
私は既に酩酊して、何もか
もが、くるくると廻つてゐるよ
うな感じがした。もう船に遅
たつてかまわねえ。今夜はこ
の家へ泊るんだ。何て素晴らしい
夜なんだ！
私は傍のマダムを見た。
マダムは白い胸を出して乳兒
に乳を飲ましていた。私はそ
の空いてる方の乳房をつか
うとして、腰を浮かした。マ
ダムはホツホツと笑いながら
かるく身をよじる。
途端に、彼女は大きな満月
のような白いお尻を見せて、
寝返りをうつと、ブスツウ……
と云うにいい生理的の音
をさせた。そして、不運な私
は、此の意外に強い異臭の爲
に、マダムを征服する勇気を
失つてしまつたのである。

愛怨比丘尼屋敷



緑 猛比丘
後須磨とゆき

江戸に出て来たが、何処へ行くと云う目的はない。將軍のお膝元、二百六十余大名が軒を並べている。何か就職口があるだろう、そう思つて小幡金平は江戸へ出た。噂にきいたり、空想していた以上に江戸は繁華だつた。

金平は毎日眼を丸くして江戸の街を見物して歩いた。勿論就職口を探す事は忘れない。湯屋の三助、米屋の手代、ばくち打の用心棒——そんな口ならい

つでもあると、旅籠の番頭は教えてくれたが、今は浪人でもついで此の間迄は、たとえ三十石でも武士の端くれだつたと云う自尊心がある。

泰平の御代、劍術では抱え手もなく、日に／＼財布は軽くなり、もううか／＼と江戸見物どころではなく、今日も足を棒にして歩き廻つた拳句、上野の山、清水堂の脇にぼんやり疲れ切つて腰を下した。

——つまらぬ事になつたものた。秋風が冷しくハタ／＼と金平の袂を吹き抜けて、木の葉がクル／＼舞つて行くのを眺めて、彼はそ／＼に故郷を思ふだ。

風が冷たい。肌を刺すようだ。

——大体俺は女に甘すぎる。しかし分らぬもんだな女心と云うやつは……。

金平は喉に雪路の面影をフツと思い浮べた。そしてあの日の出来事をつく／＼ホロ苦く胸にかみしめて見るのであつた。

肥後新田、二万五千石細川左京の近習役として金平は可愛がられていた。役目柄自然と腰元と接する機会も多い。無二の親友成瀬逸馬が、腰元中でも抜群の美女雪路を見染めたまではよかつたが、

頼む！この艶文、思ひのたけをかけた文をどうにかして雪路にそつと手渡してくれ。と頼まれて断わりきれず引受けたものゝ、金平はがっかりした。と云うのが秘かに金平自身雪路を憎からず思つていた矢先。友の頼みに否とは云えず、小さくた／＼んだ文を握らされて、

仕方がない、万人の認むるところ、俺より逸馬の方が美男だし、それに家柄もよい。あきらめて眼をつぶるか——と、す／＼とお錠口から引退ろうとした出会頭、今も今、その噂の雪路とバツタリ出くわしたのだつた。ハツとして身を引いたが、今こそ逸馬から預つた附文渡すチャンスと、黒い顔を赤銅色に染めて、

雪、雪路どの……実はそれ、そのう……。

——ハイ、何か私に……。

つぶらな黒い眼をパツチリ見ひらいて、凝つと顔を見つめられると、益々へどもどして、金平はじんめり汗ばんでクシャ／＼になつた文を突出して、

——こ、この文を読んで戴き度いと……ハツそ、そのうそなたを見染めて、いや、どうしても自分の口からは云い出しにくいと……。

——まあ、金平さま。わたしに……。

途端にパツと紅葉をちらした顔を伏せて雪路はサツとそれを引つたくと、

——お嬉しゆう存じます……。と云うなり振袖で顔を蔽つてかけ出した。

呆氣にとられて見送る金平の肩をボンと後から叩いた逸馬、

手渡してくれたか？

——ウン、確かに手渡した。

——拙者の事をしかと傳えてくれたであらうな？

——それが、云い出そうとした途端逃げ出しおつて……

——何じや。それでは貴公、名前の書いてない附文故、どちらのものが分らぬではないか——

と逸馬の心配したのが当つて、四日目の城下りの慌たしいひととき、宿直の前の廊下ですれ違つた雪路が、素早くサツと金平のたもとに文を投げこむと、一言

——お待ち致します、と駈去つた。

すつかり勘違いされて、金平は嬉しいやら、友に悪いやらで、隠しも出来ず逸馬に、

——どうしたらいいだろう。明日の酉の刻、繁根本八幡で待つていと書いてあるが……

失恋して逸馬はすつかり逆上していた。

——行けッ！勝手に行け。俺は知らぬ、フーム。どうなつても知らぬ——

——そう怒られると俺も立つ瀬が……

——うるさいッ……

仕方がない。金平は翌夕酉の刻になるとノコノコ八幡の境内に出掛け、チラツと雪路の影を認めて近づいた瞬間——

——不義者ッ！動くな——

金平はすつかり雪路を誘惑した悪者になつて、逸馬の嫉妬の告口から、不義の汚名を着ると其の場を去らず、

其の方儀、お家の法度たる不義密通を致せし段言語道断に就き、家祿沒收追放に処す。と、云い渡された。雪路は禁裏——

両親既になく、廿七才にして未だ独身だつた金平である。家財を賣り拂い、老僕に暇をやつて、僅かの金を懐に、飄然と新田を立去つたのが盆踊りの夜

——それから、彼はいつしか呑気にうつら／＼といゝ氣持に眠り出した。

ガヤ／＼。多勢の叫び声にハツと目醒めると間近に、ピカリと白刃が閃めいた、屈強の侍三人が六十近い老人を取囲んで、四本の白刃が秋の斜陽に燦々ときらめいている。

——果し合い？

チラリと頭をかすめて金平は俄破と立上つた。眞劍勝負は恥かし乍ら始めて見るのである。流石に江戸は廣いと感じて、後学の爲と、眼を皿の様にして固唾を呑んだ。老人の腕が大分上の様で、三人のうち一人だけが互角と見えた。後に廻つた一人が、足音を忍ばせると、いきなり拜み打ちに

——えいッ——

老人はバツと振返つて撥止と受け止めたが、グラリと足が宙に浮いた。

——危ないッ……

思はず金平は刀を抜いて飛出していた。

二

チチチナ……とこほろぎが縁の下で鳴いていた。

——フーム、淋しいところだなあ。

金平は若い体をもて余す様に、手足をふんばつてドスンと青だ／＼みにひっくり返つた。

こゝは櫻田の御用屋敷である。金平は職についた。云わずと知れた上野で援けた老人、山村甚五兵衛の手づるである事は云う迄もない。彼は御用屋敷の見張役兼書記となつた。

櫻田の御用屋敷——。人呼んで、比丘尼屋敷と云う。將軍薨去の後、その寵愛を蒙つた側室の中臈達は等しく、位牌を抱えてあり余る青春、残香を虚しくこの屋敷で朽ち果ててしまふのである。彼女達は三十前後から、下は十七八才位までの、何れも中臈（將軍の側室となると必ず中臈になつた）達で、たつた一度お手のついた女でも、將軍が薨去

すれば否応なくこの屋敷へ下げられ、あたら青春の蕾を枯らし、三十女は悶々の慾情を押えかねてのたうち廻つていた。

肉慾を伴う激しい同性愛が比丘尼姿や切髪姿の影に妖しく咲き乱れて、すぎがあれば火を恋う虫の如く、男を慕うて誘い込む有様だつた。しかもこの女群は暇を貰つて寒家に帰るとか、好きな処へ再嫁することは絶対に許されず、謂わば生きた亡骸にもひとしかつたのである。

——こんな世界もあるものか。

と金平は唸つた、屋敷内は中臈の外は、その召使の女中と總て女許りの女護ヶ島——

金平の勤める御用口に、出入商人がくるとその姓名をしるして、召使いに渡すだけの仕事。それ以外は絶えず御用口窓から監視の眼を光らせているだけで、口は一切きいてはならなかつた。その監視役を監視する老中直々任命された伊賀忍術者が、陰險な眼でジロリ／＼と外廻りをしてゐるのだつた。

——可哀想な女達だ——、愉しさも、喜びも奪われ

て……

フエミエストの金平は必々同情した。古参の荒川源内は、金平の氣持を推察してそつと告げた。

——いかん／＼。金平、同情は禁物じやぞ。金平は歳が未だ若いから、ひよつとしてどんな悪戯されんとも限らん。どんな事があつても女達と口をきいてはならんぞ。飛んだことになるで……

——と、云うとどう云う工合に飛んだことになるの

で？……

——首が飛ぶのじやよ。話をただけで首が飛んで

はつまらぬからな。

源内は笑つて、然し嘘のない話をするのであつた。監視の眼を盗んで女に接した場合、発見されたら忽ち首が飛ぶのである。世捨人の女達だけに、命と、やりとりの慾情にも、体ごと投げ出して大胆なだけに、

——そう、二三年前のことじやつたよ。監視の若い男がうか／＼と、魂のとりけそうな色つばい眼に誘われて、屋敷に忍びよつた。わしは最初にそれを見つけた。今のうちなら未だわしの外誰も知らぬからと、深入は止めて御役御免を願出よと云つてやつたのに、もう駄目じや。男ひでりのこゝな女子に見込まれたら、蛇に魅入られたも同然。物の怪に憑かれた様に通い始めて、段々大胆になつてきおつた。遂々伊賀者に見つかつて、同衾の現場を押えられて、女も男も体をバラ／＼にされて不浄門から人知れず運び出されたよ。

源内は當時を回想して眉をひそめ乍ら、
——いや／＼これはわしの老婆心じやよ。兎角あの女子衆ときたら、若い男と見れば口をきいて見たくなるらしい。まあ無理もないが。將軍様のお手附じや、我々では……いや桑原々々。君子危きに近寄らずちゆうてな——。

ハハ、そんなものかと金平はうなづいて、
——こらトンと、若い者には毒で御座いますなあ。と立上つた昨夜の話を思い出して、金平は薄暗くなつた部屋に行燈をつけた。

屋敷の中でももう仄んのり燈りがついている。その中に数多の女体がうごめいているのだと思つと、金平はやるせなくなつて、
——盛りの女許りが、今宵も亦、佗しくも悲しい夜を迎えるのだ。一体中の様子はどんなだらうと、思わず知らず好奇心が頭を擡げてくるのであつた。

——永く勤める役でもなし、場所でもない。一度だけ見たい。

自ら危険を求めようとしている自分に気付くと、金平はカーツと体のほてるを覺えた。

淋しく増上寺の暮六ツの鐘が響いてくる。
ハタ／＼と障子をふるわせて、秋風が流れて行つた——。

——源内様、初島の御中臈は随分若い方でござりますな。

朝夕霜の白くおるる、めつきり冷めたくなつた朝、金平はだしぬけに、源内に声をかけた。

——そうだな、たしか廿一か二だろう。こゝへ來られたのは十八歳の御時だつたよ。

——ハアン、永い一生をこの屋敷で埋れてしまふ……。お氣の毒ですな。誠に……。

——そうだな。ましてお清様だけに尙更お氣の毒ぢや。

——お清様と申しますと？

——將軍様のお手のつかなかつた中臈の事だよ。何でも初島様が仮親立て、中臈に上つた時、將軍様はもう大分御弱りじやつた。こゝだけの話じやぞ……。何でも將軍様寢所へ初島様が始めて伺候されてその夜お手のつく筈の処、その儘うと／＼と眠る様に初島様を抱かれた儘御他界になつたのじやと云う話よ。世間で云うあの初島様は未だ新鉢と云う奴じやよ。

——ハアン、成程、そうですか……。

——急にハツとした様に源内は

——コレ、金平。

——はあ？

——つまりぬ考えを起したのではなからうな。同情は禁物だぞ。えゝか、悪い事は云わん。判つてるだらうな——。



——俺達のつとめは、命じられただけの事をしてあげばよいのじや。
佛頂面をしていても、根は親切な源内は、親身に

なつて忠告した。

大丈夫です。

「ハハ、余り大丈夫そんな顔でもないな。首が飛ぶぞ、首が……」

（殺される事許り源内殿は云うが、独り者の俺にとつて、死ぬ事はさして恐ろしい事でもない。一層思ひ切つて……）

金平は好奇心に負けたのだつた。源内の戒めを破つてあの夜、秘かに監視の眼を潜つて屋敷の庭内に忍び込んだ。植込の蔭からソツと首を出すと、部屋々々の切髪姿、無常を感じたうなだれた婆が、ゆらく障子に影を落して、さも孤影愁然と見えた。黒くお長屋がすつと續いていた。足音を偷んでお長屋からお長屋へ、長い軒下を蝙蝠の様に廂の間を縫うて、猟奇に憑かれて歩き廻つた。

サラ／＼。水を流す音が何処からともなく聞える。ハツと金平は本能的に地べたに身を伏せて音の方を探つた。それはお長屋の外れの廊下らしかつた。細々と妙に陰気に水の音はきこえる。静かに身を起して、その辺りと覺しき処を凝つと猫の様に眼を光らせて打見守つた。

（我乍ら大胆な事だ。日頃の俺にも似合ぬ所業。思ふだところ誰と云ふ目当もない。又してもつまらん事をしたものだ……）

金平は些か軽はずみが悔まれた。夜風が鼻腔を通りぬけた拍子にハツとしたが追いつかない。懸命にこらえ様とするのに反撥するが如く、大きなくしやみが静寂を破つた。

誰ですか？

「僕として然も女性的な甘い柔かい声が飛んで来た。仕方がない、度胸を据えて金平はぬつと立上つて声に向つて現われた。」

御用口監視役、小幡金平と云うものです。

女は驚いた様に凝つと見つめていたが、急に慌たさしく無言で手招いた。

（さあ、愈々蛇に見込れて招かれたぞ。よしこうな

れば度胸を据える。捨て、惜しくない命。將軍と義兄弟なら死んでも本望——）

金平はこの年まで童貞であつた。で、そう思ひ乍らも心とは反対に動作は薩張り消極的で、いつ迄ももじ／＼していた。

早く／＼……

しびれをきらして女は声に出して呼んだ。今更逃げ歸りも出来ぬ。隠する心に鞭打つてつか／＼進むと、その儘云われる儘に上りこんだ。女は後架に行つての歸り、手を淨めていた処だつたのだつた。

明るい処で見た女は、はちきれん許りの若さを一杯に漲らして、切髪もそぐはぐな三日月眉の、窈姚たる美女だつた。

女は中藤の切島であると自ら名乗つて、名はお柳と云つた。

どうして又この夜更けに？……

お柳が問うのに、金平はグツとつまつた。

ハツ、その道に迷つて……と苦しい答弁。

ホホホ、監視役がこの屋敷で道に迷うたものうしたかこれも何かの縁。なう、金平殿とやら、わたしを逃がしたにもならぬか。

えッ！

驚くのも無理はない。

と、ぐつと膝をすり寄せて、そつと白魚のしなやかな指を金平の膝にのせた。ガク／＼金平の膝がゆれる。につこり笑つた眼元の艶なこと。金平は一眼で惚れた。こんな女を女房と迄はいかなくとも、せめて一度逢瀬をしてみり重ねたら、もう命も要らぬと考へた。唇許が雪路の唇によく似ている。そう云えば、眼も、いや顔立ちも……

わたししの切ない、苦しい胸の内をさいて下され金平殿。

「い、いや。もうよく判つています。分りすぎる程よく分ります。兎も角今日は落付かぬ。いづれ出直す。じわ／＼金縛りになりそうな肉体をやつと支えて金平はかすれ声で云つた。」

——きつと、きつと来て下さいませ……

「ハア、必らず……」

そして別れて、金平は源内に初島のお清様なる事をきいたのである。

（すると、お柳様は未だ生娘。フーム益々惚れた。何とかならぬものか——）

もう、金平の頭はお柳様の事でギツ／＼つまつて一寸動いてもおりゆう／＼ときしむ様に思えた。

四

トン／＼、微かに雨戸を叩くと、待ち兼ねた様にスルリと開いて、暗闇にボツカリと初島のお柳様の顔が白く浮いた。素早く手をとつて雨戸をしめる。

金平はこれで三度、さわどい芸当をして、戀のヴァンチュールにわく／＼していた。

「俺達は御用口から御中藤を監視している。その俺達を伊賀者が外から監視していることを忘れるなと云う源内の言葉も上の空、金平は一途にお柳に魅入られていつた。」

下總喜連川がお柳の生れ故郷、十五の年に大奥に仕え、十八の時に見染められて中藤になつて、御召しの夜、私の体の清い儘で上様は私を抱いて亡くなられたと、お柳は恥かしげに頬を染めて語つた。両親はいないが自由の身になりたい。例え途中で殺されても、

——金平様、貴方と御一緒なら私嬉しい……と、身をくねらせて悶えた。

金平は誰か怖いと思わなかつた。身を灼く恋に、心はまつしぐらにお柳に走つていたのであつた。首尾よく比丘尼屋敷を連れ出して、下總に走つた後はどうする？。それから後は未だ考へなかつたが、今よりも、もつともつと楽しい天地が開けそうに思える。眉毛落して鉄漿つけて、毎夜／＼誰に気兼ねなしに、お柳／＼と彼女が抱ける。金平はもうその想像だけで胸の疼く思いだつた。

——お柳様。逃げ延びて、楽しく生きられるだけ生

きましよう。

——え、いつ迄も見捨てないで……
そんな語らいの後、金平は其の夜童貞でなくなつた。お柳様も勿論女の歡びを知つた。

その翌る朝であつた。

金平は御用屋敷の大目付岡田村監に呼び出された。既に傷もつだけにドヤリとしたが、まさかと度胸を据えて出掛けた。

——明寅の下刻お穴門迄來て貰い度い。

——委細承知しました。と平氣なで戻つてくると何時になく緊張した面持で源内がそつと呼んだ。

——貴公の爲を思つて云う。金平今夜のうちに江戸を立退きなさい。

——とは、何故です。

——胸に覚えのある筈——。ではどうしてもお穴門に行く氣か？

——既に御承知で？……

——知つてゐるから云うのだ。金平貴公未だ若い。

——不憫と思ふのじや。

——ではお穴門に……

——多分伊賀者が待つておろう。貴公を斬る爲だよ。

——では岡田様は私を葬るつもりですか——

——それが目付の仕事なら致し方ない。わしは何時か話をした事がある。金平そなた何も知らぬと思つていたか知れんが、初島の御中臈とそなたの事は逐一、大目付の耳に入つてゐる。闇に眼の見える伊賀者、いつか注意した筈だが、愈々金平そなた明日が最後だ。兎も角逃げなさい。

——初島殿がお氣の毒です。

——そ、それを云つてはいけない。度々云つてあるではないか。あの女たちは一生この屋敷で果てる身そうした運命なのじや。

——仕方ありません。もう隠しませぬ。私は戒めを破つて、初島のお柳殿と口も聞き、いやそれどころか行末堅く、契りも致しました。今更あの人を捨て

逃げてたくもありません。

——ではどうあつても行くか——。

——行つて見なければ分りませぬ。
——憐む様に源内は口をつぐんで、ホツと深い溜息をもらした。

——そうだ、今宵初島殿を……

——強い決意を眉宇に閃めかせた金平は、硯と紙を手許に引寄せて、サラ／＼二三行認めた。折疊んで懷ろに入れると悠々迫らず、そつと雨戸を開いて表へ出る。いつもの内堀を一氣にのり込してトンと屋敷内に下りる。

金平の行手をはしむものは何もなかつた。

時刻は既に七ツを廻つてゐた。寒月に照された長局造りのお長屋は死の静けさだつた。数多の女体が轉輾、眠れぬ夜長を恨んでゐるだろう。余りにも非道い自由の束縛——。

いつもの雨戸をトン／＼。さつと灯がもれる。逸早く書狀を投げ込むと、颯ツと身を引いて待つた。すうとお柳の白衣が現われて、暗黙のうちに眼で知らす。命をかけた冒険。

明朝、曉の頃——。金平が錠を外しておいた裏門からお柳を逃す手配をすますと、落逢う先を御行の松と定めて、再び金平は戻つた。

五

初島様の寢床が藻抜けの藪と、大騒ぎの始まつた頃、金平は命じられた寅の下刻、無銘の寢刃を合せてお穴御門に出掛けてゐた。

東の空から赤い太陽が顔を覗かせて、大氣は爽々と冷たく、辺り一帯は青桐の林だつた。

スーツと冷めたい大氣を腹一杯吸いこんで、金平はじつと精神を落ちつけた。

お柳はうまく逃げたのだろうか。逃げたとなると命が惜しい。スーツと氣配を感じて振むくと、いつの間にか覆面の人影が近づいてゐた。足音一つせず、サツサツと空氣を切つて近づいてくる。パツと掌に

しめりをくれてギラリと金平は抜いた。相手も無言で抜いて構えた。金平大上段相手は中段。じり／＼と爪立ち歩きに近づく。氣合一つかけない相手であるが、その構えから流れる蒼白い殺氣の凄じさ。ウームと冷汗がどつと体内に溢れる。自分でも分る位相手の腕は格段の相違だつた。

（やられたか——。うん、やられたかも知れん。もう駄目だ。アア頭がガン／＼してくる。）

金平は観念して眼を閉じた。靜寂を洩れて相手の吐息に似た唸きがスーツと耳に入る。

——不思議だぞ。斬つてこないな……。

そう思うと頭が急にスーツと快くなり、心は落付いて、恐怖の念が薄紙を剥ぐ様に薄れて行つた。無念無想——。今の金平にはお柳もなく、惜命の念もなく、唯瞬間の空間だけが脳裏の奥にチョツピリ残つてゐるに過ぎなかつた。

相手の劍が僅かに動揺した。その間一髪、大上段の刃が、ビューンと風を切つて、紫電の如く落下した。声もたてず唐竹割にされて、ドタリと伊賀者は朽木の様に倒れた。

夢ではない。——勝つたッ。俺は勝つたぞ。金平はドンシンと大きく尻餅をついてへたばると、途端にお柳の事が頭一杯にのさばり返つた。果然と相手の屍体を眺めていたが、ビヨンとばね仕掛の様に飛び上ると、走つた。

御行の松の梢が見えて來た。もう一息——

お柳——お柳——お柳——と叫んだ。

松の大幹にお柳は凭れてゐた。しかし彼女の息の根は止まつてゐた。乳房と乳房の眞中をグサリと一突き、切尖きは松の幹にさゝり込んで、お柳は無慘にも呪い人形の様に腕をたれたまゝペタリと松にはりついて死んでゐた。タラタラと胸許から走つた血汐が、赤くお柳のしどけなく乱れた裾から見える白脛を染めて、金平は愕然と声も出なかつた。

（おわり）

女風土記

初 一 念

風流 太郎

女は男の女房になる積りで居た。別に明瞭と男と約束を交した訳でもなく、男も、日頃の交遊の戯れ言にさへも、その様な行く末の重荷になるような喜ばせは、露さる句わせたこともないのだが、女は男の女房になれる積りで居た。

女は男をまるで秘蔵の宝石でも労わるように、心の底から愛撫した。まるで世話女房のような、痒いところの手の届く、愛情の構図であつた。

男も女が好きだつた。まともに受けとるには面映ゆい程な女の細やかな愛情を、男はこよなく心嬉しく想つて居るのだが、その癖、表面では大して好しいような顔もせず、まるで、貸金の返済でも受取るような、至極のはほんとした顔で、それでもせつせと女の許に通つて居た。

男が女房を買つた。
だが、どうした事か、男の女房はその女ではなかつた。女は暫らくの

間は、掌中の珠でも奪われた様にしよんぼりして居たが、思い切りよく諦めたものか、間もなく元氣を取り戻した。

女の、ほのかな期待を無惨に裏切つて、他の女と結婚した男は、それでも、別に済まなさそうな顔もせず、結婚後も時折女の許に訪づれば、女の細い、その割に肉付のいい指を、子供が玩具でも弄ぶように愛撫しながら女の圓い膝枕に身勝手な夢を見て居た。

女はそんな儚ない逢瀬をさえ、心から喜んで、此の薄情男に昔に交らない細やかな愛情を、降る星の如く注いで居た。

男の結婚生活は長く続かなかつた男の女房はかりそめの風邪が因で、あつけなく死んで仕舞つた。

男は、其の後降るような再婚話には耳も借さず、その癖、またぞろせつせと女の愛情の門を叩いて無作法な仮寝の夢を食はつて居た。

一年は経つた。
男は、二度目の女房を買つた。
今度も、どうした事か、男の女房はその女ではなかつた。女はちよつと当が外れたような顔をしたが、それでも、其の後男に逢つても未練がましい愚痴ひとつ口に出さず、矢張り其れからも時折通つて来る男を昔に交らず、練絹のやうなきめの細かい愛情で包んで居た。

男の二度目の結婚も、不幸にして長く続かなかつた。二度目の女房と円満に別れた男は、うるさく舞い込む再婚話を何処吹く風ときき流して又ぞろ、せつせと女の許に通い出した。男の足はだんだん繁くなり、此の頃では殆んど入りびたりのような状態であつた。女は相変らず、世話女房のような至れり盡せりの愛情を男に注いで居た。二度目の女房と別離してからもう一年余り過ぎた。もう誰も、男に再婚話を持つて来なくなつた。誰でもが当然の結末のやうにその女と男との生活を、温い友情の籠つた眼眸で眺めて居た。

居た。否、或はもう女は男の女房になつた積りで、居るのかもしれない。其の後つと、至極平穩無事に、幸福そうなる男と女の愛情生活が波風もなく続いて居るところを見ると、どうやら女は初一念を貫いたやうである。それにしては随分と手間のかつた。女の愛の歸決ではなかつた。

男と女の交情は山峽の泉のやうなものであつた。絶えようとして絶えず切れようとして切れず、今に至るまで綿々と續いてゐるのであつた。



(一) 貞操の代金

島田克郎

一

松島清子は、福德生命の支配人付タイピストでもあり、いわば秘書格の位置にあつた。そして、処女にありがちな、冒険好きな無鉄砲さを多分に持つていた。だから時間中は眞面目そうにキイをたたいていても、夜は毎日のように、映画を見たり、ダンス・ホールへ行つたりして暮らしていた。

そんな性質だったので、センチメンタルな恋などは、しようとしなかつたし、といつて、せつな主義的な火あそびをする程、大胆でもなかつた。それがいつの間にか、支配人の耳に入つていた。「松島君。ちよつと君に折入つて話したい事があるのだが……」と、ある日、二人きりの支配人室で、清子はラシャを敷いた大きな机の前へ呼ばれた。

切り出されたのが、エメラルドクラブの話だつた。上品な社交クラブの、サード・ガールにならないうか、と言うのだ。募集すれば沢山あるが、あまり下品では困るし美しくなければならぬし、それには、気心も知れてゐる、あなたに來て頂ければ、申し分ない、と

夜ひらく花

競艶集

初恋から女になるまで

珍



いう話だつた。サラリーは、一万円で、細かい収入をよせれば二万円は間違いないが、どうだろうか、と、支配人は清子の顔をまじまじと見て言つた。

月給四千円の殺風景なタイピストと、華やかなクラブで二万円……パアやカフェーのウエイトレスになるのは嫌だつたが、そう言う所なら、と、考えるまでもなく、「え、行かして頂けたら……」と、清子は即座に答えたのだつた。

二

数日後、エメラルドクラブで働くようになった清子は、初めの内は、支配人の言葉通り、閑なお金持達が、商談や会合に集つてゐるとばかり思つてゐたが、一日、二日と経つ内に、それが大仕掛なエ

「由美、歸りに僕の部屋まで來てくれ」

プロデューサーの戸上が女優部屋の扉ごしに声をかけて行つた。(何だろう、近頃は成績が悪いので、又叱られるのではないだろうか?)

由美は不安に胸をふるわせて、急いで身仕舞を終え、仲間の冷やかな視線を背に感じ乍ら、逃げる様に部屋を出た。

(もしかしたらクビになるのではなからうか、今妾がクビになつたら……)

實際戸上は、スター級の四、五名を除いては、誰でもクビにするだけの実権をもつて居たし最近の由美には、クビにされても仕方がないだけの理由が、充分あつた。

(二) 裸の踊り子

月村俊二

「何を遠慮してゐるんだい、まあ掛け給え」

扉を開けたまゝで、おすくししている由美に戸上は快活な声をかけて、椅子をすゝめた。

「君こないだ支配人に給料の前借を頼んでハネられたそうだね」

「え、アノー」

「いやいゝんだ、君の事情は薄々知つて居る、そんな事はどうでもいゝんだ。どうだい今でも金が欲しいかい?」

叱られるとばかり思つてゐた由美は、戸上の碎けた調子に戸迷つて、返答に困つた。

然し金の要るのは、本当であつた。たつた一人の兄が、肺病の第三期になり、市民病院の公費患者として死を待つばかりの状態になつて居た。

放出のストレプトマイシンを注射すれば或は持ちなおすかも知れないと云う主治医の言葉に飛び立つ思いで、早速支配人に、半年分の給料の前借りを頼み込んだのだつた。然し、スターでもなく、殊に最近連夜の看病疲れから、ひどく成績の悪くなつてゐる由美などに、前貸してくれる厚意もなく剣もホロロの返答に、どうする術も

口の殿堂だということが、おぼろげにも分つて来た。分りかけて来た時にや、清子はめてしまえばよかったのだが、何となくその裏を知つてみたい欲望が、若い清子の身体に浮び上つてくるのを、どうすることも出来な



かつた。清子と同じように三人程まだこのクラブに働いていた。彼女達には、入ることを禁じられている、ドアの向うには、何があるのだろうか？ そこから消えて、長い間の廣間へ姿を見せない、マダムと女のような歌舞伎役者は、どうして

いるのかしら？ 知らぬ世界への憧れ、と云つては変だが、それ等が物惱しく考えられて、熱い血が彼女等の肉体を駆けめぐるのでつた。が、それを知る機会が、つまり清子にとつては、あやまつた第一歩を踏む時が、間もなく

おとづれたのだつた。スタンドの前でとろけるような甘い音楽に聞き入つていた清子に、「あなたは、映画が大好きですか？」と、馴れ馴れしく話しかけてきたのは、松井という有名な実業家だつた。突然の言葉で彼女はどぎまぎしながら、それでもおちついて答えた。「え、大好きですの」「ぢや、これから御覧になりませんか？ 今度、それは面白い映画が或る処から入つたんです。もう少したつと、向うで始まりますから、私と見に行つてくれませんか？」「有難うございます。でも、あたし、こちらのお勤めがありますから……」「いやあ、そんな事あ、構やしませんよ、あなたさえ承知なら」「え、？」「いや、あなたが、私と一緒に見



なくて、たゞ一人の肉親を見殺しする我が身の不甲斐なさに絶望の日々を送つて居たのだつた。「君の方で都合がついたのならいゝけれどね、若しまだ困つて居るのだつたら、よりな話があるのだからねえ、」

由美はまだ「上」の意を計りかねて居た。「若しかしたら戸上は妾の肉身を狙つて居るのでは——」此の興行切つてのドンファンである戸上に肉体を捧げた踊り子は何人あつた事であらう。ストリップショー等におちて来る踊り子は、必らずと云つていゝ程、金が目当てであつた。自己の肉体のすみすみまでを、顧客の前にサラス、と云う事は余程の事情と好條件がない限り花差し乙女達には出来ぬ事である。そして女性としての最も恥しい事を同じするならば、少しでも収入を多くしたい、と思ふのは人情で、そこをつけ込んだ戸上が、プロデューサーと云う地位を利用して、踊り子達の貞操を、次々と奪つて居たのだつた。と云つて、無下に戸上の要求を退けたならば、忽ちにして職を失

い、たゞ一人の兄の入院費は愚か我身の明日の生活にも事欠く状態なのだ。由美は突嗟に身を捨てて兄を救おうと決心した。「どんな事でしょう。」

「実は僕の友人が、大阪の、或るナイトクラブのプロデューサーをやつて居るんだ。それがストリップの出来る女の子を一人欲しい、と云つて来ているのでね、條件がとて面白いし、丁度君が、金が欲しいと云つて居るのを知つたものだから、それに君の身体とマスクが向うの要求に、ピッタリとはまつているので君を紹介しようと思つて居るのだが——」由美の心配も決心も一時に吹きとんでしまつた。舞台で裸になるのならどこでも同じ事だ、條件次第によつては飛付いても良い、と眉をひいた。「私みたいなものが……」「いや、うちの女の子の中で君が一番適して居るんだ。給料は三万圓



に行くのが嫌でなかつたら、私が言つておきましよう。しかし、見ている間、一言も声を立てないことをお約束してくれなさいといけませんよ」

「え、」

どうしてそんな事を言うのか、よく分らなかつたが、清子は素直に返事をした。

やがて、

「さ、もうそろそろ始まるでしようから、行つて見ませんか」

松井は先になつてドアの方へ向つた。

清子も仕方なく松井の後について、始めて大きな黒いドアの中へ足をはいこんだ。

三

そこには、真赤なじうたんをはつた、長い廊下があり、その両側には、小さな室がいくつも、いくつも並んでいた。そこを彼女は、松井に肩を抱かれながら真すぐに進んだ。

つきあたりの部屋、前まで行つたとき、松井は、一か今図でもする言子で、ドアをノックした。

開かれたドアの向うは、かなり広い部屋だつた。一方の壁に銀色の小さなスクリンがあり、寄木細工の床には、バー・ルウムののように、椅子やテーブルが並べられてあつた。

「まあ、」

入る、清子は頬を紅くしあとし、。というの、どの椅子にも、一組づゝの男女が、見るにたえな草で、グラスをあけてい、からだつた。それはみんな、平常たつたら、すまし反つてゐる、名士や、会社の重役連、奥様連中だつた。

「約束！ もう何も言つちやいけませんよ。いゝですか」

と、松井は、清子の背中へ軽く手を廻して、片隅の椅子に案内した。

「いよう！ 松井君、今日は可愛らしい小鳥を連れて來ましたな！」

誰か、大仰に言つと、どつと笑い声や拍手が起つた。彼女は急に何となく、恐しくなつて、また一方には、いさゝか冒険心もあつたが、



別に契約金として五万円出すと云うんだ……どうだい？……その代り條件が君には難しいと思うんだが……」

うちのスターだつて三万円貰つてゐる女は一人も居ない、その上契約金が五万円も貰えるのだ、それにしても難しいつて、どんな條件なんだらう。

「つまりクラブの踊り子になれば最初の二ヶ月間はクラブの秘密を守るために外出を絶対許さないと云う事なんだ。たゞそれ以外の事なんだが、君の場合少し無理じやないかと思うんだ。勿論契約金と二ヶ月分の給料は契約と同時に出す上、クラブに居る間の食費も宿泊費も一切負担すると云うのだがね……」

夢ならばさめずに居てくれと願わずには居れなかつた。全部合せて十一万円、それだけあればサナトリウムに入院させて人を雇つて看病させる事だつて出来るのだ。自分の生活費が全然要らないと云う事も大きな魅力であつた。

二

その夜、由美は約束の梅田駅頭に、手渡されたバツヂをつけて、立つてゐた。

丁度、約束の時刻に四八年型の自家用車が由美の眼前に停車すると、彼女を乗せて走りはじめた。中には昨日逢つたプロデューサー村田が居た。

「目隠しをしますから、しばらく

寫屈でしようけれど辛抱して下さい。」

真黒い布で固く眼を掩われた。車はどこを走つてゐるのか分らない。四、五十分も経つた頃、音も立てずにすべり込むように停車すると、あたりは、蒼としたヒマラヤ・シードの樹立であつた。眼の前は真白い洋館が浮かび上つてゐた。

長い廊下を曲り曲つて四帖半位の、瀟洒な洋室へ入つた。

「さあ、これが君の部屋です。あとで、ボーイがやつて來て、いろいろな事を説明するでしよう。それ迄に、こゝに、着物をそろえてありますから、君の身についてゐるものを全部脱つて、着更えておいて下さい。もう一時間もすれば舞台が開きます。來週からは本格的なものを演つてもらいますが、今日は顔見世と云つた意味で、そのまゝ出てもらいますから……」

と村田が出て行つた。

由美は早速上衣をとり、シュミーズを脱いで、用意された着物を手にとつた。薄もの、眼もさめる様な真紅の腰巻に、桃色のなまめかしい長襦袢と、紫地のあでやかな着物を引っかけると、サツとズロースも脱いでしまつた。やつと着付が終つた頃、待つてゐた様に純白の洋服を着たボーイが入つて來て、クラブの色々な事を細々と説明して出て行つた。

(ナイトクラブつてどんな怖しい

「あたし、帰らして頂きます」
と、小声で言つたが、松井は笑つて、

「ハ、ハ、何にも、怖わがる事はありやしませんよ」

「でも、あたし……」

「まあ、まあおちつきなさい」

そう言つて、無理に清子を椅子につかせた、その時、室内の電燈が一せいに消えた。カタカタカタと響く、映写機の音。スクリーンには最初に、露骨に撮られたエロチックなシーンが、大写真となつて現れてゐた。彼女は肩へかゝつた松井の腕を、はらいのける元氣もなく、強烈な酒でものんだとさのように、もうろうとした意識で、身体をしばれさせていた。

× ×

翌朝、タイル張りの綺麗な浴室で、澄み切つた風呂へ手足をひたし乍ら、湯気にくもつた天井をみつめて、悪夢のような一夜を思い返した。

二十年間、守つて来た「処女」は、ほんの数時間で、別れを告げてしまつたのだつた。が、別後悔はなかつた。

「処女だからつて、大して自慢になるもんぢやないわ」

一人言して、匂ほやかな湯の中で、だるい身体を思い切り伸ばしてみた。そして、松井が、帰りがけに彼女の手に握らせた、数十枚の百円紙幣の使いみちを考えた。しかし、そんなのんきな気持の片

隅には、湯気のようにほんのりと金と引きかへにした「貞操」を哀れむ感情もあつたが、

「もう今更、考えたつて仕様がな

い。眞面目につまらなく暮すよ

り、愉快にすごした方がいゝわ」

科白のように独語して、いせ

よく浴槽から、ざつと湯の音を

たて、タイルの床の上へ、飛び

おりた。

四

それからの清子は、たゞのサービスガールとしてではなしに、松井のパートナーとして、エヌラルドクラブへ毎夜出入りした。

だが、思いがけぬ不幸が清子を愕然とさせた。

妊娠！ 全然それは、考えても

いないことだつた。

ある夜、彼女は松井にそれを打ちあけた。勿論。色々と考えあぐ

んだ末だつた。心配する事ない、

と言われる事を予期して言つたの

だが、

「ほう。それはお目出度い。お

祝いしよう。だが、パパは分つて

いるのかね」

そういう返事なのだ。処女を松

井にまかせて、それからだつて、

他の男の腕になど、抱かれた事

のない彼女が、どうして、松井以外

の男の子を妊娠するだらうか？

そんな馬鹿な……。

その一言で、ぐつとこみあげた

涙を、一生懸命におさえて、

「あら！ 冗談おつしやつちやい



所かと思つていたけれど
思つた程では、なかつた

わ。

ホットしてアームチェ

ヤーにふかふかと腰をお

ろして、ボーイが云つた

出演通知のベルが鳴るの

をまつていた。

もうそろそろベルが鳴

る時分だと思つて居ると

入口の扉が開いて、着流

しの和服姿の若い男が入

つて来た。

ボーイの説明にはなか

つた事なので、どうして

よいか、と判断に苦しん

でいる間に男はつか／＼

と迫つて来て、いきなり

由美の手を捉えて乱暴にベッドの

上へ押し倒した。

「アツ」由美は思わす悲鳴を上げ

た。

夢中で男を押しつけて、裾の乱

れも構わず、開いたまゝの扉から

飛び出した。廊下は由美の逃げ場

を暗示する様に左へのびていた。

男は無言のまゝで由美を追つて来

る。しかしダンスできたえた、敏

捷な由美を捉える事は男にとつて

容易な事ではなかつた。

由美は廊下の行当りを左に折れ

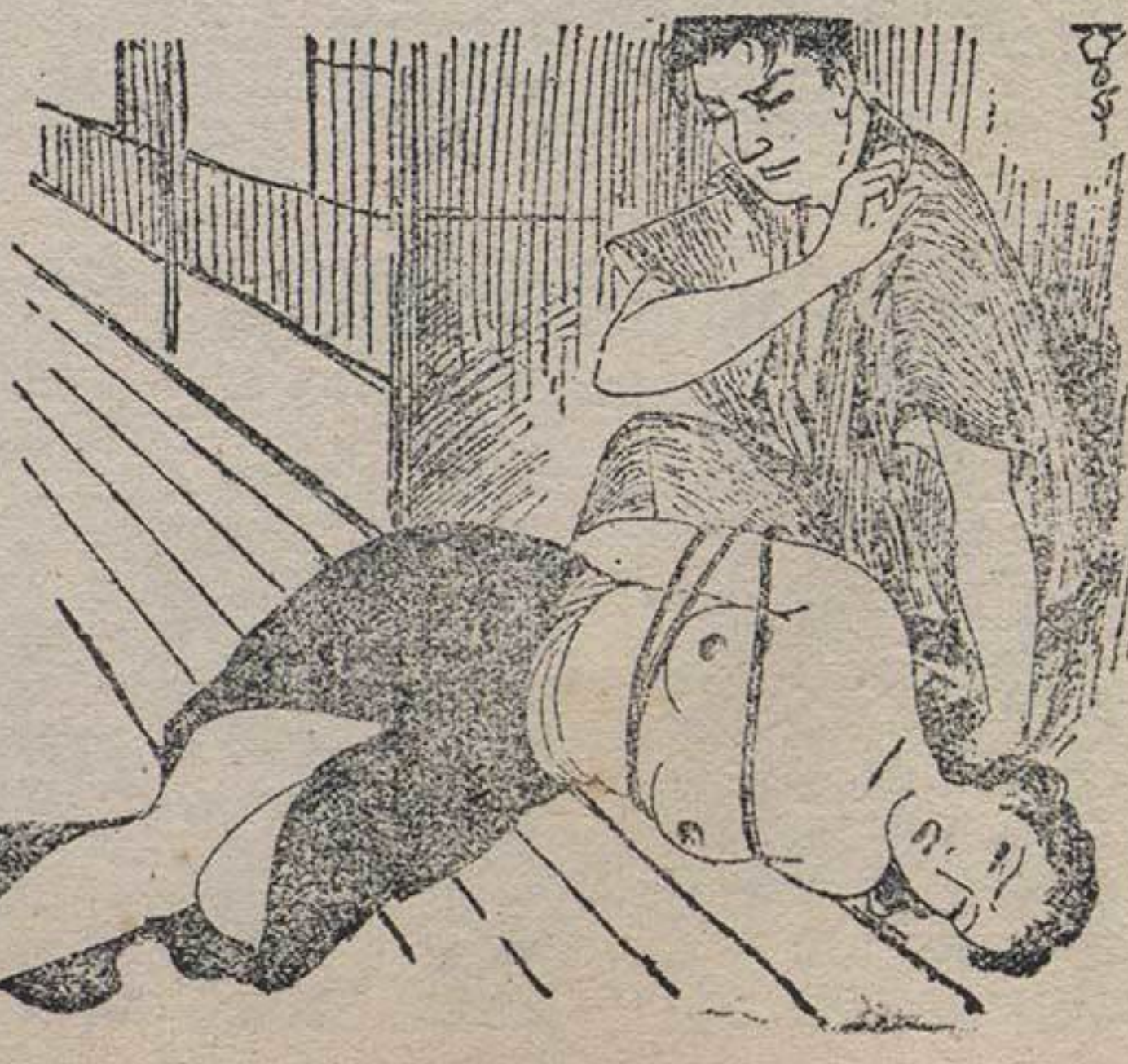
た所で、ハツと行きどまつてしま

つた。長くつゞいてゐるものと思

つていた廊下は、そこで行詰りに

なつて居て、頑丈な扉が行手をは

ばんでいる。男の足はすぐ後に



迫つて来た。

(あゝたれか……)

扉をもつかむ思いで扉を

押してみると、軽くひら

いた。飛び込んだ部屋の向う側は扉

が半開きになつてゐる。

その扉を出ると目の前が、パツ

と明るくなつた。

(アツ舞台だ)

舞台生活者の直観で突進にそう

感じた瞬間、反射的に身をひる

がえして、もと来た道に引返そう

とした。勿論舞台をつき切つてしま

えば下手へ逃げ道はあつた。

然し背後に危険を感じて居ても

開演中の舞台を、突き抜ける事は

舞台人としての良心が、許さな

かつた。

「千枝、此んな所にいたのか、こ

や！

と、微笑して見せた。

「ええ。……ようく、お分りになつていらつしやるくせに……」

「おいおい、それこそ冗談だろうこゝへ來ている女が何をしているのか、そんな事は分りやしない。

君にしたつてそうだ。一週間に一度か二度しか会わない、でその他の日はどんな男とあそんでいるか分つたものぢやない。又、もしも俺のであつたにしても、責任を負う必要は、あるまいと思ふのだが……」

「何故です？」

泣くまいとしたが、涙はあふれた。

「何故です？何故その必要はないと言われるのです！それに他の男と関係しているなんて——」

「馬鹿な！君は何を言うんだ、つまらん言訳はよし給え、今迄、ちやんと代金を拂つてあるぢやないか！」

松井は平然として言つた。

あゝ、何という言葉なのだろう女はこれで、諦めて、父親のない子を生まなければならぬのだからか？

清子は、何もかもふみにじられた気持で、エメラルドクラブを出た。

何処を、どう歩いたのか、冷い初冬の夜の街を、シヨールもなしに歩き廻つて、気が付いた時は、見たこともない鐵道線路の傍らに



立つていた。

死！清子の心に、結果をあてたのはその一字のみ残されていた。

長く続く線路に、かすかな、ごくかすかな、列車のひびきがわつて來た。清子は崩れるように線路の上へ体をうねらした儘、失心してしまつた。

五

「清子……清子！」

父の声だつた。意識がだんだんはつきりして來て、清子は細く眼をあけた。そこに父の顔があつた。

列車は、彼女のいる場所から、ほんの少し手前で、急停車したということだつた。

そして病院へ運ばれて、ハンドバックの中にあつた名刺から、父を迎えられたのだつた。

ベツトの上で、彼女はすべてを



ちらへ來い」

三

舞台は純日本間の六疊位の凝つたものであつた。スピーカーは、「森の水車」の前奏部を軽やかに送つて居た。然し由美には、その音楽も聞えない程恐怖にふるえていた。

「千枝ッ。お前は僕が出張しての間、此の部屋で何をしていたのだ。……云えッ……云えないのか……では云つてやらうか、貴様は此の部屋で、あの木村の奴を引込んで……ウー……貴様は……こうして呉れる」

由美には、此のセリフが一体何んの事であるかわからなかつたので、こうして突如襲いかゝられるとわけの分らぬまゝに

(タイトクラブの秘密シヨールと承知して契約したのだから、どんな事をさせられても仕方がない、しかし身体だけは死んでも守らなければ……)

処女の本能は由美をして、必死に抵抗させた。

しかしその努力は空しかつた。「貴様の様な奴は、こうしてやるのだ。」

男は鞭をとり上げると、「ビシッ」と由美のまろやかな肩先を打ちすえた。

背の上で結び合されている両の腕が、きびしい縄目に締められて痛々しくもあでやかであつた。

男はビシッリビシッリと由美の柔嫩な身体を打ち据えて行く。その度に真紅な湯文字が乱れ乱れて真白な太股がビク／＼と動く。両の肩は、はだけて、むづくりと盛上つた右の乳房が縄目に痛々しくゆがめられて居るのがいかにも艶であつた。

場内にぎつしりとつめかけた観客は一樣に激しい昂奮を感じた様に何とも云えぬざわめきを上げたその声が集つて、ウォーと嵐の様に場内に擴がつて行く。

激しい責苦に由美の身体は綿の様に疲れ切つて居た。後手に縛り上げられた不自由な身体で動かす事の出来るのは両の脚だけであつた。由美は蹴つた。タツプの要領ではげしく両脚を動かした。

激しく跳ねる両の脚に蹴りはなたれて、ビツタリと腰についた真紅の湯文字は、肉体をはなれて、肉づきのよい両脚のみが、白魚の様にねあばれて居るだけであつた。

四

全く素晴らしい演出であつた。これこそ眞のストリップシヨールでなくして何であらう、

演技指導は愚か、シヨールの内容そのもののさへ、観客は勿論の事、出演者の誰にも知らせないで、人間の本能と機会のみを巧みに利用

父に話した。

父は憤った。

事件は表沙汰になつた。

だが、名もない家の娘が、都下一流の実業家を相手どつて問題を起したつて、何になるだろう？
こうなつても地位の大きな相違があつた。

その結果彼女は反対に「脅迫」ということで、告訴されてしまつたのだつた。

金、金、金が総べてのものを不利にしてしまつた。

それが原因となつて、エメラルドクラブの内幕は、暴露されそして閉鎖される事になつた。

それから？。

現在、彼女はこうして、南の片隅で厚化粧をして、バアの女給をするようになるまで、それは、一度、コースをとりちがえた、女が歩いてくる定り切つた路だつた。

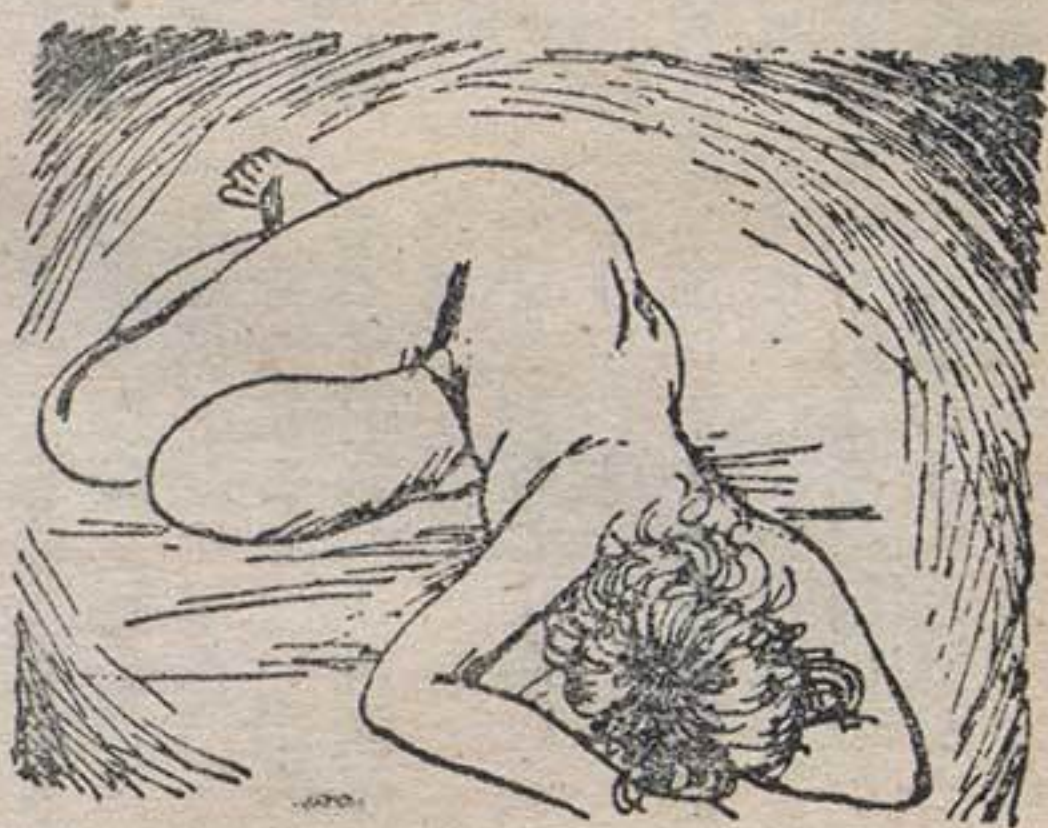
しかも、その路もまだなかばなのだ。
轉落女の、生きて行くため、男に



弄ばれつゝ生甲斐もなく、浮び上る事も出来ず、男から男へ、裸を以て挑戦するのであつた。

夜毎の男の内に眞面目に、愛したい愛されたいと、思う男があつても、やはり駄目であつた。
相手になつた男は、肉を目あての皆其場限りのものであつた。

あゝ、これから？……
もつと、もつと、落ちてゆくだけ……



して、あれ丈の舞台効果をあげた村田の力量は底知れなかつた。

然し、この生きたショーは、顧客に対して充分すぎる満足を與える事が出来た反面、由美の心を完全に打ちくだいてしまつた。

二十二年間守りつゞけて來た女の誇りも女性の最も恥しい状態の中で、見るも無慘に破られてしまつたのだ。

由美は泣くにも泣けなかつた。二、三日は死んだ様になつて、自分の部屋に閉じこもつていた。

やがて次の週の同じ日、

同じ様に着物を着せられて、細いもで後手に縛られたまま、毒虫を胸の中へ入れられた。激しい搔ゆさに身もだえして、あられもななく苦しむうちに縄が切れて、両手が自由になると、長襟袢一枚になり、乳房もあらわに漸く虫をひねりつぶした所を、となりの部屋で暑さに素裸になつていた男がとび

こんで來た。

此の様に村田の演出は病的に鋭く、演技者の本能と心理を巧みに利用して部分的なセリフを教えるのみで一言の内容の説明すら与えず、次々と素晴らしいショーを組立てて行つた。それに反比例して由美の神経はその度毎に荒んで行つた。

こうして契約期限の六ヶ月が終つた頃には身も心もクタクタに疲れ果てて居た。

そして漸く解放された時にはすでに、由美の悲しい努力も空しくたゞ一人残された兄は淋しく黄泉の空へ旅立つた後であつた。

何も彼も失つてしまつた由美は最早何の生甲斐もなかつた。

荒み切つた身体は最早ストリップショーのエキストラさへも出来なくなつて居た。

死のうと覚悟して、死場所を求めてさまよつてゐる所を昔の仲間呼びとめられた。

彼女はストリップでも食べて行けなくなつたので、トビタの花街で接客婦として働いて居た。

由美はすゝめられて彼女と同じ家に働く事になつた。

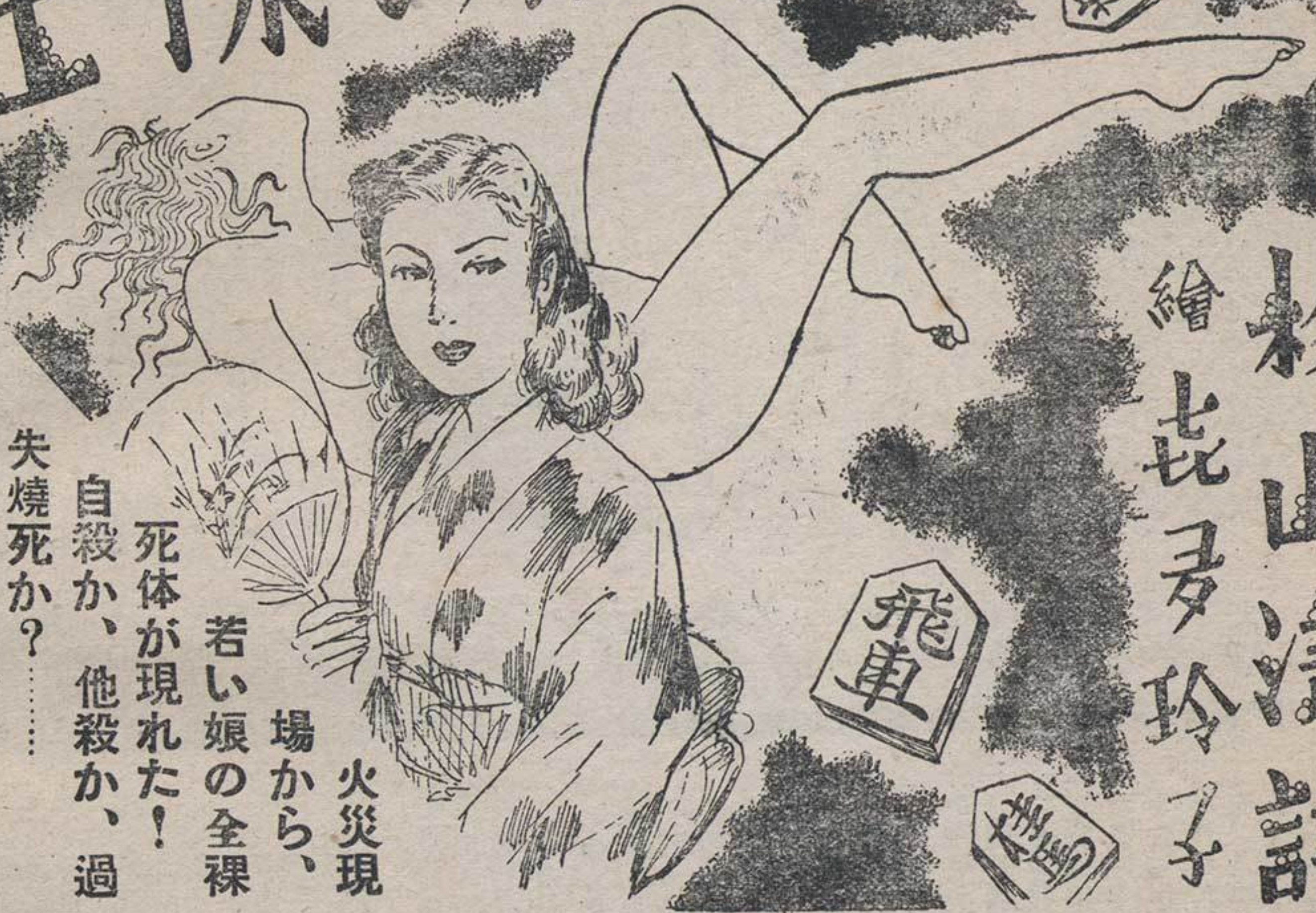
戦災で、家を肉親を無くした一人の兄も病死し、最後に貞操まで失つて、遂に花街で素裸になつて、男の慾情の前に身をさらす運命に泣くのであつた。

——おわり——

事件殺人自殺

死体焦黒の裸女

杉山清詩
繪 七 玲 子



完全犯罪と取組んだ、乙女探

失焼死か？……

自殺か、他殺か、過

死体が現れた！

若い娘の全裸

場から、

火災現

偵青空晴子の手柄話 第七〇話

第一篇 3-1-2

國宝鹿苑寺の金閣が全焼し、続いて、下鴨の松竹撮影所が灰燼に歸した。祇園祭の宵宮には、京の大動脈四條通りに猛火が狂った。

打続く大火災に、泡を喰つたわけでもなからうが、何でも、消防施設の拡充に使われる、資金にするのだとか言つて、消防署員が署の前で、宝籤を賣つていた。それでも、一応の大義名分は、筋道も通つていたし、これが熱海市の宝籤だつたとしても、あの大火は起つただろうし、起つたからといって、宝籤を買わなかつた市民の責任にもなるまい。

但し、あまり賣れない事も又事実で、もう日が暮れてしまつたのに、まだ臨時宝籤屋は店を仕舞わなかつた、ちらほら見える夕涼みの床几にまで、官僚の御連中があまり下げた事のない頭を下げて來た。

加茂川堤に今宵も床几を持出して、迷人位決定大棋戦を始めているのは、乙女探偵青空晴子さんの弟五郎君と、近所の大学生、木村迷人である。

爽かな夏の宵、行水に一日の汗を流して、川を渡る微醺のそよ風に、團扇片手の夕涼みは、晴子さんと、妹の麗子さん。

「その歩で突いてから、こいつへ桂をかけるのや……」

と、どこにでもある観戦八段氏は、本職の宝籤を忘れて、どつかり御腰を据え、誰の將棋だか分らんようにしている、消防出張所の緑川さん。

そうなると、いつの間にもやら、相手にも參謀が現れて督戦する。それは、丁度通りかゝつた、浴衣がけの三十余りの青年である。

「ア、敗けたー戦い利あらずや、今度は小父さん同志やりなさいよ」

五郎君とうとう駒を投げて、澁團扇でバタバタと足の蚊を追つた。

「五郎さん、弱いのがやア」
素肌の上に浴衣をつゝかけ、ツーンと突上げるように膨んでいる胸を、ちよつと気にして、襟をかき合せているのが晴子さ

ん、川風に散る髪をなで上げた時に、大きなハツ口から、悪戯小僧のように腋毛が覗く。

涼しい單衣に、赤い兵古帯、湯上りの薄化粧。その美しく新鮮な姉娘に、浴衣青年氏は、ちらちらと好奇の眸を投げていたし、五郎君は、いつの間にやら岡目八段に代つていた。

「晴子さん、お顔の割に毛深いんですね」

「嫌ア、けつたいな人、どこ見てはンの！」

あわててハツ口を押え、赤くなつてゐる彼女は、とても子供っぽく、可愛く見える。これが硝煙の中を走り、智識犯罪と取組む、日本唯一の美人探偵かと、誰しも疑いたくなる程である。

「そろ晴子さんももう二十三やさかいな」

「あら？あすこ何やろ、火事かしら」

北大路の電車通りを距てて、西京大学の近くに、ボーツと立昇る黒煙と、珊瑚色に染つて行く空、その末の輪廓は、次第に大きく濃くなり、やがては飛散る火の粉と、冲天する火柱が見える。

「ア！火事や火事や、消防屋ハン宝籤が賣れんうちに、もう火事が起つてしまふたがな、本職やで、早う帰んなアカン」

緑川氏、將棋の駒を投出すと、あわてて駈出したし、浴衣氏は噴上げる火焰を見て、最初ニヤツと笑つたが、今度は奇妙に顔を歪めて、現場へ走つていった。今迄の平和は、その瞬間からあの恐ろしい波局へと、急轉して行つたのである。

「姉さん、見に行こう」

と、床几の上を片付けて、五郎は、もう晴子と一緒に、飛出していった。

現場は、彼女らの家から三丁と離れていない、電車通り一つ向うの一樂莊アパート、余程火の廻りが早かつたらしく、二階北端の発火点附近は、一瞬火になり、人が見付けた頃には、もう手の施しようもなかつた。

猛烈な黒煙と、風に舞う火の粉、右往左往する避難者などで、現場は忽ちごつた返しの大混乱、その上宵の口だけに、彌次馬も黒山の如くに雲集して來た。その中に晴子さん達も居たわけである。

時を移さず、上消防署下鴨出張所からは、三台の消防自動車が駆付け、直ちに適切な消火作業を開始する。その中に緑川氏の姿もあつた。

川に近いだけに水利はよく、アパートを半焼しただけで、火勢はぐんと落ち、一時間の後には、もう火魔は終熄していった。

闇の中に、眞赤な爬虫類の骨組みみたいな、焼跡が残され、家財を持ち出した人々も、ゾロゾロと歸つて來た。

「氣前よう燃えよつたなア」

「五郎さん、大きな声でそんな事云うたら、叱られるわ。もう歸りましょ」

そろそろ御帰館遊ばそうとする、彼女らを見付けた緑川氏、

「あ、晴子さん、丁度いゝ。どうも奇妙な事があるんですが、一寸來てくれませんか」

と、嫌だなく手を引いて行く。非常

線の縄張りを越えて、辛うじて焼残つたアパートの玄関まで來ると、管理人室を臨時駐在所にして、現場調査を始めていた警官が、すぐ彼女らを迎えた。「お宅がこの近くだそうでお迎えに行こうと思つてた所なんですが……」

「あら、何ですの」

「実は今の火災で女の焼死体が一つ発見されたんですがね、発火点の二階北隅二十号を借りていた、安治川新子と

いう、二十二の娘なんです。室は裏階段の側だし、若い人なんだから、発火と同時に、すぐ逃げ出せた筈なんです。が、逃げ遅れて焼死したんです。死体は全裸体になつてましたが、別に重病入でも、歩行困難な不具者でもないのに、死ぬなんて、おかしいと思ひませんか」

「さア、そんな場合だつてありますわ」

「所がまだあるんです。発火直後に、救いを求める悲鳴を、隣室の学生が聞いていますが、死体は別に監禁されたり、束縛されたりして、逃げ出せないようにされていた形跡は、全く無いんです」

捜査主任の野田警部補は、更に言葉を

「とにかくです。これは明らかに、奇怪な放火事件と認めます。というの

は、火災を誘発するような条件もなく失火にしては、どうしても焼死体と結びつかないんです。まア一度、現場を見てくれませんか」

どうも焼死体という奴は、あんまり心持のいゝもンぢやない。死体の中

では、高熱殺菌消毒済だし、まだ綺麗な方なのかもしれんが、どうもあの生焼けの死体を見ると、牛肉屋の冷蔵庫の中を、思出していけません。

まだ余燼類を焼く、キナ臭い焼跡の中へ野田警部補と晴子らが入つて行く。と、天井が焼落ちて、半焼している一階北端の室の燻げ疊の上に、焼木と一緒に死体は轉つていた。

加熱時間が短かつたせい、炭化も白骨化もせず、表皮が焼けたされて、水分のない眞皮や筋が露出し、タツノオトシゴみたいな恰好に、きゅつと丸まつて死んでいたが、生前はよくかだつたろう白い肌が、所々焼け残つて、一層痛ましさを唆つた。

手足は焼け崩れて、丁度トルソーを見るようになり、水分乏失で身体全部が縮少し、豚の丸焼みたい、毛という毛が無くなつていたので、皮下脂肪の隆起した、赤紫に燻げた乳房がなかつたら、子供と間違えたかも知れない

「安治川さんは舞踏研究家でしたが、いつでも夜は遅いしお酒は飲むし、男友達とは泊らはるし、まア何と言うんですか、当世はあんでえのか知りません、あんなに大人しい娘は、い

なかつたようです。でも、お金拂いがえゝもんやさかい、ついその……」

と管理人氏の話。

どうせアパートに若い娘一人起居して、ダンス研究所とやいう、体裁のいゝ性教育普及所へ通つてるとならば品行方正謹厳実直な令嬢は、望む方が無理な註文、この程度がレディメイドなのだらう。世の有閑諸嬢よ、以て

冥すべした。

「——で、今日は？」

「頭が痛いとかで、珍らしく夕方へ帰つて来て私が配給品を持って行つてあげたら、もう裸で寝てはりましたで」

「何時頃？」

「え、まだ日の暮れん前やさかい。七時頃でしたやろ、それから若い男の人と女の人が、訪ねて来やはつて、半時間程すると帰りはりましたが、それから半時間程して、火事でしたさかいなア」

出火は大体午後八時、それで時間の点は概ね一致する。

「その訪問客はどんな人？」

「男の方は、三十あまりの浴衣がけの色白い面長の人でした。頬骨が尖つて、ラムネの瓶逆様にしたような顔でしたよ。女の人は眞赤な唇して、祇園祭の提灯みたいな頬ベタした、パンパンというんですかいな、あんな風の女でしたな」

その次に隣室の大学生とかいう、リゼントボーイが姿を見せた。名は森宮哲夫。

「安治川さんはパン助ですよ。高女出のインテリとかだそうですがね、いつも変つた男を啣えて来るし、ヒロポンの常習者だし、荒淫腥食、生きてる屍みたいなもんです。」

え、アベツクの來客、え、ありました。僕は壁に凭れて、聞くともなく、隣の会話を聞いてたんですが、何か口論してましたよ、男は鶴橋、女はミイチヤンつて言うんです。僕の幸福を破壊したのは、君達だとか何とか言つて

たようでしたな……」

すぐ巡査の一人が、警察電話で、そ

の二人の逮捕方を手配に行つた。

「——え、何か呂律の廻らんような悲鳴を上げて、救いを求めました。確かに新子さんに違いありません。來客が帰つて半時間程してからの事でした

僕はすぐ飛出して行きましたが、ドアには鍵が掛つていて、黒い濃煙が室から吹出していました。不明瞭な叫声は確かにもう一度聞きました。ヒューツとか何とか言つたようです。パチパチ木の弾ける音や、物凄い焔の音に、水

屋の小窓を叩き破ると、もう室中一面の火だつたので、僕は怖ろしくなつてそれから、荷物を運んだり、逃げ出すのに夢中でした。

新子さんは、屹度ドアが開かなくて歸息したのか、或は裸でいたので羞しかつたから、マゴマゴしているうちに煙に巻かれてしまつたのぢやないでしょうか」

「パンちゃんなら、火急の時には、裸でだつて飛出すでしょうし、いくら裸つたつて、パンツ一つ穿いてないなんて、少しおかしいわ。それで、貴方がその小窓を破られた時、新子さんは見えましたが？」

「い、え、室中一杯の黒煙と焔で、何も見えませんでした。たゞ、吊つてあつた蚊帳が焼けてるのと、とても刺激的な香が襲つて來たのと、気付いた事はそんなものです」

そこへ死体運搬車が到着して、現場探証や撮影などが行われ、野田警部補はそれらを指揮していたが、

「これは他殺企図の疑があるので、死体の検案と同時に、夜具などの化学的検査と、分光鏡検査をお願いしますわ。身体火傷の擴がり方、程度などは熱線の性質や、作用方法を鑑査するのに必要ですし、解剖も特に慎重にやつて頂戴ね」

晴子は監察医に、要點だけを指示していたが、その口吻は、もう明らかに他殺事件として、この火事を、かなり重要視しているようだった。

第二篇 N—11

その夜は何の証據も挙げず、何の進展も見せぬうちに、次の日の朝を迎えてしまつた。

その早朝、晴子が朝化粧を終えたばかりに、もう電話が掛つて來て、昨夜の一樂莊の來訪者という、二人の男女が國警本部に引致されているし、死体の解剖結果が、大学から來ているから午前中に來てほしいというのである。

弟の五郎君と一緒に、本郷刑事部長の部屋をノックしたのは、それでも九時頃だつたろうか。その室へ入ると、アツと云つたのは晴子だつた。そこに坐つていたのは、昨夜の浴衣がけの青年、あの白哲の觀戰八段氏だつたからである。

鶴橋達夫三〇才、櫻宮美代子二五才男は半ズボン姿、女は袖の短い赤い洋服を着て、ナイロンのバックを持つていた。

晴子はザツと供述調書を讀んでみたが、大体昨日の調査の通りで、安治川新子と口論したというのは、鶴橋には

玉造初枝という許婚者があつて、新子や美代子と、以前同じ商事会社に勤めていたが、ふとした事から美代子が賣淫を始め、その豪奢な生活に羨望した新子も、間もなく肉を賣るようになった。そして二人の誘惑は、虚榮をあこがれる初枝の胸を打ち、遂には美しい洋服が欲しさに、ダンスや映画で遊びたさに、処女だつた象徴を、何の惜気もなく、弊履よりも呆気なく棄ててしまつた。そうして、こうした倫落の女の誰かがするように、還らぬ珠を悔いるより、新しい物慾に惹かされて、すすると賣春の泥沼に墜ち込み、夜毎灯影に男の袂を引くうちに、やがては驅魔院へ、強制入院させられる身となつてしまつた。

それに引換えて、鶴橋青年はあまりにお人好しであり、浮世知らずに育つていた爲に、唯初枝との結婚を、無上の幸福と夢みて、その年まで、不自然な童貞を固執し、將來のみに生きる事を、樂しみにしていた。

それが彼女の轉落によつて、一瞬に掌中の珠玉が、数片の瓦礫と化して碎けてしまつたと、その失意落胆は非常なものがあり、他人の眼からも、自殺するのではないかと思ふ程だつた。

それを轉機に、鶴橋青年の性格は一変し、彼が専攻していた藥物學を次の愛人として、自宅の研究室に蟄居してしまつたと、極端な厭世論者になつてしまつた。

そうして一年、時々加茂川堤を散歩する彼を見かけるようにはなつたが、いつもいらいらして、神経質な彼は、

友達一人とともなく、常に寒々しい孤独の中に沈んでいた。

彼は自分の夢を破り、青春を打碎いた二人の女性、新子と美代子を心から恨んでいた。その一人が、偶然今日彼を訪ねて来たので、懐旧の起くまゝに新子のアパートへも行き、二人に悲しい回想を懐述したのだつた。

「貴方が一樂莊へいらした時、新子さんはどうしてました？」

「何だか頭が痛いとかいつて、蚊帳を釣つて裸で寝てましたが、僕達が行くとすぐ起きて来ましたよ」

「お歸りは美代子さんと御一緒でしたか？」

「出口迄は一緒でした。それから美代子はお茶を誘つたが、僕は断つて、堤の道の家へ歸りました。その途中、貴方の家の前で暫く將棋をさしてました」

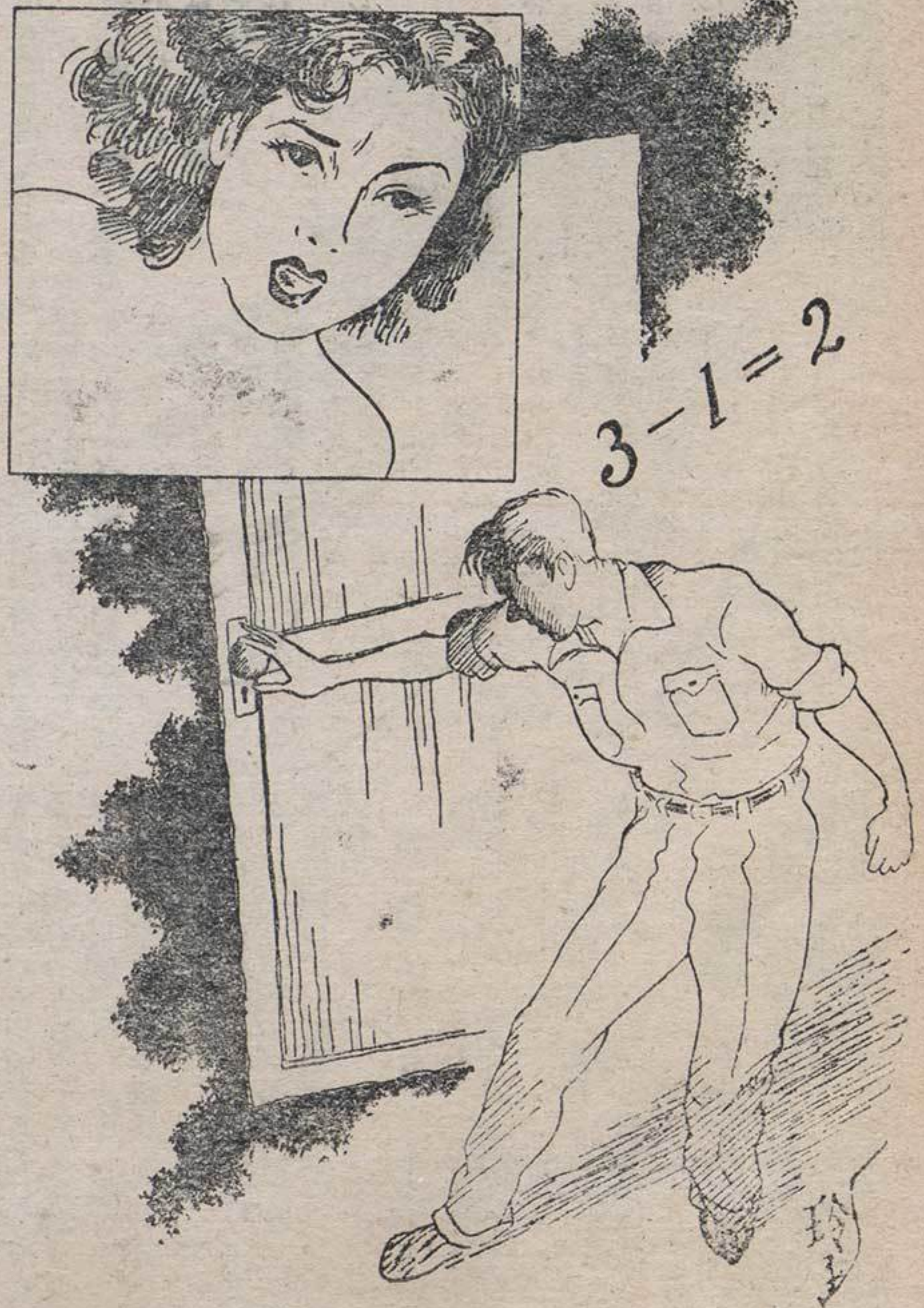
「そうだ、あの一樂莊出火の時は、彼は確かに晴子達の眼前に居た。しかも新子が出火の時はまだ確かに生きていた。とすると、彼は不動のアリバイを持つてゐる。しかもあの出火の時の奇怪な表情も、よく頷ける。動機には最も危険に見える彼は、實際は最も無難な人間なのだ。」

とにかく放火は八時少し前に行われた。それより以後ではあり得ず、それより以前なら、起きていた新子に発見されたらうし、もつと早く火災は起つた事になる。発火時間だけは動かないとする、鶴橋は新子を焚殺する爲に、八時前にあすこへ放火する事は、絶対に爲し得ない。

だが、美代子には不利だつた。彼女なら、一旦アパートの前で鶴橋に別れ、それから裏へ廻つて非常梯子を登り、裏階段を登つた所にある新子の部屋へ、侵入する事も出来るし、火を放つ事も出来る。たとえドアに鍵が掛つていても、流し元の小窓を開いて、引火し易い蚊帳に火を投げれば、充分火災は起り得るからである。しかしその彼女には、全く新子謀殺の動機が無いのだ。部長が朝から澁面になつて、晴子の智慧を求めようとしたのも、その爲である。再度情況が検討されたが、やはり鶴橋の無罪は動かす、彼は間もなく釈放された。

大学の解剖報告書によると、新子が身体に火を受けたのは、生前だつたか死後だつたかという点に就いては、次の様に書かれていた。これは隣室の大学生森宮哲夫の、新子の悲鳴が、錯覚か幻聴でなかつたかという事を確かめ焼死を装つて、他の方法で殺した死体の、犯跡をくらませようと企んだ、放火ではなかつたかという事を、立証するものだつた。

先づ、死体は喉頭、会厭に多量の煤をつけており、そこに高度の充血、腫脹、水泡形成、粘膜剝離などが認めら



れた。これは、熱気の吸引によつて惹起されたもので、時にその爲に聲門水腫を起し、窒息死の原因ともなる。

煤に更に深く気管枝内に認められ、粘液と混じて黒色物ともなつていた。これらは、咽頭から食道の方へ嚥み込まれたもので、こんなに深部までは、死後には侵入する事がないから、彼女は生前の火傷死と断定された。

又その第二の重要な所見は、心臓内血液や、大血管内の血液に、一酸化炭素が証明された事である。死斑も内臓も、一酸化炭素血液の鮮紅色を呈するが、若し他の方法で殺された死体が、

一酸化炭素含有度の高い部屋に置かれた場合には、その死体の死斑、其他皮膚上層血管内の血液は、外部からの一酸化炭素の侵入によつて、鮮紅色を呈して来るけれども、深部の血液にまでこの影響は及ぶ事がないからである。

その一酸化炭素は、小さな分光鏡などでは、20%以下の含有量では不明瞭なので、特に Munkel 氏法化学検査によつて証明された。

法医学は、彼女は確かに火傷直前まで生きていた事を立証し、頭痛の原因は、腸管内から多数発見された、蛔虫によるものだろうと解された。又胃壁

からのアルコール検出も出来ず、歩行を障碍する傷痕疾病も発見されなかつた。これらは、泥酔とか負傷とか、疾病、繫縛などによつて、彼女が出火の時、逃出し得ない條件は、何もなかつたという事を明らかにした。

かくして、犯跡湮滅と、焚殺を謀つたという晴子の他殺放火説は、完全に覆つてしまつたのである。安治川新子は、何かによる失火で、過つて焼死してしまつたという、全く平凡な火災事故に終つてしまつた。

美代子は帰され、捜査は打切られた。しかし晴子は、全てのデータは納得出来ても、尙心の隅で、何か分らないが、納得出来ないものがあつた。

「姉さん、嫌に頑強に不足する顔してるわね」

弟の五郎君が声をかけても、まだ名残惜しそくに、割切れない表情のまゝ、頻りと何か考えていたが、何思つたのか、今度は鑑識課へ入つていつた。

「ねえ、昨日の焼死事件の、被害者の夜具もう一度調べてくれはらへん？」

顔馴染の鑑識課主任は彼女に泣落されて、すぐ検鏡に掛つてくれた。その間に若い巡査が入つて来て、本郷部長がお呼びだからと、彼女を探しに來た。その室に待つていたのは、さつき釈放された鶴橋青年である。

「部長さん、何か御用事？」

「まあそこへ掛け給え、実は今この人が戻つて来て、重要な事を言い落したというので、聞いてみると、櫻宮美代子は自殺するかも知れんというんだ。昨日新子を訪ねた時、彼女が頭痛だつ

たので、丁度持合せていた薬を彼女に与えたんだそう。それはフェノバルビタール含有の劇毒物で、約三十分後に胃液に分解し、胃壁や腸管から吸収された時、毒性を発揮するんだ、しかも血液毒だから、死斑などは、一酸化炭素毒死や青酸加里死などのように、鮮紅色として現れるから、火災現場から焼死体となつて発見されても、鑑別は誤られ易いものだ、この人は自分の薬物学上の学識から、そう言うんだがね。

実は美代子は、最近異性問題で、新子と激しく対立していたので、その邪恋の清算の爲に、彼女を殺して、自分も死ぬ積りだつたと、鶴橋君に告白したんだそうだよ。

「だつておかしいわ、解剖の結果、胃袋からは何も検出されなかつたのよ。溶性フェノバルビタールは、そんな緩慢作用の毒物と違ふわ。それに第一、そんな重大な事を言い忘れるなんて、おかしいやないの」

晴子の鋭鋒に、彼もたじろいたが、丁度そこへ鑑識課員が入つて來た。

「晴子さん、やつぱり貴女は偉い、あれは他殺死体と断定しますよ」

「何ちや他殺死体ぢやと？」

眼をむいたのは部長である

「あの夜具と死体の表皮から、石油が検出されました。」

これは被害者を丸裸にして

石油をかけて火を放ち、焚殺したものと認めます。

剖検結果の、かなり深部までの多量に吸引されていた煤や、隣室の住人森宮某が、強い異臭を感じたと証言しているのは、この事実を裏書しているものと思います」

又他殺事件へ逆戻りした事件に、部長もかなり御氣嫌を損じたいらしい。

「あの室に石油があつたのかね」

と、鶴橋君へ尋問の言葉も荒い。

「石油？そう云えば流し元に、油の罐があつたようでした……」

「直ぐもう一度焼跡点検！」

そこへ一人の巡査が

「部長、只今こんな情報が得られました。玉造初枝が脳梅毒から発狂して驅魔院の屋上から、飛降り自殺を遂げ

たそうです」

「ン？何時だ？」

「昨日の正午過ぎです。それから、火災現場から約半丁離れた北方の、寺田一雄氏から、自家用ダットサンに使うガソリン罐が一ヶ、運轉台にあつたのが、紛失していると届出ています。昨日の火事騒ぎで、つい気が付かなかつたが、今朝発見したと云つてます」

「うん、大分道具建が揃つて來たな、美代子が七時半にアパートを出る、鶴橋君と別れる、寺田家のダットサンからガソリンを奪い、そこから一樂莊の裏階段までは、家庭菜園の空地。裏梯子を上つて、劇薬で苦悶している新子を裸にして、その頭からガソリンをぶつかけて火をつける——段々話が分つて來たぞ。櫻宮美代子を尾行していつた海老江刑事に、すぐ連絡だ。彼女を直ちに緊急逮捕！」

今度は俄然部長の方が張切り出したが、丁度その時かゝつて來た電話に、部長の顔は、七面鳥のように三轉して

いた。

「何。海老江君。あゝ、あゝ——何ぢやア？美代子が青酸加里らしきもので自殺したつて？ア、うん、すぐ行く！」

一人の巡査が、部長の気圧の谷の通過を恐れて、すぐガレージへ電話して

いた。

第三篇 一〇〇

「彼女は本部を出ると、鶴橋青年と府廳前の喫茶店へ入つて、暫く休んでいました。が、やがて二人は別れて、鶴橋

を丸裸にして

を丸裸にして

を丸裸にして

を丸裸にして

を丸裸にして

を丸裸にして

を丸裸にして

を丸裸にして

君は再び本部へ入り、彼女は丸太町通りを東へ歩いて行きました。

それから徒歩で京都御所の中を抜け河原町通りまで行くと、府立病院前の喫茶店へ入つて、余程暑かつたのでしよう。かき氷を食いました。そうしたら突然、痙攣を起して、死んでしまつたんです。まさかこの店の氷の中に、毒物が混入されていたとも思えませんし、計画的な自殺とより、他に解釈する方法がありません——」

海老江刑事は、すぐ車を飛ばせて来た部長達にそう言つた。ダルマタイプの部長は、顔の汗も拭わず、死体の前に、唯腕を組んでゐるばかりである。「うーむ、これでこの事件も終りだねあまりに突飛すぎて、割切れんような氣もするが、今度こそ犯人が飛出す余地はなし、まアこれで解決という所ぢやろう」

部長はやつと不気嫌そうにそう言つた。この事件に関係のあつた三人の女、新子、美代子、初枝の三人は、いづれも、短い奇妙な生涯を閉じてしまつたし、唯一人残つた鶴橋君は、火災事件に歴然たるアリバイがあり、今度の事件にも、刑事部長と晴子の眼前に居たんだから、絶対無條件で問題ぢやないそうすると、もうこれ以上、部長のいう様に、犯人を登場させたくも、この世に居なくなつちまつたんだから、この自殺事件を最後に、この奇妙な事件は、とにかく幕を閉じたのである。その日の夕方、晴子と鶴橋君は、彼の書齋で、冷い飲物を前にして、向い

合つていた。

「鶴橋さんも

此の度は本当に何かと御迷惑でしたわね」

「いゝえ、これでさつぱりしましたよ」

「これが探偵小説なら、こ

の辺で誰か名探偵が現れて意外な真犯人でも引張り出して来るでし

ようけど、實際事件では、もうこれ以上、どうにもなりませんわねえ」

「晴子さんは、誰か犯人が他に居ると思つて居るんですか」

「えゝ、そうなんです、このまゝ終つたんでは、後味が悪うて、うち、よう寝まへんわ」

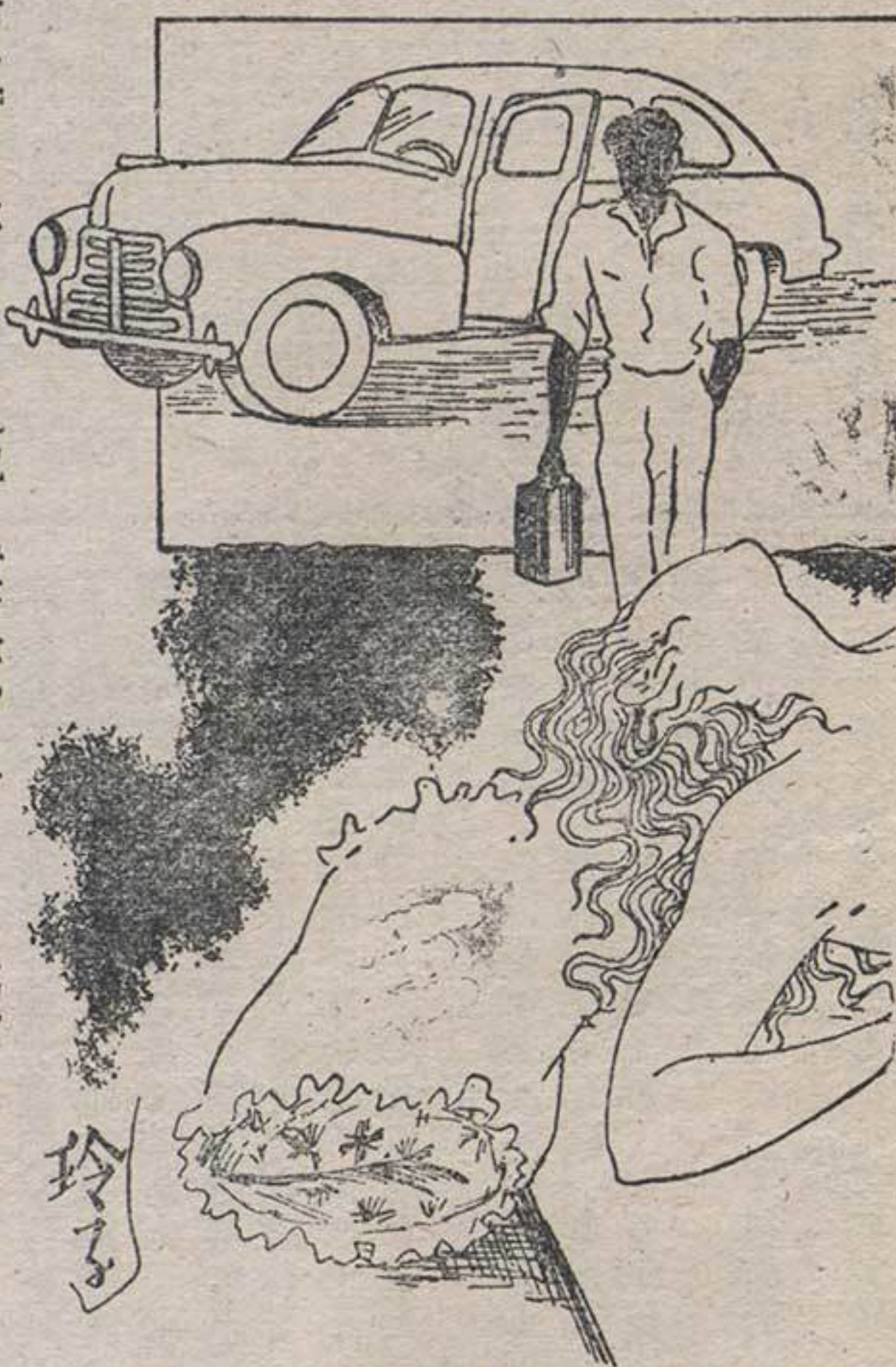
「ぢやア晴子さんの他殺説というのは？」

「本当の事言いまひよか、若し氣悪うしやはつたら勘忍どつせ、うち……本当は、今でも貴方を疑つて居るんです」

「え——？」

晴子のあまりに眞向からの突撃に、彼は思わずギクツとした。

「貴方は二つ共アリバイを持つてられるけど、あまりにも無理に作られたような氣がするんです。但しこれはうちだけの話やさかい、その積りで聞流して下さいね。最初の場合、厭世論者の



貴方が、わざ／＼美代子と会うたり、新子のアパートへ行つたり、帰りにあたしの家の前で、將棋までされた事の一つの疑問を持つてますの。

今日の場合は、又引返して来て、折角の自殺説を覆す、重大証言をしに來てはる。この二つは、両方共、犯行の時の貴方の不在証明を、あたしが証明出來ます。という事は、言い換えるとわざ／＼あたしを証人にしたい爲に、無理にその時間に、あたしの前に現れた、という事にならへんかと思ひますの。それなら、あたしの眼の前に居て丁度その時間に、遠隔地に居る被害者を殺せるかと言うと、條件さえあれば遠距離殺人は出來ます。

昨日西京大学前の小間物屋で、日本蠟燭をたつた一本買ったお客がある事を、あたしは調べたんですけれど、これで遠距離殺人は可能なんです。以下

はあたしの空想やさかい、その積りで聞いて頂戴ね。

貴方は美代子さんと一樂莊へ行く。新子さんが病臥してる、そこで貴方は何かお薬を与える、それから二人はアパートの前で別れる。

美代子がお茶を誘うのを断つたのは何か自分に目的があるからで、その後で、近所のダットサンから、ガソリンを盗み出す。これも予め見ておいたのでしよう。

次に貴方は、再び裏階段から新子さんの室へ入る。新子さんは藥物の作用で倒れている。

例えば全身痙攣が昏睡ね。そこで新子さんを丸裸にして、ガソリンを撒き壘の上かどこかへ立てた、日本蠟燭に火をつける。部屋の鍵を奪つて外から鍵を下し、流し元の小窓を開けて、鍵を再び室内へ投込む。そこで急いでアパートを離れ、土手道を歩いて来て、あたしの家の前で時間を潰す。

一方アパートでは、蠟燭が燃え切るのに、約二十分はかかる。燃えてしまつと、壘の上の油に引火し、蚊帳とガソリンという好條件で、一瞬大火災が発生する。そうすれば、貴方は約二十分程の距離を隔てた所で、出火を目撃し、相手を焚殺する事が出来る。どお？これなら一方でアリバイを持ちながら、一方で殺人を行う、一人二役も可能だずやろ。

第二の場合、二人共釈放されて警察を出る、そこで心配して待ついる美代子さんと会い、例えば、青酸加里を塗りつけた口紅か何かを、彼女にプレゼ

結婚奇譚奇習

嘉義信哉

花嫁の性的恥羞

若い女、特に処女時代の娘の抱いている性的羞恥——はにかみとつゝ、しみて——の現れである姿態は、平常男性が娘に接する時に感ずる最も大きな魅力の一つに数えられる。

この羞恥の誇張せられた形式——私たちの眼には珍奇な風習としか映じない結婚の奇習——について見てゆきたい。

琉球本島の離島、久高島には最近まで次の様な結婚様式が残つていた。此の島では花嫁は必ず結婚の席上から逃げ出して、森林、岩窟、或は親戚知人の家にかくれ、十日、二十日の間は花婿に捕えられぬようにせねばならない。

それで夫となる者は多くの友人の助力を頼み、実際血眼になつて探しまわり、捕えると、女の髪を掴んだりして、手荒い折檻をする。晝間みつける一間に押し込めて張番をつけ、夜みつかれば直ちに自分のものとしてしまう。この時花嫁は

必ず悲しそうな声をたて、泣かねばならない。

此の泣声を聞きつけて、近所の人々は、初めてこの結婚の目出たく済んだことを知り、又互に、今度娘の逃げかくれた日数は随分長くて珍らしいとか、短か過ぎたから、きつと辛棒しきれなかつたに違ひなからう等と評判し合つたものである。

中には七十二日目の間見つけられなかつたという記録もあつた。僅か一里余りの周囲しかない小島のことであるが、御嶺(杜)の中は男子禁制であるから、こゝへ逃げ込めば幾日でも捕えられぬ氣遣ひはないけれども、里へしげく食事をして出たり、或は退屈して、そつと居所を知らせに來たりするから、二十日とは続かなかつた。

この久高島の奇習は、よく掠奪結婚の一遺風として挙げられてゐるが結婚式に、花嫁を掠奪する模擬戦が演ぜられるのは、
「若い娘は強力な男性の暴力に強要せられるに非ざれば、その自由と処女の純潔を委すべきでない」と
とゆう觀念に基いて発生した古い慣習であつて、又処女の性的羞恥が

ントする。そこでお茶を喫み終つて、彼女は恐ろしい口紅を塗る。彼女の家の位置からして、歩いて帰る事は計算に入つてゐる。この暑さ、必ずどこ途中で、或は家へ帰つて、何か冷いものを口にする。その瞬間に彼女の生命は奪われる。それまでの時間だけの距離を、被害者の方で、勝手に犯人から離れていつてくれる。やはり長距離殺人は可能でしよう?

美代子さんのハンドバックの中に、新しい包紙紙に包んだルージュがあつたので、そんな事を考えてみましたのよ、どお?でもね、これはうちの考えた小説よ。うち、クレイグ・ライス夫人みたいな、女流探偵作家になれへんかしら。

今の日本の法律でね、こんな癡言みたいな推理だけを基盤にして、誰かを犯人やとは言えないのよ。何かの物的証據か、犯人の任意の自白がない限り、檢挙出來ないのが、現行の刑事訴訟法ですの、それが長所でもあり、短所でもあり、事件がその空間断層に陥ちた時には、みすみす自分で肯定しても、どうにも仕様がなないのやわ。どんなに口惜しいても、どんなに淋しいても……。

ごめんなさい。長々と変なお話してうち今日から生理日やさかい、氣がムシヤクシヤしてるんですわ。どうか氣を悪くなさらないでね——
その翌朝、晴子に宛てた速達書留の封書が届いた。差出人は鶴橋達夫。
「昨日は大変失礼致しました。さすがは名ある貴女の名察。やはり僕が敗け

たようでした。

いや、あくまでフェアプレーの精神で、この一書を貴嬢に送るべきだと思ひます。自分の良心の爲にも、三人の薄倖だつた娘達の靈の爲にも。

僕は玉造初枝を生涯の恋人として愛しました。そして彼女を誤らせた二人の娘を、ひどく憎みました。彼女が入院した約一年前から、自分の家に蟄居して、二人の殺人計画を樹てたのです。その方法は、貴女の御推理の通りです。たゞ、僕だけより知らない点を、二三補遺しておきましょう。

蠟燭の燃え切る時間を測つたのは僕ですが、一樂莊から貴女の家まで要する時間を僕に知らせてくれたのは、お宅の隣の方に居る。僕の学友木村君でした。

寺田邸の表には、庭が狭いので、いつも就寢迄ダツトサンが置いてある事、その中にいつもガソリンがある事などを、何にも知らずに、僕に教えてくれたのは、木村君の友達、一樂莊の住人森宮君です。

あの日美代子と呼んだのは、この僕自身です。それは、その朝初枝が飛降自殺をしたのを聞いたので、いよいよ兇行を決意したからです。

僕はあの日、ヒロポンだと稱して、五ccのアルコールを、新子の靜脈へ注射したのです。彼女のヒロポンマエは前から知つてましたから、あの日彼女が頭痛でなくても、何とか言つて靜注はやる積りでした。それで胃壁からはまだ酒精は檢出されなかつたそうですが、彼女は強い酩酊状態で、勿論

動力馬房

史静屋月

南方いざこざ紛争巻

第四話



「すぜ」
車夫は、黒檀のような脚で、ぐつとペダルを踏んだ。三輪車は風を切つて走り出した。

マリアームは、唇をキツと噛みしめるんだ薄茶の眸で、じつと前方をみつめながら揺られていた。

傍に夫がいたならどんなに楽しからうに――。

婚約時代、よく二人が街を乗り廻して、ちろ／＼歩いてくる苦力達に冷やかされたりしたことを思い出して、彼女は、胸がうづいた。

夫は、アンボンから船で二日もかゝるバンダ島で生まれたといつたが、十五のときから稼ぎに出され、その後、アンボンで家を買った。一度も帰つたことがなかった。よほど金儲けが上手らしく、それに、美男で、温順しいというので、マリアームの両親は簡単に結婚を許したのであつた。

カフェー・マタハリへ行くと、カウンターから青いサロンをはいった男が出てきて

「知りませんねえ、あつしは臨時に教師を雇つたこともありませんぜ」それから三四軒廻つたが同じ答えてあつた。

「もう、ほかにないの？」

「もうひとつ、ピンタン・マラム（夜の星）がありやすがね、ちよつと遠いけど、凄いい所ですぜ」

「いいね、いつてちようだい」

マリアームは、そこで分らなかつたら、お酒でも飲んで帰つてやれと思つた。

さあ、離しておくれ」

夫は、女のような優男だが、むづかる妻を乱暴に突き放し、逃げるように表へ駆け出した。

「あなたあー」

妻のマリアームは叫んだけれど、もう、夫の姿は、みえなかつた。

あやしいわ、あやしいわ、いつも夕方出かけて、朝、かえつてくると白粉くさいし、カフェーの楽師だなんてどこのカフェーかつてきいても教えてくれないし――そうだ、後をつけていつてやろうかしら――。

マリアームは、椅子から立上つて、三面鏡の前で髪をつくろい、みどりに五色の草花をあしらつた本絹のカワイ

ヤ（上衣）に着替え、サロン（上袴）

もビロードの燃えたつような赤いのと取替え、黒塗の木靴をはいて表へ出た

午後五時を過ぎていたが、街はまだ日中のように明るく、街路樹は風にそよぎ若い女と男が仲良く肩をくつゝけて笑いながら乗っている赤い三輪車がきらめきながら走ってくる。

アンボン公園の池の畔までくると折よく空の三輪車がやつてきた。

「カフェーを片づけばしから廻つてちようだい」

「どこから行きやしよう」

「楽師を雇つているところなら、どこでもいいわ」
「ぢや、マタハリ（太陽）から行きや

小さな橋を渡り、森を越え、廣い、白ちやけた坂道にかかる、車夫は、ハアハアいいながら力一杯ペダルを踏んだ。

日がとつぷり暮れた頃、カフェー、ピンタン・マラムに到着した。

入つたところが廣い庭で、薄暗い樹蔭のところどころに席が設けてあり、女給達が、くらがりで、白い背廣の男達に抱かれたり、膝に乗つかつてキヤツ／＼騒いでいた。

さつぱりした白服を着たボーイが、銀盆にウイスキのグラスやら果物などを載せて運んでいる。

マリアームは、男達に声をかけられ、口笛を吹かれたりしながら庭を突切つてホールへ入つていつた。

バンドが騒がしいジャズを奏していた。

十組ほどの男女がみだらな恰好で踊つている。天井のシャンデリヤが赤い光線を淡く投じているだけで、隅つこのテーブルに抱き会つてゐる男女が、何をしてゐるのか入口からはさつぱり見えなかつた。

バンドは、客席と反対側の一段高い所に、金管楽器をキラ／＼させて、おどけた仕草で演奏しているが顔は分らなかつた。

マリアームは、カウンターに近づき、パイヤを切つてゐるコックに訊ねてみた。コックは、変な顔をして、空盆を運んできたボーイに何かいつた。

「いいつけられたボーイは、カウンターの横のドアを開けて中へ入つていつた。」

やがて、でつぷりした人相の悪い男が苦い顔をして出てきた。

「知りませんぜ、そんな男、もつと他を採してごらんせえ」

そういつて、小さな眼で、ジロリとマリアームをみた。

「お願いです、他の所はみんないつてみたんです、ほんの、ちよつと会わしていただければいいんですから」

男は、黒々した顔をしかめた。

「いないから駄目ですつて——」

「いいえ、いる筈ですわ、ここへくるといつてたんですもの」

マリアームは、力をこめていつた。

「ぢや、勝手に探しなせえ」

マリアームは、バンドの傍へ、ツカ／＼と進んだ。その時だつた。

「あッ——」

そんな声がした。マリアームは振り向いた。開いたドアの中から、ひとり

の若い男が身を乗り出していつた。

「あッ——あなたッ——」

彼女は、驚いて、ドアの傍へ駆けよろうとした。肌着一枚でズボンもはいてい

なかつたが、たしかに夫であつた。

でつぷりした男は、素早やく、バタ／＼とドアを閉めて姿を遮つた。

「あなたッ——あなたあッ——」

ボテであつた。

「今晚は、トアン——」

女の声だ。カンボテは大慌てに足を降し、大きな眼をくる／＼させた。出

歯が呑気そうに厚い唇からのぞいていつた。

「トアン！助けてちようだい——夫が、夫が——」

マリアームは胸を抑えてあえぎながら駆け寄つてきた。

「どうしなさつた、奥さん」

もうひとりの、カマキリみたい瘦せこけたポリシーが、抱いてあげましようという風に両手を拡げて驚いた恰好をした。

彼女は、大急ぎで事情を話し、表に三輪車が待たしてあるから急いで行つてほしいと頼んだ。

「カフエー・ピンタン・マラムつてのは、妻え奴がゴロ／＼してやがるつて噂だから、ひよつとすると、命が危え

かも知れませんが、さあ行きやしようおいッ——手前もこいッ——」

「へいッ——」

カンボテとマリアームが三輪車に乗ると、カマキリのポリシーは後から駆け出した。

近くなので、五分とかゝらないで到着した。

「まあ、トアン、ポリシーカンボテ、いらつしやい」

表から入ると、暗がりから女給が出てきて、カンボテにかちりつこうとした。

「どけ／＼ッ今日は仕事だッ——」

「いいぢやないのよお」

からみつこうとする女の手を、ちよつと握つただけで、カンボテは惜しうにホールの方へ進んだ。

「へへへ、俺でどうだい」

カマキリのポリシーがいつた。

女は舌打ちして尻を揺りながら客達の方へ去つていつた。

マリアームは、それを見て、たとえ仕事であろうとこんな所へきてゐる夫は、きつとこういう女達に誘惑されてゐるに違いないと思つて気が滅入つてきた。

カンボテは、カウンターの前を素通りしてドアの方へ進んだ。

「あッ——トアン、ポリシー、そ、そこは——」

コックが飛び出してきて手で遮つた

「どけ／＼ッ——」

カンボテは、コックを突き放してドアに手をかけた。コックはよろめいた。

カマキリがそれをまたドンと突いた。コックはひつくりかえつて尻餅をついた。

「おおいッ——た、大変だッ——」

コックが大声で喚いた。踊りの輪が崩れて人相の悪い男達がどや／＼と押寄せてきた。

「やい／＼ッ——」

カマキリのポリシーが拳銃を突きつけた。男達は、さつと立竦んで手を舉げた。

「早やくこいッ——」

カンボテがドアを開けて叫んだ。カマキリのポリシーとマリアームは、大急ぎでカンボテの後から中へ入つた。

「眞つ暗ぢやねえか」

カンボテが懐中電燈を照らしてスイッチを探し、パツと灯をつけた。雑然とした廣い女達の化粧部屋であつた。鏡台の前に女がひとり座つており、さつきマリアームを突き出したでつぶらした男が凄い顔をして部屋の隅つこの椅子にかけながら其を吸つていた。にわかにかういふ態度をとつたんだな、とカンボテは思つた。

「おいッーこの奥さんの亭主をどこへかくしたッ」

「知りませんぜ」

男は平然として応えた。カマキリのポリシーは拳銃をひよい／＼弄びながら女の傍へゆき、顔を覗きこんだ。

「へへへ、別嬪ぢやねえか、おや？」
さういつて彼は床板に眼を落し

「あッ、血、血だッ！」

「なにッ？」

カンボテが慌てゝ飛んできた。点々と血が落ちてゐる。二人は屈みこんで血の跡を追つて開け放たれた窓際までいつた。男も女もぎよつとして眼を見交した。マリアームは部屋の隅つこで蒼白になつた。

カンボテは窓から身を乗り出して懐中電燈を照らした。

裏は海岸ですうとアンボン港に連らなつていた。満潮で床下までひた／＼と水が押し寄せてゐる。

「やッ？何か白いものが浮いてるぞてめえ拾つてこい、浅いんだから」

「へえ」

カマキリのポリシーは靴を脱いで窓から飛び降りた。

「トアン、男の服ですぜ」

そんな声がして、やがて、窓枠につかまつて入つてきた。白い木綿の背廣が上下、しすくだつてゐるのをぶら下げてゐる。

マリアームは、傍へ駆けつけ、それを見るなり

「あッ、夫のだわ」

さういつて手にとりポケットを探つた。

と、鏡台の前に座つて、さつきから隙を窺つていたらしい女が、さつと立上つて逃げ出そうとした。申合せたようにでつぶらした男もドアに向つて駆け出した。

「待てッ！動くと撃つぞッ！」

カマキリのポリシーが拳銃をさし向けた。

二人は、びたりと立竦んだ。

「ひつく／＼つてしまえッ！」

カンボテが叫んだので、カマキリのポリシーは二人の前へ近附いてゆき、手際よく、ガチャ／＼と二人に手錠をはめてしまつた。

濡れた服のポケットからは、見覚えのある夫のハンカチだの、葎のケースなどが続々と出てきたが財布がなかつた。

カンボテは、室内をくまなく探したすると、女が使つてゐた鏡台の下から出てきた。鱈皮の大きな財布だつたが開けてみると金が一文もなかつた。小さな箱がひとつ入つてゐた。中味は純金の耳飾りであつた。

「あらッ、これは、家を出るとき、夫が買つてきてやるといつてたんですわあ、あなたッ——」

彼女は耳飾りを手にして切なげに叫んだ。手錠をはめられてゐる女の眼がそのとき、なぜかキラリと光つた。

「やつぱし、あたしのことを思つてくれたんだわ——ね、トアン、夫は殺されたんじゃないか？」

「そうかも知れねえ、殺して、金を奪

い、証拠になるものを海へ捨てたに違えねえ。さあ、大変だ、夜が明けたら死体を探さにやならん」

「おお——あなた。あなたッ——」
マリアームは、耳飾りを胸に抱きし



めて泣いた。

「やい／＼ッ、手前等、金をとつてバラしやがつたんだろッーさあ、自決しろいッ！」

カンボテは大蛇のように唇を尖らし、三文のドク靴で床がへし折れるほど地団太を踏んだ。が彼等はふてくされて応えない。女は、非常に厚化粧をしてゐたが、細面の中々の美人で俯向いたまゝ、ぶる／＼震えてゐた。

「しおてえ野郎だなッ、おいッーいわねえかッ！」

今度は、カマキリが、やたらに腕を振り廻して喚いた。

「チエツ、豚箱へ放りこんどきや白狀するだろう、しいつびいてゆけッ！」カンボテはブリブリしてドシン／＼と靴音をたて先頭を切つて部屋を出ていつた。

三

翌日、苦力達を使つて大々的に海岸の死体検査を行つたが、波にさらわれただか、それとも、悪人達が夜の内にどこかへかくしたのか、全然手がかりさえ掴めなかつた。

一方、警察署では二人の容疑者の取調べを開始した。

事件に直接関係を持つてゐるらしい例のでつぷりした男の素性を洗つてみると、兇悪極まる前科を持つた無頼漢でも何んでもない、ゴク温順い人間でカフエービンタンマラムのマネージャーであつた。

「前科者でない者は犯人ではない」気短かのカバポリシー（警察署長）はそういつてサジを投げたが、カンボテは

「いや、前科者になるまでの犯人は前科者でなかつたか、それが前科者になるんですから前科者でない犯人も前科者になりますぞ」

とやりかえしてトコトンまで男を追及したが知らぬ存ぜぬ、果ては石地藏みたに黙つてしまふのでいつころにラチがあかない。動かぬ証據があるから彼が手をつけたのに違いないのだからなだめつゝすかしつゝ、タマにはムリして食をやつた衣類や財布をつきつ

け、やつと口を割らしたところが、何故あんな所にあつたのか知りもしなければ責任もないとろそぶいて仕末におえない。厚化粧をして毒々しく口紅を塗つてゐるところをみると春をひさいでいる女に違いないが、顔立ちが上品で、ビンタンマラムにはちよいといない美人だ。男と二人きりで同じ部屋にいたところをみると口惜しいが彼の情婦らしい。前身を洗つてみたが不思議なことには彼女の素性はてんで分らない。カフ



傷口の新しいところからみて、どうもあの夜受けたものらしいと推定された。カンボテはキンキジャクヤクいよ／＼動かし難い証據を発見したというのでぎゆう／＼責めたてたがシブトイ奴で貝殻みたいに口を閉じて開かない。で遂に白狀するまで一週間の断食を申渡した。

一方マリアームの夫の素性を洗つた

込みやつたがカイモク分らない。マリアームとの結婚前の行跡を洗つてみると、そこに、ひとつの疑点が見出された。つまり、彼は、いつも夕方出かけて朝帰つてきたというのである。それも、どこへ出かけて行くのかと、ごていねいについて行つたという男の話によると、ヤレ嬉しや、矢張り彼はビンタンマラムの前で立止り、きよ／＼周囲を警戒してから、こつそり中へ這入つていつたというのである。

それによつて、彼も、カフエービンタンマラムで無頼漢共と一緒に悪事を働くか、美女をめづつての恋愛チャンバラでもやらかして殺されたのかも知れないと思われる。マリアームとの結婚については、両親を呼び出して聞いて訊したが、娘が惚れて申込んだので別にくわしく素性

も調べてないというのだ。こうなるとろくでもない所を探つたみたいで益々や／＼こしくなつてきた。そこへもつてきて、また、マリアームのところへ、変な手紙が舞いこんできた。開いてみると五千円近くの彼女の名義になつてゐる貯金通帳が同封されてゐる。手紙には、自分は或る所に生きてゐるが殺されるかも知れないから今まで儲けた金をおまえ名義にして預けた通帳を同封した。自由に使つておくれ、勇気を出せばまた生きて会ふことができるかも知れないが、もう、自分、元のようにおまえと一緒に楽しく暮らすことはできないだろう。自分が

エービンタンマラムには大分まえからいたらしいが何処に家があつてどういふところから通つてゐるのかチンデ分らない魔物みたいな女なのである。ところが、三日目になつて、今まで気のつかつた重大な犯跡が分つた。女が肘のあたりに、さうとう深い傷を負つており、上衣の袖でかくしていたので今まで気がつかなくつたが、繻帯と

が、アンボン中のカフエー、映画館、劇場などをしらみつぶしに當つてみたが樂師として雇入れたこともなければそんな男はみたことも聞いたこともない口を揃えていうのだつた。では、どういふ商賣で金儲けをしていたかとあらゆる職業方面に當りをつけて聞き

望んでもおまえが到底許してくれない
だろうから——。

マリアームは、それを讀むと声をあ
げて泣いた。貯金通帳は二人が結婚し
た日から毎月確実に預入れてあり、最
後は殺された日になつてゐる。

「あゝ、あたしのために、こんなに思
つてくれたのに——あなたツ！疑
つていたあたしを許してちょうだい」

彼女は、泣きながら警察へ駈けて行
つた。折よくカンボテがいた。彼はむ
さぼるように手紙を讀んだが

「おや？日附は昨日だ、いよ／＼奇妙
キテレツになつてきやがつたて——偽
筆ぢやねえかな——？」

「そんなことゼツタイにありませんわ
あのひとの筆蹟はよく知つております
から」

カンボテはどたまがぶち割れるほど
考えた。誰に頼んで誰がマリアームの
家へ何時頃抛りこんだかも分らないし
字体が本人のだとすると彼はいまだこ
にケツカルのか、勇気を出せば生きて
また会えるかもしれない——

かもしれないとはどういふことぢや
自分は元のようにおまえと一緒に暮す
ことはできぬだろう——

とはいつたいなんぢや。カフェービ
ンタンマラムの何処かの一室に幽閉さ
れて人相が変るほど惨虐な目に会つて
いるのか？マリアームが恐れて逃げ出
すようなむごたらしい面になりさらし
たのか。そんならそうで、手紙はどう
して書きさらしたんぢや、うん？白粉
の匂いがするぞ？てへツ、嘘八百を並
べたてて色女を抱いてケツカルんぢや

ねえか。すると、豚箱に入つてゐる奴は
いつたい何をさらした事になるんぢや
ろう？？？——。

「おお——神様、あのひとをお助け下
さいませ、ああ、愛しいあなた——」

マリアームは、カンボテが、気狂い
になるほど考えてゐるのも知らずに、
傍で、おい／＼泣きながらうるさく神
様を拜み続けた。

四

カンボテを頼つてはラチがあかない
ので、その夜、マリアームは念入りに
化粧をし、ネツカチーフで顔を包んで
家を出た。

夫は生きてゐるに違
いないのだ。たとえど
んな姿に變つていよう
と、会いたいし、でき
れば救い出してやりた
い。

そう思つてカフェー
ビンタン・マラムに向
つて三輪車を飛ばした
やがて、誰ひとり不
審に思ふものもなく易
々とホールに入ると、
まず気分を落着けるた
めにアンゴール（葡萄
酒）を注文した。

室内は丁香（香料の
一種）臭い莫の煙と、
にがつぽい南方女特有
の体臭でむん／＼して
いる。バンドが止むと
踊りに興奮した男女が
そろ／＼席に歸つてき

た。

その時、ゴツ／＼に糊のきいた背廣
を着たひよる長い男が、河馬に衣裳を
着せたようなでかい女と手を組んでド
サリ、ヒョロリとやつてきたが、ふと
マリアームをみて眼の色を変え、つか
／＼と寄つてきた。

マリアームはぎよツとした。顔をか
くす間もなかつた。

「奥さん、とう／＼きましたね、フフ
フ」
彼女はハツとして顔をあげた。
「あらツ！」
嬉しや、カマキリのポリシーではな

いか、鼻の下につけ髭をしてチャツブ
リンみたい顔でにや／＼してゐるから
分らないので。

「シツ！さくられたらイノチが危ねえ
ですから、それに、フフフ、トアン
カンボテもきていますぜ」

そういつて、カマキリは、傍の、で
かい女の腰を突ついた。女は、恥かし
そうに顔をかくして偉大なお尻を向け
ていたが、驚いて、振りかえり、掌で
半顔をかくしてヒヒヒと笑つた。マリ
アームはひと目みて、思わず吹出して
しまつた。

ポリシーのカンボテが女装してゐる



のである。短い毛をひきつめて後でくくり、おまんじゆうをちよんとのせているが、いまにも落ちそうにぶら／＼している。

「ヒヒヒヒ、はづかしい」

そういつて、シナをつくつて椅子にかけた。どつさり口紅を塗つた厚ぼつたい唇から出齒がのぞいているのが可愛らしい。

「奥さん、どうして、こんなところへきたんですい？」

「あたし、決心したのよ、夫に会いたくつて——きつと地下室にいると思うわ、あなた方もそのためにきて下さつたんでしよう？」

「そうですよ、ちや、ちやうどいいやバンドが始まつたら一緒に行きやしよカマキリの奴、もう切符手に入れやしたが、ひとり三十圓、たまげたね、」

「ちや、あたしもお願いできるかしら」

「いいです、いくらでも賣つてくれますから」

やがてノーマニス（可愛い娘さん）の軽快な旋律が流れ出した。

客達は雑談をやめて立上り、浮々した様子でフテツフを踏み始めた。

三人はこそ／＼とバンドの後を通り抜けて奥の方のドアの前に立つている

ボーイの傍までゆくと先頭のカマキリが切符を示した。ボーイは丁寧に腰を曲げて一礼しながらドアを開けた。三人は足も地につかぬ恰好で中へ飛びこ

んだ。ボタンとドアが閉つた。薄暗いランプの下で互いに顔を見交して、にやりとした。

狭い廊下を曲つて十米ほどゆくと石段が地下に伸びていた。そろ／＼降りてゆくと石油ランプがちらちらしている所に荒けづりのドアがボンヤリみえた。至極頑丈に出てきている。ギギイと押し開けて、そおつと中を覗いてみると、驚いた。

百坪ぐらゐの部屋に小さな舞台が設けてあり、その天井の明るいガス燈の下で、いま、二人の男女が特殊な舞踊をやつてゐる。全裸でない。が出すべきところはチャンと出しているのがみものである。

薄暗い客席には、性の異なる人間共が一組づつ密室の若夫婦の恰好でみている。

たしかに三十圓のネウチはある。と思つてカンボテは、あんぐり開いた口の端つこからだら／＼とよだれを垂らした。

ひと目みるなりシャツキラコになつてしまつたカマキリは、微妙に膝を振動させて、カンボテのお尻にすがりついて舐の平衡を保つに苦勞している

マリアームは、ソピ（椰子酒）を一升がとこあふつてきたみたい顔をしながら、シツカリ手を握りしめて呼吸困難に墜入りつゝあつた。

「ねえ——ニヨオニヤ（奥さん）」

暗がりから、くねくね腰を揺りながら、いやらしい男が現れて、女装のカンボテに、蜘蛛の巣みたいにからみつ

いた。

「ぶる／＼ツ」
カンボテは顎を上下に躍動させて飛び除いた。次に水瓜の化物みたい大き

な唇をしたオナゴがゆうと現れてカマキリにしなだれかゝつた。

「エヘヘ」

カマキリは、トタンに糸ゴンニヤクになつてボーとしてしまつた。

「これツ」

カンボテが、ギョロリと眼を剥いてカマキリの横つ腹をブリツと抓つた。カマキリは足の裏にヤイトをすえられ

たみたいに跳ね上つた。

「馬鹿奴、奥さんを守れ」

「アレツ」

今度は、マリアームが男にからみつかれて、ストリツブショウみたいに尻を振つて暴れている。カマキリが男の脇の下をこそぐつて追いやり、マリアームと手に手をとつて客席へしけこんだ。

追いやられたいやらし男は、舌打ちして、また、カンボテにしなだれかかつた。が、カンボテは、既に女の手を掴んで胸に抱きしめて踊つていた。

舞台はいまや最高潮で、客席のあちこちで溜息やら鼻息が手にとるよう

に聞こえる。
カマキリは、マリアームにしがみつ

いて脇の下からタラ／＼油汗を流し、眼を閉ぢたり、汗を拭いたりしてこらえてゐる。

カンボテは、女を膝に抱きあげ、舞台の方を向た鼻の穴から蒸氣ポンプのような勢いで息を吐きながら、思わず女のお乳を、ぎゅつと握りしめてしまつた。が、女はケロリとしている。カンボテはおや？と思つた。職業意識が湧然と頭を駆けめぐつた。舞台も一時

目に入らなかつた。

やがて、ハツと何かに思い當つたらしく、眼玉をくるりと一廻轉させると女を椅子の上へおつぱり出し、あわてふためいてカマキリの方へ飛んでいつた。

「引揚げろツ」

低く囁いた。ふら／＼になつてゐるカマキリの細腕をぐい／＼引つ張つて外へ出た。マリアームもヨロ／＼しな

がら出てきた。

「ど、どうしたんだよ、せつかうい

ところなの」

カマキリはぶら／＼いつてゐる。

「馬鹿野郎ツ、目星がついたんだツ、さ、奥さんも大急ぎだツ」

はやカンボテは、くるつとサロンをまくつて十三文の足で石段を勢いよく駆け上つてゐた。

五

カンボテが凄いい見幕でどこへ行くんかと思つたら警察署へ逆戻りしてしま

た。

「ポリシー、留置場を開けろツ」

女の氣狂いが駆けこんだと思つた当直のポリシーは、ひやあと椅子から机

の上まで飛び上つて

「コラツ、出ていけ／＼ツ」

「な、なにツ？早やくしろツ！俺はポ

リシーカンボテだぞツ」

「うへえツ、そ、そりや」

当直のポリシーはシャモみたいになタ／＼と机の上から飛び降り、大急ぎで留置場を開けた。中には、殺人容疑のカフェービンタマラムの女が只ひとりでうづくまつてゐる。

断食三日目なので、この奥に眼あり
という看板が必要ならいくたびれた
顔をしてばんやりこちらを向いている
カマキリとマリアームが飛びこんで
きた。

カンボテは、つか／＼と女の傍へ進
んで、いきなり、ビヨンと突き出たお
乳に手をかけた。

「きやあッー」

女がケタタマしく叫んだ。カンボテ
は氣狂いみたいに嫌がる女を強引に抱
き寄せ、カパイヤのボタンをひきちぎ
つて、ぎゅつと熊のような手を突込ん
だ。女は火焙りのエテ公みたいに暴れ
た。カマキリがおつたまげて

「トアンカンボテ、氣がふれたッー」

と叫んで、カンボテにかちりついて
引き離そうとした。

「馬鹿野郎ッーこれをみるッー」

カンボテは、カマキリの鼻柱へ、柔
い、ぐんにやりしたものを、びちやつ
と叩きつけた。

「な、なんだ、こりやッー」

「お乳だよ、ハツハツハツ、こいつ、
男なんだ」

カマキリも、マリアームも当直のボ
リもいもおつかかなびつくりして女裝の
男を覗きこんだ。男は恥かしそうに顔
をかくした。

「これ／＼ッ、顔をあげるッ、ちよつ
と拭いてやるから」

カンボテは、雑布みたいなタオルを
出してベツと唾を吐きかけ、それで、
嫌がる男の顔をゴシ／＼拭いた。コッ
テリした厚化粧が半分ほどとれたとき
マリアームが叫んだ。

「まあッーあなたッー」
「ひやあッーマリアーム、か、かんべ
んしてくれッー」

夫は、カンボテを楯にして、マリア
ームを拜みたおした。彼女は、口惜し
さと嫌しさと腹立たしさをチャンボン
にして涙を流し、歯ざしりして叫んだ

「どんなに心配してたか知れないのに
あなたは／＼そんな恰好をして、なに
をしていらつしたんですッー」

「俺は、まえから、こんな恰好で、男
娼やつてたんだよ、でも、女には、触
れてないから安心してくれ」

「まあ——なぜ、最初にそのことを打
ち開けて下さらなかったのッー」

「そ、それができたなら、カフェーで、
おまえにみつけれられたとき、かくれる
もんか、腕を怪我してまで、あチヂ、
まだ痛いんだ、窓枠でひっかけたんだ
よ、洋服を海へ抛りこんだとき——」

「罰だわよ、人をだまして——」

「どんなことでもいつてくれ、覚悟し
てるんだ。しかし死ぬほど愛してるつ
てことを忘れないでくれ、ああ——」

貯金通帳と手紙受取つてくれたかい？
——おまえを安樂にさせたいばつかし
止められなかつた、他にこんな儲かる
商賣ないからな、ああ、許しておくれ
マリアーム」

「そうだつたか、これで分つた、奥さ
ん、怒つちやいけねえ、ご主人はえら
いッ、おまえさんのために貯金までし
て、これがばれたら一緒に暮せねえだ
ろうといいながら、その金を送つたの
だ。仲直りしねえ、俺だつて、もうチ
ヨイと細つそりしてりや男娼でもやる

んだがなあ」
「——まあ、あなた、あなた——」
彼女は、泣きながら、夫の傍へ寄り
添つた。

「しかしトアン、カンボテ、どうして
端緒をつかんだんですい？」

「ハツハツハツ、地下室で、のぼせ上
つて、女の乳を握りしめたんだ。そこ
ろが女が痛がらねえ、ハテ面妖なと思
つて、こつそりいぢくつてやつたらゴ
ム製のお乳だ。それでビンときた。浅
い海岸で死体が見当ないのも道理、夕
方出かけて朝帰つて白粉くさいのもこ
もつとも、贅沢に暮せるのは首つ玉の
下に胴体があるよりはつきりしている

こつちやねえか、ハテ？しかし、手紙
はどうして届けたんぢやろ？」

カンボテはボカンと口を開け、頬つ
べたを小指でゆる／＼搔きながら天井
向いて考えた。すると、当直のボリシ
ーが恐縮して、腰をベコ／＼折り曲げ
ながらもみ手をしていつた。

「トアン、かんべんしておくんねええ
つい、ナサケにはだされ、ムリに頼ま
れ、あつしが持つていきやしたんで、
へへへ、なに、ワイロですか、ラフ
フ、カフェー・ビンタンマラムの地下
室の入場券で、ヒヒヒヒ」

終

寸鐵常識

色盲

人間は凡そ四パーセントが生れながら
の色盲である。

蜂の針

蜂の針の長さは一寸の三十分の一であ
る。

犬の鼻はなぜ冷たいか

犬の鼻は何故冷たいか、それは、嗅覺
を鋭くするために濕らせておか
ねばならないから、即ちその濕
氣が絶えず蒸發するために、鼻
が冷たくなるのである。

鰻(うなぎ)

日本の鰻はオスばかりでメスは一匹も
いない。
反對に中國の鰻はメスばかりでオスが

いない。

ピアノの金屬線

普通、ピアノの内部にある金屬線は約
千六米の長さがある。

石炭の殺人

百万噸の石炭が採掘される毎に、平均
五人が殺され、五百五十人が負傷する
という。





初めから、終り迄、あまり濃厚なのは、丁度砂糖ばかりを食べるのようであらう。尼さんのは着物の裾から、ちらりと赤いものがこぼれるといつたのは、かなエロチシズムが好ましい。

◇ こういうつたほのぼのとしたものにしてほしいと望む。(大阪市住吉區一讀者)

人生に奇譚などザラにあるものでない。怨霊話だの、怪談など近代人の耳を傾ける筋合のものでもない。又無人島で牝猿と結婚した話や、ゴリラの精子で人間の女に人工妊娠せしめたという小話や、アルプスの山男が娘を掠めてどうしたとか言うようなストーリーは、鴉映画のモデルに自分の女房が出演していたのを發見したとか、ダンサーの内幕やパンパ

ンの生態と一緒に既に多くの作家や雑文家によつて書かれ讀者の方でアキ／＼している。又、トク名、假名の座談會ものや、告白物は編集總動員のデッサンでたとえう事は、大抵の讀者が知つてゐる。我々はびつくりするよ

うな奇譚を要求しないほん卓近な自分の身の廻りの生活の中に面白く愉快な奇譚を求めたい。此の意味で月屋静史氏の「南方いざこざ

繪卷」は満足させてくれる讀物であつた。(四國の山猿枕々亭)

◇ 奇譚クラブ拜誦、月屋氏の色事の手引、伊藤氏の飯場の飯焚女を初め浮浪者の戀、秋宵五人娘等仲々面白く讀まして頂きました。埋草やコントにあまりよいものがないうちに思いました。楽しく肩のこらないといつた意味で、こんな雑誌もあつていいと考へました。

◇ (和歌山市富永謙一)

空に、風に、匂ひに、ことづつて、今日一日をひたぶるに人を想ひてなやみあるしあわせ(大阪、田藤芳江)

◇ 「投稿歡迎掲戦のものに薄謝進呈」讀者係

集募稿原

古今東西の珍談奇聞を取り揃えるとゆう奇譚クラブの編集方針に適した傑作の御寄稿をお待ち致します。

- 一、小説、讀物、コント、挿繪、写真、マンガ、笑話、小話、実話、探訪記、探險記、暴露記事等
- 二、品を特に歓迎致します。エロチシズムとユーモアに溢れた軽快洒脫な作
- 三、採切十一月三十日
- 四、採切十一月三十日
- 五、採切十一月三十日
- 六、採切十一月三十日
- 七、採切十一月三十日
- 八、採切十一月三十日

御送稿先、大阪府堺區内管原通曙書房編集部宛
送稿の返却を求められ、早く採否御返事差し上げます
が、原稿を受取後、採切の返却を求められ、早く採否御返事差し上げます
を、優秀なる作家の方には、引き續いて寄稿家として執筆



第一図

四	三	二	一
▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲

持駒
角、金、

第二図

六	五	四	三	二	一
▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲

持駒
飛、飛、
銀、飛、

詰手順
第一圖 一三金、同香、三三金、同飛
二二角、三三玉、二二角成二三玉、二
二馬、二四玉、三五金迄 十一手詰

第二圖 二二角成、同玉、三
二銀同玉、三三飛四一玉、
四二飛同銀、同桂成、同玉
五三銀四一玉、四三飛成、
三一玉、四一龍同玉、四二
角成迄 十七手詰

奇譚クラブ 定價七拾圓
古今珍談くらべ 特集号

昭和25 11月30日印刷 昭和25 12月1日發行

發行所 大阪府堺區内管原通曙書房
編集印刷 兼發行人 吉田 稔

直接購讀者募集 半年分6
(送料共)450円(定價值上の
も据置)右御支拂込の方々に
は裸体(ヌード)写真1組進呈